342
834
342-4834
1200501400808

改訂 肥後藩國事史料

巻 三

昭和七、九 帝國圖書館藏

342-483イ

改訂 肥後藩國事史料 卷三

目次

文久二壬戌年四月十六日島津久光上洛近衛家に伺候して時局に對する意見をのふ是日久光浪士鎭撫を命せらる……一
四月十七日本藩奉行楯岡懋之助は京師出兵の件に關する政府の內意を小坂九郎助に通じ同志者の鎭撫に勤めしむ……七
四月十七日島津久光京師の藩邸に入り浪士鎭撫の任に當る……七
四月十八日藩主慶順住江苔兵衛を花殿に召喚し長岡護美をして之に自己の所存と目下の處置の要領とを垂示し愼
て其意を體すへきを訓諭せしむ……八
四月廿三日幕府は洋式銃隊操練に勵精すべき旨を達す……九
四月廿三日薩藩士奈良原喜八郎等主命を帶ひ伏見寺田屋に於て同藩士有馬新七等八人を殺す……九
四月廿四日在府本藩老臣時局に對する藩士の心得を訓示す……一六
四月廿五日幕府は尾張慶勝一橋慶喜松平慶永山內容堂の謹愼を解く……一六
四月廿五日在京我藩吏員櫻田覺助は京都に於ける長藩の航海遠略策に對する疑惑並に同藩の兵備及び寺田屋事件
後所司代邸警戒の狀況等を在藩の同僚に報す……一八
四月廿六日在府本藩老臣小笠原備前等書を藩政府に贈り長藩長井雅樂公武合體周旋の成行京坂不逞の徒と宮部鼎
藏轟木武兵衛等との關係及び藩士他國人交際の取締等につき所見を述ぶ……一九
四月廿六日我藩江戸留守居清田新兵衛は長藩の公武合躰の周旋に關する交渉に對し在府老臣の旨を承けて返書を
與ふ……二四

四月廿七日岡藩小河彌右衛門寺田屋事變前後の事情を同藩田近儀右衛門等に報す……二五
四月廿八日長藩世子毛利定廣京師に至る……二七
四月廿九日及び晦日在京の浪士多く薩士米等の諸藩に拘へられ田中河内介等薩摩へ送らる……三一
四月晦日登醍法親王鷹司輔熙近衛忠熙等蟄居謹慎を免せらる……三一
四月晦日關白九條尚忠職を辭せんことを請ふ……三一
五月朔日岡藩小河彌右衛門書を在藩の同志者に贈り岩倉具視大原重徳に謁して國情を陳へ且つ公武間の關係につきて垂示を受けし所を報し併せて青蓮院宮近衛忠熙鷹司輔熙一橋慶喜以下爪越土諸藩主の幽閉を赦し謹慎を解きたる幕府の心事に關する薩藩堀次郎の所說を告ぐ……三二
五月三日幕府松平宗保をして幕政に參與せしむ……三六
五月六日在府本藩老臣は我藩に對する幕府の所見を報じ且つ此際長州と同く公武合躰の周旋をふさんよりは寧ろ人物登用の建白をふすの優れる所以を藩政府に通牒す……三七
五月六日在府本藩老臣は長岡護美の出府若し公武合躰周旋の爲めふらんには暫く其期を延はされんことを藩政府に通牒す……四一
五月六日本藩小佐井才八小笠原島視察の狀況を知人に報す……四二
五月七日爪張慶勝一橋慶喜松平春嶽登營して將軍に謁す是日春嶽政務參與の命を拜す……四五
五月七日閣老久世廣周出京を命せらる……四六
五月八日朝廷鳥津久光に命し勅使に陪して關東に下り毛利慶親と議して公武の間に周旋せしめらる……四六
五月八日幕府は松平春嶽に登營心得書を達す……四七
五月八日我藩青木彦兵衛は薩藩松方三之允の熊本を通過するに當り之と驛亭に會して京攝の事情を聞く……四七
五月九日毛利慶親閣老久世廣周と公武關係の事につき對論す……四九
五月九日英國は我開港開市の五ヶ年延期を承諾する報酬として我は英國産の織物等に對し其輸入稅を輕減すとの覺書を交換す……四九
五月十日大納言中山忠能長藩老臣浦靱負を召して公武合躰の周旋浪士鎭撫に關する叡旨を傳達す……五二
五月十一日久我建通我藩櫻田覺助を招き彦根遷都の風聞あるを以て探索を遂くべきを勸告す尋で覺助六條有義に謁して之を質す有義遷都の說信憑すべく薩長の軋轢寒心すべきものあるを以て事に託して藩兵を上坂せしめんことを慫慂す……五三
五月十二日幕府田安慶頼の將軍後見職を免す……五四
五月十四日在府本藩老臣書を藩政府に贈りて蒸氣船購入の必要を說き且つ井口呈助池部啓太等の高島喜平山田純一郎へ入門及び海軍所入學等のことを報す……五五
五月十四日本藩池部彌一郎森重龍彦關八郎助幕府下曾根甲斐守砲術稽古の世話係を命せらる……六八
五月十五日長谷信篤岩倉具視等勅使東下に關し建白書を上る……六八
五月十五日遣歐使節竹内下野守の一行英國を發して和蘭に向ふ……六九
五月十九日本藩奉行楢岡恆之助京都の形勢を藩政府に報告す……六九
五月廿日幕府鷹司輔熙近衛忠熙等の還俗に關し異議ふき旨を京都所司代に通達す……六九
五月廿日幕府は本藩池部啓太等に高島秋帆砲術稽古世話方を命す……六二
五月廿一日在坂本藩吏員橋本喜彌太は勅使大原重徳鳥津久光の東下、薩藩堀次郎の九條關白並に所司代酒井忠義排斥、毛利慶親に上洛内命の降下及び議奏中山忠能の宮中機密漏洩等に關する幕吏永井主水正の談話要領筆記を重役に提出す……六二

五月廿二日勅使大原重德公武一和して攘夷すべきの旨を奉じ京師を發して關東へ下る島津久光之れに陪す……六六
五月廿二日幕府簡易の制度質實の士風に復せんか爲め政事改革に着手す……六八
五月廿二日脇坂安宅再ひ老中となる……六九
五月廿四日在京本藩奉行稲岡恒之助は大原勅使の東下閤老久世廣周の上京延期等に關し藩政府に報告す……七〇
五月廿六日閤老内藤信親免せらる……七一
五月廿六日幕府政事の改革は大凡寛永以前の例に據るべき旨を達す……七一
五月廿七日在府本藩井口呈助薩長兩藩公武間周旋の事情につき在國熊谷嘉左衛門に通信す……七一
五月廿九日品川東禪寺英國公使館の衛兵信州松本藩士伊藤軍兵衛英人二人を斬て自裁す……七三
六月朔日將軍家茂上洛の意思を發表し且つ時勢に鑑み政事改革の旨を諭す……七四
六月朔日在府井口呈助は養子忠三郎に幕府の大勢及び長藩長井雅樂諸詞事件の起りしことを報す……七五
六月二日閤老久世廣周免せらる……七七
六月四日在府本藩老臣松野頁は京攝の形勢漸く平靜に歸し且つ幕政改革綱紀振張の狀あるを見暫く長岡護美の出府を中止せられんことを藩政府に通牒す……七七
六月四日在府井口呈助更に長井雅樂諸詞事件に關し家郷に通信す……七八
六月六日毛利慶親鳥津久光の着府を待たすして江戸を發し中山道を經て西上す……七九
六月七日勅使大原重德江戸に着す……八〇
六月七日幕府は廣く洋書調所に於て外國書籍の講習を受くることを許す……八二
六月七日在府本藩士遠山三右衛門幕府政弊を改め言路を開くの狀況を熊本に報す……八三
六月八日有吉將監三淵志津摩は本藩政府を代表して四月廿六日及び五月六日附在府老臣小笠原備前等の長岡護美出府延期長州と公武間周旋の交渉及び藩士の他國人交際取締等につきての意見に答ふ……八四
六月八日在府本藩老臣松野頁書を藩政府に贈り長藩建白協商の順序を得さる點を指摘し且つ將軍上洛の利害を較量して徒に國力を疲らし紛擾を招くの虞ある旨をのゝ……八七
六月上旬幕府内田恒次郎榎本釜次郎澤太郎左衛門赤松大三郎田口駿平津田眞一郎西周平等に蘭國留學を命す……九七
六月九日京都所司代酒井忠義大坂城代松平宗秀江戸へ歸る……九八
六月十日勅使大原重德勅諚の旨を將軍家茂に傳達す……九九
六月十日姫路藩主酒井雅樂頭京師取締として上京す……一〇〇
六月十一日在府大野鉄兵衛は將軍上洛勅使着府長井雅樂諸事情及び東禪寺騒擾等につき在國の同志に通信す……一〇一
六月十二日宮部鼎藏書を永島三平に贈り本藩政府の近況江戸よりの通信等を報す……一〇六
六月十六日島津久光書を閤老脇坂安宅に贈り一橋慶喜松平春嶽起用の必要と將軍上洛の急務に非ざる所以とを說く……一〇七
六月廿日勅使大原重德書を中山忠能に贈り長藩長井雅樂諸詞事件自己歸京の期限及び長薩の關係等を報す……一〇八
六月廿二日在府井口呈助書を藩學教官藥師寺騏兵衛に致し薩長公武間周旋の狀況を報し我藩よりも長岡護美の上京して此間に斡旋せられんことを懇請す……一一〇
六月廿三日在府本藩老臣松野頁は勅使東下に關する都築四郎惑藩酒井十之丞よりの聞書遠山三右衛門機密役筋よりの聞書及び吉田平之助溝口省翁よりの聞書等を藩政府に通達す……一一四
六月廿三日本藩長崎留守居長鹽正兵衛は幕醫伊藤玄伯林研海蘭國留學を命せられたる旨を藩政府に報告す……一一七
六月廿七日勅使大原重德書を岩倉具視に贈り一橋慶喜將軍輔弼松平春嶽總裁の事に關し板倉勝靜脇坂安宅と會見のこと及び薩長其他諸藩の狀況を報す……一一七

六月廿七日在府井口旦助書を藩學教官幸島多喜次に贈り京都江戸の狀況を報す……一三三
六月晦日勅使大原重徳勅意貫徹のことにつき閣老脇坂安宅板倉勝靜と會見の顚末を岩倉具視に内報す……一三四
七月朔日勅使大原重徳江戸城に臨み幕府勅諚に奉答す……一三七
七月朔日在府井口旦助書を在藩熊谷嘉左衛門に贈り薩長の公武周旋に關する經緯及び我藩内松井米田兩派の分爭に對する意見を述ふ……一三八
七月二日松平春嶽島津久光會見す……一三〇
七月三日在府本藩奉行稲岡惟之助は勅使大原重徳勅諚を幕府に傳達せし事長藩主並に同藩重臣等帰京の件及び將軍上洛につき諸侯宿所手配の狀況等を藩政府に報告す……一三〇
七月三日稲岡惟之助は一橋慶喜後見問題及び薩長確執の由來を藩政府に報告す……一三四
七月四日在伏見本藩探索生藤林建左衛門古賀富次甲斐武一郎は勅使の東下、京都薩邸の狀況、酒井雅樂頭の帰京、近衛關白の再任、青蓮院宮以下の赦免、毛利慶親の帰京、諸侯宿所の手配及び薩長確執の事等を報告す……一三五
七月五日在府本藩田中尭右衛門は松平春嶽政務參與任命、將軍家茂田安慶頼松平春嶽並に久世内藤水野板倉諸閣老等の人物幕政の改革、將軍上洛の發表、勅使の臨城及び其人物等に關し報告す……一三八
七月六日德川慶喜一橋家を相續し將軍後見職とふる……一四一
七月六日幕府は諸侯の軍艦にて參勤歸國すること及ひ諸外國に任意船艦の製造を託することを許可す……一四三
七月六日本藩横井平四郎再ひ越藩の聘に應し是日江戸の同藩邸に至る……一四四
七月六日同藩小河弥右衛門在藩の同志者に長土兩藩主の動靜及び幕府奉勅の狀況等を報す……一四四
七月八日横井平四郎幕吏大久保忠寛に諸侯の參勤を遂職に易へ其室家を國に就かしめ且つ其居場を免すへしとの三策を建言す……一四五
七月九日松平春嶽政事總裁職とふる……一四六
七月九日井口旦助書を熊谷嘉左衛門に贈り一橋慶喜後見松平春嶽總裁任命の事、島津三郎褒賞のこと勝義邦軍艦練習所頭取任命のこと及び勝義邦訪問の狀況等を報す……一四七
七月十一日朝廷土佐久留米の兩藩に内勅を降し公武間の周旋を命せらる……一四八
七月十一日在府元田八右衛門永學書を萩藩源太に贈り其兄角兵衛の死を悼み且つ政局推移の形勢幕府一新の狀況を說き公武合躰の兆候あるを喜ひ併せて横井平四郎着京のこと等を報す……一四八
七月十二日大橋順藏病死す……一五一
七月中旬島津久光は要路翻珍萬弊一洗以て寛政以前の政事に復り公武一和の基を立てられんことを幕府に建白す……一五一
七月十七日横井平四郎密に慶喜春嶽起用後の幕府刷堂の狀況を吉田平之助に告く……一五二
七月十九日朝廷毛利慶親父子之内敕れか滯京すへきを命せらる……一五五
七月廿日在府老臣松野口は幕政一新に關する横井平四郎の談話を元田八右衛門の聽取筆記せしものを藩政府に報告す……一五五
七月廿日大野鐵兵衛江戸より書を在藩加屋榮太に贈り島津久光の上書遺外使節の行動及び薩長の關係等を報す……一五七
七月廿日九條家の臣烏田左近を斬り首を四條河原に梟する者あり……一六〇
七月廿日毛利定廣公武合躰の周旋に關し四條の寃書み朝廷に提出す……一六二
七月廿一日左大臣一條忠香公武周旋に關する内勅を我藩主慶順に傳達す……一六五
七月廿一日本藩探索生藤林建左衛門等京都に於ける薩長二藩其他の事情を報告す……一六九
七月廿八日本藩奉行稲岡惟之助京都より熊本に歸り薩長確執の由來を報告す……一七三

七月廿九日故三條實萬に右大臣を贈らる……一七五
八月二日長藩公武周旋に關し再び宿書を朝廷に提出す……一七六
八月三日幕府薩藩に命し堀小太郎浪士煽動の罪を糾さしむ……一七九
八月三日長藩世子毛利定廣公武周旋の爲め東下の途に就く……一八〇
八月六日松平春嶽書を我藩主慶順に贈りて政事總裁職就任のことを報じ且つ内勅降下に對する虐遇に關し意見を述ぶ……一八二
八月七日幕府書を傳奏に贈りて從來の失政を謝し自今銳意勵精力を國事に竭すべきを表白す……一八五
八月九日藩主慶順命を藩政府に下し豫め東上の準備を整へしむ……一八六
八月十旬陸人品川に於て外人に暴行す……一八七
八月十三日本藩江戸留守居清田新兵衛は長藩桂に公武周旋の朝命を蒙り公然の周旋を爲すべきを以て我藩に對する從來の内談を打切るべき旨同藩より交渉ありしことを報告す……一八七
八月十四日藩主慶順特使を發して返翰を一條忠香に贈り内勅奉承の意を通ず……一八八
八月十四日在京本藩吏員櫻田登助は將軍上洛あるへきにつき豫め我藩宿所の準備に關する件及ひ既に決定せる諸藩の宿寺を報告す……一八九
八月十五日山内容堂登營して將軍に謁す……一九〇
八月十六日廣橋忠禮正親町實愛等十三名連署して久我内府以下千種岩倉富小路數名を彈劾す……一九〇
八月十六日幕府は安藤親藩久世廣周の閣老在職中の非違を追責して退隱謹慎を命す……一九一
八月廿日久我建通千種有文岩倉具視等貶黜せらる……一九二
八月廿一日中山忠能三條實愛は千種岩倉富小路等の所謂事件に關し退役を請ふ……一九三
八月廿一日島津久光歸京の途其從士武州生麥村に於て英人リチャードソンを斬る……一九四
八月廿一日閣老板倉勝靜我藩留守居清田新兵衛を引見して時局に關する我藩の國議を聽取し且つ深く依賴する所あり……一〇一
八月廿二日一橋慶喜我藩留守居清田新兵衛を召し慶喜自ら先つ上洛の上島津久光に上京を命じ我藩主にも亦召命を發すへきを以て豫めこを藩主に申告し置くべき旨を命す……一〇二
八月廿三日三位高松保實直書を以て中山正親町三條等差遣、少將、右衛門兩内侍局、久我、千種、岩倉、富小路等鑾輿を命せられたる由を京都の本藩邸に報す……一〇三
八月廿四日我藩政府は長藩建白協議の件に關し將軍上洛の至當なる所以を述べ建白贊同の意を同藩に通告すべき旨を在府重役に通牒す……一〇五
八月廿五日土佐藩主山内豐範上洛す朝廷暫留京を命せらる……一〇七
八月廿七日本藩使者田中八郎兵衛藩主慶順の内勅に對する請書を一條家に提出す……一〇八
八月廿七日横井平四郎幕府大監岡部長常を訪ひて時事を論じ將軍上洛の必要をのべ諸侯の參勤を述職にかへ其妻子を歸國せしむへきを說く其論大に幕廷を動かし遂に横井登用の議あり……一〇九
八月廿七日米蘭公使等生麥事件につき幕府に忠告す爲て英人亦同件に關し幕府と交渉を開始す……二一三
八月廿七日彦根藩長野主膳の臣藤を梗殺して斬に處す……二一六
八月廿八日大久保忠寬横井平四郎に其所說悉く幕府の納るゝ所とあるを以て春嶽も速に出仕して事を視んことを慫慂せしむ……二一八
八月廿九日田中八郎兵衛吉地源右衛門内勅降下に關する諸說薩長勢力の消長及び堂上方攘夷熱熾烈の狀況を藩政府に報告す……二一八

八月下旬三位澤爲量來月初旬を期し外國條約のことにつきて公卿列參の企あることを京都の我藩邸に内報す……二三二
閏八月朔日松平容保京都守護職とゐり所司代の上にありて宮闕の守衛に任じ兼て近畿の庶政を裁決す……二三三
閏八月三日幕吏岡部駿河守松平春嶽に謁し幕府大改革斷行の議に決せし由を告げ其出勤せんことを勸む……二三三
閏八月五日將軍家茂松平容堂に國家の爲めに意見を上陳すへしとの朝旨を傳達す……二三四
閏八月五日幕府朝旨を奉して故水戸齊昭に贈位の恩典を與へ其子慶篤に遺志を繼承すべき旨を奬諭す……二三四
閏八月五日議奏野宮定功書を一條忠香に贈り我藩主慶順の請書を關白に提出せし旨を報じ上京の使臣は歸國差支ふき由を告ぐ……二三五
閏八月五日我藩主慶順書を松平春嶽に贈り其政事總裁任命を賀し且内勅の事に關して其意見を内示せしを謝す……二三六
閏八月五日我藩政府は長藩より公武周旋にかゝる相談取消の事及ひ薩藩の心事に關する件につき在府老臣に返書を贈る……二三七
閏八月六日勅使大原重德歸京即日參内復命す……二三八
閏八月六日鍋島閑叟内勅降下に關し書を送り使を遣して我藩主慶順の意思を問ふ……二三九
閏八月八日將軍家茂松平阿波守に時々登營して意見を陳ふへきを命す……二四〇
閏八月八日横井平四郎書を家庭に贈り幕府の登用を固辭せし旨を報す……二三一
閏八月九日島津久光初て參内して關東の形勢幕府の事情を奏上す……二三一
閏八月九日藩國公使將軍に謁見す……二三二
閏八月十日田中八郎兵衛内勅奉承に關する藩主慶順内願の口狀書を一條家に提出す……二三二
閏八月十一日横井平四郎留老板倉勝靜に謁し將軍上洛の必要を說く……二三三
閏八月十二日横井平四郎一橋慶喜に謁し時務の意見及ひ將軍上洛の必要を陳ふ……二三四
閏八月十三日三位澤爲量は勅使大原重德及び島津久光の關東に於ける應接其他行動の概況を京都の我藩邸に報す……二三四
閏八月十四日本藩留守居青地源右衛門は薩長土三藩を初め各藩京都周旋の狀況を藩地に報す……二三五
閏八月十四日酒井若狹守隱居を命せらる……二三七
閏八月十四日本藩田中八郎兵衛青地源右衛門は内勅降下につき藩主内願に關する件島津久光の動靜及び京都守護職所司代の任命等時局の形勢を藩政府に報告す……二三七
閏八月十五日朝廷勅使復奏の旨趣に依り更に寛裕の叡旨を以て幕府に勅諭を下し之を各藩に垂示せらる……二三八
閏八月十五日大納言中山忠能は一條家用人伊地知豐前介に對し内勅奉承のことにつき我藩主慶順内願の通許容あるへしとの朝旨を傳ふ……二四〇
閏八月十五日幕府政事革新武備完整の要を示し諸侯の所見を開陳せしむ……二四〇
閏八月十六日一條忠香書を本藩主慶順に贈り内勅奉承の上は居國周旋を許さるゝ旨を通告す……二四一
閏八月十七日幕府は軍艦の品海出入其他の申告及ひ諸家並に遠國奉行旅行の際銃器携帶原請手續の便法を設く……二四二
閏八月十八日諸藩に勅して攘夷に關する意見を徵せらる……二四三
閏八月十九日在京本藩重臣は幕府に於て横井平四郎採用の議ありしも固辭して事ふきを得たる由を藩政府に報告す……二四三
閏八月廿日朝廷岡藩小河彌右衛門等勤王の忠志を賞し其歸國を聽さる……二四四
閏八月某日我藩學教官等意見書を提出して藩主の諮問に答ふ……二四五
閏八月廿一日越後浪士木間精一郎を斬り首を四條河原に梟する者あり……二五八
閏八月廿二日幕府令して諸侯參勤の期を緩め且つ其妻子の就國を許し其他行裝服色貢物等の制を改む……二五九

閏八月廿三日幕府更に服制に關する令達をふす……一六六
閏八月廿三日九條家の臣宇野玄番の首を鴨河原に梟する者あり……二六七
閏八月廿五日前關白九條尚忠落飾謹慎を命せらる……二六七
閏八月廿七日朝廷長藩主毛利慶親に攘夷の勅諚を賜ふ……二六七
閏八月廿七日本藩田中八郎兵衛京都より歸藩復命す……一六八
閏八月廿九日薩藩は生麥事件の犯人捕縛不可能の事情を幕府に上申し外人若し幕府の說論に伏せすして軍艦を薩海に廻航せしむることあらば皇國の威嚴を損せさる樣應接すべき旨をのぶ……二七一
九月三日我藩は江戸の長藩邸に使を遣して公武合躰に關する同藩兩度の來使に答ふ……二七一
九月七日青地源右衛門內勅降下に對する各藩の處置及ひ當時出京周旋せる各藩の狀況を藩政府に報告す……二七三
九月八日高松保實、三條實美等の意を受け我藩主慶順の上洛を促す……二七六
九月九日三條實美高松保實我藩更員を召して更に藩主上洛督促の內意を傳ふ……二七七
九月十一日三條實美我藩櫻田覺助等を引見して更に藩主若くは連枝の上京せんことを促す……二七八
九月十三日高松保實知恩院末寺に橋本喜彌太を招き本藩連枝の急速上京を促す……二七八
九月十四日三條實美橋本喜彌太を招き豫め我藩主若くは連枝上京の期限を問ふ……二七九
九月十四日橋本喜彌太高松家に至り我藩主の上京延期に關し歎願する所あり……二八〇
九月十四日長藩周布政之助佐久間佐兵衛越藩邸に抵り横井平四郎に對する東西兩都物議の囂々たるものある由を告く……二八〇
九月十五日高松保實京都の我藩邸に來り本年中藩主の出京に及はさる旨を告く……二八一
九月十五日三條實美書を我藩主慶順に贈り朝廷鄕衛の効を奏せんことを望み且つ其意思の在る所を問ふ……二八一
九月十九日本藩住江甚兵衛は同志を代表し河上彥齋は一己の意見を以て時局に關する建白書を藩政府に提出す……二八三
九月廿日本藩武備調練等の施設を勵行すへきを以て其意を體すへき旨を藩內に令達す……二八八
九月廿日本藩は質素儉約萬事一新の實を擧くべく市目の意見を徵す……二九〇
九月廿一日本藩魚住源次兵衛山田十郎佐々淳次郎等同志を代表して更に時局に關する建白書を藩政府に提出す……二九〇
九月廿二日幕府は銃隊操練の要務たるを認め令して郭內發火演習等の便宜を與ふ……三〇二
九月廿五日本藩一門長岡刑部內勅奉承の答禮使として上京を命せらる……三〇二
九月廿五日英國公使ジョンニール書を幕府に贈りて英人殺害者處分の緩漫ふるを詰る……三〇四
九月廿七日前內大臣久我建通洛中居住を禁せらる……三〇五
九月廿七日土佐藩士谷守部樋口眞吉熊本に來り三條實美我藩主慶順に贈る所の書を齎す……三〇六
九月廿七日魚住源次兵衛永井金吾山田十郎佐々淳次郎今村乙五郎等小笠原備前に會見して時局に對する國議を確立せんことを要求す……三〇八
九月廿八日三條實美姉小路公知勅使として東下の命を拜す……三一一
九月廿八日三條實美書を我藩主慶順に贈りて內勅降下を報し藩主若くは連枝の速に上京して奉勅の實を表はさんことを勸む……三一三
九月廿八日魚住源次兵衛等昨夕會見の書取を携へ小笠原備前を訪ひて其檢閱を請ふ……三一六
九月廿八日薩藩主松平修理太夫英艦襲來の虞あるを以て釜勤の猶豫を請ふ……三一七
九月廿九日魚住源次兵衛等長岡護久同護美に上るの書を提出せしが書中小笠原備前の未定設を挿入せるの故を以て翌日却下せらる……三一八
九月某日本藩老臣等議する所あり固く朝幕の趣旨を奉じ進んで邦家の急に赴き以て措置當を失はさらんことを

藩主に上言す……三〇
九月晦日横井平四郎大久保忠寛より一橋慶喜の對外意見をきゝて共高論に服す……三一
十月朔日松平春嶽登營して一橋慶喜の開國說をきゝ之に贊同の意を表す……三二
十月朔日小笠原備前魚住源次兵衛等を招き先日の會見書取の主旨は一己の私見ふることを陳辯す……三三
十月二日在府本藩當局は在藩用人等に對し將軍上洛につきては出願の諸侯にのみ豫參を命ずることに幕議決定の由ふれば本藩も豫參を出願する方宜しからんとの意を通す……三四
十月三日在府本藩重臣は公武隔絕の狀況を藩政府に報じ此際速に國議を凝し公武融和の爲に至誠の建白を幕府にふすべしとの意見をのぶ……三五
十月六日山田十郎佐々淳次郎相伴うて國老小笠原備前を訪ふ尋て本藩の勤王家二派に分裂す……三三
十月七日魚住源次兵衛等國老小笠原備前を訪ひ本藩國是の稍叡旨に副はざる所あるを反覆辯論し尋て白黨の意見書を提出す……三五
十月七日長藩の使者士屋矢之助熊本に來る……三八
十月八日青蓮院宮土佐藩士小南五郎右衛門を引見して勅使差遣につき山内容堂の斡旋を希望せらる……三〇
十月八日在府本藩人某幕政改革の結果、長崎の狀況、列藩の我藩士に對する疑視、勅使の東下及ひ橋慈兩者の離間策等の事につき通信する者あり……三一
十月九日藩主慶順一條忠香に對する返書を發送す……三二
十月九日長岡刑部上京の命を辭す……三四
十月九日本藩江戸留守居吉田平之助書を在藩上羽佐左衛門に贈り顯光院鳳臺院兩夫人並に藩主夫人下國期日に關する件、勅使東下、一橋慶喜上京中止、石部宿の變事及ひ京都公卿への投書事件等につき通報す……三四
十月某日魚住源次兵衛等更に長岡護久同護美に建白書を捧けて速に勅旨奉答の實を擧けられんことを切言す……三六
十月某日本藩小坂秋目時局に對する國是決定に關し藩政府に進言す……三七
十月十一日本藩長岡刑部上京の使命を解く……三七
十月十二日朝廷勅使差遣の趣旨を發表せらる是日勅使三條實美副使姉小路公知土佐藩主山内豐範に擁護せられて關東に下る……三八
十月十二日松平春嶽閉居す……三九
十月十三日一條忠香我藩主慶順召命の内勅を傳ふ……三九
十月十三日本藩は内勅の旨により豫め藩士出動の準備をふさしむ……三一
十月十三日久留米藩主上洛京師警固の朝命を拜す……三一
十月十五日一條忠香攘夷に關する内勅を我藩に傳ふ……三三
十月十六日在府本藩重臣は松平春嶽引入は關する横井平四郎の密話を藩政府に報告す……三五
十月十六日本藩老臣小笠原備前内勅再降時局切迫につき藩主若くは長岡護美上京の議を主張す……三五
十月十八日會津藩士野村左兵衛幕府の勅使待遇改革の件十二條を携へ勅使に先たちて江戸に至り周旋する所あり……三六一
十月廿一日山内容堂將軍に謁して勅使待遇改正の意見を陳ぶ……三六三
十月廿三日藩主慶順來年將軍上洛參内の節先例により供奉せしめられんことを幕府に請願す……三六三
十月廿三日横井平四郎書を嘉悅市之進に贈り目下の政局に處する幕府第一の急務は京師尊崇の實を擧くるにあれとも幕庭因循まことに憂慮すべきものあることをのぶ……三六三
十月廿三日幕府各國公使館を御殿山に建設せんとする由を報する者あり……三六五

十月廿三日長州藩は國事犯罪者赦宥及び破約攘夷の叡慮遵奉に關する請願書を幕府に提出す……三六五
十月廿四日藩主慶順重臣を會して内勅降下に對する藩議を決す……三六六
十月廿四日山内豐範東下の途次藤澤驛に宿る……三六七
十月廿四日松平春嶽山内容堂交々一橋慶喜の開國說の說破に力め且其蹶起を勸告す……三六七
十月廿五日勅使三條實美等藤澤驛に泊す……三六八
十月廿五日毛利定廣勅使着府の期迫るを以て書を一橋慶喜に贈りて其蹶起出仕を促し速に幕議を指導して一定し置かんことを勸告す……三六八
十月廿五日越土長各藩の盡力により一橋慶喜明日再び出仕すべきに決す……三七〇
十月廿五日本藩魚住源次兵衛等は京師の形勢切迫せるを以て幕府の允許を待たず速に藩主の上京せんことを建言す……三七一
十月廿五日長藩土屋矢之助書を水津熊太郎に贈り家老及び松井典禮に面談を求め且つ長岡監物の長岡護美を輔けて上京せんことを懇願す……三七二
十月廿六日勅使三條實美等川崎に泊す……三七三
十月廿六日一橋慶喜再ひ登營す……三七三
十月廿六日藩主慶順幕府に屆け限りにて上京長岡護美先發の事に決し尋で藩政府は在府重役に對し此件につき豫め幕府の了解を得ることに盡力すべきを命ず……三七四
十月廿六日土屋矢之助書を長岡監物の臣芥川四郎中尾平馬に贈り其主監物の奮起を望む……三七六
十月廿七日勅使三條實美等品川に泊す……三七七
十月廿七日本藩主上京につき長岡護美先發のことを家中に達す……三七九
十月廿七日住江甚兵衛は土屋矢之助を二本樹の別邸に招き歡迎の意を表す……三七九
十月廿八日勅使三條實美等江戸に入る……三八〇
十月廿八日我藩老臣連署の叛東を長藩老臣に贈り土屋矢之助派遣の旨に答へ長岡護美をして上京せしむへきことを通告す……三八二
十月廿九日本藩老臣三淵志津摩は長岡護美上京につき隨從の件及ひ住江甚兵衛宮部鼎藏淵木武兵衛をして先發周旋せしめんとの議につき各老臣の意見を徵す……三八四
十月廿九日長藩桂小五郎佐々木男也岡藩主中川久昭に謁し京地附近通過禁止の朝命を傳へ小河彌右衛門等の赦免を迫る……三八七
十月廿九日薩藩吉井忠助書を在國の本田彌右衛門高崎佐太郎等に贈り勅使着府幕閣紛紜の狀況等關東の形勢を報す……三八九
十月某日筑藩主黑田齊溥上京關白二條齊敬に謁して時局に對する其志をのべ尋で浪士鎭撫に盡力す……三九〇
十一月朔日長岡護美勤王志士の扈從上京の事に關し小笠原備前を召して意見を徵す……三九一
十一月朔日三淵志津摩勤王志士扈從上京の件につき更に老臣中に回章を發す……三九三
十一月朔日住江甚兵衛魚住源次兵衛上京を命せらる……三九四
十一月朔日飯田熊之助日田陣屋警衛として兵五十人を率ゐ熊本を發す……三九五
十一月朔日松平春嶽山内容堂を訪ひて攘夷の策略を議す……三九六
十一月二日藩主慶順一條忠香三條實美に答ふる書を發して内勅奉承の意をのべ弟長岡護美を先發上京せしむべき旨を具陳す……三九六
十一月二日一條忠香は長岡監物是澤亦藩主に隨て上京し國事に盡瘁すべしとの内勅を傳ふ……三九九

十一月二日在府本藩重臣は幕府の内情を聞きて其改革の至難ふるを認め藩主の朝旨を奉して江戸に赴き力を致さんことを藩政府に通議す……四〇二
十一月二日長岡護美上京につき扈従長として楯岡慎之助下津久馬鎌田軍之助を陪従せしめんとの議あり……四〇六
十一月二日土藩武市半平太小南五郎右衛門長藩佐久間佐兵衛楠崎彌八郎及び村井修理少進等勅使の面前に會して幕府の勅使待遇法變革の事を議す……四〇六
十一月三日長岡護美勤王十六士陪従上京の事に關し手書を老臣に與へて遂に其同意を得たり……四〇七
十一月三日本藩住江甚兵衛粟津忠太郎中西傳右衛門魚住源次兵衛宮部鼎藏轟木武兵衛等の上京旅程を變更す……四〇九
十一月三日本藩城使里内官右衛門は英艦薩州を襲はんとするの風聞及び御殿山の公使館竣工に關する幕吏の所見を探りて之れを報告す……四一〇
十一月三日青地源右衛門書を用人田中八郎兵衛に贈り岡藩主の動靜京坂の形勢を報し藩主代として長岡刑部の上京を希望す……四一一
十一月三日長藩士數名勅使旅館に於て勅使歸洛の時期につき協議する所あり……四一三
十一月五日朝廷一橋慶喜松平春嶽蟄居の風聞あるを以て速に其出仕を促さる……四一三
十一月五日楯岡慎之助木下眞太郎は長岡護美に陪して上京するを以て各々國老小笠原備前を訪うて別を告く……四一四
十一月五日因州藩主松平慶德江戸に着し破據の假廬徹底に盡力す……四一四
十一月六日河上彦齋青木彦兵衛益坂榮藏加屋榮太等長岡護美の上京に陪従を命せらる……四一五
十一月六日在府本藩士井口呈助公武合躰の盡力に關し建白書を藩政府に提出す……四一六
十一月六日本藩田中彦右衛門は英艦薩州襲撃の風聞御殿山使臣館破壞企畫の噂あることを報告す……四一八
十一月七日長岡護美は上京扈従の士に注意要綱を垂示す……四一八
十一月七日下津久馬扈従上京につき國老小笠原備前を訪ひて別を告く……四一九
十一月八日藩主慶順長岡護美陪従の士に教書を下す……四一九
十一月九日藩主慶順長岡護美陪従の士を勞ふ……四二〇
十一月十二日岡藩主中川久昭小河彌右衛門等の處置に對する朝議を解かる……四二〇
十一月十二日松村大成長岡護美の上京に陪従を命せらる……四二一
十一月十三日藩主慶順は勅諚により追て上京すへく弟長岡護美をして先發せしむる旨を幕府に申告す……四二二
十一月十三日長岡護美上京の途に就く……四二二
十一月十三日長藩高杉晋作久坂玄瑞等十餘人武州金澤にて外人暗殺を企てしも成らず……四二七
十一月十四日本田伯耆守等幕府の學問所奉行とふる……四二二
十一月十六日多田帶刀島田左近等と通謀せしといふを以て之を殺戮梟首せし者あり……四二二
十一月十七日岡藩主中川久昭朝議解除の御禮として參内す……四二二
十一月十八日藩主慶順米壹萬五千俵を朝廷に献納すべき旨を幕府に申告す……四二三
十一月十八日長藩野村和作吉田榮太郎は住江甚兵衛魚住源次兵衛等の上京を慫慂せる同藩老臣の書を携へて熊本に來る……四二三
十一月中旬遣歐使節竹内下野守等品川沖に歸着す……四二四
十一月廿日我藩江戸留守居吉田平之助勅使三條實美に謁して叡慮のあるところを察し翌日横井平四郎を訪ひて幕議の決するところを知り尋て之を上司に報告す……四二四
十一月廿日幕府は諸侯の室家等下國の際關門通過に關し便法を設けたる旨を達す……四二七
十一月廿日幕府は安政の獄及ひ外交事務に關係せし故井伊直弼等を追罰す……四二八

十一月廿一日藩主慶順は長岡監物召徴の内勅に對する奉命書を一條忠香に提出す……四四一
十一月廿一日長藩主松平慶親朝命に依り對州藩國情調査書を上る……四四二
十一月廿一日我藩老臣返書を長藩老臣益田彈正に贈り長岡護美上京住江魚住等陪從の旨を報す……四四六
十一月廿二日長岡監物藩主上京の陪從を命せらる……四四六
十一月廿三日幕府松平玄蕃頭外數名をを處罰す……四四七
十一月廿三日岡藩の使者熊田万八京都の我藩邸に來り小河彌右衛門等處分に關する朝譴の顚末を陳辯し且つ隣交を厚くせんことを請ふ……四五一
十一月廿四日在府本藩老臣は幕議攘夷に決せば外夷攝海に迫るべきを憂ひ豫め京攝間の防備に關する意見書を藩政府に送る……四五二
十一月廿四日鍋島閑叟上洛す……四五五
十一月廿五日本藩田中彦右衛門は閑老板倉勝靜の引入、一橋慶喜と因州藩主との會見、及び勅使待遇改正等のことを報告す……四五五
十一月廿七日將軍家茂勅使三條實美副使姉小路公知を營中に迎へて攘夷の期を定め親兵を編すべきの勅命を拜す……四五六
十一月廿八日藩主慶順九月十日附三條實美の書翰に答へて近日上京の途に就く可き旨を告ぐ……四五八
十一月晦日幕府各藩に令し國事に關し罪を得たる者を調査せしむ……四五八
十一月晦日長藩は佐久間修理の罪を赦されんことを請願す……四五九
十一月某日津藩主藤堂高猷齊宮復興の議を上る……四六〇
十二月三日藩主慶順來十五日を以て上京の途に就くべき旨を達す……四六〇
十二月三日長岡護美大坂の藩邸に着す……四六〇
十二月三日横井平四郎攘夷實行に關し三策を幕府に建白す……四六一
十二月四日長岡護美伏見に到る……四六三
十二月四日本藩政府は在府老臣に藩主上京延期のことを報じ且つ外艦攝海襲來の風聞に關しふほ調査報告すべきを命す……四六三
十二月四日因州藩主江戸を發す是より諸侯相次で江戸を發して西上す……四六四
十二月五日勅使三條實美等入城す將軍家茂奉勅の書を上る……四六五
十二月五日長岡護美着京して南禪寺の旅館に入る……四六六
十二月五日本日發行の爪哇新聞、我幕政の改革汽船の購入外人の束縛及び蘭國領事の江戸出發等を報ず……四六七
十二月六日幕府軍役兵賦を定む……四六八
十二月六日松平春嶽は將軍家茂自ら幕府失政の責を負ひ官位一等を辭せんとするの意ある旨を幕吏に諭告す……四七一
十二月六日田中彦右衛門は會藩に對し島津久光を拔擢して京都の守護を命じたるを以て相共に警衛の任に當るべしとの朝命ありしことを報す……四七一
十二月七日勅使三條實美副使姉小路公知江戸を發して歸洛の途に上る……四七二
十二月七日岡藩主中川久昭使を長岡護美の旅館に遣し今般志士處分に關する朝譴を解かれ八幡山崎砲臺の新築を命せられたる由を報す……四七三
十二月九日朝廷に國事懸を置き攝家親王議傳兩奏其他堂上總へて廿餘人を補して專ら國事を討議せしめらる……四七四
十二月九日幕府松平主税助に浪士取集方を命す……四七六
十二月十日長岡護美坊城中山近衛の諸家を歴訪す……四七六
十二月十日長岡護美一條忠香に謁し内勅奉承の意を陳へ先つ藩主代として上京せし旨を告ぐ……四七七

十二月十一日傳奏野宮定功長岡護美に姑く滯京して警衛の任に當るべしとの叡旨を傳ふ……四七八
十二月十二日朝廷我藩外九藩に攝海防禦帝都守衛に關する諮問あり……四七九
十二月十二日長岡護美京都警衛の朝命を奉承す……四八〇
十二月十二日長岡護美滯京警衛の朝命を拜せし旨を所司代及ひ京都町奉行に申告す……四八一
十二月十二日幕府登庸の目的を以て我藩學教官木下眞太郎を召す……四八一
十二月十二日幕府鹽谷甲藏安井仲平芳野立藏を舉けて儒者と爲す……四八二
十二月十二日品川御殿山外國公使館を燒く者あり……四八三
十二月十三日幕府は攘夷の勅諚拜受の旨を諸侯に傳へ之に對する策略意見を徵す……四八四
十二月十三日長岡護美京都警衛拜命につき近衛坊城野宮の諸家を歴訪す……四八五
十二月十四日白川殿にて戊午以來報國忠死者の靈を祭らる……四八五
十二月十四日朝廷長岡監物の上京を促さる……四八六
十二月十四日在府本藩老臣は松平春嶽の盡力により內室の發輿許可の事及ひ時局に關し內願書を松平春嶽に提出の件等を藩政府に報告す……四八六
十二月十四日横井平四郎尾州藩邸に於て尊王の大義を說く……四八八
十二月十四日在京加屋榮太書を在國の同志に贈り十二侯異船打拂の朝令幕府に下りしこと將軍上洛につき諸侯の大坂警衛並に供奉のこと、長藩より親兵設置の建策、長藩士の勅使館警衛、島津齊彬贈位、筑米兩藩士の赦免、水戸藩主大樹隨行上洛の朝命、及ひ幕府勅諚奉承に關する毛利定廣の案文等時事に關する報告をふす……四八八
十二月十五日幕府は嘗て水戸に賜ふ所の勅書を更に改めて下し給ひし旨を各藩に示達す……四九五
十二月十五日一橋慶喜江戸を發して上京の途につく……四九六
十二月十五日長岡護美、近衛關白青蓮院宮に伺候す……四九七
十二月十五日長岡護美使者を近衛關白以下の邸に送り長岡監物上京の朝命を奉請す……四九七
十二月十五日長岡護美書を藩政府に贈りて京師の狀況を報す……四九八
十二月十六日長岡護美一條家を訪問す……五〇〇
十二月十七日幕府は我藩外十二藩主に對し將軍上洛につき陪從其他の行動に關し令達する所あり……五〇一
十二月十七日本藩宮部鼎藏山田十郎佐々淳次郎伏見より淀川を初大坂川口海岸地理視察として出張を命せらる……五〇一
十二月十八日本藩政府は藩主慶順不日上京の途に就かんとするを以て家中の勤儉力行を奬勵し且つ陪從の士卒に心得方を論達す……五〇二
十二月十八日顯光院夫人及び鳳臺院夫人江戸を發して熊本に歸る……五〇四
十二月十八日長岡護美一條家を訪問す……五〇五
十二月十八日蜂須賀齊祐新設の陸軍總裁兼海軍總裁に任せらる……五〇五
十二月十八日伊達宗城上京す……五〇五
十二月某日鍋島閑叟長崎警衛を辭し一藩の力を以て攝海防禦に當らんことを近衛關白に內願す……五〇六
十二月十九日野宮家雜掌は本藩留守居を召喚して來春將軍上洛につきて陪從其他總て寛永の先蹤に據らす專ら簡易を旨とすべしとの御沙汰書を交附す……五〇六
十二月十九日長岡護美は隆の藤井良節との會見、隆長岡の議論杆格、青蓮院宮に拜謁意見の開陳、同宮及び近衛關白の品隲、隆の內情、一條忠香と對外策につきての談話、及ひ岡山藩老臣戸倉彈正との會見につき藩政府に通信す……五〇七
十二月十九日長藩佐々木男也藩主の意をうけて長岡護美の旅館に來り明日益田彈正前田孫右衛門參謁依賴する……五〇七

所あらんと欲する旨を陳ぶ……五二〇
十二月十九日因幡藩主松平慶徳着京す……五二〇
十二月十九日藝人あり横井平四郎が都築四郎吉田平之助と集會の席を襲ひ四郎平之助を傷く平四郎難を避けて越藩常盤橋の邸に歸る尋で平四郎士道忘却云々の議起る松平春嶽之を越前に避けしむ……五二一
十二月廿日幕府は諸侯其他私有の船舶を以て武器運送並に宰家就國に關する申告規定を示達す……五二八
十二月廿日彦根藩御所六門警衛の兵を撤す……五二九
十二月廿日本藩粟津忠太郎河上彦齋青木彦兵衛等稲荷社務羽倉伯耆を訪ひ京地の近狀を聽く……五二九
十二月廿一日長岡護美攝海防禦策を近衛關白の内覽に供す……五三〇
十二月廿一日長岡護美長藩益田彈正等を引見す……五三〇
十二月廿一日鍋島閑叟京師を發して江戸に向ふ……五三二
十二月廿一日長岡護美は鍋島閑叟東下の事情各藩主等滯京の模樣等京師の狀況を藩政府に報告す……五三二
十二月廿一日山内豐範上京す……五三四
十二月某日本藩々主上京につき豫め國議を定む……五三四
十二月廿二日長岡護美曩の諸問に對し攝海防禦策を上る……五三五
十二月廿二日薩主慶順夫人江戸を發して熊本に下る……五三七
十二月廿二日藪右馬允は熊本及ひ江戸に對し長岡護美京師警衛を命せられたるにつき兵士砲器等充實の件を交渉す……五三七
十二月廿三日勅使三條實美等歸京す……五三七
十二月廿三日薩主慶順老臣長岡監物を從へて上京の途に就く……五三八
十二月廿三日長岡護美正親町三條實愛を訪ふ……五三八
十二月廿三日長岡護美は皇族及ひ縉紳諸家の言說狀況等を藩政府に報告す……五四〇
十二月廿四日會藩主松平容保上洛守護職の任に就く……五四〇
十二月廿四日幕府鵜殿鳩翁に浪士之内有志者取扱を命す……五四一
十二月廿四日長岡護美松平慶徳を訪ふ……五四一
十二月廿四日薩藩藤井良節書を同藩中山忠左衛門に贈り在京諸侯の動靜を報す……五四三
十二月廿五日本藩は非常の節天機奉伺及ひ御所近火の節人數派出等の事につき伺書を朝廷に上る……五四五
十二月廿五日長岡護美滯京警衛の朝命を拜したる旨を幕府に申告す……五四五
十二月廿六日長岡護美因州宇和島兩藩主と共に近衛關白に謁し幕府前非を改め朝旨奉承の意あり宜く速に其實を擧行せしめ外藩は妄に喙を容れず專ら各自藩屏の任に當らしむるに如かざる旨を進言す……五四六
十二月廿七日長岡護美松平淡路守を訪ふ……五四九
十二月廿八日幕府は將軍上洛の順路及び軍艦座乘の旨趣を達す……五四九
十二月廿八日長岡護美松平伊豫守松平淡路守等同道近衛關白に謁す……五五〇
十二月廿八日宮部鼎藏佐々淳次郎山田十郎攝海及び京坂附近防禦に關する視察復命書を提出す……五五〇
十二月廿九日松平淡路守長岡護美を來訪す……五五七
十二月某日幕府は將軍上洛に際し陪從其他總て簡易質實を主とすへき旨を達す……五五七
文久三癸亥年正月五日一橋慶喜上洛す……五五八
正月六日長岡護美三條實美を訪ふ……五五八
正月八日長岡護美三條實美に謁し尋て青蓮院宮家に伺候す……五五八

正月八日尾張前大納言上洛す……五六〇
正月九日六條有容長岡護美を來訪す……五六〇
正月九日長岡監物上京の途中書を裁して長岡護美の手簡に答ふ……五六〇
正月十一日顯光院鳳臺院兩夫人伏見に着す……五六一
正月十二日藩主夫人着京して一條邸に入る……五六一
正月十二日三條實美長岡護美を來訪す……五六二
正月十二日本藩政府は米壹万五千俵禁裏に献納の件幕府の認可を得たる旨を在京長岡監物に報す……五六二
正月十二日幕吏竹内下野守遣外使節としての功勞により祿三百石を增加せらる……五六二
正月十三日長岡護美旅館を二條川東妙傳寺に移す……五六三
正月十四日長岡護美關白近衛忠熙に謁す……五六四
正月十五日幕府は來月廿六日を以て將軍海路上洛の途に就くべき旨を發表す……五六五
正月十五日藩主慶順大坂の藩邸に着す……五六五
正月十五日長岡護美毛利定廣を訪ふ……五六六
正月十五日本藩山田十郎京都より書を在國永島三平に贈り幕政の振興薩長土の形勢及び三平身上周旋の狀況を報す……五六六
正月十六日藩主慶順伏見に着す……五六八
正月十七日藩主慶順長岡監物以下を隨へて着京し南禪寺の旅館に入る……五六八
五月十七日藩主慶順使を所司代邸に遣し豫め縉紳諸家往訪のことを通告せしむ……五七〇
正月十七日細川若狭守將軍上洛中非常の節幸橋門外に出兵すべきを命せらる……五七〇
正月十八日田安大納言頤に依り官位一等を降り隱居を命せらる……五七〇
正月十八日藩主夫人京都を發して熊本に下る……五七二
正月廿日長岡護美三條實美を訪ふ……五七二
正月廿日我藩在京藩士の心得方を達し他藩交際出入門限等につき取締を嚴にす……五七二
正月廿二日朝廷藩主慶順に來廿七日を以て參内すべきを命せらる……五七三
正月廿二日蜂須賀齊祐依願陸軍總裁職海軍方兼帶を免せらる……五七三
正月廿三日關白近衛忠熙職を辭し應司輔熙之に代る……五七四
正月廿三日池内大學の首を難波橋際に梟する者あり……五七五
正月廿四日靑蓮院宮近衛應司兩家及び傳議兩奏の各邸に投書して朝廷の廓清を計らんことを迫る者あり……五七六
正月廿六日傳奏坊城俊克藩主慶順參内に關する順序禮式を指示す……五七七
正月廿六日長岡護美三條實美を訪ふ……五七七
正月廿七日朝廷藩主慶順に滯京警衛を命じ長岡護美の任を解かる……五七七
正月廿七日阿州世子松平淡路守長岡護美を來訪す……五七八
正月廿七日本藩住江甚兵衛宮部鼎藏佐々淳次郎山田十郎河上彦齋諸藩の有志者と京都東山の翠紅館に會し時事を議す……五七八
正月廿八日幕府は將軍上洛後府下の警備を嚴ふらしむべきことを達す……五七九
正月廿八日藩主慶順は滯京警衛の命を拜したる旨を幕府に申報し留守居をして守兵を藩地より召致すべき由を申告せしむ……五七九
正月廿八日本藩相州の警備を免せられんことを幕府に申請す……五八〇

正月廿八日長岡護美青蓮院宮に謁す……五八〇
正月廿九日青蓮院宮に還俗あるべき旨仰出さる……五八一
正月廿九日中山忠能正親町三條實愛議奏を免せらる……五八一
正月某日本藩儒臣井口呈助は横井平四郎の處分に關し意見書を松平春嶽に提出す……五八一
二月朔日朝廷在京の諸藩に命じ匿名投書を取調へしめ且告訴せんと欲する者は明に氏名を書して其筋に申立つべしとの旨を達せらる……五八三
二月朔日藩主慶順帝都警衛の任務を盡さんと欲し更に兵員招致の命を藩政府に下す……五八四
二月朔日在京本藩老臣は都下の狀勢を藩政府に報じ且つ出兵諸隊の選擇を誤るゑからんことを通議す……五八五
二月二日長岡護美關白應司輔熙に謁す……五八六
二月三日本藩京都警衛を命せられしを以て有司に其人選を命す……五八六
二月五日長岡護美三條實美を訪ふ……五八九
二月六日藩主慶順舊臣幕府の諸問せる攘夷の策略につき公武一致必勝の明算を盡し斷然其方針を遂行せられんことを答申す……五八九
二月六日在京本藩老臣は攘夷策問答申のこと及び藩邸購入に關する件を藩政府に通牒す……五九〇
二月六日長岡護美前關白近衛忠熙に謁す……五九二
二月六日千種有功の首級を斬りて之れを土州藩旅館の前に授する者あり……五九三
二月七日長岡護美青蓮院宮に伺候す……五九三
二月九日藩主慶順參内して龍顏を拜し天盃を賜はる……五九三
二月十一日幕府は將軍陸路上洛につき本藩の浦賀警備を撤して相州警備を嚴にすへきを命す……五九三
二月十一日本藩は將軍上洛後の府下戒嚴に關し示達を受けたりと雖とも目下在府の藩兵寡少ゑるを以て事變に臨み命に應する能はさることあるへき旨を幕府に申告す……五九四
二月十一日細川若狭守は將軍上洛中幸橋門外警衛の幕令に對し既に相州警備の任務を帶へるを以て兵備充分ゑらざる旨を辯疎す……五九四
二月十一日松平相模守松平淡路守長岡護美を來訪す……五九六
二月十一日轟木武兵衛久坂義助寺島忠三郎應司關白に謁し言路を開き、人材を擧げ、攘夷期限を定むるの三策を献し即日之を決定せられんことを迫る關白伏奏して其請願を許さる尋て三條實美等勅使として一橋慶喜の旅館にのそみ攘夷期限の決定を促す……五九六
二月十二日長岡護美關白應司輔熙に謁す……六〇一
二月十二日本藩は京都警衛の命を蒙りしを以て備組の内番頭一人組其鐵炮頭半分組其大筒手片手に上京を命する旨を達す……六〇三
二月十三日將軍家茂上洛の途に就く……六〇四
二月十三日長岡護美一條忠香を訪ふ……六〇六
二月十四日一橋慶喜松平春嶽等攘夷期限の決定豫測を上陳す……六〇六
二月十五日藩主慶順は匿名投書に關する調査の狀を具し尚ほ速に攘夷を斷行あらば投書の弊自ら消滅すへき旨を奉答す……六〇六
二月十五日兩傳奏鷺掌は關白以下の諸官將軍及ひ各藩主等の途上禮節を改められし條項を各藩に通告す……六〇七
二月十五日長岡護美三條實美を訪ふ……六〇九
二月十五日本藩留守居は轟木武兵衛應司邸參向の理由を幕吏永井主水正に開陳す……六〇九

二月十六日顯光院鳳臺院兩夫人熊本に着す……六〇九
二月十六日長岡護義關白鷹司輔熙に謁す……六一〇
二月十七日青蓮院宮中川宮と改稱せらる……六一〇
二月十七日藩主慶順は攘夷決行に際し藩地の戰略等指示を要するを以て長岡護美の賜暇歸藩を請願す……六一一
二月十七日長岡護美松平春嶽を訪ふ……六一一
二月十八日朝廷在京諸侯の參朝を命じ攘夷期限の決定及び言路洞開に關する勅諚を傳へ且つ神宮警衛遠島防禦に就きての策問あり……六一一
二月十八日藩主夫人熊本に着す……六一四
二月十八日大村藩は自國海岸並に長崎市中の防禦を嚴にし且つ帝都近海非常の節は警衛の任に當るへしとの勅諚を受けたる旨を我藩に報す……六一四
二月十九日朝廷長岡護美に暫濃京せんことを命せらる……六一五
二月十九日英國代理公使ジョン、ニール幕府に對し生麥事件の賠償を要求す……六一六
二月廿日草莽微賤の者と雖も學習院に至りて時事を建言することを許さる……六一八
二月廿日長岡護美鷹司關白中川宮等に伺候す……六一九
二月廿日朝廷長岡護美の歸國を許さる……六一九
二月廿一日長岡護美一條忠香に謁し轟木武兵衛を從へ歸國する旨を告く……六二〇
二月廿二日東久世通禧は長岡護美歸國するを以て住江茂兵衛河上彦齊其他同志の者を留めて國事に盡力せしむへしとの鷹司關白の命を傳ふ……六二〇
二月廿二日長岡護美は朝命により住江川上其他の同志者に滯京を命せらるゝに當り同志者の覺悟に關し在京の有司に示す所あり……六二一
二月廿二日三輪田元綱等十餘人等持院に安置せる足利將軍の木像の首を執て之れを三條河原に梟す……六二一
二月廿三日本藩住江茂兵衛廣吉半之允山田十郎宮部鼎藏河上彦齊加屋榮太に暫く滯京を命し且つ其旨を朝廷に具申す……六二四
二月廿四日長岡護美京都を發し歸國の途に就く……六二五
二月廿五日本藩政府は京都警衛として派遣すべき藩士に訓示する所あり……六二六
二月某日幕府井伊掃部頭の差控を赦し横濱より川崎に至る海邊の警衛を命ず……六二七
二月廿六日毫張慶勝一橋慶喜松平春嶽共に關白邸に候し英人と應接の結果を慮り水戸慶篤に江戸守衛を命し瀬海の諸侯を歸藩せしめんことを請ふ……六二七
二月廿七日朝廷本藩に對し英船渡來につき防備の爲め藩主國に就くことあらば特に京都警衛として多少の兵を留め置くべき旨を命せらる……六二九
二月廿七日所司代牧野忠恭は本藩留守居を召喚し英人の要求撫許し難きを以て或は開戰の避く可からざるに至らんことを告け之に備ふる所あらしむ……六二九
二月廿七日幕府英人と應接の結果を慮り在京の諸侯に歸國を命し兵備を盡さしむ……六三〇
二月廿七日足利將軍の木像を梟首せし者を捕ふ……六三一
二月廿九日朝廷國事掛は本藩周旋方を學習院に召喚し浪士を以て攘夷先鋒の部隊を編制する事等に關し意見を徵す……六三三
二月廿九日松平春嶽は英艦の要求に應せさるの方針ふるを以て速に爭端を開かんことを慮り特に帝都の警備を嚴ふらしむへしとの勅旨を我藩に傳ふ……六三四

二月晦日朝廷藩主慶順に更に滞京を命せらる……六三四
三月朔日藩主慶順京地火の番兼務を命せらる……六三五
三月朔日本藩は浮浪有志の士を以て攘夷先鋒部隊編制等の下問に對し意見書を學習院に提出す……六三五
三月二日在京本藩老臣は藩主慶順の農兵募集汽船購入の儀を認容したるを以て其實行を計るへく藩政府に通牒す……六三六
三月二日在京本藩老臣は三條實美姉小路公知其他國事掛の堂上等と長州及び諸浪士との連絡、公卿の分派等につきて藩政府に報告す……六三七
三月三日幕府諸侯を江戸城に會し攘夷に關する評議を開く……六三九
三月三日本藩相州備場の警衛を免せられんことを幕府に申請す……六四〇
三月四日將軍家茂上洛して二條城に入る……六四〇
三月四日來十一日攘夷祈願の爲め加茂行事將軍家茂供奉すべき旨を仰出さる……六四一
三月四日在府閣老井上正直は英艦要求の條件許否に關し事變の發生を慮り特に警戒を嚴にすべき旨を各藩に通達す……六四一
三月五日大政舊の如く將軍に委任すとの勅諚あり……六四一
三月六日在府閣老は對英談判の結果或は攘夷の決行とふるべきを以て各藩國の赤心を失はず忠節を盡すべしとの命を傳ふ……六四三
三月六日幕府は英艦渡來につき諸侯に命して江戸灣の防備を嚴にせしむ……六四四
三月六日本藩は幕府屢々英艦入港に關し不慮に備ふるの令達を發すと雖も我在府藩兵の寡少にして幕意に副ふ能はさる所以を開陳して其指示を求む……六四六
三月六日日出藩使者を熊本に遣して攘夷斷行に際し隨時本藩の策應救援を乞はしむ……六四七
三月六日本藩外使日向德藏は横濱在留外人の動靜及ひ英人要求の概況を報告す……六四八
三月上旬會藩士浪士放免に關する朝命を非とし伺奏に直訴す……六四九
三月七日將軍家茂參內して大政委任の勅諚を奉承す……六四九
三月八日藩主慶順は支藩細川主米輔の參府を轉し本藩に部屬して京師を守備せしめられんことを幕府に申請す……六五〇
三月八日一橋慶喜は應司關白に諸侯の攘夷策略意見書を送り且つ對英談判恐く破裂に及ふべく此際人心の一致を肝要とする旨を陳ぶ……六五一
三月十日藩主慶順英艦薩海に廻航すとの風聞あるを以て親書を老臣松野頁に授けて歸藩せしむ……六五二
三月十一日攘夷祈願の爲め車駕賀茂に幸す……六五一
三月十一日在京本藩老臣は在府當局に對し英艦薩を襲ふの噂あるを以て自國海岸防禦等談合の爲め松野頁下國の件、沼田上京郡出府の件、時局を慮り田町の藏米移轉の件、及ひ在府不用家屋解崩の件等を通牒す……六五三
三月十一日本藩偵吏は英國軍艦渡來に關する事情を探り幕府と英佛公使との交渉の概況を報告す……六五四
三月十二日朝廷の事多く長藩の議に出て三條實美姉小路公知政を專にすとの報あり……六五八
三月十二日長岡護美熊本に歸着す……六五九
三月十四日將軍滯京を延期す……六五九
三月十五日一橋慶喜御守衛の名目を以て親兵設置の議を奉承す……六六〇
三月十五日藩主慶順京民賑恤の料として米壹萬五千俵を献せんことを朝廷に申請す……六六一
三月十五日幕府は京都の地形に鑑み豫め運輸の便を計り奸商射利の弊を矯め以て事變に臨みて米穀薪炭等の缺乏を防止すべき旨を達す……六六二
三月十五日本藩番頭志水久馬助以下の藩兵本日より十八日に亘り京都に着す……六六二

三月十六日在京本藩老臣は松平春嶽辭職の内意あることを藩政府に報す……六六二
三月十七日朝廷將軍家茂の東歸を止め京師並に近海守衛の策を講じ攝海に於て英人と應接せんことを命せらる…六六四
三月十七日幕府は朝旨を遵奉し時變に臨み攻守宜しきを制するの戰略を怠る可らざる旨を各藩に示達す……六六四
三月十七日神奈川奉行は對外交渉の結果を慮り横濱神奈川市民に諭し老幼病者等を避難せしむ……六六五
三月十八日一橋慶喜等參内して將軍の滯京を辭し且つ來廿一日を以て將軍の東歸すべき旨を達す……六六六
三月十八日幕府詔旨を奉して十萬石以上の諸侯に命し萬石一人の割を以て禁闕守護の兵を出すべき旨を達す……六六六
三月十八日稲葉兵部少輔攝海砲臺建築視察及ひ神戸操練所創設差配として出張を命せらる……六六七
三月十八日島津久光京師を發して下國の途に就く……六六七
三月十九日將軍家茂參内して滯京の命を奉承す……六六九
三月十九日幕府は將軍家茂攘夷の命を奉したる旨を達す……六七〇
三月廿一日本藩外使日向德藏は更に横濱の形勢及ひ在留外人の動靜、應接の狀況等を探りて之を報告す……六七〇
三月廿一日一橋慶喜等關白邸に至り將軍の歸府を請願す……六七二
三月廿一日幕府將軍家茂の明後廿三日を以て東歸すべき旨を達す……六七二
三月廿一日傳奏坊城俊克本藩留守居を召喚し速に禁闕守衛の兵を選出すべき旨を命達す……六七三
三月廿一日松平春嶽勅許を待たすして京師を發し國に歸る……六七三
三月廿二日將軍家茂に更に滯京すべきの勅命あり……六七四
三月廿二日水戸慶篤將軍目代として關東守衛英人應接の爲め東下を命せらる……六七四
三月廿二日我藩脫走安田喜助長藩士と共に應司關白の邸に候し將軍東歸阻止の事に盡力す……六七四
三月廿三日本藩献米の請願を勅許せらる……六七五
三月廿三日朝廷再ひ將軍の東歸を留めて對外の大策を決し國家の基を固め人心を慰安すへき旨を諭さる……六七五
三月廿三日傳奏坊城俊克は水戸慶篤に關東守衛を命せられたる旨を各藩に示達す……六七六
三月廿三日幕府我藩主外六名を二條城に召集す……六七六
三月廿三日幕府は將軍の東歸を延期する旨を達す……六七六
三月廿三日在京本藩重臣は將軍退京日限不定の狀況諸侯の動靜及ひ親兵の設置等を藩政府に報告す……六七七
三月廿三日本藩政府は時局に鑑みる所あり有司に命じて武器の修繕玉藥の準備を整へしむ……六七九
三月廿五日幕府は事變に際し銃砲武器類の城門通過に關する心得を達す……六七九
三月廿五日松平春嶽擅に歸國したるを以て免職逗塞を命せらる……六七九
三月廿六日傳奏坊城俊克は本藩留守居を召喚し石清水行幸及ひ親兵の件につき示達する所あり……六八〇
三月廿六日坊城家雜掌より石清水行幸供奉列書提出のことを達す……六八一
三月廿六日小笠原長行英人應接の爲め東下を命せらる……六八一
三月廿六日本藩在京の藩士以下の員數を調査す……六八一
三月廿七日朝廷本藩重臣を學習院に召喚して住江甚兵衛等同志中より貢献兵士を選出すべきことを命せらる……六八二
三月廿七日所司代牧野忠恭我藩留守居を召喚して石清水社行幸警備の命達を交付す……六八三
三月廿八日藩主慶順時局に關し周旋すべきの内諭を奉したるを以て應司關白を經て天下の事皆將軍に委任し政
　令一致以て今日の危機に處するの必要ふる所以を建白す……六八三
三月廿八日本藩長崎留守居匂坂平右衛門は日英關係切迫により長崎騷擾の狀況長崎奉行より英國領事への交渉
　之に對する領事の回答及ひ領事より市民への告知書等を得て之れを藩政府に報告す……六八五
三月廿八日本藩田中彦右衛門は權濱市民動搖の狀況奉行の示達等を探り之れを在府藩當局に報告す……六八八

三月廿九日傳奏坊城俊克は去ル廿一日の選士貢献に關する令達の訂正せられたるを以て更に之を交附す……六九一
三月廿九日藩主慶順は藩地沿海數十里に亘り又天草島策應の任務あり此際親しく防備を督せさるべからさるを以て速に歸藩を許されんことを朝廷に申請す……六九二
三月廿九日石清水行幸の際社頭休所の儀を傳奏より關係各藩に示達す……六九二
三月廿九日石清水行幸四月四日の豫定を延期せらる……六九四
三月晦日藩主慶順は前に朝廷に上りし封事と同意の建白書を幕府に提出す……六九五
三月晦日津山津和野岡の三藩攝津湊川より武庫川邊警衛を命せらる……六九六
三月某日在京本藩人山崎昌重書を家郷に贈り幕府對外策の緩漫我藩主の公武合躰盡力の狀況及ひ公卿諸公の品隲等時局の大要を報す……六九六
四月朔日松平甲斐守外十名京都及ひ其附近の警衛を命せらる……六九九
四月二日本藩政府は對英事件の結果を慮り緩急機を失せさらんが爲め兵備充實の必要を藩内に訓示し且つ在御家人の子弟長柄の者等に西洋式銃隊稽古を奬勵す……七〇一
四月二日西國郡代屋代增之助は英艦渡來狀勢不穩の風聞あるを以て書を我藩に致して豫め天草島の應援を乞ふ…七〇二
四月三日朝廷藩主慶順の歸國を許さる……七〇三
四月四日幕府は秋田外四藩に命して江戸市中を取締らしむ……七〇五
四月四日藩主慶順は將軍親しく京都守衛の任にあたり公武一致以て天下に號令し宸襟を安んし奉らんことを朝廷及び幕府に建白す……七〇六
四月某日我藩宮部鼎藏長藩久坂義助開老板倉勝靜に見えて攝海の防備及ひ攘夷の勵行を促す……七〇九
四月五日藩主慶順參内して龍顏を拜し天盃を賜はる……七〇九
四月五日幕府我藩外十三藩に對馬應援の心得を以て豫め軍備を整へ置くべきことを命す……七一〇
四月五日幕府は英艦渡來して江戸市中の動搖せるに乘し惡徒の徘徊亂妨の虞あるを以て酒井繁之丞等に府内の巡視を命す……七一〇
四月五日藩主慶順書を一門長岡内膳同刑部及ひ老臣等に與へ内膳刑部兩人の内孰れか速に上京し已に代りて守衛の任を盡さんことを命す……七一二
四月六日朝廷來十一日石清水行幸につき社頭其他の警衛及ひ加員隨身の員數等を我藩外十九藩に達せらる……七一三
四月六日藩主慶順京都を發し歸國の途に就く……七一七
四月某日本藩宮部鼎藏等京師を發して國に歸る……七一七
四月七日坊城野宮兩傳奏雜掌は三條實美に京都御守衛御用掛の命ありし旨を我藩に通告す……七一七
四月七日將軍家茂攘夷の期限切迫につき上下奮勵すへき旨を布衣以下の諸有司に諭す……七一八
四月七日本藩政府は在京老臣に通牒して天草警衛に關する重大なる結果を慮り相州及ひ京都の警衛を辭し專ら領海の守備に力を盡すことの可ふる所以を述ふ……七一九
四月七日本藩政府は西國郡代屋代增之助に答書を贈る……七二〇
四月七日本藩の長崎留守居匂坂平右衛門は時局に關し同地關係諸藩の出兵佐賀藩の砲臺建設及同地在留英國領事の擾亂鎮靜の爲めに致せる市民に對する宣言書並に長崎奉行に對する書翰寫を藩政府に提出す……七二一
四月八日本藩は來十一日石清水行幸につき志水久馬助に社頭警衛の爲め出役を命す……七二四
四月九日本藩廣吉牛之允山田十郎外八名に石清水行幸の際加員隨身として出役を命す……七二五
四月九日在府本藩士太田墨權作は先月末より本月五日に至る幕英交渉の狀況に關する福澤諭吉の談話を報告す…七二七
四月十日幕府我藩に男山社附近の警衛を命す……七二八

四月十一日車駕石清水に行幸あり一橋慶喜將軍に代りて之に奉供す是日警衛として藩兵百六十三人を出す……七三九
四月十一日在府本藩用人松下亀記は書を在京重臣に贈りて將軍東歸梨請に關する幕閣の内情を通報す……七三一
四月十二日幕府は近來宿驛困窮の折柄ふるを以て諸家々族及ひ家來妻子等共國邑に歸還する者は暫く宿驛人馬の使用を停止する旨を達す……七三三
四月十二日本藩汽船購入費として拾萬兩を支出する事を決す……七三四
四月十三日朝廷男山社加茂隨從の輩を賞せらる……七三六
四月十三日本藩時局に鑑みる所あり豫め相州京都天草及ひ領内海岸等各地の守備警衛に關する部署を定む……七三七
四月十三日岡藩使を熊本に遣はして昨年小河一件以來本藩周旋の好意を謝し且つ目下の形勢につき厚く依頼する所あり……七三九
四月十四日筑藩平野二郎書を松村大成父子に贈り先月末出牢徒罪方附を命せられ米十苞を給せらるゝに至りし旨を報す……七四〇
四月十五日幕府は水戸慶篤に賜りたる勅諚及ひ幕命の趣を洽く各藩に示達す……七四一
四月十五日本藩相州警備の任を解かれんことを幕府に申請す……七四二
四月十六日藩主慶順鶴崎に着す……七四三
四月十七日三條實美書を長岡護美に贈り守衛の選士は士卒の階級を論せず廣く適材を選はんことを要する旨を述ぶ……七四三
四月十七日幕府拾万石以上の諸藩をして交互京都守衛の任に當らしむ……七四四
四月十七日幕府出羽庄内藩主酒井繁之丞に新徴組統率を命す……七四五
四月十七日三條橋上に貼紙して將軍家茂を謗り速に姦吏を嚴科に處せすんば旬日を出すして悉く之に天誅を加ふしべと称す者あり……七四六
四月十九日本藩木下眞太郎の任用を免せられんことを幕府に申請す……七四六
四月廿日將軍家茂攘夷期限の決定を奏上す……七四七
四月廿日傳奏野宮定功長岡監物の上京を嘉し細川大和守と共に力を警衛に盡すべしとの朝旨を傳ふ……七四八
四月廿一日傳奏坊城俊克五月十日を以て攘夷の期限と決定せられし旨を諸藩に達す……七四九
四月廿一日將軍家茂攝藩海濱巡視として京師を發す……七四九
四月廿一日幕府は對英談判中家臣庶民に至る迄無謀過激の行爲なき樣篤く訓誨を加ふべく若し一旦緩急あらば戮力國威を發揚するの覺悟あるへき旨を各藩に廻達す……七五一
四月廿一日幕府は海岸防禦の爲め品川より藤澤迄の沿道に村里の變更人家の移轉を命することあるべき旨を達す　七五二
四月廿一日藩主慶順熊本に歸着す……七五三
四月廿一日長岡監物滯京警衛の朝命を奉承す……七五四
四月廿二日上杉彈正大弼宗對馬守は五月十日を以て攘夷の期限と決定せしにつき嚴に海岸を警備し外夷襲來の節は之を撃攘すへしとの幕命を傳達す……七五四
四月廿二日一橋慶喜攘夷撃攘の爲め京師を發して關東に下る……七五五
四月廿二日我藩長崎留守居匂坂平右衛門は幕府より佐賀福岡兩藩に對し長崎の守備に關して諮問せし旨を藩政府に報告す……七五六
四月廿三日勅使小將姉小路公知肥後長州紀州諸藩の志士を隨へ兵庫山良加太浦等巡視の途に就く……七五六
四月廿三日一橋慶喜東下の途次江州土山驛に於て家老戸田能登守の旅館を襲ふ者あり……七五八
四月廿三日幕府は鎖港談判の結果を慮り江戸市中取締の令を出す……七五八

四月廿三日延岡藩は對英談判の結果干戈に及はんことを慮り使者を熊本に遣して豫め援助を求む……七六九
四月廿三日横濱發行の新聞紙本邦對外關係の逼迫せる狀況を報す……七六〇
四月下旬在京木藩老臣は細川若狭守等江戸に於て幕閣に提出せし所の意見書を得て之を藩政府に移牒す……七六二
四月廿五日木藩京都守衛陣屋地として城州葛野郡壬生村中堂寺村畑地の内一萬四千六百坪餘を幕府より下附せらる……七六三
四月廿六日服部長門守長崎奉行に任せらる……七六四
四月廿七日幕府は和親貿易拒絶の朝命ありしと雖とも尾張大納言上京して事實の眞相分明する迄は穩便に心得べきことを達す……七六四
四月廿七日參州岡崎に於て幕府監察岡部駿河守の旅館を襲ふ者あり……七六五
四月廿七日長藩使者を小倉に遣し攘夷に關して豫め協議せんことを要請す韓て倉藩之に答ふる所あり……七六六
四月廿八日尾張慶勝水戸慶篤連署生麥事件の償金を英國に入るべき旨を應司關白に報す……七六七
五月二日木藩莊村助右衛門庄林曾太郎等家老小笠原備前を訪ひ大砲鑄造の爲め增田彌曾六其屬工を率ゐて下藩すべきことを語る……七六八
五月三日幕府は將軍家茂明日以て海岸を巡視すべき旨を達す……七六八
正月三日神奈川奉行淺野氏祐英國公使と償金交附延期の談列をなす……七六九
五月四日幕府は英人との關係切迫して今夜戰端を開かんも測るべからざるを以て警衛を嚴にすべき旨を達す……七七〇
五月四日在京木藩老臣は朝議深く長岡護美に倚賴せらるゝ所ありて微命の内意ありしことを藩政府に報す……七七〇
五月四日木藩政府親兵五十四人出京のことを議す……七七四
五月五日朝廷曩に姉小路公知に隨從して下坂せし山田十郎等七名に各自白銀貳拾枚を賜ふ……七七四
五月五日木藩脫走黑瀨一郎助安田喜助攘夷の先鋒たらんと欲し長人時山直八等と相携へて西下し是日防州山口に入り明日赤間關に向ふ韓で光明寺黨に加はる……七七五
五月七日傳奏坊城俊克は木藩留守居を召喚して長岡護美召徵及び長岡監物賜暇の朝命を傳ふ……七七五
五月七日細川大和守參内して龍顏を拜し天盃を賜はる……七七六
五月七日三條實美は攘夷の期限既に決し開戰も測るべからざるを以て速に木藩の守衛兵を上京せしむべき旨を促す……七七六
五月七日本藩政府は禁闕守衛の藩士監督其他の任務を帶ひ住江茜兵衛小坂大八に上京を命す……七七六
五月七日水戸慶德更に書を應司關白に贈り生麥事件の償金は之を出さゝることに決せし旨を報す……七七八
五月八日一橋慶喜攘夷決行の命を奉じて江戸に着す……七七八
五月八日長岡監物京師を發し歸國の途に就く……七七九
五月九日幕府は將軍家茂攝海巡視を了へたるを以て明後十一日歸京すべき旨を達す……七八〇
五月九日老中格小笠原長行獨斷を以て東禪寺及ひ生麥事件の償金を英國に交附す……七八〇
五月九日小笠原長行書を各國公使に贈り箱港の談判を委任せられたる旨を報し各國公使之に答ふる所あり……七八三
五月九日長崎奉行服部長門守長崎に着す……七八九
五月九日木藩政府は禁闕守衛として派遣せらるへき人名を住江茜兵衛に通達す……七九〇
五月十日攘夷の期日に當り皇國假令焦土に化すとも開港交易は決して好む所にあらすとの勅諚あり……七九一
五月十日侍從中山忠光長藩士を隨へて久留米に至り眞木和泉等を赦し出京せしむべき内勅の旨を傳ふ……七九二
五月十日長岡内膳藩主に代り上京の途に就く……七九五
五月十日長人下の關にて米船を砲擊す……七九五

五月十日米兵千餘銃砲を携へて横濱本牧の邊を行軍す……七九六
五月十一日將軍家茂攝海巡視より歸京す……七九七
五月十二日本藩政府は住江甚兵衛に上京藩兵の心得方を達す……七九七
五月十二日長崎奉行は本藩留守居を召喚して外人拒絶に關する幕府の訓令を示し外人引拂の談判を暫く延期すへき旨を達す……七九八
五月十三日我藩重臣沼田勘解由越藩中根靱負に會し水戸餘四郎丸山内兵之助及ひ長岡護美を以て親兵世話方と爲さんとするの朝議ある由を告く……八〇〇
五月十三日幕府は尾張慶勝に將軍在京の間政事を輔翼すへきの朝命下りし旨を達す……八〇〇
五月十三日幕府は非常召集に關する注意條項を示達す……八〇一
五月十三日住江甚兵衛上京の途に就く……八〇一
五月十三日横濱碇泊の外國船艦三十一艘に及ふ……八〇二
五月十四日一橋慶喜攘夷の勅旨貫徹の望ふきを以て辭表を上る……八〇二
五月十四日出火の節の心得及ひ九門外警固の事を傳奏より各藩に達す……八〇四
五月十四日岡藩の使者熊本に來り湊川警固免除の歎願却下の事を報じ且つ自國防禦の事に關し依願する所あり……八〇五
五月十五日將軍家茂親しく攘夷の功を奏せんか爲め東歸の許可を請ふ……八〇六
五月十五日在京沼田勘解由は我藩の相州警備解放の件に付大坂に於て幕府當局と交渉せし顚末を藩政府に報告す……八〇七
五月十五日信州松本藩の兵三百警衛として浦賀に着す……八〇八
五月十六日在京本藩兵の宿營借受の件につき困難を感するを以て改めて寺院を割渡されんことを幕府に申請す……八〇八
五月十六日我京都警衛の必要に基つき陣屋地下附の申請書を幕府に提出す……八一〇
五月十七日柞榮藩使者を熊本に遣して豫め外寇に際する應援を求む……八一〇
五月廿日本藩小坂大八等四十餘名に禁闕守衛として上京を命す……八一一
五月廿日松平容保水野忠精板倉勝靜參内して償金授與の失態を謝し且つ攘夷の功を奏せんか爲めに將軍の親征を許されんことを申請す……八一五
五月廿日夜少將姉小路公知劍平門外にて暗殺せらる……八一五
五月廿日本藩田中彦右衛門は對英交渉の顚末、幕士の横濱警衛及ひ一橋慶喜辭表提出の事等を報告す……八二三
五月廿一日本藩寺町門の警固を命せらる……八二二
五月廿一日本藩寺町門警固に關し守兵の注意條項を列擧して傳奏雜掌の指示を求む……八二四
五月廿一日三條家及ひ學習院に貼紙して三條實美を脅かし其隱退を迫る者あり……八二五
五月廿二日姉小路公知暗殺以後重職の公卿に衛兵を附せらるゝに至り我藩兵を派して三條實美の邸を衛らしむ……八二六
五月廿三日朝議將軍家茂に東歸の暇を賜ふことに内決す……八二七
五月廿三日本藩在京物頭列に對し寺町御門警衛心得方を達す……八二八
五月廿三日長人下關に於て佛船を砲擊す……八二九
五月廿四日朝廷本藩も亦京都守衛の任に在るを以て姉小路少將要擊の賊を探索すべく命せらる……八三〇
五月廿四日長岡内膳京都に着す……八三〇
五月廿四日長藩の使者小倉に至り攘夷決行に關する五條の詰問書を提出す……八三〇
五月廿五日本藩相州沿岸警備の任を解かる……八三二
五月廿六日少將東久世通禧の護衛として我藩兵を派遣す……八三四

五月廿六日藩主名代長岡内膳の上京を上申し末家細川大和守の賜暇を上請す……八四五
五月廿六日沼田勘解由は姉小路遺雛隨て寺町門の警固三條家の護衛等の事情を藩政府に通報す……八四五
五月廿六日我藩は杵築藩の使者に答書を授く……八四七
五月廿六日大村丹後守長崎總奉行に任せらる……八四八
五月廿六日横井平四郎越前より書を熊本の社中に寄せて當時の形勢幕庭の狀況を說き越前藩論の一定主從決心の内容を通報す……八四八
五月廿六日本藩探索森井惣四郎は薩藩生麥事件に關する英艦の要求に憤慨し兵戈を以て久光の首級を授與せんと幕府に切言せしことを報す……八五四
五月廿六日長人下ノ關にて蘭國軍艦を砲擊す……八五五
五月廿七日幕府は外人談判の狀を察し沿海警衛兵士を姑く撤退せしむへき旨を達す……八六〇
五月廿七日本藩勘解由小路家に護衛として兵を出すへき旨を命せらる……八六一
五月廿七日小倉藩は去ル廿三日及ひ廿六日長人外船砲擊のことを幕府に申告す……八六一
五月廿七日薩藩田中雄平姉小路公知暗殺嫌疑者として藝藩に預けられ遂て自盡す……八六二
五月廿八日細川大和守歸國の願を許さる……八六三
五月廿九日薩藩の禁門守衛を免じ薩人の九門通行を禁せらる……八六三
五月晦日在府閣老井上正直は姉小路公知の刺客搜索の令を發す……八六五
五月晦日東久世勘解由小路兩家の護衛として長岡内膳の家臣を出す……八六五
五月某日中川宮侍從隱岐長門守の名を以て大和十津川鄉士に其誠忠の志情を嘉賞し五百金を賜ふ……八六六
六月朔日堀田鴻之藩使者を江戸の我藩邸に遣し相州警備交替猶豫の交渉をふさしむ……八六七
六月朔日長岡内膳着京につき細川大和守賜暇京師を發す……八六七
六月朔日米艦下關を砲擊す……八六八
六月朔日侍從中山忠光下關を發し上京す……八七一
六月二日幕府は十万石以上の諸侯京師警衛交代勤務の制を定め之を各藩に示達す……八七一
六月二日閣老小笠原長行は水野痴雲井上信濃守等と共に京都の銷擄論を翻さんと欲し兵を擁して上洛の途次淀に要止せられて果さず……八七三
六月二日本藩長岡内膳の家臣を派して少將東久世通禧の警衛に充つ……八八〇
六月二日薩藩は姉小路刺客嫌疑者の件につき萬一を慮り特別守衛として在京の兵約二百を下坂せしめんことを請願す……八八〇
六月三日江戸城火あり西丸燒亡す……八八一
六月上旬將軍家茂上書して小笠原長行以下處分の件は下坂の上之を執行すべく時宜によりては親しく尋問して復奏することあるへき旨を陳ぶ……八八二
六月四日中川宮攘夷の先鋒たらんことを上請せらる……八八二
六月四日宇和島藩主伊達宗城書を長岡護美に贈り内外の狀勢危機に瀕するを憂ひ交互各地の狀況を通報して協商謀議する所あらんことを望む……八八三
六月五日本藩淀出親兵の宿所として寺町通滑華院塔中六ケ寺を配當せらる……八八四
六月五日本藩兵士八名を派して中川宮家を警固せしむ……八八四
六月五日佛艦下關を砲擊す……八八五
六月七日朝廷長岡護美の上京を猶豫せらる……八九五

六月七日伺奏坊城俊克は長州既に外夷と戰端を開く各藩亦一致協力掃攘の功を奏すべしとの朝旨を傳ふ……八九八
六月七日伺奏坊城俊克は小笠原長行兵を率ゐて入京せんとするの風聞あるを以て豫め警戒すべしとの朝旨を傳ふ……八八八
六月七日本藩親兵屯所として寺町淨華院塔頭戒光院外六ケ寺の引渡を受く其他各藩親兵の屯所を定めらる……八九八
六月七日本藩政府は天草援兵の件に關し幕令の變更ありしことにつき日田郡代屋代增之助に通牒を發す……九〇四
六月七日森井物四郎書を藩廳教官藜瀾騏兵衛加々山權内に贈り將軍滯京の渾動小笠原長行の擁兵上京其他京都の事情を報す……九〇五
六月九日將軍家茂京都を發して大坂に下る……九〇七
六月九日幕府小笠原長行等の職を免し之を大坂城代に附預す……九〇八
六月十日岡藩小原隼太等書を我藩奉行荒木甚四郎等に贈り襲に使命を帶ひて來熊し厚遇せられしを謝し且つ姉小路の變後京都守衛として藩兵を上京せしめし事及ひ小河彌右衛門上京内願の事等を報す……九〇九
六月十一日本藩江戸留守居方城使里内官右衛門は異艦下關砲擊に關する幕吏白石忠大夫の談話を上司に報告す……九一一
六月十二日本藩禁闕守衛の選士五十四人の氏名を上申す……九一三
六月十二日本藩禁闕守衛の選士に對し心得方を達す……九一四
六月十二日宮部鼎藏轟木武兵衛山田十郎眞木和泉佐々木男也伊達五郎三條邸に會し親兵の事を議す……九一六
六月十二日幕府小笠原長行免職の旨を達す……九一六
六月十三日將軍家茂大坂を發し海路東に歸る……九一六
六月十三日越藩村田己三郎沼田勘解由を來訪し共國論を告けて同意を求め長岡護美上京して縉紳の間に周旋せんことを乞ふ……九一七
六月十四日大坂城代松平信古破約攘夷の談判進行中につき通行の外船に向つて妄りに砲擊を加ふへからざる旨を各藩に通達す……九一八
六月十四日長藩使者を小倉に遣し砲臺建設の爲め地を内里田浦の附近に借らんことを乞ふ……九一八
六月十五日本藩選士十名攘夷監察使正親町公董の長州出張に隨行を命せらる……九一〇
六月十五日我藩長崎留守居匂坂平右衛門は馬關砲擊に關する長倉兩藩吏員よりの通牒を藩政府に報告す……九一〇
六月十六日將軍家茂江戸に着す……九一二
六月十六日攘夷監察使正親町公董長州に下る……九一二
六月十六日我藩奉行荒木甚四郎等書を裁して岡藩小原隼太等の贈りたる六月十日の信書に酬ゆ……九一三
六月十八日野宮家雜掌は本藩留守居に對し勘解由小路資生國事掛を免せられたるを以て我藩より差遣し置きたる隨從者を撤去すへき旨を達す……九一五
六月十八日在京本藩番臣沼田勘解由は將軍の東歸、攘夷監察使の西下、小笠原長行の上京阻止及ひ長岡内膳の下國希望等のことを藩政府に報す……九一五
六月十九日伺奏野宮定功は本藩留守居を召喚し攘夷に關する詔書を下附す……九一七
六月十九日本藩中村仁兵衛内田敬次郎去十一日以降關門の形勢を視察し下關防備の狀況長倉兩藩の交渉等を報告す……九二七
六月廿一日三條實美書を長岡護美に贈り衛士の人選に關する意見を贊し且つ京師の守衛ふほ充分ふらさるを以て更に一隊の衛士を速に選出せしめんことを望み併せて護美上京猶豫の評議ありしことを報す……九三〇
六月廿一日鳥藩牧野主殿介沼田勘解由を來訪し越藩使節を我藩並に鹿兒島に送るへきに決せし旨を告く……九三一
六月廿二日大坂城代公用人は去る六月十九日の攘夷に關する詔書を我藩に傳達して六月十四日の通達を取消す……九三二

六月廿三日幕府足利將軍木像梟首の者を處刑す……九三一
六月廿三日府内藩使者を熊本に遣し豫め攘夷に關し領海防禦の應援を請ふ……九三二
六月廿四日幕府本藩相州沿海警備の任を解きたるを以て武相兩國中に在る預所の管轄を免す……九三三
六月廿四日本藩番頭西山大蔵に警備地砲墩引渡の立合を命す……九三四
六月廿四日中川宮家士山田勘解由伊丹藏人姉小路暗殺の嫌疑者として捕縛せらる……九三四
六月廿五日朝廷京護職松平容保を召して將軍東歸前後の措置に關し追て糾彈する所あるへしとの勅諚を給ひ且つ東下して攘夷の周旋すべく容保に命せられたれとも京都守護の重任を負へるを以て之を拜辭す……九三五
六月廿五日浪士村上俊五郎本藩末家細川利永家來に預けらる……九三六
六月廿六日本藩備頭坂崎忠左衛門に京都警衛として東上を命す……九三六
六月廿六日本藩武相兩國の預所郷村を代官木村董平に引渡すべきを命せらる……九三六
六月廿六日本藩砲器鞏固費として金參萬兩を支出することを決す……九三七
六月廿六日號使里内官右衛門は幕吏白石忠太夫の談話にかゝる馬關砲擊後長州の對外關係及ひ生麥事件の賠償要求の爲め英艦鹿兒島に赴くに當り幕吏便乘西下の事情を報告す……九三七
六月廿七日我藩は府内藩の使者に答書を授く……九三九
六月廿七日宮部鼎藏眞木和泉を訪ひ親兵の事を議す……九四〇
六月廿八日小倉藩使者を熊本に遣し攘夷の決行に關し長倉兩藩各其見解を異にし兩國の關係頗る危殆に及ふことを告け其處置に對する我藩の所見を叩き指導を請ふ……九四〇
六月廿八日本藩京都留守居元田八右衛門歸國の途船中に於て越前特使派遣内交渉の顚末を記す……九四四
六月廿八日在府田中彦右衛門中山忠光の消息を報す……九四八
六月廿八日本藩駒井權之助矢島源助德富太多助去ル十九日松橋を發し是日薩州に入る……九四八
六月廿八日英艦七隻鹿兒島灣に入り生麥事件の償金を要求す薩人肯んぜず……九四九
六月廿九日岡使者を熊本に遣して時局に對する指示を訪ひ且つ我藩脱走の竹志田熊雄等が彼藩に至りて勤王攘夷を勸告する所ありし應答始末書を贈る……九五一
六月某日本藩轟木武兵衛三條實美に謁して急進過激の憂ふべき所以を說く……九五八
六月某日長藩窃に天皇親征論を唱ふ……九五八
六月某日中將東園基敬等和州十津川郷士の忠誠ふるを勵す……九五九
七月朔日朝廷松平容保東下の命を停め禁裡附小栗下總守をして東下せしめらる……九五九
七月朔日日向高鍋藩使者を熊本に遣し攘夷決行に際し臨機應援の依頼を求む……九六〇
七月朔日本藩駒井權之助矢島源助德富太多助薩州重富に至り薩船青鷹丸に於て五代才助松木安右衛門と時事を談し且つ此日鹿兒島城下に至る……九六一
七月二日宮部鼎藏轟木武兵衛久坂義助眞木和泉等三條實美に謁し越を拒むの策を決す……九六二
七月二日長藩の使者坂上忠介秋良敦之助熊本に來り四日覺書を提出して攘夷の斷行を告け且つ臨時應援の處置を望む……九六三
七月二日三日陸人英艦を砲擊す英艦應戰し鹿兒島市街を燒て去る……九六四
七月四日閣老連署して佛國公使に答書を與ふ……九八四
七月五日朝廷また一橋慶喜の辭表を留め猶奮て幕府を裨補し攘夷の功を奏して宸衷を奉安すへき旨を諭さる……九八五
七月五日越前丸岡藩主有馬道純老中に任せらる……九八五
七月五日我藩は小倉藩の使者に答書を授く……九八五

七月六日米澤藩の使者京都の我藩邸に逃走人捜索方を依頼す……九八六
七月六日我藩佐倉藩に相州警備地の引渡を了す……九八七
七月八日監察使正親町公董防州宮市に到る……九八八
七月八日沼田勘解由は京都に於ける藩兵宿所の件住江甚兵衛歸國の事及び本藩選士取扱に關すること等を藩政府に報告す……九八九
七月八日我藩は岡藩の使者に答書を授く……九九〇
七月九日本藩相州警備地の引渡を了せる旨を幕府に申告す……九九一
七月九日我藩は長州藩攘夷應援を乞ふとの使者に對し事態により互に策應するは固よりなれとも目下聊所見あり て官武に建言し指示を請はんと欲する所なるを以て直に乞に應する能はず幸に其意を諒せられよとの旨を答ふ……九九二
七月九日本藩番頭長谷川仁右衛門等を薩摩に遣し英艦擊攘の狀を訪ひ藩主顧慮の意を通せしむ……九九三
九月十一日攘夷監察使として中將東園基敬を紀州に侍從四條隆謌を明石に遣はさる……九九四
七月十一日薩人の禁門通行を許さる……九九五
七月十一日本藩政府は公武の命二途に出て適從する所を知らざるを以て建白の國議を決せしこと及び諸藩と使節往復のこと等を在京の奉行鍋田軍之助に通報す……九九五

改訂 肥後藩國事史料　卷三目次　終

改訂 肥後藩國事史料　卷三

文久二年壬戌四月十六日島津久光上洛近衛家に伺候して時局に對する意見をのぶ是日久光浪士鎮撫を命せらる

〔文久二年〔尊攘錄自筆狀〕〕

渡邊一郎左衛門大坂ヶ持參

正親町三條樣雜掌田原大進演舌之趣聞取書

（前略）薩州島津泉州上京前近衛樣に內通有之候處同御殿より京都御留守居御呼出ゝ而泉州上京之儀若堂上方御內ニ而身分怪敷者共雜說申觸し候を實事と被心得上京ニも相成候哉萬一左樣之儀ニ候ハヽ泉州心得方不宜と被仰聞候付其旨泉州ニ相達先伏見迄出張ニ而所々被相探候處近衛樣被仰進候通ニ相見へ候間直ニ上京被致近衛樣ニおゐて三條樣中山樣御出會之上　叡慮被奉伺候處泉州申條尤ニ相聞に候得共二百年來昇平相續候儀全將軍家之忠勤殊ニ此節　皇妹配偶茂有之上者猶以御親睦事ニ付關東御政事不宜儀者被遊御相談候而御改可被爲成德川家之興廢ニ係り候儀仕出候躰之所置者　叡慮ニ不被爲叶且又浪士面々ニも專國家之爲ゝ心を盡候義ニ候半ゝ屹致改心其忠肝を海防ニ遷候樣有之度との趣承知被仕彌以平穩之所置無之候而ゝ　叡慮ニ不被爲叶儀ゝ感服被仕猶又被伺出候ゝゝ右之儀ニ候ハヽ外國打拂之儀ゝ如何と被奉伺候處　叡慮ニ此儀ハ先年關東ゝ十ヶ年延引之儀御合躰ニ相成居候上ハ此節其年限未滿之中ニ猶又打拂之叡慮被仰出候而ゝ是又信を關東に御失候事故其儀ハ此節ヶ其心得ニいたし置右年限相待其上關東之所置次第ニより猶

綸命も可有之との事ニ付是亦被奉敬承關東御役人進退之儀ハ如何哉と被奉伺候處右ゑ關東老中呼寄せ評議之上兎も角も可被仰付との　叡慮被奉拜承候付左候ハヽ夫迄之處當地に滞留浪士鎮撫之任を守り可申との事ニ而其儘滞京有之長州も此度少將様御通行之砌先日以來之儀も有之旁以　天朝此機嫌御伺　叡慮ニより京都御滞留可有之旨關東に御屆御上京之處此節　叡慮ニ而御滞京有之御老中御上京を御待有之候との趣御座候事

戊　五　月　二　日

〔採摘錄〕

京都市中評判之趣同町人書取

于時文久二戌年四月上旬ニ西明之能將薩州之大主御實父のよし御本家御隠居格島津和泉様御年四十二蒸氣船ニ而多人數浪花に御着同十四日伏見へ御着同十五日夜八時御供揃ニ而御上洛十六日未明ニ京都錦小路通東洞院東へ入ル西魚屋町と申所ニ薩州御屋敷へ御着隣近町辻々ハ町名之高張灯燈を立テ家別ニ盛砂手桶掃除致し灯燈を差出し厚御もてなし則十六日朝四時分ゟ御家來三百余人御召連近衛殿へ御入殿御縁組之儀ニ付而のよし折柄序ニ近年外夷ゑびゑり關東政道正ゟらす趣御咄出議奏衆へも御談合既ニ　天子に奏聞之事取極り其夜八ツ時比京御屋敷立寄ゟしゑ伏見に直ニ引取是ハ諸司代へ之遠慮なり翌十七日早朝ゟ近衛殿ゟ御使伏見へ鳥津和泉勅諚ニ依て滞在被　仰渡候事則十七日書八時分伏見ゟ千五六百人之同勢ニて京都御屋敷へ御入俄ニ近町へ旅宿被仰付既ニ廿五町懸りニ御旅宿ニ成り御滞在三十餘日是ゟ風評大ゟたゟら す終世俗薩州大明神と云

一右御上洛ニ付諸司代酒井若狭守大びつくり被致薩州ゟ打取ニ被參候と被思召候よし十五日初夜比ゟ軍立鐘陣太鼓打ふらし鎗長刀抜身ニ而深更二條城近町へ夜通しニ今ニも軍起り候と老人童子ハ遠方へ預ケ藏ハ目塗をし道具も諸所へ運ひ火事のゑとく騒動大ゟたゟらす翌十六日ハ何でもゟし薩州ニハケ様之儀夢ニもゟらす大ゟらひ

薩長京地の米一合も御用ゟし皆々御用意也依而米の上りもゟし受能く　薩州泊り上五百五十文下四百五十文其外御心附澤山なり　宿亭大悦

〔尊攘錄探索書〕

從弘化年間至文久二年

土州藩人大坂ゟ文通之寫（本文は四月十二日の條につゝく）

同（四月）十六日朝泉州侯伏見御立辰之刻頃御着京一旦御邸に被爲入候處已之刻近衛殿より被爲召御參殿被成候處中山公正親町三條公岩倉公御參集ニ而　叡慮之達次郎に大原殿ゟ被仰聞候同様との由被仰聞且泉州侯御存慮をも御尋御座候由ニ而和泉侯被仰上候者　叡慮之所いと奉畏候乍併攘夷之儀者兎角内ゟ整へ不置候而ハ不相成儀ニ付先ツ一橋刑部卿を以て將軍家之後見とし其他尾張越前を始め賢明之諸侯に寃罪を以禁錮或ゑ退職被仰付勤　王之御志有之御方ゟ本ニ復し暴逆を退し天朝ゝ迫り候賊を　薩根侯をゝしめ間部侯安藤侯をいふ輕重ニ隨ひ悉く罪ゝ行ひ或ゑ封を削り其地を以て　天領とし畿内之地ニ親王方を置く天朝之羽翼とし后之逆徒　天朝に迫る事之不相成様豫ゑ備を立候後攘夷之策ニ相成可然旨申上且　叡慮をも被伺被下度旨被及言上候處正親町三條公被仰候ゑ尾越侯等を再ひ本ニ復し候儀ハ中々難事ニ而可有之左様相成候而ゑ却而内亂を醸し候様可相成旨被仰聞候由を以再泉州侯ハ是等之儀　叡慮之儘ニ不參候而ハ所詮其餘之儀も不相行義ゝ付何卒　叡慮御決定之上無御遠慮臣に被仰聞度　叡慮關東に下り候上猶又奉達　勅候ハヽ其節ゑ不得止事臣等追討可仕候臣既ゝ國ゟ出る時身命ゟ　天朝ニ捧る居候上ゑ聊願る所ニあらす弊藩雖微弱三箇國之人數を以屹度盡力可仕獨成否之所ニ至而ゑ豫め難期候得共當今之人情を以相考候處列藩中にも　勤王之志有之諸侯數多有之候得ハ一度事相起候者必ず　天國ゝ馳集り可申依て　叡慮之所屹度御英斷を以御決定ニ相成候様被仰上度旨申上候由ニ而中山公正親町三條公早速參内及奏聞候處至公賴母敷被思召不淺御滿足之由ニ而其形兩公ゟ泉州侯に被仰聞其餘難有　仰せ蒙り且當時滞在之儀を被仰聞候由尤表向ゑ諸國浪士とも數多洛中に入込居候趣ニ付萬一亂妨等ニ可及程も難計依而暫之間右爲取締滞京仕候様被仰聞夜半過御退散其儘伏見へ罷歸候翌十七日伏見御引拂を以七時頃御着京相成將又　叡慮之儀も多聞泉州侯御建白之通り御英斷ニ相成久世關老御呼立之上　勅書御同人に御渡ニ相成筈ニ而今十七日關東に被仰遣候由且又幕

府違勅致候時之干戈をも動き御成算故其御用意之屹度相調左右次第御國方も多人數馳登候御調へゝ相成候よし　薩藩士有志之者共泉州侯御供之外夥敷伏見大坂等に相潜居候者をゝしめ其他諸藩同志之者ともゝ萬一泉州侯關東に御下りの之思召歟又ハ聊に而も手緩き思召有之候而機會を失ひ候樣之儀有之時ハ不得止泉州侯之命を不用機ゝ授し同志之者俱ゝ事殘可起存念に有之處泉州前件之通之思召故孰も望に叶ひ右藩士ハ素方諸藩之者迄も大に相悦ひ時殘相待且薩藩役中方も安之儀無之樣精々相制居候由

右四月十五日方同十八日まて之中承之

〔探索書〕（文久二年三月以來）

薩州方京師に被差出候書附之寫（私儀旨）

此節。關東に出府仕候趣意表通之去々年以來修理大夫儀參府兩度迄御猶豫之御禮且屋敷燒失後下知不仕候而不相叶用向有之筋に御座候得共內實ハ（吏）公武合躰（暴）皇威御振興幕政御變革被爲在候樣仕度所存に御座候尤此儀之一朝一夕之事に無之去ル午年以來幕役共（相顧候）勅諚を遵奉不仕外夷通商免許仕剩。正義之（三公）親王公卿（ヘ）を奉初一橋尾張水戸（ニ）越前。其外有（リ）島（イ）旗下（ク）被（イ）志之大名。黍。禁個仕庶人之死流之刑。取行候處（ハ）よゝ四方に交を（イ）結び或。大老を刺。或。夷人を戮し候方幕役共取締之嚴命を下人共脅　王攘夷を致主張慷慨激烈之說を以交を四方に結び或。大老を刺。或。夷人を戮し候方幕役共取締之嚴命を下候處（イ）し候處彌々暫發仕。近此に相成殊に致增長終に不容易企に茂および候哉に相聞。申（ヘ）候右之通にてハ　皇國一統騷亂之基と相成勤　王之趣意に不相叶。而已（ナシ）ふらす却而外夷之術中に陷り候儀にて實以不可然事に御座候（候）私儀家督之者に而茂無御座候得共三百年來　德川家之御鴻恩を蒙り殊に亡兄薩摩守臨終（ナシ）之節國政之儀之勿論　天朝幕府之御爲宿志。致繼述精々盡力仕候樣分而遺託之趣茂承居候に付右。次第奉傍觀猶豫仕候而之不忠不孝之罪難遁と相考。修理大夫。申談是非關東に出府所存。十分建白仕候含に而先月十六日國元發足當月六日播州姬路表へ到着仕候處諸浪人追々上坂仕私通伏を相待事を起候趣。相聞候に而道中差急候事茂出來兼濟。去ル十日大坂。着仕候處。浪人多人數滯坂仕居紛々之次第に御座候而家臣之「內々」（者）差出共方共實に勤　王之志有之候ハゝ此方上京いたし（可奉伺）叡慮可奉伺候間暫時此地に潜り居可申旨精々理解仕（表）候處。漸承伏仕候に付去ル十三日伏見。に着。今日參殿（仕）叡慮奉伺且所存。建白仕候更に無御座候天下之人心安堵仕候樣御所置被爲在度所存に御座候間何卒不惡御聞取委細奏聞被成下度伏而奉希上候以上（四字ナシ）敬白

戌四月十六日　　島津和泉

〔仝書〕

四月十五日薩州堀次郎持參一紙（出）（大和守儀早々）（「建議」トアリ）（再夢記事（イ）ニハタ）

一閣老久世早致上京候樣（殿）屹度被　仰渡候而。如何可有御座哉（在）

一栗田宮應司大閤樣近衛左府公應司右府公御憤解被爲有候而之如何可有御座。哉（候）

一於關東一橋殿尾張前中納言殿越前々中將殿土佐御隱居宇和島御隱居御憤解有之（ナシ）如何御座候哉

一九條公並所司代御退去之御所置被爲附候而ハ如何有可御座候哉（在）

右之御罪科之有無ハ全不奉存候得共天下之風評且此節難波道處々に致充滿居候諸浪士之說を承候處此御方々を奉恨衆怒之歸スル處に御座候間此等之御所置無御座候而之暴發日下に起り人心一和と申處に迚も至ル間敷奉存候（ヘ）（リ申）（ナシ）盡ク存意之處程叩心贈奉申上候

一於關東安藤對馬守連に退役被　仰付候樣無御座候而ハ人心潰亂變亂之基と茂可罷成存奉候（故）（相）

一御憤解之上一橋殿御後見越前前中將殿大老職被爲任候而之如何御座候哉右等之處人心一和之基。と午恐存奉候（本）

一前件之儀被　仰渡候に付而ハ午恐　朝廷之御威勢不被爲立候而ハ關東有志急速。被取用候儀如何と奉存候間一二之大名に御內　勅。被下結句見屆候樣被仰付候而ハ如何有可御座哉（局）（ニ）（有可）（在）

一越前在藏候ハヽ上京被得ハイ　仰付　朝廷之御遵奉之道相立邪正之辨明白ニ罷成候様被　仰聞度奉存上候事ニ御座候

一公武御合躰上下一致之上異人之御所置天下之公論を以永世致貫徹候様明制被爲定　皇威諸蠻ニ鄰候様「罷成」度奉存候

右之近頃僭踰之至固。不免斧鉞之罪奉恐縮候儀ニ御座候得共近來之世態を觀察仕候處綱紀日々廢弛人心不和衰萎之極

變故四出終ニ夷人之正朔を奉候様ニ罷成候茂難計乍恐玉躰茂不被爲安候様ニ承り且本文之事件　叡慮之被爲向候處哉

ニ奉伺候間到底　叡慮を奉輔佐　公武御合躰人心一和之道御成就被成候様「右御座度内」一二件國論を交。内々奉言上

候恐惶再拜

戌四月　近衛様御諱也

右十六日拾陽明家島津差出候寫

〔仝　書〕

（議奏より仰渡されたる叡慮の趣御書付）

一浪士共蜂起不穩企有之候處島津和泉取押候由ニて旨先以　叡慮不斜被　思召上候別而於御膝元本不容易儀發越ニおゐてハ實ニ

腦　宸衷燃ニ候事ニ候間和泉當地。鎮靜有之候様被　思召候事

（右に付請書）

一浪士共蜂起不穩企有之候處當座之處私取押置内分御屆申上候處　叡慮被　思召候仍而御當地ニ滯在鎮靜可仕旨　叡慮

之趣奉承知恐入難有仕合奉存候精々取鎮方可仕所存ニ御座候乍併依時宜手ニ難及儀茂御座候ハヽ御屆申上候様可仕候

先當座之處御請申上候以上　七ニ

四月十六日　島津和泉

〔尊攘錄探索書〕

鵜殿源右衛門聞取書（四月廿一日附青地源右衛門宛）

一四月十六日於　御所見聞仕候處左之通ニ御座候薩州侯御名代として島津和泉と申人伏見迄被罷登居候處今曉未明ニ伏

見發足被仕近衛様ニ參殿ニ相成何歟御願筋有之様子ニ相見へ申候事

一島津和泉様ニハ八半時過ニ供揃被仕近衛様より歸館ニ相成申候最早東洞院薩州侯屋敷前通行之時分ハ明七時も觸居申

候且近衛様ゟ之道筋之儀ハ烏丸通を下り四條通を東洞院通りニ而下りに相成薩州御屋敷へ之御立寄無之直途伏見屋敷

へ引取ニ相成候事（以下は十七日の條に出つ）

四月十七日本藩奉行楯岡愼之助は京師に出兵の件に關する政府の内意を小坂九郎助に通じ同志者の鎭撫に勸めしむ

（魚住文書〔尊攘雜錄〕）

今朝ハ御不快中別而御妨仕候御亭御話合之一條御殿ニ罷出話合申候處　玉體矢石之中ニ被爲在候場合ニ至り候而ハ御

人數被差上候儀勿論之儀と相決申候ニ付其御含ニ而至密壯年之人々御鎭ニ相成度奉存候右迄得貴意度如是御座候以上

四月十七日　愼之助

九郎助様

四月十七日島津久光京都の藩邸に入り浪士鎭撫の任に當る

〔採薇錄〕

薩州江戸御留守居ゟ屆之書付

修理大夫實父島津和泉守事先達御屆申上候通江戸表ニ用向有之致出府候途中大坂表ニ諸浪人共寄集り相待居不勘辨之

儀中立候ニ付程能申諭候得共不致承服候ニ付伏見まで罷越兼而近衛家緣談之儀内約ニ付酒井若狭守様ニ御屆上京致參殿候節右浪人共事情御内話申上候趣御座候處達　叡聞議奏衆ゟ別紙之通　叡慮之趣御書付を以被仰渡候間去ル十七日京都屋敷ニ罷越滞在罷在候此段御屆申上候以上

四月廿五日　　松平修理大夫家來イ　筑左衛門

別紙寫

浪士共峰起不穩止有之處烏津和泉取押置候云々（四月十六日の條に出つるを以てこゝに之を略す）

〔尊攘錄探索書〕（四月廿一日附青地宛　鵜殿源左衛門聞取書）

一同月十七日島津和泉様ニも家來不殘召連レ伏見表ニ出立ニ相成申候由牧田壽太郎方より注進有之候付書後様子見聞之たゞ薩州御屋敷ニ罷越候處夥敷人數ニ而右和泉様ニも最早八時比ニ京着ニ相成申候且又玄關前ニハ　御所ニ之献上物と相見へ候而品々乘輿等澤山ニ積上有之候且又此節持登ニ相成候小荷汰ニ之武器兵具之類澤山被持越申候事ニ御座候側ふる人ニ様子承申候處和泉様ニも今日之參殿無之哉ニ申居候へ共爲念爰より御所ニ參り様子相考申候處御所内も何そ平常ニ相替候儀も無之靜成事ども ニ御坐候

四月十八日藩主慶順住江甚兵衛を花殿に召喚し長圖護美をして之に自己の所存と目下の處置の要領とを垂示し愼て其意を體すべきを訓諭せしむ

〔佐々淳次郎日乘〕（文久二壬戌）

十八日於御花畑萱書院　良之助様ゟ住江迄御申渡有之候事尤住江者川尻ニ被召候四人黙當代との事

〔採摭錄〕

一此節京都表之儀付而之太守様御苦惱被思召上屹度思召之旨有之江戸ニ可被遊御諫啓候京都ニ變有之　玉體矢石之中ニ被遊御座候節之中迄茂無之急速御人數可被指出旨於御花畑住江甚兵衛被召出良之助様より御直ニ被仰渡候御手當之儀ハ兼而御達ニも相成居候得共此節急速用意調候様御備頃ニ御内沙汰可有之旨被仰渡候同志中何れも此旨奉敬承候様若存念之儀茂有之候ハヽ御附役迄可伺出旨被仰渡之

四月十八日

右之御書付は住江甚兵衛ニ被仰渡候御意之趣を奉傳承宮部鼎藏轟木武兵衛等書取しを御趣意如何と御附役大矢野次郎八ニ相伺候處御趣意ニ相違無之候得共猶奉入御内覽候上可及返答との旨ニ候處右之朱字だけ依御意添削有之候事（本文朱字云々は淳を啓に改め玉體以下十一字を挿入せるなり）

四月廿三日幕府は洋式銃隊操練に勵精すべき旨を達す

〔御同席觸寫並大目付様御廻狀寫〕

大目附ニ

銃隊調練之儀近來西洋法御採用相成御旗本御家人ハ於講武所修行いたし夫々厚御世話有之諸家ニおゐても追々心懸格別出精之向も有之趣ニハ候得共猶此上一同及熟練候様主人々々厚く世話可被致候就而者此度麹町三丁目震火除明地炮術師範役下曾根甲斐守高島喜平調練場ニ御預相成江川太郎左衛門ニ者兼而芝新錢座調練場御預有之候間萬石以上以下之家來等ハ講武所ニ不罷出儀ニ付勝手次第甲斐守太郎左衛門喜平申談右調練場ニおゐて精出修行候様可被致候

右之趣向々ニ可被相觸候

四月

四月廿三日薩藩士奈良原喜八郎等主命を帶び伏見寺田屋に於て同藩士有馬新七等八人を殺す

〔文久二年三月以来探索書〕

一兼而御屆申上置候通浪人躰之者所々寄集居候ニ付爲取鎭和泉事在京逗留罷在候處大坂表ニ滯留仕候浪人之中三拾人計致出奔候間何時如何之儀茂難計候ニ付御心得迄此段御屆申上候

松平修理大夫内
田中忠右衛門
伊勢勘兵衛

四月廿三日

御所司代に

一薩州人亡命いたし候ニ付於伏水打留候仕手共姓名左之通

即死　有馬新七　同田中謙助
同　柴山愛次郎　同橋口傳藏
同　橋口壯助　同森山新五左衛門
同　弟子丸龍助　同西田直五郎

右亡命生

深手　奈良原喜八郎　同山口金之進
即死　道島五郎兵衛　深手江夏仲左衛門
深手　鈴木勇右衛門　鈴木昌良之助
大山格之助　深手森岡節藏

右仕手之面々

右亡命生共四月廿三日大坂表抜出登伏いたし諸浪人申合所司代屋敷に討入候企候由ニ付伏見船宿寺田伊助宅に討手被差向利害申聞せ有之候得共有馬列一同承伏いたし不申候間右之通夫々討留爲申趣ニ御座候尤他所諸浪人茂二十人余集居候得共右之騒動ニ相驚逃散申候由相唱申候事

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

薩州より御所司代様に屆書之寫若州屋敷ゟ手ニ入申候

昨夜於伏見修理太夫家來共及刄傷候付共段ハ不取敢以口達御屆申上置候通ニ候右之別帋一印之人數主命相破致亡命等候者共ゝ而昨夜大坂屋敷出立既ニ昨夜於御當地不勘辨ニ事を破り不容易御難題筋引出候形勢ニ付和泉深及心配別紙二印之人數に手厚下知いたし當所より差出鎭撫方爲致候處一圓不致承引終ゝ彼等より理不盡ゝ事を破り候付無致方及刄傷候處別紙肩書之通手負又ゝ致即死御場所柄旁何共奉恐入候次第ニ御座候尤右之内に者大坂に取鎭置候諸方之浪人共ゝも一列ニ罷居候ニ付右ゝ當所屋敷に先當坐致鎭坐置候左候而前文即死人數等者夫々御法格通御檢使等御差下相成候儀ハ其通ニ而何分御差圖可被成下候尤右之趣ハ御用番伏見御奉行所にも御屆申上候儀ニ御座候且前文亡命人數等之儀ハ追而屹ゝ國法通取扱可仕候左候而死躰之儀者伏見屋敷内に假ニ致格護置候此段申上候以上

戌四月廿四日

別紙

一印（有馬新七以下八人前に出つるを以て之略）

二印（奈良原喜八郎以下八人前同斷）

於伏見見聞仕候覺書

一昨廿五日伏見へ罷越薩州様御屋敷を見廻り候處御屋敷前濱ニ長持三棹鉄炮箱之様ふる物弐棹刀箱弐拾括程其外色々之物高瀬船弐艘ニ積居候を見受申候

一廿三日晝七時過ニ伏見京橋之東寺田屋と申宿屋ニ三拾石船三艘より薩州御家中四拾人余り上り候由其時分鉢巻致居候者も有之候由

一右之面々之内船ゟ上り候時分錢袋下駄之類ハ船頭へ遣候由

一右寺田屋ニおゐて支度共仕何哉咽合居候内名々懐中より白木綿を出し名々姓名を書印候を宿屋之亭主見受申候由

一右姓名書印巻而名々刀を拔切合候付其儘宿屋亭主者逃出候由

一二階ト下ニ而切合候を外ゟ立見いたし候者御座候由

一右騒動ハ夜五ツ時過ゟ始り候由其以前ニ六ツ時比京都之方ゟ薩州御家中弐拾人余り伏見へ駈參り薩州御屋敷ニハ不入直ニ京橋之方ゟ走り行候由

一右騒動之前ニ京橋邊遠近ニ五六人宛帶刀人罷居候を見受候者段々爲有之由承り申候右之面々ハ定而京都ゟ參り候者と被察候

一右騒動いたし居候内二階ゟ壹人下來切合居候片端ニ取亂有之候品々膳椀等取片付工夫之廻りニ爲火用心之水打懸ケ抔ゝたし候由尤其脇ニハ切合居候由見受候もの有之中々落付居候仕形皆々感心仕と咽居申候

一右騒動相濟候上田中河内介と申者薩州御家中同道ニ而京都ゟ罷登り候由風聞承申候

一右騒動ニ付寺田屋内之奥立具等ハ不殘薩州屋敷ゟ仕替ニ相成居申候其上諸品損料として金五拾兩被遣候由

一廿三日三拾石船弐艘ゟ薩州屋敷ゟ入込候帶刀人御座候由是ハ中川様御家中と申專專風聞仕候

右之外段々申上度儀御坐候得共雜愚筆盡荒方廿五日見聞之次第ニ御坐候以上

戌四月廿六日　　河邊鉄之助

〔仝書〕

大坂定府橋本喜彌太ゟ書狀寫

島津和泉殿京都入込ニ付而之長州御家老席分三人之外ハ物頭以下五百人程入込ニ相成居島津殿ハ追々軍手之士席上京昨夕も士席百貳十人程着坂ニ而大ニ混雜之由ニ御座候尤此節和泉殿ニハ於京都之不怪强情之由ニ而御存意筋御貫通ニ相成不申而之御引取ニも相成不申由ニ而手强有之當月十六日夕ニハ所司代様御差圖ニ而早鐘を打與力同心之面々ハ拔身具足抔手鎧着用ニ而駈付不怪混雜京都町中之内ニ之餘計伏見邊ハ立退今ニも合戰有之趣取々評判ニ而甚タ人氣ニ障り京都町人抔藏〳〵ハ窓を土塗いたし出火之様ニ用心ニ而有之酒井若狭守様ニも御國より御人數六百人余至急ニ御呼登ニ相成其外藤堂様ニも御人數京都ニ入込長州様へも追々御人數入込大炮等餘計ニ持越ニ相成申候何分所司代様ニ而之事落着難相成候間江戸ゟ御老中様御呼登ニ相成候由何分島津殿此節之一命ニ懸ケ手强申出ニ而大ニ動亂仕候御大國之御人數京都へ不殘入込ニ付中々風評高く有之當屋敷ニハ浪人七十人計り御割ニ相成其中ニ之松田重助も入込居長州様へも大坂留守居連越ニ相成申候御地ニ而嘸々風說高く可有之奉存候昨日長州御家中伏見ゟ夜四ツ比ニ着坂下宿へ至り直ニ卽死五人有之島津殿人數之内より打果候との事ニ御座候大混雜ニて如何成行可申哉と奉存安勞仕候

一大坂南町御奉行所より與力同心并手先之者百人餘昨夜より常安丁湊橋土佐橋江戸堀小路々々の會所へ公義御人數相詰尤問棒八十本入用之由ニ而御屋敷御備之棒迄拜借申出ニ相成候得共余計ニ無之少々御借渡ニ相成右者辻堅メと相考申候御様子相分り不申候へ共薩州御割之浪人被召捕ニ御手當ニてゝ無之哉と相考申候

薩州藩中

有馬新七（外七人姓名略之）

奈良原喜八郎（外七人姓名略之）

右者四月廿三日於伏見有馬列宿ニ山口列仕懸打取候由ニ御座候其節薩州多人數ニ而宿所致遠卷居候由島津和泉様御供之内ニも勤王を唱候者段々有之和泉様をも强而相勸候得共其說も立兼候付左之面々京都ニおひて亡命いたし候由

右之者共京都へ相滞町宿ゝたし居同類かたらひ合所司代へ仕掛候用意いたし候哉之趣ニも相聞如何之災害引起可申哉も難計候付御供之内より八人御撰重疊申諭改心致せ候様若及異議候ハヽ討取可申旨御含メ四月廿三日左之面々被差越候由

有馬新七（外七人姓名略之）　奈良原喜八郎（外七人姓名略之）

右八人和泉様内命を蒙右馬列旅宿へ罷越百方相諭候得共一圓聞入不申其内橋口壮助拔懸ケ及手向夫ゟ双方共拔合せ有馬列八人ハふんなく討留候由尤御使ニ罷越候内も五人手負三人討死ゝたし候由

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕（四月十日島津久光薩坂の條につゝく）

（五月朔日附橋本喜彌太薩州大坂御屋敷御家中ニ而聞取書ノ内）

一四月廿三日夜島津家之軍方伏見旅宿ニ而混雜之様子承り候處右軍方者大坂御屋敷内ニ多人數滞留中外御長家ニ被圍置候浪人之内ゟ此節企之一條ニ付右軍方之面々爲致同意候處ゟ頻ニ上京いたし度段引廻之永田左一郎ニ相頼候所致承知不申右者和泉殿ゟ大坂ニ致滞留居候様被仰付置候御意筋も有之候付決而御差圖無之而之罷登候儀難相成段申聞候處其内右之面々家来も召連不申銘々單物腰ニ下ケ其儘大坂御屋敷を罷出伏見へ罷登候折柄途中ニ而久留米之浪人貳人淀船一同乗組都合八人内六人之薩州御家中ニ而伏見旅宿に着夕飯も相済候折柄大坂詰方ニ相成居候菱刈方ゟ早打を以最前右之段和泉殿ニ被申入候所急速御供之御小姓組三拾人京都ゟ被差立其内八人旅宿に入込今度浪人共企之内に致同意候義之全心得違之事ニ付及利解可申若聞入不申候ハヽ致手討ニ候様和泉殿ゟ被申聞候御意筋を及演舌候心得ニ而有之候由之所討手之内壹人蹈込右之段爲申聞候所豐ひ主命たり共一且

付札

本文討手之殘り人數七人之孰も薄手深手ニ而伏見御屋敷へ引取其後四月廿八日貳人相果候由且又無疵之壹人之旅宿ニ而混雜之砌暫時裏庭に藍を隱し事相濟候跡ニ而及自殺申候由外ニ浪人同意之内壹人深手ニ而候得共存命ニ有之候付此者ハ右御屋敷に引取廿三日夜之企之様子委細聞糺様子相分り候上廿四日手筈ニ而突留候由ニ御座候事

浪人共之企ニ致同意候事ニ付如何躰被申聞共致承知不申段致返答候付不得止ヲ打手之方ゟ直ニ主命を背候不忠者ゝ一言申懸候處早及拔刀切込候付双方拔合共内殘り之七人不殘及拔刀暫時切合候内漸ク打留申候依而浪人ニ組いたし居候八人之内壹人無疵ニ而有之候處其者申分ニ之孰も即死之面々之自身共同意之面々ニ而ケ様致打死候を見懸存命ニ而之門口相固居候由事相濟京都に即夜引取懸途中浪人六拾人計待受居候由候へとも何之手差も無之京都に引取ニ相成候由尤六拾人計之浪人之旅宿之面々共ゝ一同京都に入込所司代御屋敷に夜討を懸若狹守様を奉討候存意ニ有之候由之處右之混雜ニ而事破レいつ方に歟行衛不相知相成候由依之翌廿四日ゟ和泉殿差圖ニ而軍方之御小姓組多人數伏見稻荷道竹田道兩方に浪人共を爲取押晝夜二三日相固メ候由ニ承り申候事

一右之外ニ今度軍方ニ罷登不申候面々之内貳拾人御國ゟ拔懸ニ而大坂御屋敷に致着候付其段和泉殿に菱刈方ゟ被申入候處御差圖ニ而御屋敷近邊之町家に入置ニ相成居候處右之面々大坂滞留中外御長家ニ被圍置候田中河内介同類之内ゟ企候一件ニ爲致加入一同浪人と京都に罷登候處事明白いたし候付段々心得違之段及利解候處いつゝも致改心候付右貳拾人之四五日跡御國に被差下候由外ニ百人計於京都浪人共に致同意候者有之候由之所是又改心ニ付此分之和泉殿思召ニ而其儘京都に留置ニ相成候由

一大坂御屋敷内ニ滞留之軍方拾人之引廻

右者最前於大坂六人之面々御屋敷を罷出不心得之次第ニ付段々及利解候へ共一向聞入不申内上伏いたし伏見ニ而之有様ニ付左一郎ニおいてハ此節格別之思召を以引廻被仰付置候所前文之通伏見旅宿ニ而之事柄差起預ケ被置候引廻之稜

日雖相立殊ニ外々之引廻并多人數之面々ニ對し候而も面目も無之とのの申譯ニ而四月廿三日夜大坂御屋敷ニおいて及自殺候所夜中之事ニ而いつゟも其儀存不申翌廿四日朝皆々見付候付宰躰見屆候所いまた落命ニ相成不申候付樣子相尋候所右之趣漸ク申聞無程相果候齋其段菱刈方にも相達早打を以和泉殿ニ委曲被申入候處申付置候主命ゟ重シ義を不致忘却段寄持之趣ニ而被賞永代八石被下置旨和泉殿自筆を以被下置候由ニ承り候事

四月廿四日在府本藩老臣時局に對する藩士の心得を訓示す

〔江戸機密問日記、安政五年ヨリ文久二年迄　文久二年　御觸狀扣、文久二年ヨリ文久三年マテ　申繼〕

三池尉右衛門ニ

覺

近年世上之形勢不穩趣ニ相聞候付而ハ　天朝公邊之御間ニおひて茂種々之風說等有之方今外夷　皇國を相窺候折柄萬一內亂を釀候樣之儀有之候而ハ大患無申計候處　天朝ハ不及申於公邊ハ從來御鴻恩之御譯茂被爲在候付御國家ニ被爲替候而茂東西ニ御忠節を被盡樣子ニ因而ハ公武御合體之御處置茂被遊度兼而之思召ニ而今度御下國之上御沙汰之趣被爲在候條孰も右之御趣意を奉敬承人心一致いたし聊物議ニ泥ミ候體之儀無之樣第一種々之浮說等相唱候而ハ人氣之動搖ニ係不容易事ニ付他藩ハ勿論御家中應接之間ニ茂深心を用輕卒之取沙汰等堅不致樣組支配方ニ茂精々可被示置候以上

四月廿四日

四月廿五日幕府は尾張慶勝一橋慶喜松平慶永山內容堂の謹愼を解く

〔小笠原備前守平日錄〕

四月廿六日

米禁來、發急郵、吉田平、得溝省翁書、而以書贈之、則一橋公及尾越二公之事也、以昨日官免其咎云、松埜氏外行、入夜戌前歸、酒井十之丞者、禮服而來、以來月三日、從君公歸鄉、告別也、況復　公在邸之時、爲越老侯、書以訴官、乞宥其罪、已而公歸國、故越今之侯、以其謝辭屬酒井、乃酒菓以饗之

〔仝　書〕

四月廿九日

殿中無事、酒井十之丞者、以書依其君侯之命、贈越州之產、問奉書紙及鮮魚來、蓋昨年來、因老侯幽閉之事、而吾公乞因安藤閣老、俟其免許之令、酒井謀之於予、乃以廿五日有免許故、越侯悅喜之餘賜之也、退朝後、到於酒井氏、時有官而不在家、則以話記、托其家隸而歸、蓋侯演嘉儀、謝恩於酒井氏、告別也、

〔尊攘錄皇武令、文久二年　江戸機密問日記、江戸返達御用狀控〕

尾張殿家老

竹腰兵部少輔

四月廿五日

尾張前中納言殿御事先達而御愼御免被仰出候節御在國等御願被成候儀は不宜且又大納言殿に茂度々御對面等被成候儀は御酌酌被在之御親族方其外他に御面會又は御文書御往復等之儀都而御遠慮被在之候樣ニとの御內沙汰之趣相達置候處思召御旨茂被爲在候付先年御不興之筋者皆悉御宥許被遊候間以後都而平常之通御心得被成候樣被仰出候就而者御對面茂被遊度思召ニ候間近々御登城之儀可被仰出との御沙汰ニ候此段大納言殿前中納言殿に可被申上候

一橋附家老

刑部卿殿御事先達而御愼御免被仰出候節御親族方其外以下同文此段刑部卿殿に可被申上候

右於芙蓉間老中列座紀伊守中渡書付渡之

松平越前守

松平春嶽事先達而愼御免被仰出候節在所に罷越候儀ハ難相成且又親族其外他に面會又者文書往復等之儀者都而遠慮い

たし候様との御内沙汰之趣相達置候處思召御旨茂有之候付先年御不興之筋は皆悉御宥許被遊候間以後都而平常之通可被相心得旨被仰出候此段春嶽に申聞候様可被致候

在國
松平土佐守
名代稲葉伊豫守

松平容堂事以下同文　此段容堂に申聞候様可被致候

右者今晩紀伊守宅に呼出書付相渡之

四月廿五日在京我藩吏員櫻田覺助は京都に於ける長藩の航海遠略策に對する疑惑並に同藩の兵備及び寺田屋事件後所司代邸警戒の狀況等を在藩の同僚に報す

〔尊攘錄 櫻田並東禪寺一件〕

一翰啓上仕候各様愈御安泰可被成御座珍重奉存候然者此許事躰青地源右衛門出立迄之處之同人ゟ委細御聞取ニ相成候ゝ奉存候其後格別相替候儀聞出不申候然處一昨廿三日之夜伏見薩藩取計之次第御所司代ニ屆書并外聞之覺書爲御承知差上申候其外少寃相替候儀者左ニ記申候

一長洲より建白永井雅樂より差出候大船造立渡海交易之設一端者此説ニ歸シ可申との御模様ニ御座候處於御所向少疑惑生先當時之處ゝ而者右之策ハ被行不申模様ニ或御役様ゟ承申候

一長洲者殿長門守様來ル廿七日御京着二夜御滯留同廿九日下伏ゝ御留守居ゟ爲知來申候近來長州ハ何とも風説不仕候得共大炮抔ひき出ニ持込其外武器兵糧抔も澤山ニ持込候由形ハ不穩姿ニ相見申候何レ若殿之上京を相待居申候ゝ被察候

一御所司代去十五日之夜大ニ騷立候次第ハ御留守居より御聞取ニ相成候ゝ奉存候又此節廿三日之夜八時分より騷立皆々甲冑拔身ゝ而覺悟ニ相成候由廿四日朝飯後承知仕候付直ニ大塚權三郎并河邊鉄之助兩人見繕ニ參り申候處夫迄も通用門裏門抔之具足之上ニ火事羽織着用鉄炮火繩を懸警衛いたし居候由

一御留守居被下候屆此廿五日比御所司代并町奉行に屆候様大坂ゟ被申達置候間共取計仕候筈ニ御座候へ共右混雜中ニ屆出候而者如何よふゝ被引受候哉ゝ奉存候間一兩日見合可申筈ニ御座候尤當御屋敷に人數何程參居候哉何程位歟抔ゝ近所に追々内聞も御座候間旁如右ニ取計置申候

一右之趣者青地方いまた御國滯ニ相成居候ハヽ御申通可被下よふゝ御賴申上候

右之外種々之巷説御座候得共突留候後無御座候尚慥成儀承申候ハヽ可奉申上存候以上

四月廿五日　櫻田覺助

松尾三郎様
小山多左衛門様

四月廿六日在府本藩老臣小笠原備前等書を藩政府に贈り長藩長井雅樂公武合體周旋の成行京坂不逞の徒と宮部鼎藏轟木武兵衛等との關係及び藩士他國人交際の取締等につき所見をのぶ

〔尊攘錄 文久二年 自筆狀〕

備前殿自筆狀

以別紙申達候當月三日御地被差立候早打御飛脚同十八日着御用狀之趣夫々致承知候別紙御沙汰之趣奉敬承候佐田新兵衛儀も同廿二日着御地之事情夫々致承知其砌御諚之書付も慥ニ致落手候先以不意之事差起嘸々御心配有之たると存候然處轟木武兵衛宮部鼎藏其餘同志之面々申立候趣屹ゝ夕様ゝ申儀分兼尤成筋合ニ相聞不申御元ゝて建白之書付も爲有之哉ニ付猶被差越ニ而も可有之ゝ相待居申候右付而ハ沼田列西山組共大坂表に被差立候埒ニいたり御留守中ゝ申御外聞之處も有之前後御心配之程致深察候尤西山列ハ御途中ニ而急候ニ不及直ニ相州に致交代候様被仰付候由ニ而此儀之

乍恐能々御慈合ニ相成候儀と存候然處沼田列矢蜜被差立候段直ニ京都之方御窺取ハ公法も可有之間敷被申聞左候ハ、此元に登込矢公邊御伺と申樣ニも爲被仰付儀ニ御座候哉然ルニ公武御合躰一像付而ハ長州樣御打立之次第及御取遣置候通ニ而詰り永井雅樂と申もの御國に可被差遣旨ニ付此儀被遣御承知候上之此方樣之儀同樣之御取扱筋ニ而跡ニ成候事故定而御見合ニ相成沼田列ハ引返候樣ニも被仰付たるニ而可有御座哉其後之御樣子如何程ニ可有之哉と懸念致候右長州樣御取起之儀も彼方樣御家來前文永井雅樂一旦出京之末猶又此元に罷越居其樣子ハ委敷御留守居ゟ之書取別紙差進候通ニ而猶何とと賊彼方樣ゟ御懸合之筋も可有之候由此節之御趣意之通ニ候ハヽ右長州樣御模樣ニ付而ハ最前申達候通被遣御同意ニ而可有之と存候因而差寄長州樣ニハ彼方之御留守居を以御答とゝ〻く彼方之御模樣被遣御承知候處を以先一應　豊慮之旨彼方樣迄申入候御取扱ニも相成可申哉之前條沼田列被仰付之御模樣ニも因り候事ニ而ゟ樣と此許ゟ而ハ雖取究候得とも長州樣一件達豊慮候ハヽ多分沼田列之儀之御見合ゟ茂相成り可申方之筋等之被仰談も有之御申越被遣行違ニ可相成哉ニ候得とも此元ニ而申談候趣別紙豊通差進申候

一此元ニ而ハ霜月半比ゟ賊徒州長州中川候抔處々奔亡人有之風説有之中川候よりハ御屆も有之此方樣茂二十人計奔亡有之候と申唱へ公邊より御探りも入候哉ニ相聞近日之處ハ仰山ニ申唱候向も有之哉ニ而慨思之事共ニ御座候然處佐田大坂表見聞之次第ハ何と賊不穩樣子ニ而所々浪人もの躰も參居候哉之由且島津和泉樣滞坂中ニ而右御屋敷内之模樣も不穩浪人者百人計も御拘抔と申候ニ至候而ゝ不容易次第ニ而殊ニ宮部抔之破關をもいたし候共ニてハ無之候哉彼是主立候面々ハ得斗御吟味之上屹と御取扱も不被仰付候而ハ向後御政道之筋難立樣ニも至可申哉ト話合申候然し主臺申立之趣意も得斗承知不致其後段々御處置之筋も有之たるとゝ相考候得とも此度之一件ハ不容易次第懸念之餘不差置申達候間御樣子以之便被仰越候樣存候方今時世人心申唱三十人計ハ入込候儀無相違且永井雅樂と和泉樣設合兼候抔又ハ長州よりハ三千人計京地に參居候由ニ而彼是懸念之事共有之候末去廿三日大坂表大混雜差起筑前之飛脚永口驛より引返候由慥成樣子ニ相聞此疑敷茂有之候得とも筑前樣長州樣又ハ營中飛脚問屋等承糺せ候處別紙御留守居書取遠山三右衛門紙面等一括之通ニ而安心いたし候然處御留守居長州樣ゟ聞取之趣ニ而ハ薩摩之方ハ一旦不容易儀打立之事賊と相聞因而相考候ハヽ此末宮部抔致主張候而此節之一件差起候も諸國之諸生浪人等種々虚實取交申立候樣之儀ニ被誘惑候共ニ而ハ有之間敷哉ト一旦ハ相考候得とも右薩之一件置等敷此度張より之事共ニハ有之間敷哉何ゟニも右申立之末一旦御人數をも被差出一和ハ御武備之大本別而御代替即下ゟ申御急務之儀ニ御座候處此節御沙汰之御趣意ニ而一統一致可致事ニハ候得とも偏固之學風等ニ染候ハヽ心得違も出來可申他邦ニゟ一流之學者黨を結類を引候樣之ものも有之賊ニ付若左樣之者ニ被誘心得違ニも至り候ハヽ誠以傷思なる事共ニ付他國人と相交候儀ハ上より被仰付候類ハ別段其人躰等相建候樣不容易分外天下之事等猥ニ申談不致無據次第も有之申談又ハ取遣ニも及候ハヽ其筋申達差圖ニ任せ可申樣ニも相成又ハ一向ニ當分之處御樣子有之他國交被禁候而も可然賊仁義忠孝之學問筋御國ニ而事不足譯も有之間敷此節ハ別而人心一致之處大切之御取締筋賊と相考申候間是又不差置申達候ゟし御地之事情も可有之此砌容易ニハ難被閣も可有之哉得計可被仰談哉ト存候何樣傷思なる事差起御下向も御座候内公邊御響も如何可有之哉と其致懸念彼是深々御心配之儀ハ兎角難申儀と存候已上

四月廿六日

松野豆
小笠原備前

御家老
御中老
老宛

（留守居書取）

今度京攝之間物騒之唱有之候付長州樣類役に參り長井雅樂出京中之儀ニ茂有之其模樣尋を押立ニして罷越候處類役三井善右衛門ゟ留守ニ而大和彌八郎と申者ニ面會仕唱承居候內致出京居候長井一昨夜致歸府候との事ニ付京師之探索等相濟次第長州之樣ニ參候筈之切組ニ承居候處何ゟ相違之儀ゟ而も致出來候哉と尋候處一昨夕之歸府ニ而昨日ゟ終日君

前ニ出居未タ面會不仕候間譯柄之少シ茂承り不申同役も今日之様子聞ニ麻布御屋敷ニ參居候との事ニ付一ト通り京猟之様子等承り引取猶今朝三井ニ參候處在宿ニて寛々咄承候次第左之通ニ御座候

近況京猟之間物騒之唱専ラ有之候處當薩州様之御實父和泉様と職申御方御願ニ而御出府懸ケ丁度之折柄御着京ニ相成御同勢前後迄ニ之千ニ茂及可申兵器等段々御持せニ相成候抔仰山ニ申觸シ就而之御家様ニ而も數千人京地ニ相詰御番頭職御家老職五頭計茂御詰ニ相成候哉相聞候處虚實何程ニ候哉と尋候處長州様京地之御屋敷之至而御手狹ニ而中々多人數相詰候様ニ之參發候由舊冬來物騒ニも有之近來之別而之事ニ付貳三拾人も御國許ゟ御呼寄ニ相成其外兵庫御陣屋詰ゟ少々參候哉且江戸より致歸國候者之内自然ハ懸留ニも相成候哉何様ニも大勢ニ相成候得之迚も大坂御屋敷ゟても被差置候外有之間敷御番頭等京地ニ參居候者ハ無之との事ニ付今度浪人共相集り物騒ニ相成候ニ之次第柄も可有之如何之御聞込ニ候哉と尋候處發端ハ去冬比職之由薩州様ゟ近衛様を以　天朝に執奏有之右建白之次第ハ近年關東之御處置不宜御藩政而已多ク有之候之御人を不被得よゝ之事ニ付御役人難陣之事を幕府に　綸旨被成下薩州にも其御趣意ニ而　綸旨被成下候ハヽ關東に人數召連罷出被仰立候筋も可有之との御旨意ニ相聞候處　天朝ニ而之鮑迄も德川家御永續之處之　叡慮之旨被爲在殊ニ今度　姫宮様御緣組ニ付而之　皇妹様之御縁柄共上御兄弟様被仰合候御儀ゟ被爲在旁以方今弓矢の沙汰ニ相成内亂を生候而之忽チ夷狄の術中ニ陷り候との　叡慮ニ而薩州之建議御取揚無之由右建白之廉ゟ職段々御手船を下ノ關に相廻サレ於同所糧米拾万石計も御買入ニ相成候由ニ而去冬之下ノ關邊不穩唱も有之萩御城下より御人數も被差出段々探索ニ相成候處米賣候者も相知候處左迄之事ニハ無之五六万石之全ク買入ニ相成大坂迄之海岸ゟ而相應之身代の者ニ右之米囲方頼ニ御役人致奔走候儀も爲有之由右之綸旨被成下候得之成行次第ニ之直ニ所司代ニ仕懸可申夫ニ相成候ヘ之京地之者共可及難儀共取扱之ための糧米と申事ニ相聞候由内輪右之通之事故諸浪人ニ之來春迄ニ京猟之間ニ參り相待居候様内々含メニ相成候末ニ而此節兩境騒々敷成行候哉ニ相聞申候由右段々之通ニ而建白之行レ不申猶御所置替之趣有之和泉様御發途ニ相成候處含ニ相成居候諸浪人

兩境ニ集り今やノヽと相待居候折柄ニ付何とふく京猟之間御通抜も相成兼種々之手當ニ而右浪人共を段々と大坂の薩邸ニ引入ニ相成居候由右等之風聞ニ而所司代様ニ之御國許ゟ多分之御人數參り居今度　御婚禮濟に付而之御使井伊様御出京ニ付而ハ參内三度有之三度共酒井様御同道之筈之處一度も御同道無之御引籠ニ相成居候由尤長井去ル十四日京地發足候處其比ハ次第ニ居り合靜ニ趣キ居候由同人唱いたし候との事ニ御坐候

一公武御合躰御周旋之一條何そ謹卿之筋ニ而も致出來候而長井氏引返○付札共ニ而ハ無之哉と相尋候處左様ニも相聞不申何様今度之顛斗之下聞ニ參候得共少々之手を付候由之處　天朝ニ而も多分御異存も聞に不申候得共長井ニ而ハ　叡慮之處何共可被仰出御模様ニ無之長州様御出京ニ不相成候而ハ其邊ハ分も兼可申との事ニ付　御合躰成否之境如何之見込ニ候哉と尋候處各別手廣ク也有之間敷德川家ハ何方迄も致永續度様ニ之事ニ付長井氏御歸本クマヽトレ何様長州様御出京と相成候ヘ之御一方様ニ而も相濟申間敷國老之内も御上京ニ相成可申職との事ニ付長井氏御歸府後國老方ニ之未タ御出無之哉と相尋候處昨日御退出ニ罷出候様ゟ申參り定而致伺公候とハ存候得共今朝迄ハ様子承り不申との事ニ御坐候　右之通段々唱合候末當時之世評ニ之久留米同抔ゟ大勢亡命人有之私方ゟモ多人數致濟出候哉に唱候様子ニ而同心手先抔より姓名迄も相認メ内々問合參候處左様之儀之更ニ無之御家様ゟも大勢濟出爲有之哉ニ承候處長井京地ニ而承發り候趣ニ而ハ淡石ニ御大家様ニ而御手茂被爲屬左様之儀之無之由尤當人職肥後浪人と申者右之組應ニ學問ゟ有之隱分才力者ニ而浪人之内ニ而ハ口幸利ゟ候様ニ聞込參候處實否何程ニ候哉と尋候問十年計前ニ茂可有之士分之者ニ無之輕藥ニ而江戸に相詰居不來之儀有之御國許ニ而相應之咎メ可被仰付答ゟ而平人同前ニ而被差下候途中致逐電共者京地ニ參居候哉ニ六七年前より承り候儀有之候處是非召捕不申而難叶と申程之罪科ニも無之共其儘ニ相成居候者有之　松田十助と職申素之夏迄　外ニ茂輕藥之内罪有之密刀從刑に相成候者一人去年比ゟ御國許致逐電候哉ニも聞込居候處外ニ之　宮部何某とか申者　此節之騒動より出奔抔と申事者無之段返答仕候處兎角仰山ニ申成候ニハ困り候と互に一笑仕候事ニ御座候

一薩州も内輪一致と申程ニハ無之哉ニ相聞申候子細之御小納戸頭取ニ而御用人兼居候様ニも相聞へ隨分權威在ル役人ニ堀忠左衛門と申者長井ニ之此元ニ而追々出會長州様御建議筋も長井ゟ存寄相違候處至極同意ニ而和泉様ニ伏見ニ而懸御目委細申上呉候様頼候由夫故長井ハ時日を考へ參候處和泉様ハ又々御國元御立延引ニ而今度長井ハ懸御目不申候由堀之伏見迄參り專ラ内輪之事心配いたし候哉ニ相聞申候

右之外色々咄承候儀茂御座候へ共書上ケ候程の事茂無之荒々閑筆仕候至急ニ相認メ段々不束之儀計ニ而可有御座何卒御推覽奉願候事

四月廿四日　清田新兵衛

付札〇合印

本行御建白一條ニ付長井を御國迄被差越候趣ハ最前より申參居候次第有之候處今度又々此元之様ニ引返シ申候間其の邊ハ如何可相成哉違候處いつゑ彼方様ニ而御治定ニ相成候處ニ而重而案内可致何分昨今之處ニ而ハ夫迄之咄ニ貫り兼居候との事ニ御座候

四月廿六日我藩江戸留守居清田新兵衛は長藩の公武合躰の周旋に關する交渉に對し在府老臣の旨を承けて返書を與ふ

〔小橋記錄〕

先達御懸合御座候東西御合體御取扱一件に付御使者之事早速重役えも申通御國元えも申通候處越中守様達御聞兼て當今之形勢御懸念被成居候而既に御同様之御取扱も可被成と思召之儀にて御同意に思召逸稜之御打立御都合能御成功に被至候様有之度思召追而御懸合之筋も有之候へは無御腹臓可被仰談聡に御座候此段無屹御手前様迄御申通申候様との事に御座候事

細川越中守様御内　清田新兵衛

四月

松平大膳大夫様御内　三井善右衛門様

四月廿七日岡藩小河彌右衛門寺田屋事變前後の事情を同藩田近儀左衛門等に報す

〔撥反雜記〕

四月廿七日伏水ニ而認申候手控

薩州始列國之事情何分不盡筆頭其内少々決候事御座候上可及御文通左も無之候而は只々御疑惑之種とのミ相成候半と存一日ノ〳〵と延引いたし候於御地ハ嘸々御氣遣御浮問ニ可有之候長州之情態抔中々入組候事ニ御座候併是は漸正論ニ歸し申事と奉存候先暫其儀はさし置第一之薩州情實一わたり可得貴意候追々周旋有之候柴山橋口列尚又先達而市木ニ而致面會候田中有馬列右等之見込と君側小松堀大久保列之見込は的とまる所は同様と聞取候へ共其策略手段ハ相違有之ゑる事と聞取申候併其相違有之事ハ何分是迄探付不申候小生登伏後追々と其様子わゐり申候共手段相違と申ハ有馬列之見込はともかくも　王朝回復之事業ハ不容易ハ勿論之事ニ而先第一ニ天意之御英決付候事をはゐり不申ては往々埒明不申候自然と緩々之處置ニ而は一且は治りても末をとげ不申依之最初ニ少々之而も兵威を示し是迄は關東より王朝をさし引仕候處此處ニ而初ニ共柄ゑ取返　王朝より關東ゑ御指揮相成候外無之と見込申候扨堀大久保列ハ夫よりハ緩論之してそろ〳〵と押懸りて關東より違　勅あらハ是をこらもべけれども先ハ兵威を内之含て押かゝるといふ處の違有之たる趣ニ而候有馬列之は彼名之しおふ大島三右衛門同論ニ而有之候ニ付十ニ九は其通り運ひ可申とゐそ見込候處三右衛門之論過激之していゑられゑ其方も退らゑ候扨彼緩論ニ相成候而十六日近衛家陽明殿ニ御參殿被仰立之御趣意は一橋家越前家ゑ被爲起將軍御後見大老等に被命扨近年無罪之して幽閉之　青蓮院宮ゑ初奉り堂上方御引入之方々初諸列藩寃罪之人々ゑ被免苟ニ被復候様との御中立ニ而其時議奏中山大納言様正親町三條様も御出會兩卿直ニ御參

内ニ而　叡慮御伺之處其通ニ被　仰出旨ニ而和泉殿ハ暫滞京被致旨被　仰出扨久世閣老ニ急ニ上京仕候様十七日寅刻早籠ニ而關東ハ申參候山久世様御上京之上右御承知ニ候得は直ニ越前家御呼上せニ而萬事被仰含候御心組の由聞取申候夫ニ付而尚細目も數多ニ候へ共暫略之候何様一ト先好都合ニハ候得共是は猶尋常平穩中之御處置ニ而候乍併表よりもる所は隨分此通も可宜されは裏より廻りて一擧して　叡決を扶けかねてハ堂上ハ婦人の如き御方々ふれバ其心をも張しめ候半は現物丸見せて安心させる外無之と申様なる譯ニ而廿三日夜ひそゐゑ河内介列を始め押立薩長之有志列其外段々有之候諸司代丸結ひ　青蓮院宮丸奉して參　内させ奉り和泉殿を　御所ニめして此上回天之事業盡力可被　仰付様ニと其手配も夫々つきて其筋ニ運ひゐけ候處先ニ京之薩邸之者へ譯有之其登る人數丸指押へんとの事ニなり申候先ゑは淀の川端と申上候得共ゑせ登る者初休息したる所淀ニ而双傷ニ及候所ハ伏見京橋也　夫より指押之人々參向候處魁首有馬田中柴山橋口出向ひ談論様々之處五ニ承伏せを一方ハ君命ニ而押付んとし一方ハ決談を論しおり合不申田中初太刀ぬきゑふせハ摠切結ひニ相成候由二階ゑ有合者追々馳下り候内弟子丸橋口森山是ゑ加り七人切死いたし相手ゑ指押方ハ八人手負候得共其内即死は一人ニ候田中有馬列も無餘儀拔ゑ那したれども爰ニてハ切てもらふ位之事と心中至而床敷被存申候誠ニ言語同斷之事ニ候首謀之薩藩有之通故是ニ應し申筈之諸藩ハ共儘皆潜伏いたし候由ニ御座候小生列は其内情は委細心得居候得共夫等ゑは離れて泉州之手ニ付候而　御所警衛ニ罷出候心得ニ而馳登り候へは伏水ニ而有やふれ承り大ニ力丸落申候河内介眞木和泉守列は皆京之薩邸ニ入居候由夫ニ付而之内情もいろ〳〵御座候得共とても傘紙ニ不盡候最早今暫兵革ハ動申間敷候得共久世様速ニ御上洛無之歟又は御上洛ニても右件々御受出來ねば列國有志之諸侯ニ　敷丸被降候手筈ニ相成居候ニ相違無之其邊ニ付て和泉殿はりこミハ中々強き事ニ御坐候長州人之見込ハ此處ゑ必敗れ出來可申との見込ニ候得共河内介列之見込は夫ゑは初は敗は出來間敷いゐ樣之迷惑も一應は引受るニて可有との見込ニ御座候扨引受ても大難儀事ハ御察可被成候長州若殿今日御着是も和泉殿一同滞京之　命下り申手筈之由ニ御座候彌　朝廷之御勢は付申方ニ御座候何卒此先十分之回天ニ至り候へかしと是のミ奉存候其ニ付御國之事も色々相考申事ニ御座候心事不盡筆頭候一應此書面ニて御元ニてハ一擧せんとしゐる者ハ横さまふる拳擧可思召候得共其心情中々入組候事ニ而夫ハ不盡筆頭候誠ニ々々可憐可哀可痛事ニ而長嘆之至ニ御座候まゐし彼等が忠魂必徹を所可有之のミ那らす英名ハ千古ゑ不朽と奉存候田近陽一郎田部龍作を御道中迄右言上ニさし出置候朔日ニは御日わり通ふれは御着と是のミ奉待候尚朔日頃迄ゑは猶々まつゐりとしゐる所見込慥ニわゐり申手段も御座候分明次第可得貴意候已上四月廿七日小河彌右衛門拜

田近儀左衛門様中川傳次郎様小河六郎左衛門様志水左兵衛様瓦林重藏様

猶々政府初御同志諸君へ此旨よろしく被仰通可被下候此上急變之事ハ片時も不安心ニ候得共其儀ハ難期ともかくも一先之居合見届不申ては進退難仕長々之在陣是ゑは當惑仕御察可被下候只々此上兼而存込候御家之御都合宜敷有之かしと此義心願仕候事ニ御座候萬一兵革ハ不動とも世の中は一變仕候ゑ相違無之候以上

四月廿八日長藩世子毛利定廣京師に至る

〔文久二年尊攘錄自筆狀〕

（犬塚權三郎演舌の一節）

一長州御嫡長門守様ニも四月廿八日御京着昨晦日應司様有栖川様ニ御出ニ相成候處是ゑ御出京表向之御對話迄之由ニ而御双方小半時程ゑで御立有之候由依而何そ御子細有之候而之伺公ニハ有御坐間敷由

一御同方ニハ日數三日御滞京之筈ニ候處御所勞ニ而暫之間御滞之由實ゑ閣老出京迄之間ハ御動キ無之との風評ニ候得共未タ御屆之模様ハ承不申候容易ニ違ハ有御坐間敷由

〔採種錄〕（四月廿三日の條につゝく）

長州御人數四月上旬ゟ追々四月廿八日江戸ゟ若殿御上京同勢千餘人御滞在

四月廿九日及び晦日在京の浪士多く薩士米等の諸藩に拘へられ田中河内介等薩摩へ送らる

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕（薩州大坂御屋敷御家中ニ而聞取書、四月廿三日の條につゝく）

一四月廿九日晦日兩日之内京都ゟ浪人共三拾人程大坂御屋敷に被差下其内貳人之晦日土佐御屋敷御留守居に引渡外々一同三人久留米御屋敷御留守居に引渡ニ相成申候尤薩州并佐土原之浪人三人外ニ浪人之頭分田中河内介之由是ハ手錠足がねに而薩州之御國に一同飛船早打を以被差下候由殘り之面々之今日迄大坂御屋敷御長家ニ共儘被差置候由ニ承り申候事

一和泉殿御嫡子島津宮之允殿和泉殿ゟ御呼登せニ而近日御上京之由尤御同勢凡千五百人程被召連候由ニ承り申候事

一伏見旅宿之亭主に薩州樣ゟ當座之爲謝禮金百兩被下置候也

右之通承り候付申上候以上

戌五月朔日　　橋本喜彌太

〔撥反雜記〕

一書曰五月十日久留米藩中一統御廻文寫回狀

先月廿九日松平修理大夫樣大坂御留守居松崎彦兵衛より面會之儀申來候間小林賢二就病氣雨森傳左衛門罷越候處別紙手覺書之趣意口達ニ而申達手扣相渡候ニ付同卅日之曉身柄御屋敷へ引取候段大坂在番中ゟ申越候事」

此度和泉樣へ墓上り候而別紙之拾人誠奇特之志有之向ニ思召候然處今般此御方御家中有馬新七列三人之者共之企ニ被誘無據其組ニ加之り候哉ニ相聞則有馬新七等ハ段々被仰渡趣も有之候得共不相用候ニ付打果候樣被仰付候然ハ前文十人ハ畢竟有者共ニ被誘引出候事而已ニ而外ニ何ぞ子細ハ無之事ニ有之然共有新七等へ一旦組いたし候此御國之者共儀ハ一昨廿七日御國許之樣被差下置候ニ付而ハ右十人も右同列之儀ニ而右ニ付準候得ハ其儘ニ而ハ難被召置御情合も有之夫故御方へ御引渡候樣被仰付候尤此節之暴動共頭ニ立候有馬等之者之打捨其外ハ成だけ取押浪人鎭撫之　叡慮ニ叶候樣仕度趣を以早速御屆ニも相成たる譯柄之者共ニ御座候得之此取扱振之儀共至極御丁寧ニ被成下穩便ニ被仰付候樣無之候而ハ御趣意之も不相叶儀之付此旨譯而和泉樣御沙汰被爲有候ニ付右者共へ御留守居方より得斗御申渡御趣意之程も難有謹而承知申上穩便御方同道ニ而被引取樣有之度思召候此段御談申候事

別紙名前

直木和泉守　眞木菊四郎　酒井傳次郎　鶴田鈎次　原道太　荒卷半三郎　古賀簡二
中垣健太郎　古武助右衛門（マヽ）　佛太郎弟　淵上謙三

此ふみは友人蒲生の武秀がもたるをかりてう都須加屋盾列

〔小橋元雄手記〕

久光は中山忠左衛門に命し田中父子及秋月藩海賀宮門等を海路薩屋に送ると稱し日向國細島に至りて悉く斬殺せしめたりと云田中等斬殺の事世に傳る所にして其確證なしと雖文久二年五月二十二日久光の喜入播津に與る書中「浪人船にて差廻し相成管此儀は意味深長の事」とあるは此處分の事なるへし又前原一誠の擧兵に關したる新潟人大橋一藏は中山が大久保利通暗殺に關し懲役の刑に處せられ細島服役中景を同じくせしか中山病に罹り熱發譫語中田中父子を殺したるを自白せしと云而して大橋の談は佐々千城同獄にありて所聞

〔田中河内介君傳〕

サル程ニ是ノ事件ニ關係アル志士ハ薩公ノ手ヨリ各々ソノ藩主ニ渡シ藩主ハ各藩地ニ護送シテ禁錮スルコトニ定マリヌソノ名アル人々ニハ薩摩ニテ伊集院直右衛門（兼基）谷元兵右衛門（道之）西郷眞吾（從道）大山彌助（巖）三島彌兵衛（通庸）吉原彌次郎（俊重）篠原冬一郎（國幹）岸良三之助（俊之）是枝柳右衛門等二十五人久留米ニテ眞木和泉守ソノ子菊四郎吉武助左衛門河上謙三原道太（盾男）等十人岡ニテ小河彌右衛門田近陽一郎（長陽）廣瀨友之允（重武）渡邊彦左衛門等十七人土佐ニテ吉村寅太郎（虎雄）宮地宜藏吉松緣太郎佐土原ニテ富田孟次郎（信通）池上隼之助ナリ大島三右衛門村田新八森山新藏ノ三人ハ辯キニ國元ヘ送ラレテ流竄ニ遭ヒヌ長州ニテハ久坂玄瑞寺島忠三郎（昌昭）佐世八十郎（前原一誠）入江九一（弘毅）堀眞五郎品川彌二

郎（日致）以下頗ル多カリシモ家老浦觀留守居宍戸九郎兵衛ナド皆正義ノ人ナレバ之ヲ庇護シテ罪セズ清川安積藤本飯居ノ徒ハ事ニ及バザリシニ因テ罪ヲ免レヌサテ君ハ獨リ主家ナケレバ今ハ却テ幸ヲ得テ流竄禁錮ヲ免レヌサレドモ流竄禁錮ヨリモ更ニ甚シキ禍事ハ君カ身ヲ取リ卷キヌ幕吏ハ君ヲ這回ノ首魁ト認メ極刑ニ處セズンバ已マジト附ヶ狙フ君ハ薩人の勸メニヨリ是ノ月二十八日大坂ニ遁レ鹿兒島ニ潛マバヤトテ五月一日ト云フニ君カ父子一隻ノ廻船ニ搭レハ八十島カケテ漕キ出ダス筑前秋月ノ海賀右衛門（直求）君カ義弟タル京都ノ中村主計千葉郁太郎皆國士ナリ君ト死生ヲ俱ニセムト欲シ別ニ一艘ノ船ニ乘リテ從フ薩士數輩護衛ト稱シテ兩船ニ乘リコミヌ

噫是ノ後ノ事ハ余話ラムニ忍ビザルナリ否話ラムト欲スレドモ永ク闇昧ノ中ニ埋モレテ眞相ノ明ナラザルヲ如何ニセム今尤モ信スベシト思ハル、說ニヨルニ是ノ夜暴風吹キスサミ雨ハサナカラ車軸ノ如シ須磨ヲ過ギテ垂水ノ沖ニカ、リシ頃ハ怒濤濆薄シ船骨々トシテ覆ラムバカリナリキ陰謀ハ何時ノ間ニカ結バレケム薩士三四人近ヅキテ「內命ナレバ御父子ノ命申シウケム」ト言フ君神色自若トシテ少シモ騷ガズ「斯クアルベシトハ豫テ覺悟シタリ疾ク擊タレヨ」トテ襟ヲ披キ胸ヲ明ケテ衝キツケタリコヽニ人々タユタヒシモ殺サデカナハヌコトナレバト思ヒ定メテ胸板深クモ一刀衝キ貫キ逆卷ク波ノ上へ投ケ棄テツ是ノ時君ノ辭世ナリトテ醜ノ隼人カ僻耳ニ留マリシ歌

ふからへてあえらぬ月も見るとても死して拂えんとゝろうき雲

佐馬介ハ胸ト腹トヲ三度マデモ突カル背ニハ手負ハザリケル父子ノ最後ゾイサマシキ海賀中村千葉モ日向ノ細島ニテ同ジク非命ヲ遂ゲツ　惡逆無慙ノ族ニモ一點ノ良心ヤアリケム君ガ最期ノ樣眼前ニ立チテ忘ルヽヒマナク終ニ狂ヒ死ニ死ニキコレヨリ薩人君ノ靈ヲ怖ルヽコト甚シ垂水沖ヲ通ルトキハ尤モ戒慎ヲ加フルナルニ或ル年軍艦コヽニテ暗礁ニ乘リ上ゲ沈沒シケレバ一層恐レヲ抱キ今ニ至ルマデ彼ノ國ノ人君ガ死處ノ邊ニ至レバ皆身ヲ縮メ息ヲ殺シ心中ニ神佛ヲ念ジ茲ヲ過キ去リテ始メテ溜息ツキテ顏色催ストゾ（中略）

君カ横死ハ自ラ世ニ隱レナクナリヌサレドソノ死屍ノ在所ヲ知ルモノナクテ數年ヲ經ヌ慶應二年四月長門ノ奇兵隊備中倉敷ノ代官所ヲ擊破スソコノ志士林孚一ト云フモノ官文ノ散亂セル中ニ君ガ死屍ノ見分書類ヲ得タリ其記セル所ニ據ルニ文久二年五月一日讃岐小豆島ニテハ申刻ヨリ東北ノ風吹キ初メ夜ニ入リテ雨サヘ添ヒテ物凄キコト言ハム方ナシ翌曉福田村ノ民伊右衛門ト云フモノ遠干濱ニ打チ出デテ夜來ノ損處ヲ見巡リケルニ沖ノ方ヨリ異體ノモノ高波ニ搖ラレツヽ近ヨリテ水際ヨリ十間バカリノ處ニ打チ揚ケラル凝視スレバ年頃五十バカリノ人ノ死體ナリ丈高ク面稍々痩セ頭ハ白髮打チ交リ髭蓬々トシテ顯ナルハ最モ長シ之レハト驚ク間モアラズ今一ツノ死骸體ヲ檢スルニアラ無慙ヤ二人トモ麻繩ニテ後手ニ繫リ同シ處ニ打チ揚リヌ齡ハ二十三四ナルベク肉肥リ髭ナシ上ゲ荒ケナキ木片ニテ足柳ヲ篏メ釘留メニセリ老タル方ハ左胸ニ突キ創アリテ背ニ達シ弱キ方ハ左ノ横腋ノ下ニエグリ創アリ臟腑流レ出ヅ血色未タ變ラ子バ其ノ致命ハ丑ノ刻ニモヤアリケムト思ハル水呑ミタル躰ナケレバ息絕エテ後ニ水漬ケシナラム弱キ方ノ腹卷ニ「田中河內介男左馬介藤原嘉猷」ト記セリ村吏ハ支配所ナル倉敷代官所ヘ屆ケ十餘日ヲ經テ檢使ノ來リシ時ハ五體腐爛シテ蛆ヲ生ジ異臭鼻ヲ衝キ面目辨ズベカラズ頓テソコニ瘞メキト云フ

カクテ親戚知友何レモ君ノ埋骨ノ地ヲ知ラデ永キ年月ヲ送リソノ間磯打ツ荒波鳴キ渡ル濱千鳥ノ外ニハ吊フモノトテハ絕テナカリシニ偶然ノ事ヨリ右ノ官書林孚一ノ手ニ入リ終ニ傳ヘテ西村敬藏ノ耳ニ入リ西村ハ遠ク若干ノ賚ヲ島氏ニ寄セテシルシバカリノ石ヲ建ツ然レドモ世ノ人ハ未タ之ヲ知ラザリキ

四月晦日尊融法親王鷹司輔熙近衛忠熙等蟄居謹愼を免せらる

〔撥反雜記〕

文久二年壬戌四月晦日御放囚之節御書取

入道準后入道前右大臣

文久二年

右以深思召關東に御沙汰被爲在自今參内以下萬事平常之通被心得不及遠慮由被仰出候事

入道左大臣

獅子王院宮

右御同文

右以深思召關東に御沙汰被爲在自今被免蟄居以下御同文

〔文久二年尊攘錄自筆狀〕

（大塚權三郎演舌書の一節）

昨晦日獅々王院樣宮樣（粟田口宮樣也）近衛前左府樣（本ノマヽ）鷹司入道准后樣鷹司前左右府樣等御愼　勅許ニ相成候由ニ而卽夜右之御方々御參内御座候由尼州越前土州抔ニも御同樣の由ニ承申候得共此儀ハ未タ慥ニ之難申上候

四月晦日關白九條尙忠職を辭せんことを請ふ

〔文久二年尊攘錄自筆狀〕

（大塚權三郎演舌書の一節）

九條殿下昨晦日關白職御斷之御内意有之右之關東御取遣之上御模樣可有御座との由承申候

五月朔日岡藩小河彌右衛門書を在藩の同志者に贈り岩倉具視大原重德に謁して國情を陳へ且つ公武間の關係につきて垂示を受けし所を報し併せて靑蓮院宮近衛忠熙鷹司輔熙一橋慶喜以下尾越土諸藩主の幽閉を赦し謹愼を解きたる幕府の心事に關する薩藩堀次郎の所說を告ぐ

〔撥反雜記〕

從伏水啓上仕候然は過日之狀ニ申上候通ニ而大原三位樣岩倉少將樣被蒙　勅許候旨ニ而私ニ拜顏被仰付旨昨廿九日朝岩倉樣ニ罷出候樣薩藩堀次郎と申者より傳來り則上京いたし參殿仕候大原樣ニは彼御方へ被爲入御前に被召出蒙御懇命首尾能罷下り申候扨其私ゟ此度被召出候趣意ハ是迄薩藩長州藩よりハ追々申立之品も有之右兩國之情ハ御承知も被爲有候得共自餘之國情をも弘く被爲聞召度　叡慮之旨も被爲有且は　天朝之御模樣をも委敷可被仰聞ゟ被召出候由ニ御座候（其小生を被召出と申譯は下ニ可申上候）左候而戊午之年已來關東より　朝家ゟ輕蔑し奉り候かゞ〳〵遂　敕之かと〳〵荒增相伺候是は於御國元も承候通ニさして比相違は無之併思候よりも關東より輕蔑甚敷事ニ而乍恐　叡慮之程只々奉恐入候扨其末　和宮樣關東御下向之事申立之主意ハ夷狄討拂之事連年之　叡慮ニ候得共何分其處ゟ至りかね候　此上皇妹御下りの之處ゟてハ　公武合體關東之威勢大ニ張申候ニ付不遠　叡慮之通夷狄ゟ斥け可申との事　天聽ニ達し候處近年外夷通信通商ニ付而は天下之萬民苦辛も大ゟたゟらす候故　皇妹御一人ゟ以萬民之苦辛ゟ被爲替可申ゞの　叡決ゟ以御下り被爲成候左候得は此ニ至而ハ又急ニ討拂も出來不申七八年乃至十ケ年ゟハ　叡慮之通可取計との申立ニ候於　朝廷ハ戊午年前後段々申立候人々も有之其ニ付御運ひも被爲有候處間部上京之處ニ而有志之人々を急ニ探索して召捕終ゟは靑蓮院宮奉始御幽閉堂上ゟも數多御落飾等も有之　朝家御危難之時も一人之大名としても力ゟ　王朝ゟ盡し候者無之武道ゟても忠正之士は悉死刑遠流幽閉等ゟ被處候得とも右之御次第ニ而　朝廷は只々　叡慮而已ゟゟら更ゟ被遊方も無之聊も關東之意ニ不叶而は立處ゟ變をも生し可申勢已に昨年も廢　帝之例ゟ關東ゟてハ取調有之たる程之次第共を也　叡慮被爲抑候之處今度薩州和泉上洛申立候かども有之長州も差加り又岡藩よも多人數罷出候のミゟらす列國より勤　王有志之浪士等も京攝ゟ集り候而盡忠志旨被爲　聞召誠ニ御賴母敷被　思召上今度久世を可被爲　召ゟも至り此上種々深き　叡慮も被爲有候旨委細御話奉畏候共邊ゟは筆紙ニ難載御次第も御座候右之次第ニ付第一薩第二長第三岡初諸浪士之此三ツゟ　御依賴思召との所より薩長之志士は追々其情御聞屆被遊候故此度は第三之所ニ而小生被召出候御模樣ニ奉伺候扨々恐入候事ニ御座候扨又御話之中に奉伺候へば連年之遂　敕之かどを被爲正且夷狄討拂之御主意ニ候得ゟ其口實として　朝家之御自由ゟ被爲營樣之事有之而ハ　朝家之私意ニ被爲當候よりて左樣之事ハ決而無之との

仰ニ而誠ニ恐入申候御受之申上方も無之何様時勢は不得已もの ニ而已ニ太平記ゝは主上御謀反之事と申文面も御座候而恐入候事ニ御座候とのミ申上候てそゝろゝ涙那らし申候　朝廷は草生茂り候位ニ而關東之全盛ハ無言計夫ゝ　朝家ゝ御榮耀を被爲取ては私意と迄御引縮は只々恐入候事に御座候是ゟ以　朝家之衰御察可被下候工藤左門抔ニ咄候得は切齒憤懣被致候扨存より候事ハ不殘置申上候様重々被仰付候得共薩長二藩より申立候事も可有之其中ニ小生不肖之者可申上事無之候再應申上候得共押而御尋ニ付見込申候次第二三條と先夜暴發いたしかけ候者の心底聞及居候次第等申上候得ゝ夫々被聞召受早速被達　天聽候との御事ニ而扨々恐入候とも何とも申方無御座候猶今日は御參内前ニ付重而可被　召出候ニ付罷下り候様尤來月三日午後罷上候様との御儀ニ而於御次食事被下罷下申候扨私儀蟹之目の頭ニ而飛出し候得共今以ゝゟ〳〵敷戰爭之事は無之左候得ゝ只々御國中致動搖候迄ニ而其罪言語同斷之事と恐入候然ニ右兩卿之御詞ゟ伺候へは私共罷出候段ハ偏ニ叡慮ゝも叶ひ數ゟらぬ者ゟから　御依賴之一端ニ被爲成候と申儀畏り候而は折角と馳上り居候詮もゟきゝあらそ少々安心仕候尤兩卿之御咄ニも中川家は武功之家筋山崎賤ケ嶽之戰功は世ゝ無比類事ニ而畢竟右様之家筋故ゝ可有之今度薩長ニ引つき多人數罷出居候段不淺事と御太祖様之御戰功ゟ被擧て御懇之御談被爲有誠ニ落涙仕候心中御察可被下候扨主人之存意ハ如何哉江戸ニ而其方共は亡命之屆出候由老中より所司代ニ申來候旨内々承居候いゟゝやとの御尋御座候故夫ハ一向是迄存不申私共罷出候はケ様々々の次第ニ而上方ニ罷出候たけれ暇申捨ニ而家老共と内談之上罷出居申候乍併主人も共義不埒と存亡命御屆差出候ニも可有御座万一は江戸御暇も出不申内故自然在所より上方へ罷出候ゟと申邊より御疑有之而ゟいけ不申と存無據右之通屆置候ニも可有之歟扨主人内慮關東之暴政ゟ宜と被存候事ハ決而無之様子迄は心得居申候へ共其より上之所は何分私より何とも御受は難申上と計申上置候」

昨晦日ゝは前文申上候御禮も有之上京致堀次郎も挨拶ニ參り面會之所同人咄ニ去廿五日於關東尾州一橋越前侯抔夫々御幽閉等之者悉御赦免本意ニ被爲復旨被仰出於京地も　青蓮院宮奉始御幽閉を被爲解公卿落飛之御方々も同斷其餘下々公家士等ニ至迄悉罪ゟ爲消寃ゟ雪候様今晦日夕より朔日朝迄ニ御發しニ相成候御都合之由先回天之手開有之不堪愉快申旨承り共ニ難有數盃ゟ傾け申候乍併此位之所ニ而聊も是ニ御腰ゟ不被爲懸彌以根强く御ゟりこみニ相成不申ては相濟不申其旨段々盡力之様子委細承申候於關東も前非ゟ悔て右之處置ニ出候ゝは無之勢不得已して此ニ出候事ニ而其心底ハ面白き事ゝは無之と次郎列も推量ニ御座候果して其通ゝ社と考られ候事ニ御座候乍併幽居之人々其罪を被解候は誠ニ難有事ニ御座候　宮奉始其人々之喜嘸社と被察申候扨長州若殿長門守様頃日御着京昨日御參　内之由ニ御座候是以和泉殿同様滯京之命御座候由ニ候何そ表ニ湧出候變ハ頃日廿三日一件計ニ而候處熊本京留守居より二條家へ追々相伺候譯有之是非共此勢薩長之間へわりこみ不申ては上は勤　王之業立不申下は薩へ隣交も立不申候ニ付急ニ人數繰出申様可致依之京留守居去廿一日より早追ニ而歸國之由今比ハ最早くり出方ニも可有之歟左候ハヽ御地へも知せ來候事ニ可有之歟猶矢張外ニ辭令ゟ設け差出や此段は分り不申候得共ともかくもやらて人數ハ出申方ニ可有之歟と考申候土佐も今十五日廿日之中ゝは大分出可申候先左右申來候此ゝては薩廣も諸藩ゟ結ひ候所存專有之様子ニ見受申候卽而は御上之處何程ニ可有之歟と内々堀より申聞尋有之候得共此儀計ハ何とも申方無之左之通申述置候關東暴政ゝはくみし申所存無之ハ追々申述置候通ニ御座候得共京地ニ踏留り勤　王之力ゟ盡し應援申上候と申所は供之人數も無之何程ニ可有之歟ともかくも歸國之手くゝりニ成居申候堀又申聞ニハ和泉より御相談御賴申候而御留りニも相成歟と被尋候故其所ハ何共御返詞出來不申とのミ答置申候ともかくも右之通ニ而近頃急變ハ無之形勢ニ押移候得共彌以尻强く張込申候所存段々承申候全く干戈ゟ不動して平穩ニ押移へきハ更ニ難期御座候委細之事ハ何分筆頭ニ難盡候兎角　君臣之名分を正し　皇國中ゝ　天子有之事ゟ知らしめ申迄之手段ハゟしかゝ被付候との和泉殿見込之様子ニ御座候中々不容易大動ニ御座候得ゝ穩ニ事行はれ可申ハ別而難計御座候併ゟらら只々長滯留ゝは大ゟまりニ御座候是は蟹之目の天罰に而可有之候半と あきらめ居申候御笑可被下候頓首　五月朔日朝認置

御同志諸君中様

別啓廿三日之夜ハ諸司代大狼狽ニ而二條之城ニ入奥候様ゝとて被拿候得共二條も受付不申夫より迷ひ子ニ而さまよひ被申候而不堪一笑候夜明ても諸司代屋敷は物具して東西する者もあり與力ゐどハ諸司代守護之者ニあらずと申ゑる者も有之山二條も驚き矢さまをつきあけ申やら何やら言語ニ難述さまにて何もノ〳〵よき氣味ニ御座候まかし若州ハいゝゝも高運之人ニ御座候御一笑可被下候已上」別啓先日申上候義士七人死候由之處一人聞落し候八人ニ而御座候西田直五郎と申者加ハり居申候其外山本四郎と申者ハ右義舉ニ加り死ニ後候ゑ憤り候故ゝや割腹いたし候由夫ニ道島五郎兵衛と大坂の永田佐一郎を加へて都合十一人之壯士死去也昨日有馬列之墓ニ謁し誠ゝ袖をぬらし申候扨小子事當春入薩の時とり引合候有馬田中又此地ニ而引合候橋口柴山右之通ニ相成候上は何ゐ不來ニ可有之ゐと御氣遣も可被爲成と遠察し候得共曾て左様之譯ニ無之追々小子より申述置候事情もよく通し居和泉殿手前も至極よろしく近日不快之由快氣次第面會被致との事小松帶刀大番頭側用人兼也ハ申迄も無之小納戸堀次郎大久保一藏目付海江田武次奈良原喜左衛門之列ニ引合此上薩に之取合何ゐ都合ハ至而宜敷御座候間此段ハ重々御安心可被下候已上箱列よみて奥ゝしるすうち日さす都ゑさま幾みつくきの圖人ゝとふ世ゝをあるゐゐ、こゝろゐきき人ハしらしゐミつくきの圖ゑしけミ幾分しつらさ幾

五月三日幕府松平容保をして幕政に參與せしむ

〔撥反雜記〕

一書曰　五月三日

以來重立候御用向可申談候間度々登城相談可致旨被仰出之

右於御白書院溜老中列坐和泉守申渡之

松平肥後守

御座之間

同　人

右御目見上意有之

右之通御座候大老職と不唱御大老ニ而可有之哉」

五月六日在府本藩老臣は我藩に對する幕府の所見を報じ且つ此際長州と同く公武合躰の周施をなさんよりは寧ろ人物登用の建白をなすの優れる所以を藩政府に通牒す

〔自筆御用狀扣〕文久二年、慶應元年迄

以別紙申達候京攝之間樣々之唱有之御府中在中ニ懸人氣動搖いたし候付而ゑ御評議之趣佐田新兵衛へ御申含被差立其後御覺悟之次第御直書之寫并御國議之書付被指越候通ニ候處右之御樣子一統奉伺御趣意伺出候向茂有之候間萬一京表及混雜御所茂無心元程ニ候ハヽ急速御窺之上御警衛之御人數可被差登と御内答其末渡邊一郎左衛門京大坂之樣子見聞言上仕候樣被仰付被差立候處ゐ何方茂先致安心候趣ニ相聞候由彼是嘸々御心配爲有之と存候此許ゑ何そ相替候儀茂無御座尤京攝表之評判ハ種々申唱此方樣之御事茂御一國起立候抔仰山ニ申唱候得共廟堂ゐゑ隱目何方に茂夥敷被指出置候哉ニ相聞別紙御留守居聞取之通御國よりハ何たる儀茂無之と組頭衆抔ゑ御聞込之由ニ而何事も相分居候樣ニ被考一度ハ喜一度ゑ患申候且又別紙和泉樣滯京之儀薩侯ゐ御屆茂無相違事ニ而浪士躰京攝之間ニ集居不穩樣子ニゑ候ハとも叡慮之趣も有之候上ハ鎭靜ニ至可申哉然シ不容易企を茂いたし候事ニ候ハヽ如何可有之哉此後之變化も難計乍併和泉樣ゐ御教示を茂不用候故同藩人を茂被討取候處より見亘候得ゑ漸く鎭り候方ニ可有之組頭衆之噂も尤ニ茂相聞申候委細ゑ別紙之通御座候偖東西に御建白之一條ゑ重疊被凝御評議候内長州樣ゐ御留守居迄御懸合之趣相達候付猶又御評議被爲在候上良之助殿に被仰付不遠御出府之御治定ニ而左候而楢岡愼之助儀京大坂へ被指越模樣ニ應於京ゑ所司代且御緣家之堂上方に茂御手を被爲付且吉弘加左衛門出府被仰付御役々樣方へ懸合或ハ列藩之事情等茂探索いたし何ゑ茂追而良之助殿御出府之上屹ト御都合ニ相成候樣重疊致心配候手續ニ而兩人共近々出立之旨太守樣に茂御着座ゐ不一方被遊御配慮加之不慮之御凶事乍恐御心中被奉察候旨尤長州ゐ御使被差越候而思召筋御懸合ニ茂相成候ハヽ、御同意可被爲

在様ニ御考有之候處斯迄御覺悟ニ決居候儀ハ大ニ御都合ニ相成候旨爲心得被仰越段夫々承知いたし候然處右之如何様之御趣意ニ可被爲在哉御評決之大意茂不被仰越候之御子細も有之候哉爲心得被仰越候ハ、此許丈之覺悟御都合を茂計申候様之爲ニ可有之候處良之助殿御出府之上御取扱之御運ヒ御趣意ヶ様ト相分不申候故打寄申談候而茂考察而已ニ而利害之見込茂付兼甚案勞いたし候依之御議定之末更哉角申達候ハ奉恐入候次第ニ御坐候へとも乍奉案勞其儘ト者難差置申談之趣不閑申達候

一此節之御趣意長州方御懸合前既ニ公武御行違ニ候ハ、御合躰之儀御取扱可被遊御決定ニ相成居候付内々御懸合之儀之被遊御承知候而茂御相談ニ不被拘御取扱ト申御帋表之趣ト相見申候然處此儀長州之昨年方之事起ニ而候を御同様之筋只今被仰立候而之御詮茂薄ク既右一件之長州様方公武之間御取扱ト申御打立ニ之無之御建白之末被任せ候事ニ候へハ唯今此方様方御手を被出候而之長州様御受茂何程可有之哉御外聞茂如何哉ト懸念いたし候且御同様程之御建白ニ候ハ、公邊ニ而茂御聞屆有之候迄ニ而矢張長州様御周旋ニ可相成候ハ、節角御建白之詮茂被爲在間敷哉ト乍恐相考申候且又御合躰之筋ト申候而も元來公武御行違風說等之有之候得共實事ハ分兼御不和之筋屹ト相分不申候ヿハ難相成夫故楯岡吉弘を茂被指立候御事トハ相考候得共今方右等之筋方御取懸ニ而之其内ニ之長州様方御取扱も相堅り御無益之事ニも至候而之愈御都合可悪ト話合申候殊ニ長州様ハ筋道を被爲蹈先公邊へ風說方と之御趣伺有之候末依御内命御取扱ニ至候儀ニ有之候處楯岡被指出所司代様へ直ニ伺等之些差付之事ニも可有之哉且唯今ハ長井も跡月廿一日江府へ歸浪士等不穩一件ヿ付下地之一條も先其儘ニ相成居候由ニ候へハ時分茂惡敷候處様子次第一條様久我様抔ニ手寄を以立寄候儀も若哉公邊之御疑共懸候而之不宜且御内分ヿ伺取候儀ハ公然ト被仰立茂成兼可申哉若右之御都合ニも候ハ、乍恐先御見合被遊候而之何程ニ可被爲在哉長州様御周旋被整候ハ、逸積之御事ニ而何之此方様之御榮辱ニ被爲係候譯も無之儀ト奉存候

一御合躰等之儀右之通候ハ、長州様之跡を被遊候譯ニ而左ニ而之無之此砌ニ付御人材之方々を御登用一橋様御後見或ハ春嶽様御政事ニ被爲預候様相成候ハ、兼而人望茂歸シ居申候御方々様ニ而此砌御一新之筋屹ト相立人心鎮定之基なとヽ申筋を以御建白ニも可被爲在哉然處右御方々様ハ先月廿五日御慎御宥許ニ相成御對顏茂可被爲在趣ニ候へハ御相談筋も可被爲在候間是又被仰立御無益ニ茂歸シ可申哉其上將軍様ニハ御若年ニ被爲在候得共御英明之御模様ニも奉伺候へハ左様之御建白ニ茂御座候ハ、御都合可惡哉又ハ外夷御處置筋等ニ付御改革之儀を茂可被仰立哉とも奉恐察候得共元來公武之御間御行違茂候ハ、御取扱ト申御儀ニ御座候ハ、此儀を被爲主候ニ而之有御座間敷且右兩條之儀之長州様方必被仰立之内ニ可有之長井雅樂抔追々久世様ニ出候由ニ付御參談有之たる事歟と被考申候得之是又御詮茂不被爲在様ニ茂被爲至候而者如何哉ト話合申候

一若之右等之儀茂萬般良之助殿へ被遊御任候様之御都合ニ而畢竟公武御一致ニ相成外夷御所置筋も時世相當之場合を以御處置御座候様との御主意ニ而東西之様子ニ被應御見切ニ御取扱ト申御儀ニ茂被爲在候哉是又詰り長州之跡を御蹈ニ成候ニも落大同小異之御筋ニも御座候ハ、無御詮次第ハ前條同様歟と相考申候定而右様外ニ御評決之次第可被爲在候得共得斗伺不申事故若前條之御都合ヿ茂御座候ハ、乍恐此節之儀ハ先暫御猶豫被爲在度御事ト話合申候共上京接之間不穩候付而ハ鳥津和泉様ニ浪士等取押之儀被爲命候上ハ無程鎭靜ニも至可申候得とも油斷難成折柄ニ而若之良之助殿御途中抔ニ而浪士等方不容易企筋を以建白仕奉迫候様之儀も有之候而之御煩敷次第ニ而既ニ去ル三日之朝表御門ニ張候書付別帋相添置候通ヿ浪士躰之者仕方ニも可有之哉此砌浪士類之別而不穩人氣ニも相成居候物歟と被考彼是御氣遣も申上候若又御國人氣治兼候處方被爲起候譯ニ而仮令長州様御同様之筋ニ出又ハ期後レニ被爲成候而茂　天朝公邊ニ之御忠節不被爲止處方被爲出候而長州ニ而御取扱無殘處候ハ、其分之事ト申御模様ニ茂候ハ、良之助殿御出府ニも不被爲及誰ソ御人選を以被仰付候而茂可被爲濟哉何様一日御評決被爲在候末ヶ様ニ申達候儀之奉恐入候得共前文之通其儘難押移此砌ニ付早打飛脚を以申達候條ヶ様ト之御趣意之次第委曲早々急便を以被仰越度存候猶此許事情等茂爲可申上幸鎌田左一郎交代ニ而罷下候を近々中之急ニ而差立候筈ニ御座候間同人よりも御聞取候様存候以上

五月六日

松野亘
小笠原備前

惣連名殿

尚々御留守居聞取書薩摩侯御屆寫御門張札此書付之取上候ニ不及品と相見候へとも本文ニも相認置御含之茂可相成と旁差進申候以上

付札
左一郎儀本文之通一旦申談候處此節委細御飛脚を以申達候上ハ外ニ是と申稜目も無之急被差下候ニ之及間敷と猶申談候間此段付札用置候事

（御留守聞取）

京都表物騒之風聞不穩候付昨朝早川庄次郎様ニ參上仕相伺候處風聞之稜々多分形者有之哉ニ御聞被成候との事ニ付鳥津和泉様御出京之處　天朝ゟ浪人共相集不穩聞へ茂有之候間致滞京取鎮候様議奏様を以御内々被仰出候段實事ニ而御座候哉と相伺候處全ク其通ニ而薩州ゟ既ニ御屆ニ茂相成候との御返答ニ付右和泉様之意中二タ通ニ唱候處實々取鎮之付札
和泉様同勢七八百と承り候段申上候處極々少人數僅貳百人餘と被成御聞候段御咄ニ相成申候相考候處京攝伏見ニも町奉行茂有之與力同心茂大勢可有之共上此節柄ニ而隱目等茂出居可申旁實事ニ可有之哉共奉存候七八百ニテモ此方様御上下之御同勢ニ比較仕候得之致警愕候程之人數共相見不申候事

方相違無之相聞候哉と伺候處相違無之由今度於旅中浪人共追々仕懸共内ニ之不容易事件申出候儀茂爲有之歟之處兎哉角しと大坂迄被參於同所三拾人餘薩邸ニ引入ニ相成伏見之様被參候跡ニ而殘置ニ相成候浪人共邸中忍出致上伏候處於伏見段々設得ニ相成候得共更ニ承伏不致右浪人之内ニ之薩州人茂數人有之此者共別而申募候間八人歟打捨ニ相成候間浪人共大分弱り候由右之通薩州人を一番ニ打捨ニ相成候程之儀ニ付眞實取鎮之意中ニ可有之との事ニ御座候右打果之節之和泉様同勢も相手ニ相成候内ニ之段々手負茂爲有之哉ニ承候との咄御坐候左候而去年來西國筋々之何方ゟ歟騒動致せ候者參居候ものと相聞へ筑州久留米岡抔茂騒立長州茂一旦之餘程色麼き候得共漸取鎮ニ相成候由御國許之何タル付札
筑前様大藏谷ゟ御引返し之事も相伺候處彼邊ニ而之薩人之打果抔仰山ニ唱候ものと相見夫ゟして引返ニ相成候哉と

御咄ニ相成申候事

儀茂無之段屹と聞通候との御咄ニ付何事も無之様ニ申置候而茂後道如何と心付候間且以左様ニ無之右和泉様領内通行之砌ゟ大ニ人氣ニ障り重役共殊之外致心配居候内越中守被致歸國候間少々之靜り候哉ニ申參候段御内話仕先書ニ茂認置候松田重助事共御咄仕是等加り居可申哉唯今被仰聞候通去年比之國中ニ茂奥州浪人と歟申日向之様ニ通り候哉ニ而所々立寄候哉ニも承居候段申上候處何様そゝのゟし候者有之ニ相違無之との御咄ニ而筑前久留米岡抔亡命人之事茂委細御承知ニ相成居申候

（中略但四月十五日の條に出つ）

右之外段々相伺度儀茂御坐候得共御登城前私迄ニ六七人致參上居何分色々之儀迄伺參而被仰付候和泉様滞京并浪人共事之一ト通相分候間引取申候此段不關御内意申上候事

五月四日

清田新兵衛

五月六日在府本藩老臣は長岡護美の出府若し公武合躰周旋の爲めならんには暫く其期を延はされんことを藩政府に通牒す

（文久二年尊攘錄自筆狀）

五月六日江戸立早打飛脚同廿一日着

以別紙申達候良之助殿御出府之儀ニ付而之此許之事情見込之趣共別帋御用狀之通ニ御座候處島津和泉様於京都被申立之趣等別帋聞取書一通昨日着之御目附付御横目ゟ相達候由ニて佐野亥一郎ゟ差出申候右之御許ニも青地源右衛門被下

候由ニ付御承知之儀ゝ存候右ニ付猶咄合候處薩州之深意ハ分り兼候へ共何樣不容易存念之筋有之浪士鎭靜を名として長く滯京之積乎も難計御座候且又去酉年永井雅樂ゟ前以京師ニ差上候書付寫一冊井口呈助ゟ御奉行迄相達候付則差進入御披見申候右之秘密之由ニ而手塚律藏ゟ借受候由同人儀ゝ雅樂相談相手ニ而右書付致所持居候由ニ御座候當時之形勢を以考合候へハ右建議之趣至極條理を得候樣ニ被考申候處於長州ハ既ニ東西ニ御手を被付候末此方樣ニ御懸合之趣有之候付而ゝ右御打立之御趣意ゝ兼而御同樣思召之旨も被爲在至極御同意被遊候得共御內輪之情實等委く不被遊御承知候而ゝ御力を被添候儀も難相成初發より之御運ひ當時之成行等無殘所被遊御熟知度旨被仰付越候との趣を以精々御留守居ゟ及示談右付而御心付之儀ゝ無御腹臟被仰談御成功ニ至候樣乍蔭御周旋被爲在候ハヽ長州と被仰合自ら御國議相立候道理ニ而至當之御處置ニゝ有之間敷哉然ニ只今ニ至從此方樣强而御手を被出候而ゝ他之功を被成御奪候形ニ相成時論且猶條理も何程ニ可有之哉土豪之御趣意得斗不奉伺兎角申上候儀ゝ重疊恐多奉存候へ共前文段々之通ニ而自然御建白等之譯を以良之助殿俄ニ御出府ゝ申御儀ニ御座候ハヽ今暫被成御見合御國內之人心をして一定せしゑ天下之形勢を被遊御覽候儀方今之御良策歟と奉存候今度猶御國種々建白之族ハ全く薩人等ゟ誑惑さゑ專ら勤王之說を主張ゝたし御國中之人氣を致動搖候儀ゝ被考申候右等之響より終ニ良之助殿御出府ゝ申埒ニも至申候哉猶此許勘考仕候趣ゝ願曰深遠之御國策被爲在御動靜不被窮測樣之御處置御肝要之儀歟と奉存候尤右御出府之一件ハ深キ思召之旨被爲在候而之御議ニも可有之處御趣意一向ニ伺得不申當時之形勢ニ因り專ら考察を以種々得御意候儀甚以奉恐入候得共不容易御時節心付候儀其儘默止罷在候も何分難安不得止打重テ前文之次第ニ御座候間御汲取可然樣御執成可被下候以上

五月六日

松野亘

小笠原備前

御家老

御中老

宛殿

（尙々書略之但四月十五日の條に出つ）

五月六日本藩小佐井才八小笠原島視察の狀況を知人に報す

〔裳田文書〕

雇被差立候由ニ付拜啓仕候愈增海陸無御滯御機嫌能可被遊御着奉恐悅候然ゝ私儀去ル廿九日歸帆仕白金御屋敷ニ着仕申候先以出立之砌ハ萬緒不一方御配慮被成下忝々奉存候正月三日品川沖出帆浦賀入航之處夕方ゟ逆風ニ而入港不能金奈川沖ニ碇泊四日晝四ツ半着浦賀港ニ碇泊正月十九日まゝ同港滯港同日夕七ツ半過ゟ出帆廿日朝豆州井田子へ入港同所へ三月八日迄碇泊三月九日朝六半過出帆十日朝四過同州妻良港ニ入港十三日迄滯港十四日朝飯後同港出帆十七日朝六過紀州大島へ入港いたし十九日まて碇泊廿日朝早天同港出帆四月二日大島港出帆後十三日振ニ小笠原島港內ニ投錨四月廿日迄碇泊廿一日朝五ツ過出帆去ル廿七日晝八比浦賀港口へ碇泊廿八日晝前出帆廿八日暮比ニ品川沖ニ碇泊廿九日書過ニ白金御屋敷ニ着仕申候航海中之模樣委細之儀ハ御飛脚便ゟ可申上と略仕申候小笠原島之樣子いまた不怪不開之島ゝて當時異人墨利加人英人蘭人イスパニヤ人住居いたし男女子供迄ニ三十四人歟居申候由尤一所ニハ居不申三ケ所ニ分レ居申候至テ下賤ゝものと見受申候惣躰岩石ニ而平坦之地なく尤異人居住之近邊ハ開拓して野菜物拵作さゑり水脉乏尤谷間々々ニハ出水御座候へとも纔成事ニ而漸飲水位之事御座候水利を附田作等出來候見込無之且岩石之山々ニ付水利茂無之迚も田作ハ出來兼可申當時異人野菜を植居候ハ重モニ御國之からいも、ねき、きうり、ぼうぶら、とうきび樣のものニ御座候尤過半ハからいも、ねきニ御座候からいもハ年中絕へ不申由日々之食物セウガクボウと唱へ海亀之大キなる港海ニ茂澤山居申候其肉ニ右之ねきの根からいも又芋を切交セ煮て鹽少々加へ食物ニいたし居申候畑ニも五穀類一切見受不申尤豆ハ何豆歟少々植付たるを見受申候中々日本人居住抔當時之所ゝてハ永住出來申間敷相考へ申候草木日本ニ見受申候物頓斗無之一躰山ゝ木類山ゝ六七分ハ株稻ゝ木ニ御座候シュロも日本之ものとハ格別いたし申候大キなる物ハ廻り四五尺長さ二十間餘之もの御座候山奥ニ入候ハヽ又長大之物可有之相考申候シュロに類し申候

而野芭蕉と唱へ申候もの御座候木の肌ハシュロニ類して眞直ニ延生高キハ二十五間餘ニ茂及ひ常ニ芭蕉の樣成葉上ニ附キ奇麗之木ニ而御座候又一種天笠邊ニ多ク御座候由ニ而アンペラと歟申類との事ニ而葉ハビロウの樣ニして根地上ゟ太キ木ハ四尺五尺上ゟ數株ニ分レ珍敷形の木御座候此三種澤山ニ繁茂いたし其内株椙尤多ク御座候其餘之木堅木も多ク御國の獨樂子樣ニ作り候さるすべりと申樣成木數種御座候日本ニ杉松檜抔の家材ニ用候木一切無之依テ家作之材木乏敷容易ニ家建立等出來申間敷又屋根を葺候もの萱わら麥から抔之もの無之異人ニ家之株椙ニ葉ニ而ゟき四方ニ壁代りニも株椙之葉にて防き居申候異人家ハ都合二十五六軒茂可有之一軒と申候而も廣き家疊之十枚茂敷可申哉六七枚四五枚敷之もの多ク御座候測合暑ク四月上旬寒暖計八十度餘我國の六月初旬比磯邊抔書内通行すゑハ六月暑中ニことし又鳥獸少ク鳥ハ鶯多ク鶏茂山ニ居申候雀烏鳶居り不申尤烏ハ無人島中ニ四疋ハ居申候由碇泊中ニ一度聲を聞申候獸ハ野牛居申候外ノ物居不申虫も少ク蚯蚓ハ見及申候蛇類一切居不申一躰日本之模樣とハ替り居申候懸望之土地ニ無之と相考申候烏茂周圍十五里と申事ニ候へハ至而小島ニ而御座候公義衆ゟ外國方七八人ニ水主四五人十人餘ハ殘りニ相成居申候猶又當月中旬比蒸氣船一艘小笠原へ御出帆ニ相成申候由小笠原島ニ於而水野筑後守樣當港滯在の異人ニ御談合之趣ハ是ゟ日本所領ニいたし候間諸事差圖を受候樣申聞ニ相成候處自分共開拓いたし候作地等ハ共ものゝ持地ニいたし一躰之差圖ハ日本人より受候樣との事ニ談合相決申候又江戸ニ而久世大和守樣英人と小笠原島之事ニ付御對談之趣ハ合衆國之振合ニ相決申候對州之議とハ同樣之譯ニ無之如何相決可申哉と奉存候先ハ何茂委細之儀屆便ニ付略仕無異歸帆之段爲可奉得尊慮如是御座候御序ニ宿本嘉右衛門へ茂別紙屆兼候間宜敷被仰聞被下候樣奉願上候尚奉期後音之時候以上

五月六日

伊右衛門樣

才八

尙々古小路樣藤本樣へ茂出帆之節ハ不怪御厚配ニ相成申候間宜敷奉願候實經驗航海測量之儀存之外之處ゝ經驗之功を得申候處有之遠キガ近キ航海之術業ハ同樣の事ニ而航海測量業之處ハ一通相分申候樣ニ御座候へとも此上理合之處稽古仕度可然先生を賴修行仕候筈ニ御座候御小や茂近日ゟ濱町へ拜借奉願置申候仍而未た歸鄉之程茂相分不申宿本へ茂程能御申聞被下候樣奉願入候以上

五月七日尾張慶勝一橋慶喜松平春嶽登營して將軍に謁す是日春嶽政務參與の命を拜す

〔小笠原備前昇平日錄〕

五月七日

登急使、以良公之有東行之備、欲拒之也、蓋粗察不利其事也、今日、將軍見尾老侯一橋公越前老侯、而後久世閣老與三侯談、久世侯有至京師之命、

〔撥反雜記〕

五月七日

御坐之間　尾張前中納言殿

御坐之間　徳川刑部卿殿

右御登城御對顏畢而於竹之間御吸物御酒御菓子御茶出之

右御登城御目見」

〔仝書〕

一書日遠山三右衛門江戸來書五月十日發六月十三日達

文久二年

去る廿五日一橋様尾張越前御隠居様御慎御免當月七日越隠春嶽様依召御登城御座之間ニ被召出御政事向萬端御相談御
頼被成旨御直ニ被仰渡猶又久世大和守殿以國家之御爲隨而被仰付旨ニ而御断等被仰上儀不相成旨被仰聞御請相濟其後
今日迄日々御登城一昨日は夜ニ入御退出御前御人拂ニ而追々御相談被爲有候由全諸御用御聞込御大老之譯と相見申候

〔嘉永七年風説帳〕

五月七日

越前守養父隠居
松平春嶽

以來御用向可申談候間折々登城相談可致旨被仰出之
右於白書院黒鷲之御杉戸際溜老中列坐和泉守申渡之

五月七日閣老久世廣周出京を命せらる

〔都築四郎記録〕

五月七日久世大和守出京を命せらる
五月廿六日久世大和守今日出京御勝手方外國懸免せらる

五月八日朝廷島津久光に命し勅使に一橋東に下り毛利慶親と議して公武の間に周旋せしめらる

〔尊攘録自筆狀〕（文久二年五月十七日附櫻田豐助聞取書の一節）

一島津に此間被下候書付於關東太膳太夫申談諸事取計候樣との趣ニ御座候處和泉殿ニ之被致承知候へ共下方之受惡敷此
方ハ長州方先ニ鎮撫方被仰付候付此方より掛合候譯無之抔と申候而決而御請不申上候由依之和泉殿下役之面々四五人
一議奏衆被召呼泉州ハ家老職大膳太夫ハ諸侯ニ候へ之倍臣之者に被致相談儀之筋違ニ可有之ふとゝ色々理解有之候處其
坐ニ參候面々之道理ニ服シ候由然處矢張下方不致心服と申候長州之仕方薩州ニ對して是迄不宜候付悞を生シ居候付泉
州も以而ゟまし御書付引替を願出らゑ候へ共一端被下候書付引替なとゝ申儀不相成由左候へ之御返納可仕と被申候得
共是又御返納抔と申儀猶更六ケ敷由夫より段々熟談ニ相成猶長州懸合之文字を除候御書付被渡下候趣ニ御内諚ニ相成
居候間今日抔ハ受取可申哉と存候由被仰聞候
一此節大原卿勅使被相勤候三ケ條被仰向之内島津より申上候と將軍家御上洛之儀情勘考仕候ニ去秋和宮樣御下向一件御
途中失費且諸國之痛不少將軍家御上洛と申ニ至候而之上下之困窮如何計大事ニ相成可申哉且又御上洛ニ相成候共未タ
御若年ニ被爲在候得之兎而も御直答之被爲成間敷哉と奉存候

五月八日幕府は松平春嶽に登營心得書を達す

〔尊攘録諸家建白並御屆書等〕

五月八日
和泉守殿御渡
松平春嶽

以來折々登城之節各御用談且御用筋之書類等披見被致候間者西湖間ニ可被罷在候尤右廊下下之休息所ニ相越休息被致
候儀は勝手次第可被致候就而之外ニ出座之者無之節之譯を以是迄之振合ニ不拘部屋同樣休息致候積可被心得候
事
右之通相達候間可被得其意候事

五月八日我藩青木彦兵衛は薩藩松方三之允の熊本を通過するに當り之と驛亭に會して京攝の事情を聞く

〔採種錄〕

一薩州早打飛脚松方三之允より青木彦兵衛聞取書

但松方身分之御使番と被見受候飛脚番之者兩人附添居候

右松方ハ四月廿九日京都出立ニ而船中風惡く當月三日備前牟より上陸いたし昨七日小倉着未之上刻打立今八日晩時分熊本通行仕候付彦兵衛先人馬所に驅付役人に申含置相待受直ニ座敷に上ケ此節罷下り候御用筋相尋候處此儀ハ何分ニも難申聞候段斷申候

田中謙助有馬新七列打果之次第尋申候處此八人之者打取之儀は列國ニ對し愧敷事ニ者有之候へとも無餘儀事實ニ面目無之とて落涙咄申候根元大阪着後多人數九條樣酒井樣是非討取可申との議論を發候間九條樣酒井樣打取之事はいと易有之是ハ枝葉之事ニ而夷狄を拂之策此節之急務ニ而此節押立左候へは餘者自ら全功相行れ可申且此節は京都之御威光計相望候譯ニも無之列藩何方も以後御威光相立候樣有之度此地ニ到着仕見候へは以前御國許ニ而之見込よりは幕府弱之模樣付而は手段も相變不申候而は難相成棄小執大之意味申論しニ相成候間餘は皆納得仕候得共同勢三十何人は是非々々至急に討取不申候而は相成かたき趣申募議論押張候ニ付和泉樣ニは深遠之謀慮有之機を以度々御論し有之候へとも一向に聞入不申甚敷ニ至り候而大阪屋敷より伏見屋敷へ參り候途中より亡命におよび候間其節も懇命有之愈以論ニ相成候へとも八人之者は決而聞入不申八人迄ニ而も是非討取可申段言張一圓承知致し不申候中九條樣酒井樣に此事露顯ニ及ひ既ニ混亂ニも至り可申勢ニ相成候ニ付乍涙無致方切腹被申付候處夫も聞入不申候間不得止直ニ打果申候由尤右討手之方ハ朋友之者之由此節論を受候人の中も有之いつれも涙を流し袖を濡申との咄仕候

一長州侯世子江戸より下り懸四月廿八日京御着其儘滯ニ相成候由毎之供廻よりも大分之人數ニ相見候由

一久世樣上京ハ病氣ニ而御斷有之板倉周防守樣出京之筈ニ候由

一岡藩小河列其餘諸浪人何れも和泉樣御所置ニ隨ひ其期相待居申候由彼地發足後は少々之事差起り候も雖計萠見込之筋も有之由噂仕候也

五月八日夜

五月九日毛利慶親閣老久世廣周と公武關係の事につき對論す

〔尊攘錄自筆狀〕（文久二年）

寫　櫻田覺助參達

去ル九日大膳太夫殿と久世殿と對論手强利害久世殿忙然として無答然上之老中列座ニ而可承と再談數刻其上永井雅樂上京之上　御所之思召を窺歸り居候間猶永井御召出手强キ　叡慮之趣久世殿初而驚仍而永井雅樂十二日江戸表發足之旨承り御用之儀之未タ相分　五月十八日

五月九日英國は我開港開市の五ケ年延期を承諾する報酬として我は英國產の織物等に對し其輸入稅を輕減すとの覺書を交換す

〔懷往事談〕（福地源一郎著）

却設く幕府は三使を派出したる後に於て英國公使オールコックに談判したれども兩都兩港の延期は英國政府に於て必らす聽入べしとは思はれ難しとの事ふりければ安藤閣老は大に心を痛ましめて切に事情を述べ其盡力を望まれたる折から安藤閣老は其正月坂下に於て兇徒の爲に襲はれて負傷したり然れども療治の病床に臥しふがら此事を忘るゝの暇なく森山多吉郎（通詞御用頭取）を枕邊に招き口上を申述べ屢オールコック公使の許に申入れたりければオールコックも其志の國事に存じて撓まざるを感じ然らば余も一層盡力いたさんが其報酬には何々の個條を承諾あるやと其談判に渉り云々の件々は報酬に與へらるべし然る上は公使は歸國して直に英國外務大臣に事情を陳述して延期の取計に及ふ

へき間森山も同伴せしめらるべしと議定まりければ安藤閣老は三使への調令を森山に渡し森山をして調役淵邊德藏と（今は遊萍）と共にオーコックに同道せしめたり去程に公使オールコックは森山淵邊と共に五月を以て倫敦に來りければ森山は其訓令を三使に渡し夫より外務大臣ルッセル卿と談判に渉り其結果は英國に於て江戸大坂の兩都兵庫新潟の兩港の開市を五ヶ年延期すべし其報酬として日本は英國物産の織物等に對しては其輸入税を五分に減すべしと云ふ事にて談判は詰りて倫敦覺書を取換す事に及びたり尤も輸入税の減少は此の覺書に初まりて永く今日に至るまで其禍を遺したれども開市を延期して外交上葛藤を豫防したるの功は實に安藤閣老と森山氏の力ふりと云はさる可からさるふり（森山氏が外國交際の事に關して大功ありし事は何日詳說すべし）而して幕府をして此延期を乞はしむる迄の地位に外交の事情を陷れたる者は誰ぞや是は余に問ふ迄も無く今日維新の元勳たちに質さば分明たるべきふり（本文の孤括は原書の儘也）

〔慶應二年風聞書〕

正月

先年日本使節外國ニおゐて條約を結ひたる書面

覺

日本ニおゐて外國を厭ふ鎖國家と申もの故障をるゝ由り　大君其執政ゝ於て通信各國ゝ約せし廉々を十分ゝ難遂旨日本在留英國皇帝の公使へ　大君執政より申述たり猶又英國皇帝の執政へ大君より差越たる使節よりも同情ニ申立たり就て英國政府ゝ右申立之趣を勘辨ゐて降誕千八百五十八年八月廿六日大貌利太泥亞並日本と取結ひし條約第三條之内千八百六十年一月一日貌利太泥亞臣民の爲ゝ新潟若不都合成ハ其代りゝ日本西海岸おゐて外都合宜港開へき事並千八百六十三年一月一日兵庫港開へき事及千八百六十二年一月二日より貌利太泥亞臣民江戸府逗留致へき事書載セたる廉々取行ひ方ニ千八百六十三年一月一日より五ヶ年間猶豫之儀承知致もへきにより取極置ヶ條左の如し是則英國政府前文故障之企を日本執政おゐて十分ゝ取潰させんが爲ゝ右の如く條約數條を交換致し候間其　大君並其執政急度其外廉々不殘長崎箱館横濱三港おゐて爲取行攘夷の舊法表向ゝ廢し其外左ゝ述る數十條の故障を止る事を望む

一千八百五十八年八月廿六日の條約第十四ヶ條差障り日本人より外國人に品物を賣拂ふ時直段又ゝ程々限りを附る事

一總て人夫を雇就中大工水夫小船人足師匠並諸類の僕を抱る事差支る事

一諸侯私領の產物を互市に遣し自己の支配人を以て賣拂ひ差支る事

一運上所官吏其外役々之者とも禮銀を貪らんとして差支る事

一長崎箱館神奈川三港おゐて人物之品等ゝ限りを付るを差支る事

一外國人日本人と自由ニ懇切の交際を差支る事

右ヶ條は元來之條約面ニ由て可遂ふり然しふらら大君並其執政此ヶ條を無相違不遂ハ前文千八百六十年一月一日より五年の内何時ゝても英國政府此本書港津都會ニ付書載る所の交換せし廉々を廢し千八百五十八年八月廿六日の條約諸廉早速取行ひ前文皇帝陛下に被差越たる使節歸國の上日本繁昌ふる一端の趣を以其屬島對島の港外國交易の爲めに開くへき旨　大君其執政へ建白可致事を約も且又　大君其執政歐羅巴諸州を懇愛し兩國の交易繁昌致度旨を示も爲メ輸入酒類の税を減し玻璃器を五分税の内揚ケて以て最初條約取交之節の脫漏を補ふゐき事

大君其執政に建白致すへき事を約も猶又横濱ニおゐて海外より渡來の品物を輸入日本役人に預置荷主賣拂ひ引取り輸入税を納る迄無税ニ入置へき納屋を建る事取引候樣大君其執政に建白致もへき事を約す

當千八百六十二年六月六日に取極メたる事件の證據として貌利太泥亞皇帝の外國事務大臣並　大君より被差越たる使節夫々名を記し貌利太泥亞皇帝欽差へ送り申ゐし

ロセル

日本使節三人の名前

五月十日大納言中山忠能長藩老臣浦靱負を召して公武合躰の周旋浪士鎭撫に關する叡旨を傳達す

〔撥反雜記〕

一書曰五月十日中山大納言殿より長州家老浦靱負被爲召御渡ニ相成候御書取

一國忠之段御滿悅之事　一父朝臣深意ニ隨ふ事

右は永井雅樂爲以言上大膳大夫我爽跋扈　御國威逡巡候爲被爲歎候ハ外濠幕府之政事不携制禁も有之候處其儀ニ不拘諸有司ニ說得之上然は　公武之御間可周旋候事君臣之名分を正し先年來違　勅之廉田安大納言上京御斷可申上候樣周旋可致之事年來御國政向關東ニ御委任ニ被爲泥幕府有司之存意を御酌酌被爲有折角之思召爲も婉曲不被仰出候故　叡慮之御旨徹底不致而已ならす却而　公武之御間柄如何之儀も出來致候故此後ハ何事も斷然と被　仰出候左候ハヽ諸有司も恐入拜伏可致何事も斷然と被　仰出候ハヽ主人ハ素より雅樂も　叡慮之被爲向候處ニ隨ひ幾重ゝも周旋可致との事一建白之旨趣未徹底　御殘念ニ被　思召候事右永井雅樂半途ニ而引還ニ相成候ハ全く於關東安藤對馬守再出以下事々幕政不正ニ付而は大膳太夫周旋之道も相塞り候ニ付而は右周旋も辭退之由就而ハ關東ニ建白之趣意不致徹底候而忠誠も空敷相成　御國威も難相立候哉　御殘念ニ被　思召事　但永井雅樂差出候建白之儀ハ　御國威相立候御事ニ而可有之哉試ニ書取被差出候儀ニ而　勅諚ハ勿論上は列藩より下廻邊ニ至まて高尊之說有之候ハヽ其說ニ隨ひ違儀無之候旨言上仕但し建白之中　朝廷御處置聊誘詞ニ似寄候儀も有之　御殘念ニも被爲在候得ゝも是等は主人上京之上委細御辯解被爲有候併航海之儀は第一御國中變動不容易儀ニ而輕易ニ難被遊　叡慮天下之衆議被　聞召候御事ニ可有之御沙汰被爲在候事

一浪士鎭靜之事

右浪士勤　王之志爲以蜂起候而被惱　叡慮候ゝてハ無之儀は申迄も無之候得共　叡慮ニ被爲在關東ニ被仰下候儀有之自然暴發等有之候而は　叡慮之處も齟齬候ニ付只今之御處分爲鎭靜相待候樣ゝの事

五月十一日久我建通我藩櫻田覺助を招き彥根遷都の風聞あるを以て探索を遂くべきを勸告す尋て覺助六條有義に謁して之を質す有義遷都の說信憑すべく薩長の軋轢寒心すべきものあるを以て事に託して藩兵を上坂せしめんことを慫慂す

〔文久二年尊攘錄自筆狀〕

聞取書

五月十一日久我樣御呼出ニ付參殿仕候處閣老久世大和守多人數引率上京左候而　御所を彥根ニ可奉移內存之由內通有之たる趣右之屹ト突留たる事ニてハ無之唯風聞を聞取候付其方よりも探索可致との御事也

但此內通ゝ江戶長州ゟ申來候趣之由

一美濃大垣より正親町三條家へ內通ゝ老中上京ニ付人數差出候樣申來候間差出可申旨屆有之候由

一右之話之末御用人山田仙太ゟ御國之御模樣何程ニ御座候哉かゝる御時節ニゝ御人數ニても被指登候御模樣ニ御坐候哉如何との噂ニ付何程ニ可有御座哉右等之趣國許ニ申遣候ハヽ其上ニ而如何樣とも了簡付可申私儀ゝ國許之樣子少も存不申是迄國許よりゝ何とも不申越と返答仕候

一右探索ニたし候樣との御事ニ付久世三位樣ニ參相伺候處此御方少も御存無之趣ニ御座候夫ゟ六條太夫樣ニ參上相伺候處御同樣御聞込無之候間御探索被成下候樣御願申上置候間十三日夕只今罷出候樣被仰付候付直樣參殿仕候處彥根ニ可奉移との一件相違無之由然共今一應尋見可申ゝ所有之候間否ゝ明日申遣との御事ニ而十四日相違無之旨御書付參ル左候而明早朝致參殿候樣との御事ニ付十五日參上仕候處當時形勢甚以御心細被思召一昨夜聞も爲有之哉薩州ゟ長州を夜討之手段有之候を泉州聞付漸取押候由其上彥根之說有之誠御心細之折柄ニ付御國より御家老之內一頭被指登御人數ゝ

大坂邊ニ被指置候樣之儀ヶ出來仕間敷哉是ヶ此方より申ニてハ無之議奏衆より噂有之候而ヶ角立申候間此方より內々
聞合申處也何そ此方ゟ誘賴越候樣之聞取ニてハ大ニ事間違申候間左樣ニてハ無之相州詰交り之樣ニ而致出京左候ヘハ
此元より御留ニ相成樣ニ取計可申との御噂ニ御座候
答云私ヶ何共御受難申上近々留守居も上京可仕且又重役之者近日此元ニ立寄可申趣ニ付得斗咽合可申ヶ御受仕置候
事
一薩州長州行違之儀ヶ永井雅樂奸佞之者ニ而長州ヶ先ニ建白致置候處一端ヶ御取用ニ相成候樣之趣ニ有之候得共於江戸
安藤樣久世樣ヶ申談候末之儀ニ付少御疑惑差起薩州之建白御取上ニ相成浪人鎭撫方薩州ニ御內　諚被仰付候を妬浪人
蜂起を計泉州ニ迷惑を掛度との奸計ゟ終ニ伏見之變も生シ候由然を近日薩州之方ヘ共事を聞出下方不致承知是非敵打
抔と相企候由
一閣老上京被差留　勅使御下向之趣關東表ヶ申遣候樣御所司代ヶ御達有之候處御所司代よりヶ閣老上京之儀ヶ御構不被
成其儘ニ被閣可然との趣之由ニ御座候
以上
五月

櫻田覺助

五月十二日幕府田安慶賴の將軍後見職を免す

〔文久二年御同席觸寫並大目付樣御廻狀寫〕

（水野和泉守殿御渡候御書付寫　五月十二日）

大目付ヶ

田安大納言殿

公方樣御年頃ニ茂被爲成候付御願之通御後見御免被遊候以後御政事向御相談茂可被遊候間折々御登城可被成候先年以
來日々登城被致格別御精勤御滿足被思召候付別段之譯を以被叙正二位候
右之通被仰出候間向々ヶ可被達候
五月

五月十四日在府本藩老臣書を藩政府に贈りて蒸氣船購入の必要を說き且つ井口星助池部啓太等の高島喜平山田純一郎へ入門及び海軍所入學等のことを報ず

〔文久二年尊攘錄自筆狀〕

以別紙申達候蒸氣船御買入等之儀付而ハ御國ニ於も追々御評議ニ相成居候由ニ候處今度薩州より御買上ニ相成筈之蒸
氣船一艘薩藩之方當時段々混雜之事件も有之右御買上ハ先御見合ニ相成候由ニ付此方樣ヶ御買上ニ相成度段長谷川仁
右衛門より相達申候右船製造より二年ニ相成長サ三拾九間半蒸氣ハ底仕懸ニ而價四万五千兩之由ニ御座候此砌御出方
筋之儀ヶ重疊奉恐入候得共方今之形勢ニてハ必要之品ニ付可相成御參談ニ候ハヽ此節幸ヒ之事ニ付何卒御英斷を以速
ニ御買上ニ相成乘組之御役々等も至急に御參談を被遂度存候既ニ於此許も航海術修行之儀付而池部啓太より書達之趣
有之種々之科目有之內差寄運用測量蒸氣學被仰付由ニ付右三科稽古として海軍所ヶ出方被仰付候而々別紙之通ニ御座
候然處近年非常之御物入打湊候末右樣之大議を被起候儀ハ不容易事ニ御座候得ヶ最早諸藩ニも段々御先蹤有之事ニ付
一時之御出方筋ヶ兎角を難申候へ共後年ニ懸遙稜之御國益ニ相成候儀ハ必定ニ而ケ樣之節御英斷ニ相成不申候ハヽ何
年を經候とも御買上之御餘分迎ハ容易ニ被爲出來間敷其上航海術開ケ不申候而ハ萬一之節諸藩ニ後ゟを受候樣之儀も
可有之哉ニ付御軍用之爲被貯置候品物成方御銀等之內ゟ出金被仰付候而も可然機會歟と相考申候出金之儀ヶ猶如何樣
卒御參談ニ相成度存候尤四萬五千兩之內半金ヶ御國產之大豆茶類或ハ銅等長崎ヘ御積廻ニ相成於同所御引渡ヶ乎又ハ
五年賦御拂入ヶ乎相談も出來可申哉之趣ニ御座候右ヶ餘計之御出方筋ニも係候儀ニ付御國ニ可及通議旨申聞置候因而

五十日程他に賣拂之見合呉候樣相談いたし置候筈ニ付願曰急便を以御買上有無之儀被仰越候樣存候尤右船を從是ンホコンに渡海いたし猶又横濱に可參由ニ御座候以上

五月十四日
（本朱書）六月十三日着

松野亘
小笠原備前

御家老
御中老　井口呈助

右者高島喜平殿に炮術入門被仰付且運用學稽古として海軍所にも出方被仰付旨

四郎名跡相續之二男
都築輔佐彦

右之松平與十郎樣御家來山田純一郎に騎馬隊調練入門被仰付且蒸氣學稽古として海軍所へも出方被仰付旨

七太郎嫡子
關八郎助

右者高島喜平殿に炮術入門並松平與十郎樣御家來山田純一郎に騎馬隊調練をも入門被仰付且蒸氣學稽古として海軍所にも出方被仰付旨

一平嫡孫
池永喜太郎

右者松平與十郎樣御家來山田純一郎に騎馬隊調練入門被仰付且運用學稽古として海軍所にも出方被仰付旨

一平二孫
池永辰次郎

右者高島喜平殿に炮術入門被仰付旨

三右衛門嫡子
遠山謙藏

右者松平與十郎樣御家來山田純一郎に騎馬隊調練入門被仰付旨

池部啓太

右者測量學稽古として海軍所に出方被仰付旨

廉三郎二男
森尾龍彦

右者高島喜平殿に炮術入門被仰付且測量學爲稽古海軍所に茂出方被仰付旨

奥山靜三

右者高島喜平殿に炮術入門被仰付且蒸氣學爲稽古海軍所にも出方被仰付旨

外樣足輕
尾崎又八

右者測量學稽古として海軍所に出方被仰付旨

刑部殿家來
久留玄靜

右者蒸氣學爲稽古海軍所に出方被仰付旨

右之通五月七日達有之候事

文久二年

五月十四日本藩池部彌一郎森尾龍彦關八郎助幕府下曾根甲斐守砲術稽古の世話係を命せらる

〔文久二年壬戌中繼〕

五月十四日　晴

一講武所御奉所大關肥後守様ゟ今日御呼出ニ付吉田平之助參上之處左之書付御用人を以被成御渡候

細川越中守殿家來
池部彌一郎
森尾龍彦
關八郎助

右下曾根甲斐守炮術稽古之儀致世話候様久世大和守殿無急度被仰聞候事

彌一郎列ニ御達之儀者
御奉行ニ相達置候由

五月十五日長谷信篤岩倉具視等勅使東下に關し建白書を上る

〔撥反雜記〕

五月十五日新清二位長谷三位岩倉中將之外書記御用一同連署

今度關東ニ　敕使被差下幕政改正之儀　叡斷之三策　被仰下候ニ付而は於幕府　叡慮徹奉行之節は夷戎膺懲之師可擧と存候萬々一御請不被申上候ゟ再應德川家長久ゟ被　思召候厚諭之　叡慮被　仰下候共上戻　敕喩暴政相發候節は朝廷之御威光不被爲振而已ならす列藩不伏速ニ發兵端候得共天下二分之勢相成候歟左候節は　朝廷安危何ゟも難申上恐入候儀と奉存候尤御結局之　叡慮は奉恐察候得ゟも至其期萬々一被動　聖慮候而ハ　皇國之威不被爲立列藩勤　王之忠魂廢弛し　皇國彌犬羊蹂躪之衢と可相成儀は必然候間　叡慮斷然不被爲動日々擧國一致攘夷之成功可有之存候前件之儀申出候も多罪候得共

皇國重事不堪默止　宸慮御決意之處乍恐奉伺度言上仕候事」

五月十五日遣歐使節竹内下野守の一行英國を發して和蘭に向ふ

〔佐田文書〕

一森山淵邊着後追々應接之様子兩都兩港先延期成就之由ニ御座候

一當今日本ニ兵ゟ出し可申者歐羅巴列ニ而佛國今帝ナポレヲン第三ト申說有之其故ハ佛帝自立後佛兵意ヲ帝ニ居ニ付帝之頼ム所只兵ゟ動スニアリ若シ他國ニ事無之ば國用不足を言立兵數ヲ減候說動モスレバ起リ候由因而帝四方ニ事ゟ求ルヲ旨トシ候由已ニ日本使節到着前者日本ニ兵ゟ動サントスルノ考有シト云フ（本ノマヽ）

一五月十五日「ロントン」出立「テームス」河ニ而和蘭ノ迎船ニ乘スル船將「ペルスレーキ」其他「ドンクルキュルシス」等ナリ北海ゟ航し十八日「ヘルレスロイツフーフ」港名に入リ直ニ「ロットルタム」府名ヲ歷テ首府「スカラーヘンハアヘ」ニ入ル政府ノ丁寧人民ノ歡迎格別ニ有之候英佛ニ比較ハ不成ト雖モ武備器械等頗ル精備ト云ベシ六月六日國王第三世「ウイルレム」使節ニ謁見有之過日「アムステルダム」行モ有之候是海港ニ而繁華之由首府ハ內地ニテ小府ニ有之候當地も當月十二三日ニ出立可相成様子ニ居申候猶「フロイセン」等ゟ追々呈書可仕候毎度乍御手數別紙壹封拙宅迄御投入之程偏奉希候此節極而大暑之比ゝ推察御保護奉希候當時此地「ハーレンヘイト氏」寒暖計六十六度計尙冬服相重居申候尙重便可得貴意候頓首

戊
六月七日　認

手塚律藏様

佐野鼎

五月十九日本藩奉行楯岡愼之助京都の形勢を藩政府に報告す

〔文久二年尊攘錄自筆狀〕

楯岡自筆

雇差立候付得貴意申候太守様上々様益御機嫌能被遊御座奉恐悦候各様愈御清康可被成御勤務奉拝賀候私儀徒然として青地着坂を相待居候處櫻田覺助より筆紙ニ難題事有之急ニ上京いたし候様申遣シ候付浪人者ニ而も騒候風説有之候哉と渡邊とハ咄合十五日出立十六日書比古門前御屋敷へ着仕覺助へ様子承申候處別帋一之書付之通申出候付意外之事ニ而とても急便得貴意申候外無之ゑゝし當御地之趣猫之目之様ニ時々刻々變化いたし候付幸翌十七日覺助久我様へ（久我内府）（様は方今いつ方も依頼之御方様之由覺助へ御沙汰ハ御深慮被爲在候而之御儀と恐察仕候）罷出候御用向有之候ニ付私儀上京仕私勤ニ參殿仕度段相窺せ候處別帋二之書付之通内府様ゟ御用人を以被仰聞候右等之御模様ニ而相考候へゑ乍恐堂上方も御見寄せ聞寄迄ニ而さしたる御見識ハ無之方今諸國興起之内薩長之二州ハ本腰ニ成居候ニ幕議承久之北條之故轍ども乍恐御蹈被爲成候而ゑ　皇國大亂之基とハ凡眼ニても見へ候事ニ付六條太夫様覺助へ被仰聞候事も乍憚御一已之御見込歟と奉察候

一春嶽様會津様等之御儀ゑ人心も安し候様ニ相成可申哉

一朝議も穩之方ニ而薩之議も寛ニ相成是も　皇國之吉祥歟赫々たる鏡ハ匿一ツも目立錦を着て綯を加ると歟申候方穩ニ可有御座歟

一中川様如何様之御手續ニ而御建白ニ相成申候哉分り次第可申上候

一永井雅樂惡名ゑ閣老御一味と申處よりも航海之一條雲上ニ合兼候ともニてハ無之哉と相考申候

一青地渡邊市御目附付御横目等着いたし候後御國議如何哉私儀出立後之御儀一書も存不申唯々處女之如くおとふしく仕居申候青地上京　御國議奉敬承度奉存候何之御用ニも相成不申日夜恐懼仕申候先右迄得貴意度如是御坐候以上

五月十九日　　楯岡慎之助

御奉行中様

尚々時下御自重奉祈候且又覺助列ハ探索迄ゑ而ゐまり深針立不申様申聞置候以上

別啓仕候御當地諸御大藩より御家老御人數爲御見舞被差出候風説有之覺助仙臺之御屋敷へ知人有之參候而承候處薩長之御建議さへ何事歟存不申位ニ而御人數上京いたし候抔とハ何とも不申來加州へも承見申候處是以同様之由高松様へ近日御年回有之重役之人御代香へ參り歸ニ鳥渡御當地御屋敷へ二時計ゝ歟立寄候段申參候由其外格別重立候御家より御人數等參居候趣ニてハ無之由ニ御座候

京表之模様從大坂申達置候後相替申儀も無之候處去ル十三日櫻田覺助ゟ何歟心遣之趣を含ミ拙者出京之儀促カシ遣候付十五日出立十六日京着様子承申候處則別紙一之濱舌書之通ニ申達猶一昨十七日覺助今出川ゟ罷越大原三位様東行御延引之模様ふゞ承合候處是又別帋二之聞取書之通ニ而何比御出立ゝ申儀分り兼島津泉州ゟ御再議被奉願候内將軍家御上洛一件ゑ別別帋書面之通ニ而御大老一條も春嶽様御列今度被蒙仰候通ニ有之候へゑ先ゑ　勅意相立候事ニ而其儘御押付ニも相成可申哉夷狄打拂之儀も打拂と申土臺さへ相立候へゑ宜キとの事ニ而最初建白之趣と些相違いたし先寛ナル方ニ相成候へゑ三位様東行も此末如何相成可申哉諸浪士當時ゑ薩州之處分を恨ミ却而泉州ゟ狼籍之企ニおよひ且長州薩州兩藩士之間不平を抱キ候哉之風説も有之候へ疑共ゝ相聞候儀ゑ無之長州世子今以御滯京久世大和守様上京被仰付候趣之御請ゑ相濟居候得共何比御出立御入洛と申儀未タ相分不申候青地出京無之候而ゑ御國許之模様一切相分不申此方ニおゐても今少シ程立候ハヽ折合も可有之哉段々探索仕せ置候儀も有之候得共先當時御手を不被出候而難叶ゝ申時勢ハ相見不申候間左様御承知被下御家老衆へ被仰達可被下候以上

五月十九日　同廿六日着

御奉行衆中　　楯岡慎之助

尚々久我様御噂之内中川修理太夫様ゟ御所ゟ上書有之大樹兩藩建白之主意ニ相替不申宮被爲出來候ハヽ追而御見せ可有之との事ニ御座候以上　本文之外於江戸松平肥後守様松平春嶽様姉小路様之儀ニ付久我様ゟ櫻田覺助ゟ御見せニ相成候寫猶相達候付差越候事

（一）

聞取書（五月十一日の條にあり）

（二）

聞取書

今十七日久我様に參殿仕楢岡方御機嫌伺ニ參殿被仕度御故障之有無相伺候處越中守様方何そ康立候御使ニ候ハヽ可致參殿候自分勤ニ候ハヽ當今不穩時節是迄差登等無之ニ餘計之人數致京着候抔風說有之候程之事ニ付御國より奉行抔此方に參候と申候而之彌以人氣ニ差障り可申源右衛門上京之上得斗申談有之度先暫見合候様との御事ニ御座候（中略但五月八日の條に出づ）

一諸侯之内假令五大老を被爲居候共其人を不被爲得候へゝ却而天下之害ニ相成可申哉と奉存候

一打拂之事今日被仰出明日方直ニ打拂と申譯ニハ至兼先一應利害を解左候而不致承知其節ニ至不得止打拂と申ニ決斷不仕候而ハ相成不申候付御打拂之御規定相立候へゝ當十月已後大坂兵庫等之新規開港取立ゝ相止可申と奉存候

右之件々御再議奉願候由申上ニ相成居候由以上

五月十七日　　櫻田覺助

五月廿日幕府鷹司輔熙近衛忠熙等の還俗に關し異議なき旨を京都所司代に通達す

〔撥反雜記〕

鷹司入道准后殿近衛入道前左大臣殿鷹司入道前右大臣殿萬端如平常可心得去月卅日被仰付候ニ付而者當月下旬還俗被仰付入道准后殿ニ者昔年之義故可任所存旨被仰出　思召御内慮之趣當地へ宜申上旨傳奏衆へ被申聞被致持參之書付寫被越之到來則及言上候御内慮之通ゝるべき旨　被仰出候間其段傳奏衆へ可申達候以上

五月廿日　　酒井若狭守殿　　御老中連名

五月廿日幕府は本藩池部啓太等に高島秋帆砲術稽古世話方を命ず

〔江戸返達御用狀控〕（文久二年四月より）

講武所御奉行大關肥後守様方今日御呼出ニ付罷出候處別紙御書取一通御用人を以被成御渡候間差上申候池部啓太列ニ御達之儀ゝ御奉行ニ相達置申候

五月廿日　　吉田平之助

細川越中守殿家來　池部啓太　都築浦佐彦　關八郎助　池永喜太郎　森尾龍彦

右高島喜平炮術稽古之儀致世話候様松平豐前守殿無急度被仰聞候

五月廿一日在坂本藩吏員橋本喜彌太は勅使大原重德島津久光の東下薩藩堀次郎の九條關白並に所司代酒井忠義排斥毛利慶親に上洛内命の降下及び議奏中山忠能の宮中機密漏洩等に關する幕吏永井主水正の談話要領筆記を重役に提出す

〔尊攘錄探索書〕（從弘化年間文久二年迄）

五月廿一日主水正様方御直話之掠書取

一主上叡慮之旨於關東夷戎交易御取扱後逐年次第ニ萬民及困窮候趣被聞召深被惱　震襟候折柄今度島津和泉上京申上候間可爲異船打拂之儀其（ママ）御感悅ニ被思召彌以關東之御所置筋屹ト改正いゝ（ママ）し候様との　叡慮ニ付豐ひ於關東交易御改革無之とも　天朝之御趣意彌貫通被遊度との御存念ニ而異船退治之儀者先公武御合躰之上諸藩ニ被仰出候上之事ニ候得

共右之一條自然於關東異議申立候稜茂有之候ハ、將軍家ニ無御係從　天朝公卿を初日本之大藩有志之面々に被仰出退治之御存念ニ被爲在候畢竟關東之御所置筋老職共暴政之儀と被思召依之　玉體を豐ひ如何成遠島に流罪之被爲蒙神罰を共少茂不被遊御厭神州之名儀を汚シ候而已ならす萬民を忠心難默止安悅之世上ニ服シ候樣被遊度との　叡慮之旨ニ御座候

一五月廿二日大原三位樣關東に　勅使被差立候事薩州長州兩家ゟ申立且　叡慮之旨茂被爲在久世大和守樣出京被仰出參殿之上勅書之趣得斗取調候樣との趣御沙汰之筈ニ候處發足延引付而ゑ島津和泉樣ゟ度々被申上候趣茂有之旁以　勅使關東に被差立和泉樣茂同道江府着之上尙應接筋之儀ハ松平大膳大夫樣と申談候樣被仰出候處和泉樣ゟ存立之筋申上薩州心底ニ取計被仰付度段相達存立之通被仰出候由

一勅書之內將軍御上洛等之儀被仰向候旨ニ付和泉樣御存念之儀有之御上洛一件ゑ如何之ものと被仰上候處右ゑ猶　天朝深キ被爲在御趣意候事ニ付　勅書被仰出候上改意等難相成旨ニ付御文意共儘ゑ而被差置候由

一松平越前守樣大老職ニ被任度との　勅書之趣ニ候得共猶武邊ハ右大老職之儀ゑ家格茂可有之哉先政事總宰職と申名儀ニ而被仰出度との和泉樣御存意ニ付尙御出府之上大原樣と申談及言上候樣御內命之由

一島津和泉樣今度申立之大意ニ付而ゑ於　天朝格別御カニ茂被思召尙此末致精勤候樣との御內命被爲立候由

一薩州長州之儀ゑ今度諸藩ニ越に建白之趣申上候段甚御感悅ニ被思召依而兩家共御守護之儀御賴被仰出候由

一勅使下向延日ニ相成候儀付今度和泉樣御出府跡に島津石見京着之義ニ付數度往返取遣も有之候付御延引之由

一松平大膳大夫樣建白之儀ゑ夷戎交易筋改革被仰出候而ゑ方今關東之御所置筋ニ付却而萬民之動搖係り打拂之儀有之候而ゑ以之外之事ニ付先平穩之御取扱ニ被遊度段被申上候由尤長井雅樂之所分ニ被致合躰候趣ニ相聞近日之處天朝茂思召致相違且又長門守樣御存意筋ゑ却而大膳大夫樣ニ事變り御建白之筋相立候樣之御意味茂可有之哉候へ共何分父子之間柄我意ニ所分も難被仰上無餘儀情躰ニ付大膳大夫樣致出京候樣との儀御內沙汰ニ相成候由

一長州家之儀ゑ當時所分致同意兼候意味ニ相聞島津家ニ對し候而ゑ　天朝之思召と違勿論少も御カニも難被思召との趣ニ御座候由

一久世大和守樣出京之儀ゑ　勅使關東に被差立候付出京ニ及不申候樣若又江戶發足ゑゑし候ハ、途中ゟ退鶴いたし候樣との趣御所司代に被仰立候處御受迄茂相濟殊ニ老職之內も上席ゑ而有之候處右樣御手輕被仰付而ゑ關東之職位權威茂薄く相成候樣存候間此儀ハ被差置矢張致出京候樣被仰付度との事ニ付其儘之御內命ニ相成候由

一關白樣幷酒井若狹守樣方退職被仰出候樣との儀ゑ島津家之內堀次郎と申者上書ニ有之候通ニ付尙和泉樣ゟ之御內意茂有之候處兩家ゟ御通之堂上方有之九條樣ゑ關白職御辭退御申出候然處若狹守樣ゑ近來病氣之御申立を以參內ニ相成不申奉對　天朝ニ而ゑ御不都合之筋ニ被爲在候へ共惣躰是迄天朝を重し候儀ニ被對格別之御咎も不相成其上島津和泉樣御對談ニ相成候處若狹守樣御所分至極御尤之筋ニ相聞候由且又大原樣ゑも御發足ニ付被及御對顏候處御趣意難相分候へ共重疊建白之趣ニ相成候由

一此方樣御上京之御內命茂可有御座哉之町中風說有之候趣を以程能主水正樣に取合於　天朝右樣之儀御模樣も可被爲在哉と奉伺候處決而左樣之意味ゑ無之全町中之風說ニ而も可有之との御沙汰ニ候併有志之大藩之內壹人たり共建白申出候義も有之候ハ、猶　天朝ゑ一稜御カニも可被思召との由ニ候

一議奏中山大納言樣　御所表之御內密筋都而今度勅書之趣共御所司代に被致內通候處江戶に右之趣御老中樣迄申向ニ相成猶關東之勅書之內一橋樣御後見被爲仰付由中山家ゟ御內通被致候儀ニ付不容易之事ゑ付建　叡聞候處　思召之旨被爲在　御所表書記方等も二拾人程被仰付候由

一松平越前守樣大老職　勅書之通於關東被仰出候ハ、急速上京致候樣との義茂大原三位樣ゟ被及言上筈候由

一伏見表旅宿ニおゐて先月騷動之節島津和泉樣ゟ急速人數差出取靜方いゑし候段御滿足ニ被　思召上尙浪人取押方之儀精々心を用候樣被仰出候處和泉樣御受ニゑ浪人共私手ニ罷在候者とも不心得之儀有之候ハ、取押方指揮可仕乍併聞込

不申外之儀之存不申段御受書差上ニ相成候由依之達　叡聞候處右御受之文意御笑ニ而島津家ゟ今少し之所手ぬるき事
と被仰候由
一薩州長州兩家之儀も當時之處ニ而之双方些ト說も合兼候ゟ少しもゑ合居候意味も有之候由右稜々主水正様ゟ御直ト拜
承いたし候間此段申上候以上

戊五月廿一日　　橋本喜彌太

五月廿二日勅使大原重德公武一和して攘夷すべきの旨を奉じ京師を發して關東へ下る島津久光之れに陪す

〔採薪錄〕

一五月廿二日書比關東へ　御勅使大原三位様御下向三位様左衛門督様ト御昇進御藏米三千俵五字不分中納言大納言一同之
御位之ト し大内無双忠臣也
一同朝薩州和泉様同斷關東下向御同勢千餘人　御所ゟ吉例を以和泉三郎と改名被下此和泉三郎と申ハ往昔右大將頼朝公
之御流之御方和泉國何とゟ申濱ニ而住吉大明神の御神託ニ而近衛殿御逢ニて御引立ニ相成候御方三郎と申島津家の御
先祖なり其吉例也と云

〔文久二戊壬雜記〕

五月廿二日

勅使御發輿被　仰出候節別段大原卿に　被命候
叡慮之寫
朕國家のため日夜うゑいたへす而て幕吏苟茂安ゟらん事をぬもむ仍て方今汝を關東ニ下してあまねく朕ゟ固有の
志與字内ニゑらしめんと欲を願ハ汝朕ゟ服心と爲て忘る事あるなゟれ且當中廟論之日萬一幕吏曲直與あゑまり島津と
爭論ニ及ゑん事もゑゟりゟたし然則汝大道をもつて是非をさすし天下ゑ一大事與ゑゟやまらゑむることなゟれ今日之事
朕一ツニ汝ニゆたぬ汝つとめて祖神の震怒をなくさめよ
（本朱書）
此御書附ハ京都ゟ水津當り之手ゟ參候由島津ニ異論之處餘り任し過られたる様にて些ト疑ハし水津共手ニ入候出處
相分居共ハ致問敷哉可被仰下候

文久二年
〔登攘錄自筆狀〕

書取

今廿二日久我様に參上仕候處森但馬守出會申聞候ゑ此度之一件不容易儀故自身壹人ニてハ屆兼候儀も有之旁山田仙太
にも同様相勤候様内府様ゟ被仰付候由ニ而右仙太茂無程罷越内府様ゟ御沙汰之旨ニ而申聞候ゑ此度爲　勅使大原三位
様關東に被差下候付三ケ條之儀も須日差出置候稜々之儀ニ御座候事三ケ條外御嚴山御　御老中久世様御呼登之儀ハ被差留呉候様
借渡之儀も大原様に筧斗御含ニ相成御察討有之管之由ニ御座候　有之ノ落字カ
御所司代様に御沙汰被爲在候處御同方様御返答ニゑ外御用之儀も候得ゑ御自身方御用談も。無程發途も可有御座此儘
被閣候様有御座度との趣被仰上候間其通ニ被閣候由之處此節久世様にゑ長州之永井雅樂御附添罷登候段島津和泉方被
承出候由ニ而被申上候ゑ右雅樂儀附添ニ而上京いたし候ハヽ自身留守之儀ニも有之如何様之儀取計候哉も難計殊更長
州之儀ゑ二說ニ相別浪人躰も雅樂申分一ツとして信用不仕程ニより打果もいたし可申抔ト内々相唱候趣ニも相聞茂以
掛念有之猶御當地混雜等之儀差起可申哉も難計御膝本之儀別而御氣遣被申上候付何卒久世様御登之儀ハ被差留候様有
之度左様無之候ハヽ御道中ニ而御行逢次第　勅使と被申談强而江戸に御引返之御取計いたし可申との趣被申上候間其
段酒井侯に御沙汰ニ相成御上京之儀先御見合ニ相成候様一昨廿日之夜飛脚を以被仰遣候由尤右之通ゑゑ候得共久世様
押而御登ニ相成候哉茂難計御見込之由　久世様御上京之儀本文之通ニ候處御病氣ニ付御延引ニ相成候哉之段
久我様より御知せ相成申候未タ表向之被仰出ゑ無之様子ニ御座候事

一此度島津和泉方　勅使に被差添諸事關東に之御沙汰筋周旋いたし候樣御内々被仰付候間直樣御當地發足之筈ニ候得共詰込之人數も少且薩長之間内々申分も有之自身留守跡之儀指揮いたし候もの無之而之浪人躰取押候儀被屆兼候付其人躰呼登候迄ハ御猶豫被相願右等之綾ニ而遠國往復彼是ニ而發途之日限延引ニ相成申候由右人躰之儀之只今干戈を動候と申場合之無之候間島津石見と申者呼登留守中之儀無御心遣樣申談置可申外ニ島津圖書と申者修理大夫親族ニ而總躰剛氣之性質隨分御用ニ相立候人物ニ付同人呼寄度候得共是者國中何之も心服仕居此節呼登候ハ、藩中擧而罷登候樣相成可申左候ハ、是非も不相分内餘り事々敷御座候間先石見を呼登自然關東ニ而　天朝之御趣意通取用無之猶私之涯分丈心配仕候而も其甲斐無之節之最早致方も無之早速ニ馳登り　禁裡奉守護候筈ニ付其期ニ至右圖書儀之罷登候都合ニいたし置申候尤修理大夫ハ勿論之儀ニ而國力を盡し御忠節申上可奉安　宸襟との趣被申上候由容易ニ右樣之埒ニ之相成申間敷候得共自然右圖書馳登候との儀相聞候ハ、猶御國許も京地之變と被成御承知候樣此段も爲含内話いたし置候樣被仰付候段兩人ニ而申聞候事

五月廿二日　　青地源右衛門

〔元治夢物語〕

斯テ朝廷ニハ確乎タル叡慮貫徹在ラセラルベキトテ大原從三位重德卿ヲ關東ヘ勅使トシテ下向セラルヘキニ治定セシカバ正三位左衛門督ニ任セラレ五月二十一日京師ヲ發シテ東下セラル島津三郎久光道中警衛トシテ供奉セラレ同勢凡六百餘人鉄炮武器嚴重ニ備ヘ威勢凜々タリ

五月廿二日幕府簡易の制度質實の士風に復せんか爲め政事改革に着手す

〔文久二年壬戌申繼〕

五月廿二日　陰

一今日御三家樣并溜詰本多美濃守樣御登　城　御目見高家詰衆御奏者番布衣已上之御役人一役一人ッヽ、　御目見御沙汰書ニ所見

上意之趣

近來御政事向姑息ニ流諸事虚飾を取繕ひ候より士風日々輕薄を增御當家之御家風取失ひ以之外之儀殊ニ外國御交際之上者別而御兵備充實ニ無之而者不相成就而者時宜ニ應し候御變革被取行御簡易御制度質直之士風ニ復古致し御武威相輝候樣被遊度思召候間一同厚く相心得可勵忠勤候

諸役人に申渡之趣

只今上意之趣誠ニ奉恐入難有御儀ニ候何とも厚く相心得思召之行屆候樣一途ニ心掛拋身命可被抽忠勤候猶追々被仰出候品も可有之候間心得違無之樣可被致候

五月廿二日脇坂安宅再ひ老中となる

〔文久二壬戌雜記〕

脇坂摂水殿御渡之御覺書寫一通相達候間被得其意御同列中不殘樣無遲滯早々可有之通達候答之儀ハ先々銘々より不及挨拶各方溝口讃岐守方に可被申聞候已上

五月廿二日　　大目付

松平大膳大夫殿
上杉彈正大弼殿
右留守居

覺　　摂水（前播州龍野藩主脇坂安宅）

今般加判之列被仰付候付而ハ諸家方爲歎贈物可有之候得共一旦隱居も致し候上再勤被仰付候儀ニ候得之此度ニ限り右歎として諸家方贈物之儀之堅く及斷候間其段向々に可被達候事

〔元治夢物語〕

扨モ武城ニハ頃日朝威盛ンナリトテ聞エケレバ幕吏ヲ追々ニ擯斥有テ朝廷向ノ事モ能心得有トテ（脇坂拌水）再加判ノ列ニ順セラレ又中務大輔ト再任アリ

五月廿四日在京本藩奉行楯岡愼之助は大原勅使の東下閣老久世廣周の上京延期等に關し藩政府に報告す

〔文久二年 尊攘錄自筆狀〕

青地源右衛門儀去ル廿日京着一昨廿二日一條樣久我樣始所々勤有之候京地近日之模樣之大坂定詰橋本喜彌太當時禁裡之御模密ニ御關り候公家衆に手寄有之聞繕候趣別冊（五月廿一日の條に出つ）之通ニ而源右衛門久我樣方承候趣之同人方書取（五月廿二日の條に出つ）差進候通ニ御座候　勅使大原左衛門督樣烏津三郎殿泉州改名本文之通一昨廿二日御發途久世大和守樣にゝ去ル十九日江戸御立來月四日京着之積ニ而副使加納遠江守樣其外御旗本衆御差添ヒ申事ニ御座候處源右衛門承候趣ニ而ゝ久世樣御列ハ彌以途中方御引返と相見へ申候本文左衛門督樣勅命被蒙仰候三ヶ條之外御殿山夷館之儀被仰含御察討有之筈ニ御座候由且又久世樣餌出京之儀本文之通ニ御座候處御不快ニ而御出立御延引ニ相成候段内々申來候由追而久我樣方申來候段源右衛門方面舌有之候　此砌諸家樣之内御人數等被差出置候方ゝ無之哉聞繕せ候處彦根郡山等方　御所御固御所司代御手人數御備之外備前方薩州御見廻として身分柄之人四拾人餘之人を連滯京ゟたし候樣子ニ相聞外ニゝ右躰之模樣一切承不申候諸浪人之儀ゝ薩州之鎭撫故歟近日何之風說も無之島津三郎殿東行ニ付而代として島津石見（此節一郎と改名之由）出京松平長門守樣于今御在京委細ハ別帋書付源右衛門書取ニ而御承知被下御家老衆に宜被仰達候樣存候

以上

五月廿四日　　楯岡愼之助

御奉行衆中

（尙々書略之　但五月某日の條に共全文を揭ぐ）

五月廿六日閣老內藤信親免せらる

〔都築四郎記錄〕

五月廿六日內藤紀伊守老中を免せらる

五月廿六日幕府政事の改革は大凡寛永以前の例に據るべき旨を達す

〔文久二壬戌雜記、嘉永七年風說帳〕

五月廿六日和泉守殿御渡万石以下計即日觸

大目付
御目付に

御政事向御改革之儀今度被仰出候就而者大凡寛永以前頃之振合ニ基キ格別簡易ニ相成候樣可被致離決儀者見込之趣早々取調可被申聞候尤組支配有之向者末々迄不洩樣可被達候

五月

右之趣向々に下被相觸候

五月廿七日在府本藩井口呈助薩長兩藩公武間周旋の事情につき在國熊谷嘉左衛門に通信す

〔文久二壬戌雜記〕

文久二年

此節長州侯　公武御合体御取扱之御主意之別紙兩通（永井雅樂京師ニ建議先便學校迄仕出置一通ハ此節仕出長州侯江戸ニ建議之書付）聊間然無之時年來永井雅樂差入苦心仕候儀と相見　公邊ニも既ニ御。揚ニ相成（取落カマヽ、七日曲）三月初態ト御目附様御同道京都ニ被差登候由之處折節薩州和泉様御通行諸浪人騒動有之且長州侯御上京無之候而ハ　叡慮之趣直ト伺取兼候由ニ付四月十六日京師表出立江戸之様引返し（五月）同廿一日御當地着仕候由ニ而君侯も當月廿日比御出立ト申事ニ御座候右ニ付前文兩通眞僞相正し申度旁時勢之談を茂（下谷邊ナリ）承候爲メ去ル名家ニ訊問仕候處少シ差合者之由ニ付態ト名前ハ出不申候近日長州薩州人罷越段々談合候趣右之右双方之口振ニ付見込候趣ハ唯今之通御國体不相立様成行候ハ全く　公邊御役人共人を不被得故ニ候得ヱ　朝命を假て御役人之難渋を茂致へしとの趣ハ長薩同意ニ而長州は關東ゟ順路ニ手を付ケ（永井京師建議之書付ハ江戸ニ内分ニて極秘ニて有之候由）薩州ヱ浪士を誘立テ京師ニ逼り（欄外朱書）京師ニ逼るとハ藝廷ニテハ無之九條殿ト及所司代酒井家を頼との事と見ゆ　關東御役を恐愕せしめ傍銘々重きを天下ニ取ゐき私意無之とも難被申實は長州之方却而腹黒く薩ハ永井雅樂に使ヱれ候趣ニ御座候（欄外朱書）腹黒く長州ニ使えるゝの躰少し過る様有之全く薩州京師滞留之勢ニて長州之抑も懸り江戸の政事十ニ七八は早速改リ爲申故ニ相見候近日　勅使銀下リ和泉殿も出府と申事ニ而又一押懸リ久世侯引入脇坂老侯再勧と相成大概南部老ヱ地を挿内藤侯も引入ト專ハら唱申候得共是ハ未殘ニ相成居申候斷を茂可仰上儀ニ候得共御時節柄萬民之難渋ニも係り候事故田安様御登然可との趣ニ御座候由之處此度雅樂罷下候後ハ　京攝之動揺を申立時勢彌以切迫ニ付是非　將軍家御上洛を奉勸天下之諸侯を　京師ニ會し大業成就仕せ候仕組ニ有之由ニ付右名家ゟハ左様大事ニ仕成候而ハ國家之經費彌以苦敷時勢重疊不可然儀を長薩双方之人ニハ精々申談置候由極内密承申候此人見込ニ而ヱ　公邊も此大機會ニ乗し根本之御政事さへ御一新有之候得ヱ　京都ハ關老一人ニて相濟候得とも何を云ても久世侯抔も臆病神除キ不申如何哉と危ミ申候由御座候

（欄外朱書）和宮様御縁談之儀ニ付十年先外夷掃攘之儀公義ゟ御受合ニ相成居此節永井上京長州主意ト違却ニ相成不怪心配致候ト申說有之京都ニて公家衆ニ被仰出候御書付トハ符合仕候得共何程ニ可有之哉且御上洛之事も其砌御約束有之居候段專ハら世評ニ候得共公家衆被仰出之御書付ニも其文意見へ不申何そゑつかゞと致候證跡見聞致出不申近日長州御留守居にも問合セ有之由之處夫レかゑつかりと有之候へハ何之手もふく候得とも長州ニ茂とふも知レ不申由越前老公抔も御上洛ニハ早速御同意も被出來衆先ッは此所ニ引懸り長州御上京も見合ニ相成候歟ト被察候久世侯は元來去ル十九日京都出立之御暇迄被下候而引入ハ勅使故ト評判然ルニ勅使延引和泉殿も出府未分不申大概勢計ニて江戸ハ押つぶされニ相成其臆病神除不申ト云も宜也此節脇坂老候も加判列被仰付候即日諸家音物御斷之達有之御軍政改革之方ハ若年寄稲葉様右一件に引除キ日々御調之由大久保越中守（横井抔出會致候當時鄙一之大才ト聞候人なり）近來講武所か蕃書調所ゟか大目附ニ被相成此手筋ニヱ相應之人才も段々有之由此節ハ大方此人達の世之中ニ相成可申左候ハヽ隨分綱紀も振ひ可申との見込ニ御座候私抔も御承知之通天下浪人ニて御當地滞寓罷在ケ様之事柄を直々見聞仕初心遂得不申候得共不幸中之幸と竊ニ喜悦仕候下之本文ハ此間承及候儀を去方ゟ書付見せ候様噂有之差出候草稿ニ而跡ニ相成候得ヱ段々意味合替候儀も有之候得共大意ハ相分候間夫ニ朱書致し先當時之成行小子見聞之及候丈を御知せ申候是に付少々私見も有之候得とも却て御覽被成候御方々御目惑ニも可相成ト省キ申候尚追々可得貴意候

五月廿七日　　井口呈助

熊谷嘉左衛門様

五月廿九日品川東禪寺英國公使館の衛兵信州松本藩士伊藤軍兵衛英人二人を斬て自殺す

〔採薇錄〕

一當五月廿九日夜品川東禪寺ニおゐて松平丹波守様御家來内ゟ異人及殺害其人場所を立除屋敷へ立歸切腹丹波守様ハ翌日ゟ御固御免閉門被仰付釘締

一品川御殿山異人館喰斗取止メと申譯ニ無之併急キ之模様ニヱ無之寛々いたし候事八ッ山下上り場突出し候ケ所も數十間之石垣を十人計そろ〳〵仕懸居候ゝし

一江戸是迄異人共旅館御固メ御免且公義衆武藝熟練之人被附置候御番士も御止と歟御國元ニ而噂承り居候處左様之譯ニ而無之旅館も已前と相替不申候御大名衆御固メも御番士も有之候事

右江戸詰歩御小姓方御歩所に録上之内要文抜書

〔撥反雑記〕

六月十一日　附

大槎氏手簡曰先月廿九日之夜半計之比俄ニ太鼓打立騒敷候ゝ付何事やらむと存居候内半時計過候而町方之釣半鐘を打人數ゟ操出し大ニ騒立候得とも出火ゝても無之何様夷賊之巣穴ゝ夜討ゝても入ゟる那らむと段々承申候處全夷穴之騒動ニ而夷賊式疋（書疋ハ中官書疋ハ下官之由或ハ貳疋とも下官共云）殺ゟし家ゝ歸り書置抔相認遂切腹申候則屆書別紙之通ニ御座候右ハ兼々夷賊之凌辱を蒙り候のゝ那らす士足ニ而頭ゟ蹴候由依之不堪憤怒明友抔ゝも相談ゟし是非此耻辱ゟ不雪得ば再ひ不相見とて誓言を立日夜透ゟ伺ひ居候處幸其夜時節到来ゟし遂志願候由此節之事ハ重疊彼が非理ゝ付格別怒り不申尤之次第位之事ニ候由ニ御座候○今曉八時比暎吉利人宿寺高輪東禪寺へ狼藉者亂入仕異人ゟ切害深手爲負立去行衛相分不申候由然處私家來徒士勤伊藤軍兵衛と申者昨夜五時過何れへゟ罷出候處今曉東禪寺異變ゝ付勤番相宿之者共增固罷出候跡へ立戻り自殺仕候旨申出候ゝ付早速檢使之者差遣爲相改候處腹ニ淺疵一ケ所咽ニ突疵一ケ所左眉筋へ鐵炮疵一ケ所有之且當人へ相渡置候槍不相見其上差料之刀及こぼれ血付有之候上は右狼藉ハ若同人仕業ゝも可有之哉甚心配仕候此段御屆申上候右ニ付如何相心得可申哉奉伺候已上六月朔日松平丹波守○此度東禪寺異人固被蒙仰候儀前代未聞無此上殘念千萬ニ奉存候乍去公邊より御主君様へ兼而被仰含候旨御座候得ハ都而慎罷在候然處警衛御人數ゝ對し彼が傲慢失禮如何共傍ニ見受兼候此上彌跋扈增長候得は　皇國之人情難忍切害可仕候左候上ハ素より決心自害仕候事快御座候只々御主君様へ御苦勞奉懸且又御法令を侵し御奉公半途ニ而果一家斷絶不忠不孝之儀奉恐入候得共前文之儀不得止事斯之仕合ニ御座候死後如何様ニも被仰付可被下候様御取計奉願候謹言　五月伊藤軍兵衛

六月朔日將軍家茂上洛の意思を發表し且つ時勢に鑒み政事改革の旨を諭す

〔七年嘉永　文久二年〕風說帳、機密聞日記〕

六月朔日御禮以前布衣以上御役人一役壹人ヅヽ芙蓉之間に罷出御老中御列座被仰出之趣

近年之内御上洛被遊旨被思召候御治定之儀ゝ追而可被仰出候此段ゝ御内意可申達旨被仰出之　御禮後万石以上之面々に於御白書院再御目見被仰付上意之趣

近來不容易時勢ニ付今度政事向格外ニ令變革候旨何茂爲國家厚く相心得心附候儀ゝ可申聞猶年寄共に可申談

入御後御列座中務大輔殿被仰渡之趣

今日上意之趣誠以厚思召候國家之御慶事無此上雖有事ニ候昇平殆三百年其流弊綱紀茂相弛ミ武備御行屆ニ相成兼候折柄近來外國之事務頻ニ御差湊ヒニ相成右御取扱振より自然天下之物情ニ差響終ニ奉惱　叡慮候ニ至り深く恐入思召候素々公武之御間柄聊茂御隔意被爲在候御事ニゝ無之候得共何となく御情實御通徹ニ相成兼候故よゝ之儀ニ而速ニ御上洛萬端御直ニ被仰上度との思召ニ而則御内々被仰出ニ相成候併御上洛之儀ゝ寛永以來御慶典ニ相成候御式ニ候得ゝ萬端之取調急速ニゝ御行屆ニ難相成候付暫之處年寄共より御猶豫奉願候處此度之儀ゝ御舊例ニ不被爲拘格外御省略御行粧等萬端御易簡ニ被遊候思召ニ付急々取調次第と被仰出甚御急キ思召候事ニ候萬事御誠實ニ思召御直ニ被仰上御合體御熟算之上從來之弊風御一洗（ヽヽ）復御武威被遊御振張皇國を世界第一等之强國と被遊度御偉業を被爲立候上ゝ　天朝之　宸襟を奉安下ゝ萬民を安堵爲致度との思召ニ候得ゝ何茂厚く奉得其意御政事向御變革之筋等各見込之儀茂可有之候得ゝ聊茂不憚忌諱國家之御爲第一ニ相心得心底を盡し可被申上候猶追々被仰出候儀茂可有之候間飽迄茂其意を體し可被抽忠誠候也

六月

六月朔日在府井口呈助は養子忠三郎に幕府の大勢及び長藩長井雅樂謗詞事件の起りしことを報

す

〔文久二壬戌雑記〕

六月朔日屈御狀同月十五日屆來

（前略）

一當時勢之事ハ廿七日屈ニ熊谷ニ仕出置候書付一見可被致候處尙又替たる樣子聞出し申入候永井雅樂先月十四日迄ハ久世樣ニ罷出御對話有之十六日ゟ久世樣御引入御役御斷京都登之被仰付其外御目懸ハ御免ニ相成候得とも御役ハ未タ御免之樣子ニハ無之候脇坂樣御隱居ニ而廿二日御老中被仰付内藤樣も久世樣同時比ゟ引入候處廿六日御役御免（中略）水野出羽守樣も昨日御免越前老公ゟと御後見ニ而此節ハ屹ト御改革是迄之風弊御引改メ相見候廿二日御意之書付ハ廿七日屈ニ熊谷ニ仕出置略候廿六日御達左之通（和泉守渉の達文五月廿六日の條にあり今略之）

覺

御門主御三家方御兩卿之外諸向ゟ音物之儀向後三季献上悉献上有之節并公務ニ附候音物且平日献上殘之外之堅相斷一切受納致間敷候

右之通一同申合候間爲心得向々ニ無急度可被通置候事

右今日元田御小屋ニ而承り共儘寫置

大概當時之形勢右之趣ニ候處爰ニ一ッ氣毒ナル事ハ永井雅樂頃日來引入之末甚不首尾ト申事ニて世上ニ之切腹致候ト申評判も有之候仔細ハ未タ詳ト不相分候得共京都江戸主人ニ申出候口振齟齬致し候事有之何共申譯無キ事出來候と申事ニ候右ハ初發森井聚堂邊ニ而聞出し噺候得共左樣之麁忽容易ニ可有之人物とも相見不申如何哉ト存候得とも初發此方樣ニ御相談口ハ將軍樣御上洛願曰有之度候得共當時柄萬民難儀ニも可有之田安樣ニ而も御名代ニて可然ト申事ニ候處今度京都ゟ下候而ハ是非御上洛ニ而無テハ難相濟樣ゟきりト申立久世樣もとふか夫ニ因り引入ニ相成候樣之說も有之此處前後之逸歷々不審有之段小子抔不叶（乍落マ、）ニ說之替候處之仔細を最中探索致居候處ニて大方夫等之處歟ト推察致候昨日安井にも問合ニ參候得共鹽谷參居是非只今老中之役人ニてゑつたゑたらゝ話出も遠慮致し一應之處承候處矢張森井話ト大同小異ニて說話三鼻斗りニ齟齬有之ト申事ニ候何樣返覆表裏を申樣ナル人物ニ而ハ有之間敷候得共才力家ニて少樣變ニ達候樣自負之氣味も相見京都ニハ京都ニ說之入候樣老中ニハ老中ニ說之入候樣聊口之すべり樣ゟ左樣之儀ニも至候歟又ハ内輪ニも兩說有之周布正之助ト申御中老此方實ハ正當之人物ニて人望も有之候得共行不申永井說ゝ相成居候由ニて内輪之議論六ケ敷共ニ而ハ無之哉右先推量之處ニ而實正之處は追而探索相屆次第可申入此段熊谷は勿論學校にハ幸島に通路可有之候先ハ右迄差置申候以上

六月朔日當賀　　忠三郎殿　　呈助

六月二日閣老久世廣周免せらる

〔都築四郎記錄〕

六月二日久世大和守免職老中

六月四日在府本藩老臣松野亘は京攝の形勢漸く平靜に歸し且つ幕政改革綱紀振張の狀あるを見暫く長岡護美の出府を中止せられんことを藩政府に通牒す

〔自筆御用狀扣〕（文久二年）

以別紙申達候先月七日御地立之御飛脚一昨二日着京攝之事件ニ付而ゑ青地源右衛門并御目附付御横目追々下着大坂ゟハ屈飛脚ゝ而度申越何樣島津和泉樣出京段々御建白之筋茂有之たる儀ハ相違も有之間敷右付而ゑ不容易趣茂相聞候得

共考察ニ類候事柄多候間良之助殿御出立之比合渡邊一郎左衛門歸着彼地之模様委細相達候上御取堅ニ相成共趣ニ應吉弘加左衛門ニも夫々御申含早々被指立方ニ御評決ニ相成候由委細被仰越趣致承知候大坂よりと此許ニ指而申越候儀茂無之候へ共慣岡慣之助ヶ京地之模様御奉行迄申來候趣を以考察いたし候へハ長井雅樂抔之心術茂何程ニ可有之哉長薩二藩士之間不平を挾ミ候様之儀茂有之由其外種々風説之趣等之聚ミ取留候儀ニ無之哉ニ相見且又當時之處ニ而是非御手を被出候程之儀ハ有之間敷との趣を茂申越此許之事情を追々早打等を以申達置候通ニ付彼是を以良之助殿御出立之儀ニ先御見合ニ相成居候方ニ茂可有御座歟何様不遠備前殿茂御着ニ相成候ハヽ段々御咽合ニも可相成と存候近來公邊之御模様ハ專ら御紀讃御振張之御處置と相見御役々御人選其外難有上意之趣等有之此末格外之御改革筋茂可被爲在何卒非常之御像業相立候様窃ニ奉願候事ニ御座候扨差立候付一應之貴酬旁如是御座候以上

六月四日　　松野頁

憲連名殿

尚々御端書之趣承知仕近日御國中之人氣茂平穩之様子ニ相聞候由一段之儀と先安心仕候事ニ御座候以上

六月四日在府井口呈助更に長井雅樂謗詞事件に關し家郷に通信す

〔文久二壬戌雜記〕

（前略）

一近年之内　公方様御上洛ニ被決候由此數日御譜代外様にも被　仰出有之尤　將軍様ハ不怪ゐへきニ候得共久敷退轉致居候御儀式ニて取調等ゑニ出來兼老中ヶ御猶豫願ト申御事ニ御座候右御決着ニ相成候故ト相見へ長州侯も來ル七日ニ御上京ト申事ニ御坐候永井雅樂ハ不首尾ニ而引入と申事剛日之雇ニ申遣候様覺候得共尚申入候夜前清田話ニてハ長州御留守居ヶ申分ニ京都申立候書付少忌諱ニ觸候様之儀有之哉之趣京都被　仰越爰許ニて見候而ハ左様之稜も無候得ともも何様不容易事柄ニ付長州侯御登り子細相分候迄ハ引入慣居候由併外儀ニてハ京都江戸此方様抔ニ之申分辯舌ニ任セ被行候ヵ主意ニ齟齬致候事有之他所ヶも投文等致し彼御家中も不服ニて引入たると言最初ヶ頓斗之實意疑敷儀も有之候處テキメンニヲら出氣ノ毒ナル事ニ候併跡ハ周布正之助抔申者却而正當ナル人ニて君侯御周旋之方ハ不相替出來候ト被存候

一勅使和泉殿も一同立吉弘宮ニて追越下候由一兩日内ニ之着ト相見候左候ハヽ彼是猶新聞可有之候

一かゝ予種禮ハ昨夜清田にくゑノ〳〵申入候先ハ右迄草々以上

六月四日　　呈助

忠三郎殿

六月六日毛利慶親島津久光の着府を待たずして江戸を發し中山道を經て西上す

（僕弘化年間至文久二年）

〔尊攘錄探索書〕

一長州之長井雅樂引入候ニ付而之代而桂小五郎と申者列取扱仕候抔とも申候物論種々有之候事長州侯一昨六日此許出立之由中仙道ヶ被登候由承り申候此度京都之方鹽梅六ケ敷可有之抔とも風説仕候

一世上識者之見之如くたとひ長州之領腹黑ニもせよ又島津之事觀兵之術ニもせよ建白書之面間然もべき儀ニ無之故公邊ニ而之いゆる不逆詐正直至誠ひたまら建言を被容さへゝゑし候へと恐悦至極之事浪士を鼓舞せし振舞妄舉とは申もの丶若藥不瞑眩無疾不瘳之理ニ而大ニ天下之良藥と相成是亦可喜事也ト申說御座候

〔撥反雜記〕

七月廿日大槻鐵兵衛書翰ノ一節

長州者京師之薩州ニ先驅を被附候事を怖間敷やおもひけん貳度目之上書抔者專ら薩州を刺付候様の文躰有之甚敷俗論ニ而大ニ識者之望を失ひ候事ニ御座候其上今度長州侯上京も先月七日之筈ニ候處　勅使七日之御着ニ付而俄ニ引上ケ

六日ニ出立有之而已ふらす　勅使ハ東海道御下向ニ付長州侯ハ引違木曾路被致候事抔何共難心得事ニ御座候常情より考候得之假令一兩日位ハ出立及遲緩候共成丈ケ勅使御待受委細御伺取之上上京可有之處却而被避嫌候處より見候得之長州之廟略者如何可有之哉些異議を挾候樣相見申候永井雅樂者京師ニ而上言之後ハ譴責を蒙り御下ニ相成於國許蟄居被申付候由ニ候得共長州之策略ハ却而永井ゟ論ニ歸着仕候樣相見申候吉田派之義論も余程公平正大ニ而此一黨ハ此節之義ニ之寸斗服不申由ニ御座候乍去長州之論者俗耳ニ入り易キ故歟諸藩大概長州同意ニ而薩州ハ義論を不用身を以天下ニ先立之志ニ付俗眼ニ而者難見候ニ付同意少ク當時孤立之勢ニ御座候

六月七日勅使大原重徳江戸に着す

〔尊攘錄探索書〕（慶応元年閏五月文久二年）

勅使大原左衛門督殿并ニ薩州島津三郎昨七日着府ニ相成候ニ付一覽致候處大略左之通

一勅使ハ一昨六日品川着ニ相成島津ハ道中一日後レニ而參り候由ニ付昨七日島津品川ニ着出會之上一同江戸入之樣ニ評判仕居申候處左樣ニ而之無之島津未タ品川ニ着前書九ツ時頃江戸入ニ相成候事行列存之外人少ニ御座候事

一公家之事故固り武器類ハ無之緞子ゆたん懸り毛入差荷三ツいつゝも建札ニ勅使大原左衛門督ト認有之其他之荷物者惣而大原殿ト而已認有之候事

一駕脇八人程皆薩州之士ニ相違無之見受申候何ゝも屈强ニ相見候其外前後歩行立供廻りハ下賤屈人ニ相見候人計り衣服等立派ニ目立候事

一大原殿ハ駕之内故聢ト不相分候得共年令五十位少々白髪も見へ色黑相貌野ニ相見衣冠仕居候處些ト不似合程ニ御座候樣覺候事

一大原左衛門督内某々と申ハ駕ニ而後ニ續キ五六人參り候事

一品川宿旅亭ニ大原左衛門督先供分部若狹守ト申紙之宿札張付有之候得共行列ニ之見受不申候事

以下島津行列を記ス

一八ツ時過品川立直ニ高輪下屋敷へ着いたし候事

一伊達道具壹本黑白交り大鳥毛對道具黑無十文字形豪弓壹飾其外先箱刀筒袋入傘等ハ並之通之事

一赤袋入修羅筒貳十五挺駕ノ先ニ並ブ但玉薬箱添引キ續て百目前後之筒入居候と覺しき貳人持草履小長持八荷駕ノ後ニ同斷拾荷參り候事

一駕脇前後扈從之士五十人程いつゝも白帷子ニ水色紗羽織着用脚半尻端折之事

一三郎殿駕之内故聢ト不相分候得共年令五十以上色白く相見候事

一具足櫃無札ニ而有之候事惣而荷物島津三郎内某抔と認候物相見不申只薩州ト而已認有之候事供勢惣而薩侯直參之者と相見又者ト覺しきハ見受不申

一後供ニ獲入差荷具足櫃爲持候大身と相見候者ニ之北郷作左衛門少し格落て谷川次郎兵衛中山中左衛門都稲宗益抔ト申名前相見申候

一小松帶刀後押へ鳥毛伊達道具壹本對道具相見不申行裝人數等大抵此方樣御用人位ニ相見候事

一行列いたし參り候下供持居候供餘六十本有之候事其外行列ニ不拘追々ニ前後着いたし候銘々爲持候節數記臆不仕候得共所詮行列ニ立候程ハ無之樣ニ覺申候左ゝゝハ京攝評判之半も無之候事尤彼地ゟ人數返しもいたし候歟默算仕候ニ此方樣いつも御上下之御行列御人數程ハ有歟無キ歟ニ相見申候

一行列之外ニ大長持等之荷物ハ夥數參り候事

一此度　勅使之景色いかゝも薩人ニ瞞され且擁せられ來りたる躰ニ相見榜觀人心疑惑ニ相見候事

右行列一ト通り流覽仕候迄ニ付相違も多分可有之候得共共儘認差出申候事

右之通御達仕候以上

戊六月八日　　田中彦右衛門

〔撥反雑記〕

一書曰江戸も御老中始かくし供共外臨時之番所當月朔日より一切止之由此表ゟても近年出來候口々改番所淀舟改番所等一切引拂ニ而諸向之關所万端櫻田一件後増之分一切止ニ成申候扨大原嘸江戸へ御着之時万一夷人乗打等有之候得は打捨ニ被致と申事江戸へ御申入ニ而江戸御役人大騒急ニ外國奉行へ達ニ而其日は夷人出歩行不申候樣手を被靈候龍口屋敷へ御着之所ニ而ほつと息を引きたる由申來候以上

月日闕

〔文久二壬戌雑記〕

（前略）

一勅使大原左衛門尉ト申人八日ニ品川ゟ着傳奏屋敷落チ着鳥津三郎殿同日川崎ゟ着拙者ハ行裝を見んとて品川迄行

勅使八ツ比品川立御用物半匹位之箱貳ツ先キ行菊桐之御紋附ナリ帶刀八人計大方薩州人ナリ萬事薩州取持ト見ユ七ツ比三郎殿品川着釜屋トゟ申所ニ休供人々も隨分大勢ニ見ユ駕廻りハ若手兵子組位之者多し大樣白雉子ニ淺黄紗夏羽織鉄炮廿五挺供鑓五六十本通列ニてハふし昨日嘸ニ若御屋敷抔へ見へ候節ハ薩侯同樣ニてハふく十万石以上之格ニて緣付ニ出向ひ小書（院落カ）のとゟ通候由着以後之樣子ハ未タ何とも承り不申候近日屈ゟ何ゟ立可申其節ニ讓申候

一永井不首尾些ト疑ハしき稜も有之段々探索致候得とも區々ニて篤ト未タ了簡ニ乗不申候薩長同腹同意ト申處公義役人を差ゟへ候所迄之事ニて開國ト攘夷之處はかくそく致居候樣相見候此節長州侯上京ニて如何計ニ相成候哉右等之境余程差障り出來居候ともニてはなきや今少し致候ハヽ樣子知ゟ可申候

一一橋越前御補佐ハ京師薩長共ニ注文通ニ付此御方樣方之存寄ニハ容易ニうかつけふる所分ハ有之間敷候

一公方樣御上洛之被仰出も此朔日有之候書付進申候餘ハ後便ト艸略致候以上

六月十日　　忠三郎殿　　呈助

六月七日幕府は廣く洋書調所に於て外國書籍講習を受くることを許す

〔文久二年御同席觸寫並大目付樣御廻狀寫〕

大目附に

洋書調所稽古之儀萬石以上以下陪臣者兩文典句讀相濟候者稽古差許候段去ル午年申相觸置候處向後は文典句讀不相濟候共格別熱心之者は稽古差許筈ニ候委細之儀は田村肥後守杉浦正一郎可被承合候

右之趣向々に可被相觸候

六月

六月七日在府本藩士遠山三右衛門幕府政弊を改め言路を開くの狀況を熊本に報す

〔撥反雑記〕

（遠山三右衛門江戸來書）

六月七日發
同月廿日達　公方樣春嶽樣御直談ニ而被仰出候ヶ條尤御直談之御儀ハ慥成方より承候得共内々ニ而御坐候○諸御役人閣老ゟ初當時人才乏御國政向因循苟且ニ推移此有樣ニ而之末々之處被遊御案勞被得人才候思召之處是迄御役人撰擧之儀閣老ゟ初め御側御用御取次へ賄賂ゟ以て被仰付候趣ニ而其以下御役人ハ猶又賄賂手引ニ無之而は役付出來不申何役は何百兩何ゟ何拾兩ヶ申樣之事ニ成行尤御大老閣老も大概同樣ニ取込たる由右之通ゟ而之とても被得人才御道無之ニ付以來賄賂之儀一切御禁制ニ相成若相贈候者有之相顯候得は双方共御咎被仰付候由御内々御示有之且御國政向列侯御昇

進等も惣而閣老方より御側衆へ被相頼折を以上聞ニ達候仕來之處是も此度被相改御用御側衆は惣而御側向之御用迄ニ而餘は春岳樣御初直ニ被御中上候筈ニ相成申候由右ニ付而は御側衆只今迄之權爲失ひ不決成事ヶ相見申候○被聞言語候思召ニ而御目見以上ハ外樣之面々ゟ共存意有之候節は直言上願出候樣御家人小身者ゟ共御爲筋存念有之面々は以封物言上仕候樣被仰出候○櫻田大變以後竹橋御門内より半藏御門内往來ゟ め切ニ而御門々々見附等惣而夜中無挑燈ニ而往來不相成一々名許相答通行番所等數增ニ而殊外嚴重ニ有之候處今度悉く以前通ニ相ゆるみ申候

六月八日有吉將監三淵志津摩は本藩政府を代表して四月廿六日及び五月六日附在府老臣小笠原備前等の長岡護美出府延期長州と公武間周旋の交渉及び藩士の他國人交際取締等につきての意見に答ふ

〔文久二年　尊攘錄自筆狀〕

京攝之事ニ付江戸より見込之趣申來候

返事　六月八日飛脚中ニ而差立候

至密別啓を以申達候長州樣より公武御合躰之儀再應御建白之末此方樣に御懸合ニ相成追而之熊本に御使者をも可被差越哉之趣委細被仰越候初發之御狀混雜之最中ニ相達其後此方樣御覺悟之次第御承知ニ相成先ツ之長州樣之被仰立之御趣意ニ致符合候間沼田勘解由列大坂に被差越候儀之御免ニ相成申たるニ而可有之且良之助殿御出府も御無用ニ被爲在度由御見込之趣幷諸家樣之模樣共追々被仰越趣致承知候根元御國家ニ被爲替候而も江戸京都に御忠告可被遊との御覺悟之長州樣御懸合已前より相決居共上公武御合躰之御趣意之先ツ御同樣ニ候得共現實可被仰立ケ條ニ至り候而之御相違之段も有之第一此御砌ニ候得之少ニ而も御心閑之儀之有之儀御建議ニ相成御誠意相貫居不申候而之後來之御爲ニも宜ル間敷何そ他之被仰立ニ讓共儀被差置候譯之無之殊ニ右之御取扱ニ而一統之人氣も鎖り候程之事ニ候得之最易御模樣打替候而之御抑揚筋ニも差障候間旁沼田列御免抔ヶ申埒ニ無之其後當時之有姿ニ相成申候而專良之助殿御出府之御手管御座候處於其御地被仰談之趣も至極御尤之御見込ニ付御奉行ヘ相渡得斗咄合候樣申達置候處良之助殿御出府之御見合之方可然由委敷書付を以相達右之兩端之内いつゟ時處位ニ協可申哉早々評決之上奉窺御治定之處可申達處佐渡方御着座後病氣之儀八代に引取ニ相成候以來愈以相勝不申山ニ而此間辭職内意之書付被相達監物方も病氣ニ而同樣内意有之内匠方之先年犬追物稽古之節膝を被拂其砌奥村療治ニ而致平癒居候處先々月末比より殊外疼痛いたし近來ニ至候而ハ起居之難渋之勿論第一之正座出來兼候由ニ而是又辭職之内意ニ相成三人共更ニ再勤之見込も無之右付而之不一方致心配居候内與三郎方當春以來之胸痛俄ニ差重去ル朔日遠行ニ相成不穩時節如是事柄迄も種々打重り候而之追而之成行も重疊致懸念彼是不本意右之一條咄合も相決候場合ニ至兼奉恐入候尤良之助殿にゝゟとへ跡事ニ相成候而も是非御出府被爲在候思召ニ而上に也共處ハ被遊御同意候御樣子ニ相窺申候

一長州樣に御答ヶふく御留守居被差越一躰之時情も御探索有之候由至極之御取扱ヶ相考申候右付而御留守居聞取之書付且遠山三右衛門より差出候一冊も被差越京都幷薩州之樣子等委敷相分候ヶ申内就中薩州之儀色々相唱居候處和泉樣土臺之御深意ハ難計候得共當春御家中へ御示之趣ニ候得之重疊御殊勝之筋ニ相聞浪人躰之者諸方より相集不容易勢ニ相成候儀之全伏見ニおひて仕ものニ逢候有馬新七列之者ゟ類を引たるニ相違ハ有之間敷其上公邊ニ而之一橋樣御初御勘氣御免春嶽樣會津樣御政事ニ御立交或ハ堂上方御加增等稜々御改革之御取扱も大概相顯ゟ候へゝ之追而之治り口も荒方被考申候尤此節大原三位樣　勅使として和泉樣被差添關東御下向有之候由右之三ケ條歟御持參外ニ御含メ之　勅諚も御座候哉ニ相唱萬々一於公義又々御違背歟ヶ申埒ニ至候ハヽ直樣大變ニ至り可申誠ニ不油斷世上百方ニ心を賦置不申候而之御國家之後難仕法無之樣ニも相成可申ヶ共以致懸念候事ニ御座候

一御隣國且此方樣よりも二十人計奔亡人有之たる由公邊御聞込ニ相成御探之御手も入候由成程最初和泉樣御通行之前後之大ニ右樣之崩有之候處より相響たる儀ニも有之候哉共儀之重疊御世話有之候處より無雜無事ニ相治り候事ニ御座候

追而良之助殿御出府之上其筋ニ御應對有之候ハヽ、右躰之御疑も清解可仕相考申候

一魚住源次兵衛より差出候建白之書付差進不申候付而之萬端之事ニも御見込付兼候由御尤之御儀ニ存候右之佐田新兵衛被差立候時分一旦之御咄合いたし爲をも致出來候へ共京攝之模樣も右之面々より申出候迄ニ而一切相分不申時分之事ニ而右樣之書付御元御屋敷内ニ而仰山ニ取之やし候末ハ如何樣成唱ニ相成候而他に響キ候哉も難計と態と見合置今夏後悔仕候跡事ニハ相成候へ共則差進入御披見申候且又宮部鼎藏轟木武兵衛抔諸國浪人等虛實取交相唱候を致主張候處より不一方混雜ゝも至り申殊ニ破關之罪狀も有之其餘主立候面々之孰も御吟味之上屹と御咎をも不被仰付候而之向後御政道相立申間敷と御咄合有之候由至極御同意之筋ニ御座候乍然現實初發より之有樣を以相考候へ之直樣重キ御取扱ニ難相成候も有之候間重畳評議を凝候上如何樣卒至當之御取扱無之候而之相成間敷と申談候事ニ御座候

一御家中之面々今暫之間他所人と相交り不申樣との儀之最前より咄合候事ニ而尤御同意いたし候當時之一統之人氣先ヅ鎮り居候へ共右躰之儀御着座後いまた上より御教示と申程之儀も不被爲在候間此儀ハ奉願向後之心得方屹と御沙汰有御座度其節右之ヶ條も御取加被爲在候ハヽ大ニ御都合可宜哉ト相考候事ニ御座候

一備前樣御下り之儀之御沙汰之趣申達置候述ニ付究而早々御出立之可有之候へ共自然良之助殿御出府之一條御懸念ニ而御滯も難計候付先月十五日御書方御用有之屆飛脚被差立管ニ而一刻も御下着相待候段自筆相認夫々相渡置候處當朝ニ至り右之屆被差延夫成りニ立不申候間先月末之御飛脚ニ其儘仕出候事ニ御座候然處先月十六日比ニハ御發足之御心積ニ候由追而被仰越候間御迎之御船も其日積ニ而致出帆不遠御着とハ相考候得共方今世上如何樣之事ニ而御滯も難計萬ニ一ツ御狀着迄も御在府候ハヽ御國許前條之有樣ニ付急速ニ御發足御途中も成丈御差急之程希申候一躰之樣子ハ中々書中ニ難盡拜話を期候外無御座候

右之趣爲可申達此節之御飛脚中ニ而差立可成丈ヶ差急罷越候樣申含せ候事ニ御座候以上

六月八日　三淵志津摩

小笠原備前樣
松野豆樣

有吉膂監

六月八日在府本藩老臣松野豆書を藩政府に贈り長藩建白協商の順序を得さる點を指摘し且つ將軍上洛の利害を較量して徒に國力を疲らし紛擾を招くの虞ある旨をのぶ

〔尊攘錄諸家建白並御屆書等、文久二年、慶應元年迄自筆御用狀抄〕

以別紙申達候今度長州侯ヶ公義ニ兩度之御建白書爲備前殿御出立之前日清田新兵衛より相達候付直樣御持下りニ相成居申候處右付而之新兵衛申出之趣些不分明之儀も有之爲念長州御留守居之方承せ繕候處右御建白書之此節御使者を以被差越此方樣ニ御相談と申趣ニ御座候得之最前新兵衛口振とハ相違いたし御國之御覺悟筋ニも係候儀ニ候處公方樣御上洛之一條之初發何之御懸合も無之既ニ御建議相濟候上此方樣ニ御相談と申儀御主意些解兼候付猶又承糺せ夫々書取を以相達候間則右書取御建白寫兩通共差進入御披見申候然處御上洛之儀之既ニ被仰出ニも相成右付而之難有上意之趣等相伺深く奉感戴候事ニ御座候處何樣二百年餘廢絶之御大典を御取興ニ相成候ハヽ如何ニ御簡易と申候而も輙く被整候筋ニハ有之間敷其上各國疲弊之餘庶民之難澁ニ係候儀之眼前之事ニ付夫等之事情於天朝も深く被爲思召上此砌各別御仁慈之叡慮を以暫く御猶豫之勅命を被下候樣之御都合ニも長州ヶ御周旋ニ相成候ハヽ於關東之天朝御尊崇之御主意相顯從天朝之關東御取立之思召相貫則公武御合躰之基源を被開候のミならす君臣上下之分正敷四海萬民之悅此上之有御座間敷乎と恐考仕候右御上洛之儀之天下之御美事ニ付御建白之趣之定而可被遊御同意候得共寛急前後之時宜合等篤と御熟考之上何卒至公之御國議を被定御速ニ御返答被爲致度御儀と奉存候右ニ付最前御上洛之儀被仰出無之內於此許一ト通咄合之趣別紙書付自然之御參談之端ニも相成可申歟と共儲差進申候右之趣爲可申達如此御座候以上（付札欠）

和アリ

六月八日　　松野頁

懇　連　名　宛　殿

㊐右相印之處ニ付札

本文之通ニ候處勅使昨日品川より御着府ニ相成島津三郎様ニも同日程ク谷より高輪御屋敷へ御着之由左候得ハ此節御上洛之儀も勅諚之御一ク條ニ付從公邊之御請等且隣藩之動靜共成丈ケ探索を遂御國之御覺悟筋ニも相成候者猶急使を以得御意可申何様今度三ク條勅諚之趣ハ速ニ相窺申度儀ニ存候事

長州侯御建白ニ付江戸見込之書付

今度長州侯公武御合體御取扱之一件別紙御建白寫兩通之通ニ而其辭正く時勢相當之御論と感佩仕候然處公方様御上洛列藩豫參被仰付於京都衆議を集御國是を被定度との儀ハ天下之公論ニ者可有之候得共退而相考申候得ハ方今不穩形勢殊ニ各國疲弊之餘二百年來廢絶之御大典を御取興ニ相成候ハ、國家之衰耗人民之困窮無申計其上諸侯伯京地に會同之内萬一異論等も差起り候ハ、假令嚴譴を被加候とも其末如何様成御煩を引起可申哉も難測若於御膝下爭端を開キ候様ニも成行候而ハ却而被惱　宸襟候筋ニ相成於此儀ハ竊ニ危疑仕候事ニ御座候偽而反復勘考仕候得ハ此度長州侯御上京之節御親族之御内御一人御參内ニ而是迄關東之御處置筋御屆衆之處ハ屹と御斷被仰上即今關東御政事向御改革之機會ニも被至候付第一御國是を御議定被成度列藩に台命を下し各述白之趣を集於幕府御熟考之上猶閣老之内一人上京被仰付　叡慮御窺取　勅諚を奉し御國是御確定之旨列侯に被仰渡候ハ、人心協和御國威更張之機忽チ相顯可申此時ニ至爲御體諸侯伯を卒目出度御上洛と申御運ニも被爲在候ハ、公武御一和を奉祝天下萬歳を唱可申候右之通ニ候得ハ國力疲弊之餘たりとも衆心安堵し雙食壺漿して相迎候様ニ御座候ハ、御上洛も曾而難被行筋とハ相考不申候然ルニ於　天下も別東と御合體ニ而御國體御一新之　叡慮ニ可被爲在候得ハ此砌萬民之困窮を被思召上候ハ、是非御上洛を御促しと申御主意ニも被爲在間敷候得ハ於長州者既ニ東西之御内命を奉し斯迄御取扱之末ニ付今一際御丹誠を被盡猶得斗深重之　叡慮御伺幕府之御威光も不被墜海内協和御國威更張之思召相貫候様御周旋有之候ハ、勤王無二之御忠節天下萬民之幸過之申間敷と恐考仕候右御合體御取扱付而者最前長州より御懸合之趣有之候處於此方様も衆而御同様思召ニ被爲在候へハ諸事無御伏藏被仰談天下之事至當ニ歸シ候様御力を被爲添ニ而可有御座候處此節御上洛之一條者既ニ御建白ニ相成候後右之爲を以今更御相談と申儀寛急不被得止御取計ニ者可有之候へとも深意何程ニ可有之哉彼是御熟考之上筋と御國議を被凝至當之御處置被爲在度御儀と奉存候右者不容易御相談筋ニ而御答之品ニ因而者御國家之御榮辱ニも係候程之御事柄乘角を申上候儀萬以恐懼之至奉存候得共御參談之端ニも相成可申哉と此許見込之趣不閑前文之通申述試候事

清田新兵衛聞取書

長州様より餘計之御人數京師に參候様追々之風聞ニ付去ル十二日御留守居三井善右衛門に參候處同人儀御用ニ而京都より御國吉川監物ニ參り夫より長府之御末家迄立歸之積ニ而今朝放發足候との事ニ付小幡彦七と申類役ニ參而會仕差寄御人數之事承合候處追々ニ八拾餘九拾人近ク參居可申尤長門守様御入國懸ケ此節は京師ニハ御立寄なし之筈之處御道中ニ而京地物騷之趣御聞ニ相成思召ニ而俄ニ御立寄ニ相成候處即日京表物騷ニ付暫く御滯留ニ而御取鎮ニ相成候様御内々被仰出候趣有之先月廿八日より御滯京ニ相成居公邊ニも其段御屆仕候との事ニ付毎年御上下之節は御立寄御座候哉と尋候處多分御立寄ニ而兩三日ハ必御滯留ニ相成候との事ニ御座候

一御建白之末如何と相尋候處長井出京之節長州様爲天下御忠勤を被爲盡候段達　叡聞愈以御周旋ニ相成度且被仰聞候筋被爲在候間御出京ニ相成候様御内々より御書取被下置候間長井ハ御國之様ニ參り候筈之處直ニ此元之様引返候由夫より長州様ニハ武門之冥加無此上而目とて此上ハ乍不及公武御合體之儀先ヲ御内々可被成御周旋京師圖東と度々之御往

遂ハ其御麁儀ニ付何卒於公邊成行御見込を伺候上御出京ニ相成度段被仰入候處此上如何之手續可宜哉と御相談ニ相成候間夕様相成候上は公方様御上洛列侯ニも豫參被仰付天下之公論を集メ　勅諚を以國是御定ニ相成申度此儀御治定伺

付札
本行御上洛一條最前三井ニ承り候節ハ當時諸國疲弊之折柄ニも有之御上洛は不容易儀ニ付田安様御名代ニ而も可宜哉と長州様御見込之由承居候間其段も尋申候處根元御名代ニ而可宜哉との見込は去年長州様未タ御在國中之御見込ニ而當春ニ相成安藤様一件其他京攝之間之物騒彼是最早今日ニ至候而ハ中々御名代位ニ而ハ天下之論落着兼可申見込より公方様御參内ニ無之候而は難相濟趣ニ被仰立候由ニ御坐候事

候上出京可仕との趣伺御建議有之委細ハ備前様今度御持歸ニ相成候通ニ御座候夫より種々之噂ニ相成候内　主上ニも宇宙間之形勢當時ニ相成候而ハ鎖國ニ而參られ不申處ハ被遊御承知候得共鎖國々々と押懸置不申候而ハ武備充實士氣興張之期更ニ無之との　叡慮ニ被爲在候哉ニ内々承り候抔との噂も承り其日ハ先ツ是切ニ而後之御建白書面借用之内談仕歸候處其後小幡彦七儀私御小屋へ參り最前三井より應御目候書面ハ御建白之大意を認メ御相談之趣意ニ取縮メ候物ニ付此節全文之處も應御目候迚後之書面共貳通持參寛々噂候間私より今日ニ相成候而ハ御建白之儀貴上にも肯タ聞

付札
本行書付持參仕候而噂ニ最前長井雅樂を御國元ニ被差越候段御案内仕置候へ共同人儀何分ニも此元迚候儀出來兼別人迚も此一件ハ御用懸被仰付候程之事ニ而致關係居候者ハ難差出前後辨へ不申もの差出候而も無詮事ニ付此一段ハ取消呉候様との事ニ付其趣御内意申上置候處型躰ニ御相談筋取消と申様ニ備前様御聞通ニ相成候様近日ニ成承り全く申上様不來より之事と恐縮仕爲念猶問合候處別紙相添置候紙面之通ニ而御使者之場ニ而參候由對話之内御使者之場と申儀承り候覺之無之候得共今更致方も無之屆兼候文第重疊奉恐入候依而御使者之振ニ而申上候處ハ今度御書方ニ申談置候事ニ御座候右書面之内ニ御相談ニ成候振と有之候得共最早御相談之場ハ打過兩度迄御建議之も相成候を如何と猶又後日承合候處是迄追々御内話仕候儀御堅命ニ任せ無腹藏雜話も打混致御噂候間色々入交り御噂振りも不宜御不審も御尤千万ニ御座候然處公邊ニても事々朝夕ニ打替候とも可申程ニ而去ル十四日ニハ長井御呼出ニ而上御洛ハ何分御役々見込無之段御申故ニ相成去ル朔日ニハ御上洛と被仰出候位之事ニ而此儀ニ關係いたし居候者も時々氣取違仕候程之事ニ有之唯今之處ハ極々内場之御請ゝ而早く申せハ京師關東と御内周旋ニ相成居候處故御落中ニハ諸生迄も存寄申出尤ニ相聞候得ゝ御取用之筈ニ御屬ニも相成居前後左右如何様ニも參らゝ候様致置候處ゝ而屹度御請被仰上候後之調兼候へハ天下之物笑計ニ無之如何様之筋ニ成行候も難計　天朝幕府共試ニ御内周旋被成此處ニ而ハ愈以相調ひ可申と下地之御見込居り候へゝ其上ニ而表向之御請も可被仰上依而御名代思召も被爲在被仰下候ハヽ長州様ニゝ篤度伺被成御參考候思召之由ニ御座候段相答今度長州様御上京も公邊御用ニ而御出京ニ相成候様御内意もし有之候へ共夫ニ相成候得ゝ表立候との譯ゝて御願而之内暫致滯京御暇順年之儀ニ付直ニ致歸國度當時滯京いた居候嫡子長門守儀ゝ京都ゝ伺又直ニ御當地之様ニ出府仕せ度との趣ニ而其通ニ御願濟ニ相成候由ニ御座候事

へ候ものと相見へ人心穏候故よりして賊種々浮説も出來候ものと相見此間ハ大膳大夫様御登城ニ而御激論有之哉ニ認候物も見申候左様之儀被爲在候哉と尋候處且以左様之儀ハ無之尤此間一旦此一件御手を引レ候儀有之夫等之事ニも可有之哉と答申候間何故左様相成候哉と猶尋候處御建白一條去夏以來長井數度久世様始メ御役人様方ニも參り追々論談ニ及ひ候間御役々之腹ニも能呑込ニ相成候とのゝ存居候處此間ニ成久世様より何分此所ニ而　天朝を取繕先々開國丈タ　勅許願取候而は如何と被仰聞候間長井より其儀は何程ニ可有之哉開鎖は本之様ニ御座候へ共枝葉ニ而武備を整へ士氣を引立萬國海岸ニ日本防禦之事場取立候様成勢ニ相成度との趣意ニ申上候間大膳大夫本意ニハ叶申間敷何様ニも篤度可申聞と御挨拶仕引取翌日賊奎上仕委細ニ申聞候處是迄再應申上候儀は最早改而申上候ニ不及昨日被仰聞候趣ニてハ大ニ致相違候間建白一條ハ是切ニ仕二百餘年之御恩澤ハ此節乍聊奉報候間以後ハ一ト通之御奉公ニ參勤交代迄忙自國を堅固ニ可仕との趣被仰入候處左様ニ被仰聞候而ハ相談と申ものニハ無之とて段々御申譯有之積ル處ニ長井聞取違之様ニ相成共儀は取消と申ものニ而元々之通伺又御相談と申事ニ相成候儀有之夫等之響ニも可有之哉と答左候而伺

又噺ニ共後去ル十四日ニ久世様より御呼出ニ相成此日備前様ニ御約束仕候日付札此約束と申は備前様御小屋へ永井雅樂爲御咄合參候筈之處御呼出ニ付而斷來候也頃日之様ニ立腹致
付札備前様長井ニ御逢之儀度々申入候處病氣等ニ而共儀調兼候間避ケ候共ニ而は無之哉と疑居申候處本文之趣ニてハ實
病ニ相違無之共上御建白一件ニ付何歟故障出來仕旁今暫は出勤も仕間敷と類役より申聞候趣ニ而考候へは身分伺様
之事には無之哉と考察仕候事
し候而ハ相談ニ成兼候との御申譯ニ而御上洛之處御役々如何體ニも見込無之早く申せハ夫よりも軍艦大炮等製造之方
急務とも可申哉夫さへ御手ニ及不申位之御難渋之折柄ニ付御上洛は上策ニ相違無之候得共何分見込付兼候間先ッ尾張
殿御名代ニ而參内開國之　勅許願取ニ相成左候而來秋冬來々春迄之内御禮旁ニ而御上洛ニ而は如何夫とも大膳大夫殿
外ニ御見込共ハ有之間敷哉との事ニ付相應ニ御請申上引取段々衆議ニ相成候處公邊は此儘手を引候ニ支は無之候へ共
京都より御書取被下候後も長州様に度々御上京且御周旋之儀御内々被仰下候趣有之　叡慮之程も不奉伺此儘ニ打止候
而は奉對天朝深く奉恐入候譯ニ付御上洛之外ニハ幾度衆議を凝候而も更ニ見込無之候得共　朝廷之御内命も難默止候
間久世様御上京ニ相成候ハヽ御前後ニ致出京　叡慮奉伺候上兎も角も處置可仕段御内意被仰入候處去ル十九日久世様
より長井ニ罷出候様被仰下候處折節病中ニ而別人參上仕候處久世様ニハ御上洛御斷ニ相成候得共御同列様之御内いつ
れ御出京可被仰付候間其節長州様ニも被成御出京候様御内意被仰聞候との事ニ御座候
一今度　勅使下向之儀色々ニ風聞有之如何被成御聞込候哉と相尋候處三ケ條　勅命有之哉ニ承候旨一ケ條ハ長州様御建
白之通御參内ニ而國是御定ニ相成候様との趣二ケ條ハ豐臣氏之古事ニならひ海岸五ケ國之大名を五奉行ニ被仰付外國
之事御委任ニ相成候様との趣第三ケ條ハ一橋様御後見春嶽様御大老ニ被仰付候様との趣ニ相聞候處海岸五ケ國之大名
ニ五奉行との一件ニ至り　勅使御發京之際ニ成り朝廷ニも何歟異議ニ而も發候哉ニ而御病氣と申事ニ而御出立御延引
之御様子ニ内々京師より申參候との事ニ而二ケ條目は屹度確之建議ニ相違有之間敷とて一笑仕候
右之通ニ御座候追々ニ承候咄取集相認候處拙筆ニ而何分文意貫兼候間御推覽被成下委細ハ共都度々々御内話申上候通
ニ御座候以上

五月廿七日

付札本文五月廿七日ニ而候へ共付札之内ニハ六月朔日御參内被仰出候ケ條も有之候間追々ニ書綴六月初被差出たるもの
ゟて御座候事

清田新兵衛

長州留守居小幡彦七より清田新兵衛へ之來翰

尊帖被爲投難有奉拜讀候如貴論梅雨中ニ御座候處益御安榮被成御奉務珍重至極奉大賀候過日ハ御賞臨被成下候處早晩
御早々の至恐入奉存候陳者先日昇堂仕候而申上候儀付縷々被仰聞委曲奉拜承候右者長井雅樂儀共御國許ゟ爲御使者被
差越今般大膳大夫様御建白一條御相談も可被成との事ニ而先達中同人罷出候段御案内申上置候處彼是御用多に而乍御
不都合最前被仰進候雅樂を御差出之儀は御止被成度ニ付共儀は御取消被成下候様左候而御建白一條御相談之儀は全御
取消被下候様との筋ニてハ無之兩度之御建白書私持參尊公様御手許迄差上候間於爰元御使者を以御相談被成候振ニ御
取計被下候様奉願候含ニ而過日罷出候譯ニ御座候右様被聞召上何分可然御取成被下候様奉願候全體私罷出使節申上様
之不行屆より奉懸御疑太以恐入奉存候不悪御聞濟被成下候様此段罷出申上候笘ニ御座候處此節至極多忙ニ罷居早急罷
出兼候間大略乍失敬書中を以奉申上候萬々御容赦被仰付被下候様偏ニ奉伏願候先者奉復迄早々頓首

五月二十五日　　齊　拜

清田様

端書扣略之

初度萩侯御建白寫

近年外國より種々難題之中立有之様相窺且内地不慮之變も出來仕内外共御煩慮之御時節哉と奉恐察候勿論廟堂之御籌

略外向より可窺計樣茂無之御歴々之御評議御遺策可有之と不奉考彼是以事ゲ間敷申立候而者越俎之御譴責奉恐入候得共當時之勢皇國之御榮辱ニ相拘候儀も可有之哉と奉考候而者區々之鄙裏日夜難忘不得止無根之世論に茂心を留メ迂僻之議論兼々相含居候付不顧憚御内々申立見候世上之議論を取御政體に茂相拘候儀申立候而者猶更恐懼之至御座候へとも鄙誠之處被聞召分不惡御取計被成下候樣奉願候右申立度旨趣者先年以來度々申上候通待夷之御良策者公武御一和叡慮御遵奉ニ基き可申と數年相含候鄙見ニ御座候處過ル午年以來公武之御間御議論齟齬之儀有之樣ニ於世上奉窺計種々雜說紛興仕段々御手煩を茂差起し餘程御配慮ニ茂相成候哉と奉窺候竊ニ右事之所由を愚案仕見申候處先年外國に和交御差許條約御取替し相成候儀ハ元より無御據御場合有之候而之儀ニ候得共癸丑甲寅以來奮激之人氣一旦屈挫仕倫安之人情一日之無事を貪り終ニ一統退縮之世風ニ罷成御國體更張之期無之樣相成可申哉と氣節を負ひ慨志を抱き候ものは外夷之威ニ壓れ安を偷ミ戰を忌む俗情よりケ樣相成候儀と存詰猥ニ公儀之御處置をいかゞしく批判仕　叡慮之旨は鎖國之御舊規を御確守被遊候樣相唱へ破約戰爭之說を主張仕壯年血氣之ものゝ憤言激行を茂醸成し且又彼我之形勢を考彼之功利技術を味候者ハ開國之說を主張仕猥ニ彼を誇耀し我が固有之正氣を折き商賈貪墨之風に染漬し議論紛々兩端ニ分れ互ニ攻擊之形ゲなし人心恂々土崩瓦解之勢とも可申哉天下之勢合へハ强ク離れは張し此支離解散之人心を以て一旦有事時黠夷强虜ニ御當り被成候儀何とも御氣遣之儀と奉存候然るに右鎖國開國と申候者待夷之御大體ニ而關係重く候へとも其根本より觀候へハ是等は枝葉之說とも可申公武之御議論草野之可窺知事ニハ無之候へとも斯く枝葉之是非を以御違却之儀出來仕候筋者有之間敷哉と奉考候其故は能可守して是を攻め能く改むべくして守之候者兵家之常典鎖すこと能はされは開くへからす不能開は鎖すへからす若シ御國體不相立彼が凌辱輕侮を受候而者鎖も眞之鎖ニあらす開も眞之開ニ無之然れは開鎖之實は御國體之上ニ可有之御國體相立候得は開鎖和戰ハ時宜ニ隨ひ守株膠柱之儀ハ全有之間敷然るに又御國體被相立候基本と申候へハ大倫大義を明ニし天下之議論純一人心和協之御處置可有之哉右物儀紛々相起候本意を熟考仕候而茂公武之御間純然御合體ニ而御國體相立候外有之間敷種々雜說御手煩をも差起候者其末弊にて可有御座候付其源を塞き其流を御治被成候へハ御定鎖强而御手間被爲取候儀ハ有之間敷候往昔草昧之世と違ひ當御治世以來厚き御世話を以文教大ニ開け倫理世ニ明かにて君親を可崇事は三尺之童子も口藉く樣ニ相成候付是迄も聊無御疎御事ニ者候へとも天下之大經を被爲立候議は萬々御厚重に被爲在度事ニ付此時勢ニ當り候而者今一際天朝御崇奉之御取扱振世上に相顯れ候ハ、天下之人心感服仕右物議御鎖靜容易ニ相整御國體之基本茂相立可申哉右基本被相立候上者是迄開港和親被差許候者乍恐未タ枝葉之御處置ニも可有之哉ニ付速ニ開國之御大規模を被相立御國體儼然と相立候樣御國論被相定度御事ニ奉存候左候而御手を可被下候處ハ武備益御張興ニ而航海之術廣く御開き人々心膽を練り知識を發明する道ニ向ひ諸藩之情實熟知之上者彼か長るゝに足さる處を茂知り我か恃むへき良策も相立可申右ハ此非常之時に當りて中興之御大業を被爲立度御事ニは候得とも人心之折合方深く御案被爲在候由過ル巳年御沙汰之趣も有之制度御改め航海之術御開等之儀ハ疾く御評決被爲在今更當否利害等不及申上儀ニ可有之其後追々御沙汰之趣を奉窺候而も乍憚御趣意筋奉深察候然處今以御國内一統耳目一新仕候樣御沙汰振りも無之候者何と歟御深謀被爲在候御事ニ可有御座其段ハ可奉窺筋ニ無之候得共宇内之形勢ハ年序を追而相開候付今日之如ク御國論御變革之機會ニ臨候而茂自然之勢ニ可有之若舊習ニ泥ミ漸々時勢ニ押移され無據御變革相成候而ハ御手後れニ相成候而已ならす却而人心之折合方ニ茂相拘可申哉と深ク奉恐入候儀ニ付右御國論速ニ御決定相成候樣相願候儀ニ御座候右之通御合體之御取扱顯然と相成天下之人心奉感服御國體儼然之御國論被相立候ハ、定て　叡感茂可被爲在元より開鎖之體に御泥ミ被爲在候儀者有之間敷候付何卒　叡慮より被爲起右御國是之旨　勅諚を以被仰出右を御遵奉被遊台命を以列藩に御沙汰相成候ハ、條理判然人心彌感服仕退縮之氣一旦進張に相改り倫安之陋習も奮發仕神州億兆之人心一和一團之正氣と相成前段種々之物議茂氷解仕毫茂内顧之御忠無之御國威凛然五大州に相振候御大業茂成就可仕哉と迂僻之私見ニ御座候右者始より御廟議之上ニおひて大海之涓滴とも相成度心懸候ニも無之候得共數代無限御寵命を奉戴御恩澤身ニ溢れ居候付兼々報効之心得ニ罷在不圖時勢ニ感發仕不顧僭妄申立候者只々野芹之味進獻仕見度區々之鄙誠不惡御亮察被成下不

都合之儀茂御座候ハヽ、御問捨被成下度重疊奉願候以上

二月イ　　松平大膳大夫イ

二度目萩侯御建白寫

外夷鎮撫御國威更張之御處置ニ付而は乍憚公武御深意御合一ニ被爲成速ニ御國是を被成御定海内和協御武威海外ニ輝候樣被仰付之外有御座間敷存付越組之罪を不顧鄙意申立候處獻芹之微志不被捨置深重之御内慮被仰聞御誠意を奉感戴微志彌增不得止於京都堂上之御方々迄前段之旨趣内々申上候處恐多く茂被爲達　天聽今般私儀上京仕候ハヽ御沙汰之旨も可被爲在由御密旨被仰下冥加至極難有仕合奉存候依之猶又熟考仕候處不得止次第とは乍申私式外樣之身分として直ニ奉汚　天聽候段甚奉恐入候筋樣之儀自然列藩並草莽志士承及天下之公論と存付候事件は公儀を差越直ニ朝廷ニ申上候而不苦樣心得違自己之了簡を以每々上書なと仕候樣成行候而は識見之所及人々小異有之可奉惑　天聽猶又神州之御國落體は鎌倉以來幕府を被建置候付列藩以下直ニ奉汚　天聽候而者其事之得失は論迚無之幕府を輕蔑仕候筋ニ相當御威光不相立候幕府御威光不相立候而者列藩各　朝廷を戴き　勅命を乞請幕府を要し終ニ群雄割據之勢を釀成し海内分裂天下之公論も歸着する所無之却而外夷之侮を招き御國威彌及衰弱可申候乍憚將軍之御職は上　朝廷を御敬戴下列藩以下を御鎭壓天下之公論を被成御總括候而　叡慮御遵奉禦侮之御手段被成御行屆候樣可被爲在段申上迄茂無御座御事ニ付今般公方樣御上洛御國初之御先蹤を以列藩豫參被仰付當時御初政ニ付天下と御更始之思召を以御國是如何被相定候而可然哉各存意申出候樣被仰聞列藩建白之旨趣御熟考　叡慮被成御窺　勅諚台命を以御國是御確定之旨列藩に被仰渡候ハヽ衆心和協御國威更張之御發端過之候樣は有御座間敷と奉存候萬一豫參御斷申上候か或は御國是御確定之旨違背仕候者有之候ハヽ　勅諚台命を蔑如仕候儀ニ付無據嚴譴被仰付候共申分有之間敷奉存候篤と御評議之上御内決之旨被仰聞被下候ハヽ、私儀速ニ上京仕御趣意之大要申上ニ而可有御座候重大之事件容易ニ申達候段千萬奉恐入候得共神州御安危之境此一擧ニ有之御事且最前深重之御内慮を茂被仰聞置候儀旁ニ付不得止申建候儀ニ御座候間不悪被聞召分可被下候以上

文久二年戊五月

〔長州樣御建白筋御相談一件〕

六月八日　　河口より

藤本　安田ニ

長州樣より御建白書寫二通り（初度御建白一册　二度目のは繪紙）先日被指越候右者清田より追々懸合茂有之候末ニ付右ニよつて參候ものと心得ニ相成候處御用狀之通御使者を以御相談被仰進候儀ニ御座候間御返答之儀被仰付越ニ相成候樣可被仰談候尤最前御使者演述相洩候歟に而跡違而賴談申來候由委細者書上之通御座候右ニ付彼方樣より被指越ニ相成候間御書方ニ寫置候を此節差上申候御差上之節之御都合何程ニ可有御座哉備前殿ニ茂御相談とハ不被存持參ニ相成居申候且又長井雅樂御國に可被指越御懸合者もはや取消呉候樣長州樣御留守居ゟ清田迄申越候紙面者清田より宍殿に差出ニ相成申候間此節之御便ニ御國に仕出ニ茂可相成歟全躰御相談と申儀不相分候付差寄先月廿七日之御便ニ可指上と申談候處右之書上迄ニ而者御相談被仰進候御趣意不被致了解候間指上候而も御返答之趣御疑惑茂可被爲左と御奉行機密間抔より茂咄合之趣有之差延置清田ニ者御家老衆より含ニ相成長州樣衆に猶御趣意聞合其外之儀共承取ニ相成此節致出來候書取御家老衆より可被指廻と存候以上

六月上旬幕府内田恒次郎榎本釜次郎澤太郎左衛門赤松大三郎田口駿平津田眞一郎西周助等に蘭國留學を命ず

文久二年

〔文久二年四月ヨリ京都大坂鶴崎長崎　返達御用狀扣〕（七月五日長州より佐賀關役に御當番方ゟ相渡候御書付とて廻狀差廻來候もの也）

御小姓組　　吉澤源次郎弟
小栗豐後守組　　赤松大三郎
御軍艦組出役　　久世大和守家來
小普請組　　田口駿平
柴田能登守支配　　松平三河守家來
圓兵衛次男　　蕃所調所出役教授手傳
奥火之番　　津田眞一郎
太八郎悴　　堀田鴻之亟家來
澤太郎左衛門　　佐波銀次郎厄介
御先手　　西周助
三浦美作守組與力　　諸職人
右者今般和蘭陀國に御誂蒸氣船登艘製作中諸術研究として被差遣候ニ付咸臨丸に乘組去月上旬江戸出帆いたし候旨申ノ來候間爲心得相達候　　八九人
戌七月

六月九日京都所司代酒井忠義大城城代松平宗秀江戸へ歸る

〔採薇錄〕

一六月十三日京都諸司代酒井若狹守御奉書到來五日之支度六日之道中是迄ハ作病此度ハ本之病氣家老斷レ六月九日關東へ下向之よしゟこ引大將大評判惡し　本ノマヽ

一大坂城代丹波宮津松平伯耆守御奉書到來六月九日伏見通行關東下向其後評判不分

一諸家樣御人數追々御上京之噂

一九條關白殿入道して鞍馬之奥ニ隱居のよし

一會津侯御斷之噂御人數少々三條通り宿屋へ御上京いたゞの事也

一長州屋敷河原町二條下ル近隣町家御買得ニ相成近日御普請取懸り加州屋敷同斷一昨日當り方外かこひ御普請取懸り

一其外洛中洛外寺院大地者諸大名方加州始中國九州四國關東皆々御請受最早御本陳ニ相成候樣之寺一ケ寺茂無之是ハ將軍御上洛之御手當之よし

六月十日勅使大原重德勅諚の旨を將軍家茂に傳達す

〔撥反雜記〕

一書曰大原卿去十日江戸ニ而將軍家御對顏之御左右今朝有之候由只今薩邸より申來大概左之通ニ御座候先將軍樣へ御對顏ニ而　勅命御傳之處御敬承ニ而御取調御受被仰上ヶの旨十一日於御白書院御老中御對顏何れも御同樣之御受其中ニ而脇坂樣ハ申はりゟミ有之少々御話も有之候扨越前老公へも御逢ニ而　勅命御傳可相成旨被仰述候へは御出坐ニ而御傳之所御落涙ニ而御敬承いたゞを御殊勝ニ見へさせられ候由越老公へは三郎殿も御面會有之たる由先右迄以上六月廿七日夕

〔文久二壬戌雜記〕

六月十日御仕出後同十一日追懸御仕出御狀寫

昨日本書ハ相認メ品物一同仕出置候處肝要之書付一通落し候間追懸平川に頼申候先キ之二通此建白共（此建白書ハ先便御仕出ニ而再御仕出）なニ熊谷ニ見せ候而學校に遣し夫ゟ小島等にハ辛島ゟニても廻し申候樣頼入候此節　勅使大意は一ニハ　將軍家御上洛諸侯豫參此建白通り二ニ者海邊ニ五大老を建海防之手當ト致候儀（或說ニ西國ニ而ハ薩州四國阿州中國長州北國加州東國仙臺ト云）三ニハ一橋樣御後見越前老公御大老ト云此儀ハ此間之取沙汰ニて　勅命ト云譯文之書有之森井ゟ居寮抔にハ遣候樣子ニ候得とも些ト疑ハシ其文ノ末ニ蓋欲使幕府選三事中之一以行也ト云文言ゟり是下ゟ上ニ奉ル文言　勅命と云ゟゟらす若又此書實ナラハ京師も至而手弱キ事ニて左のミ御心配ニ不及候且又文体　京都詔勅之趣ニゟらす定而所々ゟ付廻しも可有之得ト勘考有之度一通り申遣候昨十日　勅使登城爲有之由承り四五日内ニハ樣子分可申屆等も立可申尙其節可申越候以上

六月十一日　　呈

忠　三　郎　殿　　助

尙々此紙面も添見せ候而宜敷候願曰追々之書付跡ニ而も一々扣止メ置可被申候（※所謂本書は六月七日の條に出つ）

六月十日姫路藩主酒井雅樂頭京都取締として上京す

〔元治夢物語〕

又東武ニハ此節上方ニ浪士蜂起セシヨリ彼是騷々敷聞エ有ケレバ閣老（ホノヤ）姫路侍從忠績朝臣ヲ京都取締トシテ上京セラルヘキトテ同十八日東武ヲ發シ六月十日入京セラルトイヘトモ既ニ勅使大原殿モ東武へ下向有島津家ニハ供奉セラレ毛利家武威ヲ輝シ京師ニ滯留在テ朝廷守護ノ如ク朝威ノ盛ンナルハ殆ント朝日ノ昇ルカ如キ勢ニテ幕吏何レモ畏縮シテ見エケレバ姫路侯モ按外ニヤ思ハレケン京極妙滿寺ニ在陣シテ潛居ノ如シ

〔佐々文書、撥反雜記〕

姫路樣言上之書取

今度當表へ立寄御取締之儀當分相心得候樣被仰渡候ニ付上京仕　都下之形勢永及候處邪正混淆俄ニ難相辨候得共萬一蠢計相巧不軌相企之徒有之候節ハ乍不及奉朝命誓而回顧不仕ハ勿論加之役筋之者心得違等之儀有之御沙汰ニ候ハヽ筋々へ幾重ニも談判可仕自余形勢ニ隨ひ勘考仕度覺悟ニ御座候已上六月酒井雅樂頭

六月十一日在府大野鐵兵衛は將軍上洛勅使着府長井雅樂謹愼及び東禪寺騷擾等につき在國同志に通信す

〔永鳥文書〕

方今俯仰乾坤を觀るニ霧雨新晴　日輝明赫ふる事ハ不待贅言德川之流も漸澄清之時節ニ臨ミ　皇圖復古之機會到來是偏ニ　神祇感應冥護之然らしむる所ニして　天孫盛德誠精之所致ふり是誠ニ千載一遇機ニ〆不可失之時也仍此機投し斷然彼ゝ拒絶せハ彼假令百千萬之軍艦を率ひ攻來共禽群獸散之弱兵不足汚霜鋒徒手ニ而も撥ミ挫き塵殺するゟ氣勢ニ御坐候乃口乃すさひニ

若葦をとるゟことくニ夷戎等を撥ミ挫ゟん時ハ來向ふ夷狄等ゟ蟻乃群ふす弱軍徒手ニとて撥ミ挫ゟ舞

委細ハ風說書ニ讓申候當時御國論ハ如何歸着仕候哉最早公邊迄も右之通之氣込ニ御座候上ハ暫時も猶豫するき時ニ無之智謀雄才之諸執事達歷然として有之候得ハ臨機投會決而遺策ハ有之間敷候得共唯願くハ今之中諸民耳目を一新致候樣之御仕向有之度杞憂之餘り不耐渴望候其他情緒萬端ニ候得共非謁不能盡まつハ　勅書且風說書等呈上仕度如此御坐候恐々頓首敬白

文　久　二　年

六月十一日

奉呈

歸山大人（永鳥三平）

其外

諸君子

玉案下

樣樣之本

小子（大野鐵兵衛）

風說聞取書

一將軍家上

洛之儀一旦ハ俗說紛興迚も行レ不申勢有之越前公ニ之唯々隱默兎角之一言も無之御胸中之御苦心不一方一時衆說排却被遊度ハ思召候得共萬一共議不相立ニおゐてハ又々姦徒之勢を增候而已ニ而却而無益のミならす御一身之進退ハ將軍家之御興廢ニ關係致候得之御心中容易ニ之吐露難致迚種々御配慮ニ相成共折を御見合ニ相成居候處或時將軍家政府へ御出座被爲在候時幸ニ右上　洛之儀衆議一決難仕如何仕候而可然哉　天朝之思召ハケ樣々々外諸侯存意之ケ樣々々と委細言上ニ相成候由之處將軍家仰ニ之何そ此等之事左のミ及永愈議ニ哉我等上　洛さへ致候得之相濟可申事ニ付成丈至急ニ共手數有之樣との事ニ而案外之上意ニ付越前公之御喜之余り感涙數刻ニ被及候由依之俗說忽相熄當時專ら上洛之御催有之既ニ長州侯幕命を以去六日當地發足上　洛ニ相成君臣共競之躰ニ相見申候

一長州公發途之前日藝州侯へ御直筆を以何歟被仰越候由之處藝州より國元迄五日限之脚力を以被申越候由如何成事ニ乎封之儘ニ而候得之一向相分不申由ニ御座候

一將軍家越前公を親のことく御慕被遊越前公之御一言といへハ何事ニ而も御聞入不被成事ハ無之由依之越前侯も深ク御感激ニ相成益御負荷被爲在御政事向等段々御引改ニ相成此節賄賂抔一切御差停ニ相成逐日姦邪退キ正義進之勢ニ有之大分賴母敷世の中に相成申候

一酒井若州抔御召返ニ相成候由ニ而跡役之間部下總守ニ被命候御模樣之由此人ハ既ニ奉對　天朝不敬無禮之罪有之人望を失候人ニ候得之如何可有之哉近頃ハ改心ニ相成候由申候得共全躰時勢へ阿順する人之賴ニ之相成申間敷誠ニ危き事ニ御座候當時暫之處ハ姫路公被相勤筈之由ニ而既先月廿九日上　京ニ相成申候

一寺社奉行巨奸石谷稻葉守役儀被差罷御老中內藤侯も同樣之由御座候

一奥祐筆之姦賊河田寬之助爪木民也兩人も右同樣可賀事ニ御座候爪木ハ先達而下谷邊ニ而誰共不知馬ゟ引落候而散々打擲致或ハ土足ニ懸或ハどぶニ蹴込思ふ儘鞭撻致候而追放候由ニ御座候處鼠の逃る如く逃去申候由誠ニ〳〵愉快成事ニ而堪笑ニ事御座候

一去朔日將軍家上意之趣迚役々へ御書附御渡ニ相成候由其書附ハ未タ手ニ入不申まつ其御趣意ハ第一　叡慮御遵奉　公武御一和夷賊御攘逐被遊候而　皇國を全世界第一之强國ニ被遊度抔申御文言有之大分　皇國ら敷相成何之幸ゟ加之實ニ以可欽事ニ御座候

一將軍家御幼稚之時ゟ殊之外諸鳥之聲音を被爲好依之平常御翫物之ゐるゟ中ニも鳥類ニ而有之たる由ニ候處此節之夫等之玩好一切御遠ニ相成嚴敷奢侈を抑へ質素之風御返シ被遊度との事ニ而第一武事を御唱ニ相成御旗本抔切々御召出ニ而武術試合御上覽ニ相成御旗本抔之全躰是迄太平ニ狎レ武藝抔ハ無用之物と相心得居候人而已多く大分迷惑有之たる由ニ御座候併夫等之人ハ只々見物致候樣との事ニ而何レも失面目赤面不寞候由ニ御座候依之近來ハ御旗本抔ニも大分振ひ立候氣勢ニ御座候由將軍家さへ如斯之通候得之御國抔も不失此機今少本氣ニ相成候樣御仕向有之度事ニ御座候

一去七日　勅使大原殿品川之驛ゟ御到着ニ相成御供廻之拾人計皆薩人ニ而屈竟之壯士ニ而御座候未タ御登城之御模樣之承不申候

文　久　二　年

一島津三郎殿も右同日川崎驛ゟ高輪邸へ到着ニ相成些遲刻ニ及御行列拜得不申遺憾此事ニ御座候供廻大刀以上千人程も有之樣相見へ皆々屈竟之壯士計ニ而千萬軍をも挫へ申猛勢有之見物之人も何も目を驚嘆賞せぬものハ無之誠ニ〳〵義勇事ニ御座候翌日直ニ　勅使御機嫌伺として傳奏屋敷へ來訪有之たる由御行列金紋先箱君侯同樣ニ而御座候

一永井雅樂於京師上言致候趣長州侯之御旨意取失ひ奉對　天朝不敬無禮之上言致候由ニ而當時鐘責を蒙り差扣居申候右永井上言致候後家老浦靱負上　京致候處或堂上方名前失念より雅樂の上言之趣ニ而之惜らくハ太膳太夫誠實些貫不申とのの儀　叡嘆被遊候段具ニ御咄ニ相成たる由依之俄ニ桂小五郎へ上　京を被命右永井ゟ失念を取繕且君侯之前驅開道之爲京地周旋仕候樣との事ニ御座候由永井滯　京中所依非其人先達而得御意置申候幕奸狩野戚加納共いふ繁三郎と始終事を談候由殆國事を誤らんとす危キ事ニ御座候

一三郎殿之所行公邊ゟ大ニ疑念有之若　天朝を名として實ハ私家を營之深キ所存有之事ニ而ハ有之間敷哉と密々間者を以探索有之由此間ニ疑惑相生候而之內亂之基ニ相成由々敷一大事ニ及可申如何相成可申哉竊ニ嘆息仕居申候事御座候

一先年櫻田一亂之後ハ內櫻田之通行堅御制禁ニ相成居申候處此節平常之通ニ相成申候

一一橋卿西丸へ御乘込ニ相成候由承申候

一和宮樣ゟ　京師追々御密啓被爲在候由將軍家御英邁も內實ハ余程　宮樣御介助之御力も被爲在候樣被察申候

一彥根ハ又々先日上　京致し此節ハ　京師警衛之爲ニ而御座候由

一鹽谷甲藏安井忠平抔將軍上洛之儀於當世之國家困乏を招之基ニ而不可然抔いふ說を唱候由腐儒之見皆同一般ニ御座候

一當時儒者之中別途廢帝家と唱候學者有之專ら左樣之事を委曲ニ探索いたし居候者有之よし何卒其名を記置候而後日之血祭ニ致申度事ニ御坐候

一去三日板倉侯夷賊御應接有之例之通履を踏ゟから上り候ニ付履を脫候樣申聞候得共是迄安藤侯ニ而如此仕事候のミゟらす國法ニ而御座候間脫不申との儀返答致候ニ而成程其方國法之可然候得共　日本ハ禮義正敷國柄ニ而左樣之不作法之儀ハ決而不相成國法ニ付是非共脫候樣無左ハ此方ゟ應接を望候譯ニ而も無之應對ハ不仕候ニ付引取候樣申聞候處然ハ迚脫候由然處御應接間取被是安藤侯之振合ニ大ニ相違致曲來抔之設も無之候ニ付大ニ不滿意之躰ニ候得共不及是非應對致候處對話之中何歟氣ニ入らぬ事ニ而も爲有之哉甚立腹之躰ニ而暇をも不乞座を立候ニ付忽左右より押留ゑ不敬也無禮也元來其方ゟ應接を願出候ニ付御應對ニ相成候處未タ其談話も不盡且引取候ハヽ夫々引取之禮を施候而退出可致ニ左も無之無禮之振舞於有之ハ決而返し不申迚引留申候處又本之座ニ復り對話を終へ夫々禮を成候而退出いたし候由板倉侯ハ余程頼母敷人ニ而御座候

一御殿山之方も當時又々御取止ニ相成どふ歟此節ハ御斷ニ相成たる哉ニ風評承申候近來ハ夷賊共股肱之忠臣と相頼申候安藤家久世家抔退役ニ而大ニ落力段々御應接振等已前と相變候彼是ニ就而嘆佛抔大ニ懷不平軍艦ニ而も差向申さん哉と評議有之由ニ御座候

一先月廿九日夜半計之頃俄ニ太鼓打立物騷敷候ニ付何事ゟらんと存居候內半時計過候而町方之釣半鐘を打人數を探出し大ニ騷立候得共出火ニ而も無之何樣夷館夜討ニ而も有之ゟらんと存段々承申候處全夷館之騷動ニ而夷賊貳疋曹疋ハ中官曹疋ハ下官之由或ハ貳疋共下官共いふ殺ゟ殺ゟし家ニ歸り書置抔相認切腹を遂申候則御屆書別紙之通御座候右ハ兼々夷賊之凌辱を蒙り候のミゟらす土足ニ而頭を蹂候由依之不堪憤怒朋友抔ニも相談いたし是非此恥辱を雪得すハ再ひ不相見逆誓言を立日夜透を伺ひ居候處幸其夜時節到來ゟし遂志願候由此節之事ハ重疊彼ゟ理前不宜候ニ而格別怒り不申共返報尤之次第位ニ申候由

右之通ニ御座候一覽之後御投火勿論之事ニ御座候已上

六月十一日　認

六月十二日宮部鼎藏書を永鳥三平に贈り本藩政府の近況江戸よりの通信等を報ず

〔永鳥文書〕（憂國遺音）

御一覽之上御火中可被下候亂毫御推讀奉希候

此間ハ態々大三郎御遣し御手簡被成下忝々捧讀仕候先以頃日者叅趨寛々拜晤大慶之至奉存併毎々不怪御難題ニ罷成恐縮仕候爾來御頭痛ニ而御難儀被成候由其上御家内樣方流行之痳疹被成御煩候由嘸々御困り可被成併最早彌以御全快と奉存候附而御約束之草案御認メ難被成旨承知仕候然處爰許政府之惑亂定而被成御聽取候哉南方米家一同辭職願尤米家之願ハ近日御留メニ相成居候由朽木家も同樣辭職長岡與三郎殿ハ病死何樣當節之模樣南黨米黨分爭之世界物情騷然君上二公子之御苦惱唯々奉恐入候事ニ御坐候附而者上言之儀も何程ニ可有御坐候哉方今之勢ニ而ハ所謂不和國不可以出軍ト云有樣と被考實ニ痛憤之次第御坐候併去ル四日京師ゟ早打之飛脚到來（中國路四日限り宰領付キ）右者薩の和泉殿（三郎と改名之由）先月廿二日　勅使大原三位卿一同出立關東ニ押懸ケニ相成若久世侯列上京ニ相成道中ニて行逢ニ相成候ハヽ直ニ江戸ニ御引返し於同所　勅諚被爲在若御請難成儀も候ハヽ有志之諸侯へ被　仰付夷狄を御誅戮被遊候　叡慮之趣右之儀萬事島津三郎を賴思召候旨長州者若殿方と當侯方と議論齟齬いたし（當侯ハ毅若殿ハ急）居候由又別ニ子細も有之候哉賴思召されを候由（鍋嶋上總介常胤ヲ祀退ケシヲ飼孫用カ）附而薩ニテハ島津一郎（都ノ城預リ島津播磨此節改名）滯京其上程ニ寄島津圖書ト云者を國元より呼登せ可申此者ハ國中一統心服いたし居候ものニて若出　京仕候ハヽ國中彌以相競ヒ多人數罷上り可申然シ少々氣荒キ生質ニ有之候間自然ハ强義之致方ニおよひ不申歟と被存候段屆方も爲有御坐由何樣一体至極手强キ仕懸ケ之由青地源右衛門ゟ委細聞取書差出し尤稲岡愼之助方ゟも委く申越ニ相成候由隨而政府之議論も無程動キ申候哉ニも有之候へ共未タ俗論勝チニて寸斗捌ケ兼申候趣併緩急ハ難計候へ共無據正義ニ歸し可申歟今暫く樣子ヲ睨居申度相考申候右之次第極々内密ニ承付ケ同志中ニも告ケ不申位之事御坐候間御令兄樣御父子ニ者格別其外一切御口外不被下候樣くゞ〳〵願置申候尤深藏君御出府ニ相成候而も同志中ニ御話無之樣御申向可被下候其外奉啓度儀も海山御坐候へ共何も難盡短毫先右貴答旁早略如是御坐候頓首拜

六月十二日

增實拜

歸山老兄

梧右

尙々頃日之御禮御家内樣宜々御鶴聲奉願候以上

六月十六日島津久光書を閣老脇坂安宅に贈り一橋慶喜松平春嶽起用の必要と將軍上洛の急務に非ざる所以とを說く

〔投筆餘稿〕

島津三郎贈閣老脇坂淡路守手簡之事

先日者舊來御親睦之一筋を以御役御離れ御面會被成下別而忝次第奉存候殊ニ隨貴意存慮無腹藏申述候處何分御異論無之安堵致候夫ニ付尙又熟考致候處何れ天下之御爲と借躊之罪を不顧存案之趣申述候間御都合次第御同列方へ御談合被成下度奉存候

一此節　叡慮之趣被爲在久世氏御上京之儀被仰出候處御請及遲滯候ニ付不被爲得已事

勅使被差下公武御一和御國内一致之處無之候而者不濟と　思召就而之一橋越前兩侯天下之人心歸向ゟる所故御後見御大老ニ御登庸有之候樣との御趣意誠以恐悅至極之御事と奉存候然處先日組御咄致承知候得者名目之所御評議甚六ケ敷由其節ハ愚意何とも不申出態と差扣罷在候得共退而致勘考候得者存付之儀致默止候而は却而不宜と奉存不得止事申上候遲遲　勅使被差立被仰下候御趣意縱ニ名目計ニ被爲拘御評議御決定無之候而者乍恐優柔不斷と可奉申歟當時不容易折柄舊格先例ニ御拘泥被爲在候而は以之外之御大事と奉存候ケ樣御評議御遲延相成候てハ又々人心疑惑ゟ生し異說紛々致流行浪人共蜂起いたし候儀も可有之哉と甚懸念至極ニ奉存候若其次第ニ相成候而ハ御國威御挽回之期も被爲在間敷と實ニ恐入奉存候何卒非常之時節御出格之譯を以一日も早御評議御決定　勅諚御遵奉被爲在候樣伏而奉希上候尤一

橋君御後見之儀ハ近比田安君御免ニ相成候故際々之處如何との御評議ニ奉伺候御尤之御事ニは御座候得共不容易時節被爲惱　宸襟態々勅使被差立被　仰下候御事ニ御座候へは快く御請被爲在候ハ、　公武御一和之實情ニ御通徹被爲在候御儀ニ而天下有志之人心も此一條ニ奉感服御國家御安泰之御事も御座候ハ、御大老同樣御政事總裁有之候樣屹と被仰渡一統へも右之趣承知仕候樣御達被爲在候ハ、御國內靜謐人心一和ゝ罷成無此上御美事と恐ふゝら奉存候

永井雅樂當路之時也

一長州之事粗申出候處御答振不分明致承知候此儀ハ先頃脇方より當正月二日大膳大夫より之上書落手仕虛實ハ難計候得共愚意聊疑惑いたし候御上洛之御一條ハ實以寛永以來之御盛擧ニ而申上候迄も無御座御事ニ御座候得共先日も粗申上候通何そ當年不被行候而ハ天下之人心紛亂仕候ニも有御座間敷來春より先々ゝても被爲行候ハ、可宜歟と奉存候貴公樣ゝも其御趣意と致承知候然るゝ長州は頻ゝ此儀催促申上候委ニ相見へ甚心配奉存候方今之處ニてハ　勅諚通り越侯御登庸之上當秋上京被命候故外夷御處置國是之御評議言上有之　叡慮御伺相成方可然と奉存候急速ニ御上洛被爲在候而御道中宿々及逐惑且於京師種々御評議決兼候御事共被爲在候ハ、以之外之御大事却而　皇國紛亂之基歟と乍恐奉存候大膳大夫爰許ニ罷在候ハ、小子面會致直談候所存有之候へ共小子着を乍存道々替前日發足之次第何共不審千萬心底難計御座候長門守出府之由ニ候得共家督ニ無之候得は決兼候儀可有之候付相成事ニ候ハ、只今之內大膳大夫再致出府候樣被仰出小子深厚談合いたし候樣被仰下候儀は相叶申間敷哉左樣御座候ハ、趣意致一致　公武之御爲別而可然御事と奉存候右之趣意家督ゝても無之身分ニ候得共亡兄遺言之一筋有之不得止事不肖之身を忘れ存慮十分申上候間若忌諱々犯し僭踰之罪御糺し有之候ハ、何樣ゝも可奉畏候此節國許發足いたし候刻身命を拋　公武之御爲御周旋仕候儀敢而功名榮利々貪り候趣意ニ無之　公武御一和御國內一致ニ相成候ハ、愚身ハ如何樣被成候而も曾而遺憾無御座候此趣深く御汲取被下度奉伏願候以上　六月十六日

脇坂淡路守様　　島津三郎

六月廿日勅使大原重德書を中山忠能に贈り長藩長井雅樂謗詞事件自己歸京の期限及び長薩の關係等を報す

〔撥反雜記〕

益御擾嫌能恐悦候隨而愈御清康恐悦候然者七日之御文十七日朝屆拜見候岩へ之書狀御覽御安心之旨於拙子畏存候別ニ文不上恐入候扨御示之長州大之上京之事專ら上洛之事勿論ニ候併周布ニ承候得者夫計ニ而者無之由彼謗詞ゝ似寄之一件之由ニ候全体上京之事を申立居候內中タユミニ相成先夫ニ任せ居候處同も申居候得共失念仕候謗詞之一件聞へ參り御懸念之由甚心配いたし候者ゟ急ゝ暇を賴上京致し其子細可申承との存念之由ニ申居候當月廿七日頃ニ者大膳大夫京着ニ可相成歟周布を昨十九日出立當月中ゝ者京着と申居候且又謗詞之一件甚心配之由申居候ニ付長井者如何ヤ尋候得者蟄居之由ニ申候間夫さへ出頭ニふくハ夫で宜ヤ申候是ハ先便ニ申上候樣ニ候へ共爲念又申上候　御用談ヤ申て世間咄も致申候得共上洛一條とんと咄無之候一橋越御沙汰之通勿論候越前過日申上候通政事總裁職ニ而御請ゝ相成一橋今少しムチヤノ〳〵申今日迄埒明不申候へ共何ゟ埒明候事勿論是をできすニ歸京相成不申三郎頻ゝ催促ケ樣ニ延々候得之又他之浪士ども如何可發哉も難計天下有志之氣合ニも拘り可申と申越候得共今少者ユルリトナケネハ成間鋪存候事ニ而候併此次ハ是非々々御請之處へ談詰候心組ニ候併無理者申さぬ積必御安給問敷候一越拜承之上大樹上洛ハ何ゟ可然島津申居候得共小子多ハ來年ニ而を遲ゝらぬ車越前上京之事當秋中ヤ申越候扨如　勅命御請之上當秋中越前上京之事可申聞ヤ存候處三郎脇坂面會之砌ニ手前何迄在府まる積と被尋候故ゝ越於御請之上ハ當秋中上京之事兼而御沙汰有之候共上京之砌又上京可致蒙　御沙汰有之候故是頃まて居ヤ申タト咄候間脇坂も承知之事ニ候間未表向御受ゝハ無之候得共乍內々正ナル御請之事故內々當秋中越前ニ上京可致御沙汰も有之候由申聞置候事ニ候十九日之節可申上候之處書落之故則申上候且又長薩之間誠に心配之處薩之着前ニ發足三郎文ゝ有之候通其心難計ヤ有之候樣之事ニ而不審ニ候併小子ハ老中へ　勅諚待候よりも實は心配此事ニ候處大助り誠ゝ天助ヤ手の舞足之踏處を不知大悅此事ニ候付而者貴卿を被始御安心之筋ニ候早く申上候樣ニ覺候得共又長之望を失候との御文言ニ而更ゝ存出し言上候實は大安心ノ〳〵仕合申述樣をふく候長門守

又出府之由薩文ニ有之候姫路相國寺丸借之由薩ゟカラルヽトハ迷惑筋ゟ一吹候石州ハ實ニ氣毒千萬ニ候酒井若狭守御暇を不參出府も理之由大心配之處其くらひも可宜候當地ニ而者とんゝ沙汰不承候七日陽明公御内意之由恐悦何事を可被相改恐悦申上候扨存出之先日出立掛ニ三條殿へ以書取申上儀如何被爲在候哉幕も段々相改り候樣子ニ候間朝廷も御新政奉祈候陽明公御手始ニ何ゝら可然御勘考御新政所願候早々要用計不典

六月廿日巳刻出　　重　　德

中　山　大　納　言　殿

追而今日始而閑日故ゟ御返事認置候差出日ハ遠可申上書々ゟ可有之候御見合可給殿方へを上候のゝ御見合願上候おゑし樣ゟは認らゟを色々可有之御不審と存候御さとり自何も賊を御承知願入候亂書けし共可被免候也

六月廿二日在府井口呈助書を藩學簽教官瀨騏兵術に致し薩長公武間周旋の狀況を報し我藩よりも長岡護美の上京して此間に斡旋せられんことを慫慂す

〔文久二壬戌雜記〕

戌　六月廿三日屆ニ而築瀨先生に之御狀七月九日着

京師薩州長州之一件ニ付近日森井惣四郎專ゟら周旋致し書付數通手ニ入安井仲平杯に茂私罷越書面之異同及ひ眞僞を茂相質し月末之御便ニ仕出候心組ニ罷在候處幸明廿三日屆立候由ニ付原書ハ本御飛脚ニ讓置私胸中ニ合點仕候丈之處一通り書付懸御目申候右書附ハ差よ丶三池御奉行に遣置機密間ニ而寫ニ相成居定而此節之御便ニ差越ニ相成候ゟ奉存候私儀ハ其大意を覺候儘書綴候ニ付少々宛之違も可有之其段ハ御推覽可被下候

一此節之一件長州薩州同腹ニ而東西ニ別を手を付ケ候儀ゟ大樣先書申述候通ニ御座候處長州ハ開國を主とし薩州ハ攘夷を主とし候全く此所ニハ違却有之物と相見申候

一永井雅樂上京以前　此方樣に御相談之節迄ハ御上洛之儀田安樣御名代ニ而可然見込之由ニ御座候處雅樂歸府以後是非將軍家御上洛ニ而無之而ゟ難叶ニ說變し其ゆゑんを推し候ニ此節上京致見候得ゟ彌以事情切迫ニ相成迚も御上洛ニ而無之而ゟ治り難き見込之段長州留守居ゟハ申候由乍併薩州之樣子等ハ前以長州ニゟ相分居候事ニ而今更驚キ候事ニ無之畢竟最初ゟ御上洛を說候而ゟ御老中もギョッと被致其說行を兼候ニ付而之策略ニ而爲有之歟ト被察候雅樂引入一條ハ京師ニ而建白之內禁庭ニも　御懸念被遊候趣有之段申來り長州手元ニ而も篤ト書面之趣研究致候得共差而忌諱ニ觸候事柄も見へ兼迎も君侯御上京之上ニ無之候而ハ明白致兼候ニ付夫迄之處雅樂儀ハ　公義御役人御應對等相憚候段長州留守居ゟ噂之由併京師ニ而も薩人ゟ大ニ不快を受逃戻たるとも評判有之　禁廷薩州も攘夷之御主意ニ而雅樂說違却致候故歟ト被察候長州家中も攘夷之說多く有之雅樂を惡ミ奸人抔ト目候者も不少由右之仔細ニ而京師ゟ江戸に直ニ引返し御國ニも參り不申御相談之筋も先取戻しニ相成候事ト奉存候左すれハ長州も此以後開國之說持屆ケ出來可申哉否之處ハ為らしく長州之國脉も大概此所ニて被占可申候

此建議ニゟ攘夷之事柄ハ見へ不申候　此建議ニゟ攘夷之事柄ハ見へ不申候

一薩州ハ去年十一月京師に建議有之其大意ハ關東之御處置迚も　百位之人數を卒て上京　帝闕を守護し奉り先年水府一流之御方々之寃罪を蒙り蟄居之人々を世ニ出し一橋家御後見越前老侯御大老三條樣初御歸役之事關東に被　仰下無異儀御受有之候得ゟ其分之事　井伊安藤堀田等之知行を減し親王方之御知行を增し畿內之地ニ被居置禁裏之羽翼ト被致候樣との稜も有之候　若御違背ハらハ早速國元ゟ數隊之兵卒を差登せ關東ニ押下り可申左ゟをハ加賀仙臺長州肥前等　勤王之國々も多く有之馳參し可申候得ゟ無御猶豫御決斷有御座度尤薩之先侯以來曾而亂を被好候譯ハ無之　叡慮之御旨趣さへ相立候らへハ强而兵を關東ニ加候儀ニゟ無之との趣右建議書付ニ京師ゟ返答らしき書付相添居其趣は公卿方ニも九條殿帳口被居押立チ此建議ニ御同意迚ハ出來兼候得とも國元ゟ事を起候ハヽ先之扱ハ如何樣とも相成可申と云樣ナル中程ゟ之返答振有之此節ハ則前條之仕組ニて諸浪人を駈り催し押而被登候物ニ相違有之間敷被存候然處出京之上近衛

殿に奎殿　叡慮之趣被伺候處當時大切之折柄御國内ニ干戈を動候樣之儀有之候而ハ徒らニ外夷之術中ニ陷り候事ニ付決して左樣之思召ハ無之旣ニ　和泉樣關東に御下向も被爲在候上ハ彌以永々德川家御扶助被遊候　叡慮之趣ト申事初て御寛情相分り和泉殿も遠國ニて被存候とハ大キニ事情相違ニて　叡慮之趣至極奉感服さらハ浪人取鎭可申とて勅諚を以滯京世間諷評之通伏見打果之一條ニて漸く事鎭り左候而先月十七日　勅使大原三位殿左衛門尉ニ任し御下向和泉殿　勅命ニ而是ニ被差添當月七日　勅使ハ品川ゟ江戸着（着之樣子至而秘事ニ而溜り詰以下にも知れ不申由世上ニて未タ一向取沙汰無之餘留守居ニハ坊主共ゟ少々話も有之候由ニ候へとも少も證據ニ相成候事ハ分り不申候）直ニ傳奏屋敷ニ落チ着キ和泉殿ハ河崎ゟ直ニ高輪屋敷ニ着行裝も薩侯御上下程ニハ無之樣相見候得とも駕廻り抔は多くハ若手ニて兵子組上り位ト相見白帷子ニ水色紗之夏羽織大方對之樣ニ相見に隨分奇麗ニ上ゟ之仕着せ共ニハ無之哉ト被存候供鑓三十四五本前後共六十本位ト見受申候田中彦も見物ニ參り私見込ゟハ多く見受候段申候勅使付添之帶刀は都而藩人ニて御座候和泉殿上京之主意ハ少當テ違たる樣子ニ有之候得とも全く叡慮ニ不叶物ニ候ハヽ　勅使ニ可被差添譯も有之間敷一書ニ　公義向はケ樣々々取繕ニ相成候得とも內輪ニハ種々之入組有之筆頭ニ盡難く抔ト有之云ニいたれさる譯合も有之儀ト被存候長州ゟも田中何某とゟ申者君命を以和泉殿を下關ニ待受ケ一之手ハ御國ニ被取候得とも主人も江戸ニ於て周旋致し二之見ハ他人ニ讓申間敷ト挨拶致候由土州人之聞取ニ相見迚も此節之儀ハ一朝一夕ニ不圖起候騷動ニ無之鼎藏列も今少心を平易ニすえ見聞之趣偏僻ニ流不申候ハヽケ樣之うろたへニも至り不申一稜御覺悟筋之御爲メニと相成可申筈之處ゟまさらぬいきさつに相成申候事ゝ嘆息仕候御國も今迄之處ハ人の心の奥深き抔と取沙汰致し（假名手本忠臣藏ト申落書ニ世間ニと至而奥ゆゟしく存居決して侮り候樣之儀ニハ至り不申誠ニ恐悅之御事ニ奉存候何卒此上ハ御國議一決致し徒らニ傍觀之譏りを御受不被成候樣御所置之程奉祈候事ニ御座候就而ハ餘り差出候事ゟら私見込之趣ハ今日之時勢至極大切成ル折柄ニて時機朝夕ニ轉變致事毎ニ御國御取遣共有之居候而ハ如何ニ妙計奇策有之候共機會を逸シ何之詮も有之間敷候ニ付御國議大体相定候ハヽ　君上御出府被遊候ハヽ此上も無之責而良之助樣に可然人々被差添御差登しニ相成候ハヽ越前樣ニと御間柄之御事ニも有之御政事向さし入御相談之由ニ付諸事御打合せ有之候ハヽ現實之御事情も相分可申事ニ因而ハ加賀仙臺等ニも被仰合確乎たる御正議を被立此瞑眩之機會ニ乘し御國家ニ被爲替候而も善後之略を御佐有之候ハヽ第一　公邊之御力ニ相成御國中之人心も安堵可仕歟ト窃ニ相考申候學校ニ而も開鎖之得失御論談專ら有之鄙說之趣御問合も有之候得共當時節一概ニハ難差極共證據ハ薩州も京師之御模樣國許ニ而考られ候とハ當テ違ニ相成長州も開國之成說そろ〳〵引色ニ相見へ兎角物場ニ推出し衆論を取て折衷致候ゟ外有之間敷奉存候何卒御國柄御恩澤厚薄等を不論第一君臣之義を論究有御座度是迄之處ニてハ些ト妾婦之道ニ近キ方共ニ而ハ有之間敷哉ト相考申候祿之多少恩之厚薄を以去住を決候ハ市道之交ニて斗升之祿一飯之德を受たり共君ハ君主人ハ主人ニて報徵を致候ニ取分有へき筋ニ無之此御主意さへ一致ニ歸候ハヽ一刻も　良之助樣御登有之候樣奉祈候何樣三百里之遠路を隔一々御往復之上ニ而相決候樣ニ而ハ何事も跡事ニ相成折角　御忠節を被盡候詮も有之間敷乍恐窃ニ奉氣遣候事ニ御座候開鎖之論ハ外ニ說も有之候得共餘り事永く本御飛脚ニ拜答可仕候一加賀仙臺動搖致候儀ハ承不申君侯上京も無覺束水府老公京師徘徊ハ彌以虛說ト相見此方ニ而ハ頓斗承不申候一宸筆を以公卿に被仰出候御書大意癸丑以後　外國御取扱件々　叡慮ニ不被爲叶儀多候得共　公義御役人立て願出之趣も有之先其意ニ任せ時勢を　御覽被遊候處終ニ櫻田之變異等激し來其後も異人殺害東禪寺等之事ゟ當正月十五日之變ニ至り右浪人休ハ狼籍之仕方ト見得候共實ハ　皇國之衰微を憂候心底ゟ起り候事ニて忠義ニと迦レ不申候然るニ幕府御役人本ニ返り候了簡絕て無之威力を以于今押捕候仕法のミ致候ハ彌以人心離散之媒ゟるへし追々死ニ至候者共を生ケ置て攘夷之先手とゟさハ一稜之事ゟりしゟ惜むへき事ともゟり去年和宮樣御緣組之事ハ世上之人心一和爲幕府御役頻りニ願出ニより唯御一人之　先帝御遺腹之　皇妹を百里之外ニ御離しハ難被爲忍御情態ゟゟら國家之御爲ニ難被替下し賜ハる所ゟり就而ハ幕府御役人連判之證書ゟりて（公方樣御上洛ニ付而連判之證文書シトハ此譏なり）必人心一和十年を出すして夷狄を掃攘ニ及ふへしとの約定あり且當　將軍家之樣子を御覽せらるゝニ正月十五日一件の翌日上野廟詣之事を諸臣留メしゟ獨斷を以テ奎詣有しを見ゟハ實ニ寛大の御度量有と見ゆる故へ征夷之御職掌ニ叶ひ給ふへし因て十年之內國の元氣を養ひ

夷狄を篤ト理解せしゑ若聽用せゑハ打拂ふへし　自然將軍家御猶豫ありて其事行ゑゑゑんハ公卿百官ト天下の侯伯を率ゐて　御親征被遊へしとふり宮部列上書御親征と云も此事なるへし大意右之通ニて本書ハ本御飛脚ニ仕出可申候政府ニゑ此度參り可申私共ゟ差出置申候間御披見之御手都合も出來可申歟と奉存候以上

六月廿二日　　井口呈助

藥・瀨先生

梧右

六月廿三日在府本藩老臣松野亘は勅使東下に關する都築四郎越藩酒井十之丞よりの聞書遠山三右衛門機密役筋よりの聞書及び吉田平之助溝口省翁よりの聞書等を藩政府に通達す

〔文久二年尊攘錄自筆狀〕

以別紙申達候勅使御下向御登城茂被爲在候由之處其後之御模樣御留守居抔へも精々申含探索致せ候へ共未タ取留候儀一向相分不申候且島津家之方近來何之取沙汰も無之先ツハ靜謐ゝ被考申候然處春嶽樣より横井平四郎を呼登之儀付而太守樣ニ御直書を以御賴被仰進答ニ而近日彼方ゟ都築四郎ニ追々御懸合之趣有之候處御借被進旨此節之御便ニ申來候由ニ而右付而之御直書御仕出ゑ御見合ニ相成申候四郎儀ハ春嶽樣御内ニハ段々懇意之向も有之彼方ゟ必多度懸合事等有之候付而ゑ幸手續も宜く此節之一件内々承繕せ候處末タ稜目を舉是ゝ申儀ハ分兼申候得共四郎より咄之趣別紙聞書之通ニ御座候右ゑ同人書取を所望いたし候へ共聽ゝ稜目も無之一時之論談迄ニ付書取ニいたし候儀ゑ些難渋之趣相斷候間於此方聞取書出來同人存寄ニ引直候樣申談意味合違候處ハ付札を用返達有之候事ニ御座候且又遠山三右衛門書取機密之御役筋より承込候趣ニ而内見ニ差出候付形も無き事ハ有之間敷右之外井口呈助森井惣四郎なと周旋を以手ニ入候諸書付寫眞僞ハ相分不申候得共其儘差進入御披見申候何樣都築咄之趣ニてハ從公義猶列侯へ御建議を御乞被成候哉も難計且ゑ諸藩之老臣等御呼出御尋之筋可有之哉も難被測趣ニ相聞申候間於御家も乍此上篤ゝ御評議を被疑正大之御國論相立居候樣有御座度奉願候事ニ御座候勅使御下向後此許之事情段々御案勞ニも相成居可申ゝ態ト宿繼飛脚差立先ツ右之趣荒方得御意申候以上

六月廿三日　　松野亘

御家老

御中老宛

尙々本文平四郎出府之事春嶽樣ゟ酒井十之丞被差越四郎迄御尋之趣有之候處此方へゑ一向相分不申四郎より方々問合等甚致心配居候内當人より之吹聽狀手ニ入且ハ典禮ゟ内狀を以申越候趣有之候付彼是ニ而稍く間形ハ合申候由ニ御座候

都築四郎咄之趣聞取書

勅使御下向後之御模樣段々探索ニ及せ候へ共聽ゝ取留候儀聞兼申候處都築四郎儀春嶽樣御側御用人酒井十之丞抔兼而別懇之交誼も有之由ニ付右一件種々之風說等上ニも被爲聞召上嘸々御懸念ニも可被爲入候間致承知候而不苦丈を至密相伺御國許にも申上度との趣を以委く申含右十之丞ニ賴談ニ及せ候處不容易事件ゝ付内々春嶽樣にも相伺候由之處尤之御儀ニ被思召候得共右ゑ於　廟堂も未タ御内輪之御評議迄ニ而如何御決着ニ可相成哉も難量御事柄ニ付御間柄且以御疎意等之譯ニ無之別而御心外ニ被思召候得共右之次第ニ付當時之模樣如何樣共難被及御返答旨事を被爲分御斷被仰進候趣十之丞より具ニ申達候付四郎より品能御答申上夫ゟ段々ゝ私之論說ニ移候由之處　勅諚之趣ハ專ら世上ニ唱候三ヶ條之事件ニ而も可有之歟之見込之由然處方今之形勢ニ而ゑ迚も鎖國ゝ申御場合ニ而ゑ有之間敷尤　勅諚之趣も長薩之論說も開鎖之間多分異同ゑ可有之候へ共約マル處ハ共ニ治國安民之外ニ出候儀ハ有之間敷候間天下之公論を以御取用ニ相成因循固執之偏見を捨一圖ニ治國安民之實地を得候樣との時勢事理至極相當之筋合ニ被成御運候付公武御合躰之御實意相貫キ候樣との御廟算歟ニ相聞當時御内輪專ら其御評議最中ニ而未タ御勅答御評決等之埒ニハ至不申由

將又當時將軍樣御事之中々非常之御方とて春嶽樣度々御賞歎被成候儀之十之亟抔も聢と拜聞いたし居候由殊更主上御英明日夜御國家之事をのミ被遊御憂慮候儀ハ竊ニ相伺居申候處自今以往愈以治國安民之道を被得度との公武眞實之御合躰ニ而右之御實意天下ニ徹底いたし候ハヽ、忽御國威更張武備充實開も鎖も時宜次第何之御差支も無之如何ゟ大業も相立可申との趣ニ兩人之論談落合候由尤十之亟ハ當時要路ニ罷在大樞承込候儀も可有之候へ共不容易御事件る御廟堂之御模樣を洩せ候樣ニてハ難相成自己之議論ニ託し右丈之處ハ嗅取候との趣も四郎ゟ申出有之候事

今度　勅使下向之一條於世上種々之風說仕候付御内話之御模樣機密之御役筋へ手寄を以極々内分承合候處左之通

大原左衛門督樣御下之儀ハ人柄御撰ニ而格別之仁ニ有之由去ル十日登城被致其前後段々懸合ニ相成候處元來之御趣意ニ公武御合躰御隔意を生シ不申樣との御趣意ニ而諸事大原樣御請込ニ而於關東後來之御爲惣而事情を盡見込ニ而申談皇國大平之基を定候樣との事ニ而被差下且又是迄之處御國政筋惣而被任置候儀ニハ候得共格別稜立候儀ハ一々逐奏聞取行候樣近年之處惣而被遂奏聞候儀無之追々外筋より被遊御承知候儀等多く依之諸事御不安意ニ被爲在公武之御情態融通ゟいたし兼以之外ニ候間以來右樣之儀無之樣との事之由大原樣ハ先代三位樣之御三男ニ而先年忍ひて江戸ニも暫く御居住被成下々の樣子も能く々々御味ニ相成居且又先年井伊家出頭之節關白樣御初御咎之節も内々京地を出大坂ニ被登土屋樣ニ被訴出候儀も有之たる人ニ而誠忠之御方殊ニ律義温厚之人柄中々出來たる御方之由世上風聞とゑ大ニ相違いたし候得共其筋へ懸り候方ゟ極密承申候間言上仕候以上

遠山三右衛門

六月十五日

吉田平之助溝口省翁ゟ極内密承り候旨ゝ而申聞候儀左之通

一御上洛可有之旨御老中御調印之處迅速年月等不被仰上此段何分ニ御座候哉之事

一和宮樣御姫禮被爲濟候上　和宮樣と可奉唱之處御豪樣と御唱被遊候事不被爲叶　叡慮候事

一異人和親交易之事一應無據筋ニ付御許之處後世此通ニ而被押移候思召ニ候哉又近年ニも被爲逐退候御存意ニ候哉聢ト御尋被遊候事

一京都御守護之御備御形のミゝ而實事無之ゝ付以之外ニ思召候事

一公邊並諸侯方姫君有之時ハ此末京方へも御申請被遊度事

一外國へ之御處置以來逐一奏問之上御沙汰可被遊事

右實否ゝ得斗探索出來兼申候得共傳承候儘書付申候事

六月廿三日　本藩長崎留守居長鹽庄兵衛は幕醫伊藤玄伯林研海蘭國留學を命せられたる旨を藩政府に報告す

文久二年四月ゟ〔京都大坂長崎〕鶴崎返達御用狀扣〕（六月廿三日長鹽より對州類役ゟ御狀を以爲知來候とて通知せしもの也）

奥醫師長春悍
伊藤玄伯
同　洞海悍
林研海

右之者此度阿蘭陀ニ軍艦御誂相成爲傳習御軍艦組之者共被國便船ニ乘組被差遣候付船中病用も相兼醫術爲傳習可被差遣候間御軍艦組之者當地着之上一同被國便船ニ乘組直ニ當地より罷越候樣板倉周防守殿被仰渡候旨江府ゟ申來候間爲心得相達候

戌六月

六月廿七日　敕使大原重德書を岩倉具視に贈り一橋慶喜將軍輔弼松平春嶽總裁の事に關し閣老板

倉勝靜脇坂安宅と會見のこと及び薩長其他諸藩の狀況を報す

〔撥反雜記〕

帳面一帖入御覽候右之輔弼之請かたハ次第ニ候最初ハ會津ゟ何ゟウンツクト田安之家來とも何ゟイキサツ有樣ニ申次之面會ニハ諸役人共彼此申と申候故書取を見セ申候得ゑケ樣之書候故ニ張札致返し候是を三郎ニ相談致候事ニ候又一昨日之處では一橋を出して用候積なゑとも一橋ニ權ゟ付申大樹ゟ尻ニシカレル左それは普代之者共無念ナ左それは外藩ゟ一橋に歸依して居故ニ普代と外藩との論ゟ出來樣と案る又一橋ゑ權付く處て外藩ハ薩を云ノカシラン より奏聞して將軍ニ居ル樣ナ〻テモ出來樣歟案思ルトモ申候故其樣ナ事之可有候筋ゟ能々考へ知るへし今屹度家督相續して居者を除き是を將軍ニといふ樣ナ〻が出來者ゟ夫ハムチヤクチヤト云者ゟり其樣ゟ無理を朝廷御取上有セ被存候實ゑ無念至極ナル〻也左樣ナ無道ナ御所テハナイゾ　薩之此度之事を中々御遠慮でツイニハ御取上ナカタナレハ天下之事故御取上ゑナツタレハ全躰大名之申事ハ中々御取上遊を事テハナイト申タラハ其邊之安心ニハナルナレハ左樣ゑ御所者ヲソレテ御坐ルト思ハレテモドモナラス今ノ老中ナドハ御所ニ而大名共ノ申事を御取上ニ而ケ程ニ御心配遊ハストハ知ント見申候夫故ゑ何ヲドコカラ云ヤラシレント云樣ナフリヲ致置候是大秘事也併無ナ事申タリトモ御取合無キ〻知レタ〻也其邊ニ心配ハ決而ノ〳〵無用左樣ナ〻ナレハ今此方コヽテ請合血判でも致を又御所御役人方之御書付でも取テヤル左樣ナ〻モ御請成難き事ゟゑハ決而〳〵無用頼と安心被致急ゑ御請セ詰掛申候得者中々夫計でもなんと申候樣の事左樣ゟら先左樣全躰此度之御儀ハ天下之爲天下之爲は則德川之爲德川安けゑは朝廷御安心此筋故ゑ出格　之勅使を被下候事今更申まてもナケレト操返しひつこう〳〵申聞漸可成樣の勘考可致と申口上を彼待居候兩人を早速罷出噸を含猶次之登城を約し歸候故胸サスリ申候而引取申候樣ニ相成相濟候扨此勘考之返事ハ城内ニ而可聞事ニ相成有之候此登城ガセツバ之登城ニ而天下昌平將軍家も無異ニ可至左候得ゑ　朝廷も御安心之際ニ而重德ノ決心ニ在所ニ候從元覺悟之事ニ心決而無之此一擧ニ御請可承と存候必御安心可給候登城廿八九日之間ゟと存候仍早々如此候也

六月廿七日　　重德

岩倉中將殿

追而此狀御覽後兩三日屹度吉左右可申上御待可被遊候也

三郎作文

幕政失處置候以來人心離散各藩生心草莽之匹夫ニ至り憤激致し候時聊暴發之擧動ニ及ひ内外切迫之世態德川氏之爲天下之爲不被爲得止事非常出格之以　思召被仰出候儀故速ゑ遵奉可有之處各方段々平凡常格之故障を申立不審千萬ニ候何分早々一橋刑部卿輔弼之儀御請可有之候此上色々申上御受無之候ハヽ遠　勅ニ相違無之候殊ゑ是まて　勅答及延引今更御請無之儀於小子奉對　朝廷無申譯候間最早各方へ内談ハ無用ニ候間一兩日中大樹公直ニ　勅答致承知度候若其上種々御差支申立を有之候ハヽ神速ニ歸鄉致し形行明白ゑ可及奏聞心得ニ候事」而會ニて相渡候處承知致候得共とて差返し候直ニ　勅答致承知度と申候得ハ明斷ハ出來ぬと申候故夫而ハ親政を無おほつゟセ申候得者笑を含候

今度公武御合体之厚き御趣意　御懇ゑ　勅使被差下被仰進候御儀深く御感激候ニ付右之内松平春嶽兼而ゟ登城ニ而御政事向御相談有之候得共猶如　叡慮政事總裁ニハゟし萬事御相談可有之候刑部卿殿御後見之儀ハ何分御請被成兼候子細ハ公方樣追々御年長ニ爲成田安殿御後見ゑ而ハ自然ハ親政之御意徹底ニ相成兼其上御資質御英明ニ被爲在御親政之思召有之且ハ御緣組を被爲濟候上ハ御當人前之御方ニ被爲成候間田安殿にハ是迄之御世話御謝し被成被進物も有之其上御勳勞を賞し被成御位階をを御進從今御新政之樣普く天下ニ御承知有之候然處不日ニして又刑部卿殿御後見被仰出候而ハ前日之御承知御僞言ニ相當り天下ニ信を御失ひ被成候間此後御美政被仰出候而も信仰をる所無之御政体之上於て大害有之候　勅使被差下候を所要關東を厚被　思召之御事然處事實之上ゑ御爲ニ不相成事有之候而ハ　叡慮も御安心不被爲在御儀道理之上ハ不及申御親ミ之上ゑ而も御齟齬可相成候儀能々御考究之上被及奏聞候樣致度候前々之次第故御後見或輔弼之名目は公武御爲ニ不相成兼候得共　叡慮も被爲在候御事故出格之譯を以御復職被仰出度候

御登城萬端御政務御相談可被成左候ヘハ實さへ有之候得ハ名ハ兎も角もニ而强而　叡慮ニ振候儀も有御座間敷且御政事御相談有之　公武御盛ニ相成候事ニ候ハヽ、刑部卿殿御榮華ゝも相成内外御都合ニ相成候條厚御心得御取扱可被成候事右之趣春嶽へも申談候處同意ニ付申進候

六月廿三日

〔仝　書〕

益御機嫌能被爲渡恐悦候從而ハ彌御安全珍重存候然ハ七日御認之文十七日ニ着拜見候是ハ七日之御返事也幕府模樣御傳聞御用部屋抔不承候得共日々登城大老同樣之事を致し居樣子自分ニ申居候一橋登城勿論ニ候十日小子申述候翌日登城直面會之由ニ承候併近々被用候ヶ申樣ニも無之候寛永以前政事共不承候（後ニ承候得ハ御示之通也）　新役貳人和泉ハ父ヶは容貌顔色共相違君子ハ容貌如愚之古言ハウソ歟御笑周州隨分可然先常式對話極意不存候（用人山田安五郎屹度シタル人之由何事も是ニヨル歟）　脇坂ハ三郎出會段々之咄ニ惜キ人を多く殺た事シヤト申たる由扨ハガテンデ引候歟ヶ申候事ニ候同人周州を　朝命遵奉ハ屹度其心得ゝ候得共併矢張是迄之心得ゟ離ゑかね實ゝ非常之　勅使忽拜服コヽデナケネハ德川家持ナヲサレント云程ニモ不見候越ハ成程誠實之人ヶ見請申候物事手厚人之由是者コヽヲハスシテハ取返しカナワスト云心アルヶ見ヘ申候人何卒別ゝ面會（私宅ニ行）直談致度昨廿日直ニ老中へ申候得ハ何時成共御行向可被遊ヶ申候故夷人警衛之事直ニ賴候得ハ承知越前へも通達可致旨申居候故三郎ニ爲計置候併御處ゟ面會せよヶ御沙汰でも戴候ヘハ十分之事ヶ存候コヽ迄過日廿二三日頃認置候（以下ハ廿六日夜認掛候）

其後早々可相認之處種々有之候内一橋一件今日埒明可申今日ハ埒明可申哉ヶ段々延引ニ相成候其内不面白ヌ事申上候もむゑに御心配を掛ニもいらぬ事ヶ存合ノヽ遲滯いたし候

一陽明公今日御内意之由承候恐悦ノヽ今廿七日當り御奏慶哉ヶ存候

一若州之事段々承候皆々慮ニ候可惡事候幕も正論ニ而虛ハ不申ヶ存候此段ハ近々之御書之御返事ニ申上候急キ飛脚ニ而御示之事七日振ニ屆候而拜見扨々遠方ハ埒之明ぬ者此危事屆候頃ハ鴈も鳩も飛タ跡ヶ者存候得共爲御安心申入候則昨日脇坂へ相尋候得者呼寄有之候得共所勞ニ而未致出府理之趣申并ニ政役も外申付候積と語り候故再役之氣遣ハ決而無之ヶ存候御安心可被遊候併前申上候通ケ樣申上候ヶても何御役ニ立ぬ事ヶ存候

一姫路正議之由御安心

一藤堂出格之建白有之由何之沙汰も無之候

一長州上京之事周布ニ御聞被遊候ハヽ可分ヶ存候此藩主正議ハ元ゟ之事なゑとも屹度ゑたふ人ニ而もふく一國之持上ヶ相見候併何分大物程好御あしらひ可被遊候先日建白ゝ成書能々御覽可給候此頃幕之威光抔可申時節ニ無之を如彼申出し候ヘハ謂諛之心歟但常格を離ぬ故歟却而大邪魔ニ成申候

一薩之事御心入長入候六人之者とんと家來同樣使令致し人柄と申とんとノヽ安心側近習同樣苦勞ニ相成寐而から起ゟら畢竟近習ニ候内より連候者ハダハヲ起し候得共六人ハ孜々して相勤赤面之次第シカリ申候中ニも吉江事山科兵部屹度間ゝ合人ニ而重疊時々薩藩ヶ往反致し甚都合宜敷相悦居申候三士も節々來大ニ力を得候事ニ候兩國之間之事は上ニも御案思之樣御尤小子大案思之處天助深長入存候事ニ候

一一橋越前之事越ハ最内御請申上候通ニ候一橋之處折合兼段々應對何ゑ和一道理ニ候令拜服不日ニ可令言上存候　廿六日別段書中ニ而可申上候處便ニ同紙ニ相認候略儀可被免候

一脇坂板倉相招對談致候此前兩度相招應對候得共ソコノヽノ事ゝ而言上迄ニもなし却而御案思ゟ掛候樣ふる事ハ申さぬゟよしヶ相心得候大ニ御無沙汰ニ相成恐入存候宜御理願上候其前中山大久保參候樣々段々長引候而ハ人心ニ拘り候故今日者是非ノヽ御請ゝ相成候樣對話致詰候樣若御請無之ハ老中兩人席を立サヌヶ申位ニふくては不相叶旨申述候小子併老中限ニて御請申上候事者迎も出來間鋪御請ゝ可成返答可聞夫ニ而承知吳三郎へも可申聞申候夫ニ而承知ふり併若

夫まてゝ不至は屹度此旅館ニ而了簡有之趣兩人決心相見へ大ゝ心配致候吉江事も同樣也且兩人共旅宿ニ扣居候右故小子も屹度勘考致候先手ゟ應對下手人之云カ尤ニ聞へてヌラヌ賊私故甚六ケシ併コヽカ　勅命を蒙り候處之肝要ト心を勵し面會之處不納得之次第段々申述漸可相成樣之勘考可致ト申處ニ至り夫ニ而相分候而先ゝ何も大變ゑし此日ハ相濟一先安心致候猶其時宜ハ歸京之上右之通厚勘考ト申事故此返答兩日之中ゝ可承候夫は登城可致城中ニ而早々申述ト申事ニ候間一兩之中ゝ登城致可承候ト存候何ゟ兩三日中ニハ吉左右可及奏聞ト存候事ニ候早々不典

六月廿七日

追申江戸着より最早廿一日ゝ相成何をして居ヤラトテ被思召何共深く恐入候得とも何分人相て登城ト申てハ仰山ナ〻老中樣カトテモ高家ヤスツタト堂々敷事ニ而何ゟ埒明兼延引致し無申條恐入候得共何ト力致し納得させ是非ノ〳〵ト存候得之急ニハ參兼恐入候薩も大力ニ相成全後櫨鎮城故愚口狀もキヽメ宜心配中快事も有之候必々御案し給間敷候

〔仝　書〕

一先便越前内御請言上之砌當秋上京之事内々申述置承知候て又御急便ニ被仰下段上洛之迹前ニナラヌ樣先越上京之事去廿日ニ拜見候廿三日ニ脇坂面會候樣共由申聞且秋ト ハ乍申其内早くト被仰越候ト申述置候尤私迄之御書取ニ候間老中ハ不相見候三郎へ其方可然旨申候實ゝ申述拜承候昨日脇坂申述居候ニ何ゟ外夷之國是早く談合いたさねハナラヌト申候此段も御申上可給候

追申例此文通ニ而ドコモカモ通候樣御取計願入候數通之處御憐愍願入候

一私滯在之儀ハ未申出候何ゟ一橋内請後ニ可申出ト存候越前之事書入候而上御分ゟねト存候間更ニ認候

薩頼置彼人ゟ面會を乞旅宿へ參候樣ニヤ申承知ニ候得とも越前所勞之由有子細所勞之由子細雖書取候　是ゝ付直ゝ面談致度存候故老中へ直ゝ申候處何時ゝても御招と申候故所勞故此方ゟ行向度病床ニ而も不苦候間天下之大事面談致度ト通して呉候ヤ直ゝ老中兩人へ申候尤　勅使ニ而ハなし大原一分行向ト申置候得ハ承知ニ候此段も申上候此上願ニハ天下之大事ゝは何方成共可行向との御書附戴候ハヽ大ニ安心仕候尤何ゟへも無左ト可參積は無之候得共差掛其邊之事も可有之候滯在致候得ハ尚以之事ヤ奉存候併御威光を振つまらぬ所へ行ゑヤ致候了簡毛頭無之候此間も老中越會抔申候ニ旅宿究屈ゑるへし講武所之タヽキ合又濱殿抔へ可參旨深切ニ申居候得共中々心配故ゝ遊覽所デナイせゑて内御請ても有之上は少々ハ安心ニ而又々可相頼儀ト申置候樣之事ニ候内御請ても御座候ハヽ可行向ト存候併武所ゟ聖堂一覽ト申置候段々思出し申入候薩此度ハ實以國忠屹度御褒賞之御積り只今より被遊度事ニ候也

六月廿七日巳刻頃認畢　　岩倉中將殿内々　重德

六月廿七日在府井口呈助書を藩學教官辛島多京次に贈り喜都江戸の狀況を報す

〔文久二壬戌雜記〕

辛島先生に御狀之内抜（井口呈助より）

森井周旋ニて手ニ入申候書付多く一通りハ手元ニ留置又一通り一昨晩より昨日畫迄ニ漸仕舞申候間懸御目申候何卒教授局に御見せ書寫方に御寫留メ例之御社中に御さし廻し可被下候一々丸ル呑ニハ難信候得とも此節之書付ニてハ大概京師長藩之模樣も推察被致候ト覺申候兼て御噂仕居候如ク御國元之歴々ハ時勢之事を度外ニ被置候故末々ニ至迄狐狸之所爲之樣ニ被存候得共此數通之書面抔を以勘考仕候得ハ鼎藏列見聞偏僻ニゑ相違無之候得とも仰山ニ申立候も私儀ゑ無理とも被存不申候畢竟上下一致安心仕候樣ナル御國是相立不申候より之うろたへと奉存候此節　勅使御下着以後最早廿日計ニ相成候得共營中之御評議等世間ニ一切漏聞不申頃日大原殿登城以後一橋越前尾水三閣老脇坂板倉水野内藤松平豐前樣ハ引入切り之列席ニ而長キ御評議有之候由ニ御座候得共事柄ハ何とも知ゟ不申候漢文之　勅書ト有之候方書生之謟作ゟト相見候得とも京都之御主意ハ多く世間ニ漏聞候ニ付大意斯之通ニ而可有之ト安井抔も見込申候和文之方ハ至極事情を盡し居實物ニ相違有之間敷段申候土州人見聞書ハ全く水戸流之人ニて薩州贔負ニ有之餘り大そう過候得とも和泉殿出懸

ケ之勢ハ大概ケ様ナル勢ニ而爲有之ト被存候薩州建白ハ安井ニハ未見せ不申候得とも實書らしき物ニ御座候大原氏に之　勅書ハ都築家手ニ入大方越前ヵニ而可有之未タ承りハ致不申候是ニ而考申候得ハ四五日以前雇ニ築瀬先生に申入候通元來　京師ト島津家ハ釣り合ニ相成居候事ニて重疊　叡慮ニハ相叶居候事ト相見申候

一諸家禁錮御解放し目附無提灯ニ而通行和田藏半藏御門内通行支無之樣相成候ハ大キニ人氣も穩ニ相成候御事と被存候御殿山ハ何そ相替儀無御座東禪寺ハ悉皆引拂ヒ諸道具も殘置不申候由ニ御座候横濱も引拂候と申事土州御目附一見致來候由同藩諸生寮生森井に話候由ニて森井も信居候得とも間違ニて御座候東禪寺ハ御殿山普請出來迄引取ト申候由是ハ先月廿九日警衛之人數之内ヵ私怨之由ニ而又夷人を切害切腹致者有之ケ樣之事ヵ歟ト被察候田中彦探索致候筈之處未タ承り不申候先月央比板倉侯初而夷人應對有之際越ニて此以後ハ諸事外國奉行に筋々懸合候樣申渡ニ相成候樣御留守居話ニて承り申候慷慨派ハ此勢ニて直ニ横濱ニても打崩候樣ニ申候得とも左樣ニハ參り申間敷

叡慮も十年内との御年限有之實意之御改革さへ屆キ候ハヽ追々とハ如何樣とも御所置付可申歟ト小生ハ相考申候

六月廿七日

六月晦日勅使大原重德勅意遵奉のことにつき閣老脇坂安宅板倉勝靜と會見の顚末を岩倉具視に内報す

〔撥反雜記〕

大暑之砌彌御機嫌克可被渡令恐悦候陳ハ一橋輔弼之事十三日十八日段々掛合ニ候處以差支候趣申述候次第一昨日之事狀ニ申上候通ニ而實はサノ字余程手强振合ニ候全夫故ゝ候歟一昨日脇坂板倉等相招又々對禮可致之處理ゝて文こし候則文入御覽候此樣子ニ而は又々安心を何ゟも申候得共何分ニも差支有之折合兼候趣ハ段々述之尾張も申候由又參政之向ゝも申候由元來一橋人物故登庸致度事此人々何ゟも申候得共權力候ゝ大樹之無力如きニなり可申を案候故折合か六ケ敷と申私一將賢明ナレハ其邊ニゝ至るまゝと申候得ゝ左を有へきさハ不申左樣ふる次第故ゝ賢明ふれハ御遠慮ニて却而輔弼之場合カ出來ぬて御座候何分　叡慮は段々相伺候通十人之指十人之目故登庸したれは可宜故ゝ被仰下候へ共於將軍家ゝ無據右等之譯合有之事を巨細ケ樣ニ申述候間　勅使御差酌ニ而程能被　仰上タナラハ夫てもさは被爲在間鋪候但少々いや見を含てケ程折合兼候而も是非輔弼名目御請無之而ゝ被爲在候御事候そこ迄ニ相成候ハヽ御蓋解も可被爲在抔さ申出し小子心中心配兼候御沙汰も被爲在小子も其心有ふから無理ニ請させるさ申處ニ而ハ十分御所之處ニ差支候事故假令内心ハ不承知ふり共表向成程さ申さをては心もをまゐ其上ゝサ印は天下有志之氣合を有之是非今日御請ふと申宥豫無之二士扣居吉江も同樣扣居候故中々ヌルイ〻ニテ又勘考ともまいらす是も又尤之事ニ而天下有志之氣合ニ相掛候得は宥豫之内ニ變之起る間敷事ゝを實ニ騷動　憂慮之不被爲在處何とゟ答候幸心付聲ニ應して左右アルヘシ言上ニ及候ハヽ其邊無理ニ共被爲在間敷ハ候得共何分只今之身分ニ而は此兩事御請ゟ爲ウヨトノ勅ゟ蒙居る身分兎角之推察ハ難致是を速ニ之事ふれハ又何とゟ可有ナレ共今日迄延引相成今更京師に何ナルトナリ候テハ彼有志共何は兎もあれ　勅命ゟ速ニ御請無と申處より不平ゟ抱き變事も起候哉も難計故無理ニとハ不申候得共能々勘考有之今日之處可相成候樣之返答承度自然是迄同樣猶勘考一通り一日延し之振合ニ而者此座ハ去不申さ押切何分天下之御爲天下之爲ハ德川家之爲此解ハ兼々之口クセ故得手ニ帆を上十分ニ申候へハ終ゝは猶厚勘考致し御請可相成樣談合可致併自然猶以不折合時ハケ樣ニ申タカト御責ニ而は何分兩人限之事故恐入ゝ申候間夫不無理議ニ候間承ラヌニ而者無之候得共コヽニ至而御請被成兼候さて譯合屹度無之而者只今迄之子細ニ而者承屆ふたくと申候處ニハ此御返答者於城中と申者ニ成左候ハヽ御勘考談合付次第一日を早く承度旨申述相分候扨サ印之人々も先夫ニ而帶吹而歸り申小子も胸を撫し案心之事ニ候其勢今日ニ及候故ニ前日之文歟眞實ふれは安心哉又心を馳サセ强而拒ムト申事哉先度々心配致若强而拒之候節ハ此白毛頭を取而逃　勅之號を顯し從老中方之理可申述も頓ゝ投出し可申述候段々申禮決心候何ゟも其心得ニ成死地ニ入候樣之事ニて登城候處會津以下老中四人越ハ所勞五人如例而會之處脇坂申述候ニ段々　叡慮ニ付一橋刑部卿再職被申付後見同樣之儀御請被申上候旨申述候最早是ニ而宜き處後見同樣之事サ印此間タ文ニ而申越候故可相成之

御沙汰通輔弼ゟ宜テハナイカト申候事ニ御座候故ニ是迄ニ各承知ナラハ輔弼ゝナラヌ歟左候ハ實は　勅命尊奉諸藩之氣請萬端當家之幸貴所等之御勘考總而都合宜事ニ候ヶ思切と申述候へは脇坂答候ゝ左候ハ、後見と申處御請ニ可相成候ヶ速ゝ決斷致し相答候間夫ナラハ從初之　思召ニ候昨日後見と被仰出候之御斟酌之處ゝ候其方より後見と被申出候ニ何之思召可被在ヶ之不被存候間夫ニ而御治定御請と申事ニ落居致候私口上ゝ嘸々御滿足可被爲在ナトハ能々申述猶巨細は歸京可合言上候右之次第ゝ候故速ゝ御請も是迄之樣子カラ一昨日之事カラ　思召候へと余り速過却而何歟思案之筋を可有之哉ヶ疑念を差起り候故兼而申上置候暫滯在之事申述候處承知之趣候併明後日七月一日御返答御暇可給候積り御暇後　勅使ヶ申候邊は如何ナト申候故尤兼而落カマ、蒙仰私ゝ滯在致スト申ニも無之故其邊は又御勘考可被有之又小子を存意可申入樣ニ申置候此文認居候處は昨夜着と申候而御文到來六月廿日申半刻御認之御書早速拜讀事之御請何ヶ歟可申上事共候得共差當り小子歸洛之事一越奉行候ハ、直歸京ニて宜樣示給承候乍併前條申上候通り之事故滯在致すては如何早速夕方堀以下三人出頭御請之賀解申述安心申話り居申候處故滯在之事を申述候得ゝ從元左ゟくては參不申と存候實而は七月下旬頃迄ニ而を不致滯在てハと申居候故決着仕居候乍併日々聞繕都合宜二心無之又江戸中之人氣又諸藩之氣請等を宜候ハ、早々上京從元之事決而ノ〳〵滯在致度事ハ無之候得共ソコノ〳〵之事を致候而例之猫之おきいろふ樣ニテはせぬ方ゟはるかましと存此邊赤心之過候處歟とも存候得共一心はヶ樣ニ候宜賴入候

先荒方ヶ樣之事ニ候猶後便巨細可申上候實ゝ薩の國忠無比類事ニ候乃清卿之一行物精忠貫日月之一行物從是爲持可遣とこしらへ居候處ニ候又彼四人小子附六人之者至而靜々として孜々ヶ相勤文事を有之宜候中ゝを吉江ハ又一層ニ候此者共歸洛之上ハ屹度御褒賞私より相願候事ニ候色々思案致候其内又々可申上候尤三郎儀ゝ先便ニを申上候通屹度御勘考可被爲在候昨日之處何程私氣張候而を一人之微力ニ而は難成大盤石を上ゝ釣應對致候ニ而自然と向之納得致を次第を有之候併何程薩强ヶも小子不氣張ニ而は參不申都合致候故無難ニ參候誠ゝ天下之恐悅凡世界之事ニ二ツよき事はなひと申候處至此度ゝ二ツや三ツ處ニ而ハ無之何も角を宜敷事ニ候尙万々歸洛拜面可申上候此段可然御申被達　叡聞樣拜願候尤議奏御二方へ可申入覺悟ゝて筆取候得共段々ヶ亂筆ニ相成失敬共例ニ而何共無申條候一々貴君ゟ向差上候いつもゝ通御有志之御方々へ宜御達此文御見せ願入候俊實ニも同樣願入存候早々不典

六月三十日　　岩倉中將殿内々　　重德

別紙申上候

越前上京之事薩大ゝ急キ居候右ニ付昨而會之砌越前上京之事兼而被仰出有之候隨分早方可然歟八月上旬ニゝ發足ニ相成候樣ニ抔被申候得共當節所勞ニ候得共まゑ二月を御座候故隨分其頃ニハ上京之事御請可被申上次第ヶ申居候老中首尾中其樣子ニ因り小子も上京可仕哉自然夫迄も江戸之樣子宜候へは本紙申上候通ニ候故一日も早々上京可仕又其樣子を御咄申度候事山々有之候也　　六臺　　重德

七月朔日勅使大原重德江戸城に臨み幕府勅諭に奉答す

〔撥反雜記〕

主上　儲君親王　准后增御攪嫌克可被爲渡恐悅存候今日登城候之處此度　勅諚御請御禮等被申候御序之節宜願御沙汰候恐惶謹言

七月一日　　重德

中山大納言殿　三條大納言殿　飛鳥井中納言殿

久世宰相殿　宰相中將殿

別紙

今度出格之　叡慮を以被仰進候ニ付一橋刑部卿を御後見越前中將を御政事總裁職ニ被仰付候御政事万端御相談被成候

問此段奏聞可被致候事

口上

此書取面并文言國字之場一向愚存ニ入不申候得共ソレマテコテ付可申ニ而無之候此儘落手仕候猶一越薩共と測可申候事

〔仝　書〕

釜御機嫌能可被爲渡且當日令恐悦候從而愈御安康珍重存候陳ハ本紙令言上段大樹公御請之事御口上振を有之候ニ付老中以書取相渡則一紙之通ニ候宜御沙汰希入候尤本紙可差上處ニ候得共脚便之事ニ候間以寫入御覽候猶本紙ゑ隨身上京之上可入　覽覽候何を一昨日令言上候外無之巨細ハ岩倉中將被申入候間御聞取可給候且又速ニ上京可致之處是以前便申上候通之仕合暫滯留仕萬端見聞繕如何之儀を有之候ハ、可及言上と又可被仰下候何も島津三郎へ申談偏ニ治國之筋可取計覺悟ニ候尤今日御請并樣應暇等可給旨ニ候故御請計之事を申述候得ゑ先規ハ有之別日ニハ雜相成旨之由左候へゑ無是非候間別段可致滯在との城使可被差向候旨申入候一紙入御覽候右申入候處苦六ケ敷由矢張歸京可致御暇登城之方ニ申來候尙樣子ニ依り歸京之期ゑ可令言上候右故今日ゑ　勅答饗應迄ニて相濟候此段を申上候仍早々要用計如此候也

七月朔　　重　德

中山大納言殿

別紙

勅答御暇等之儀先規ニ拘り候事故同日ニ無之而雜相成旨致承知候然ハ此度之御儀ハ出格之譯を以被仰下候ニ付尙又叡慮之御旨を有之當地滯在可致之事申立ニ付彌可致滯在候樣との城使可被差向候事

七月朔日在府井口呈助書を在藩熊谷嘉左衛門に贈り薩長の公武周旋に關する觀察及び我藩内松井米田兩派の分爭に對する意見を述ぶ

〔文久二壬戌雜記〕

熊谷嘉左衛門に御狀之内拔（井口呈助書翰）

一長州腹黑との事ハ江戸ゟ見渡候見ニ而薩州を鬼ニ立テ下手ゟ裏ニ廻り己レゟ功ニ致候樣ナル所を爲申物ト唯今ニ相成候得ゑ被考候併薩州ニてふくてハケ樣之思イ切たる仕事ハ出來不申候彼ノ思切ニて無之候而ハ　公邊にもとへ不申此度　宸筆之寫薩州建白書土州人見聞書等幸爲當ニ仕出申候御一見被成候へハ事情明白致候攘夷鎖國之事ハ何とも無之薩州私之便利當候と申も世間邪氣ゟト相見へ申候闕東を倒し候樣ナル事も慷慨家末々之論ニて井伊家一派之人サへ政事を執不申候得ゑ何之異論も無之事ニて久世侯引入後ハ萬事目くじゝ被立候人物迎ハ無之　勅使を初和泉殿も越前老侯當り之御相談何も逸却無之すらゞと一和致候樣成勢ニ御座候開港鎖國之論逸却出來仕候而又々難儀如何成行可申哉ト私儀ハ唯此品のみ氣ニ懸り居申候處奸吏さへ除キ申候得ゑ夫等之處ハ廣く天下の公論ニ被決候由ニ而　勅命も左樣片切タル趣ニ而ハ無御座由窃ニ窺候儀御座候

一永井事ハ開鎖之一條逸却ニ而可有之察居候處今度之趣其所も格別差合居候樣ニハ無御座左候得ハ長州御留守居ゟ噂之通り何そ文言之内ニ失体之事ニ而も有之哉何を近日ニハ相分可申候　御上洛之事も　勅書ニも有之ゟ條ニて初發之所少程善キ申事ニ而爲有之歟ト奉存候水野和泉守ハ初之評判程ニハ無之板倉脇坂兩人が閣老骨切歟ト相見申候　御上洛も彌以簡易之事と被存候

一御國之をつを甚敷迎も一度ハ藥のゑんけん無之而ハ疾病も癒不申候何を快復之時節も追々相見可申候私見込ニ而ハ仰之如ク何方も誠實ニ存込候事ニゑ相違無之　八代殿一國之元老ニて麁忽ニ人言を取揚らを候所ゟ　君意ニも相叶難く成行候事ニて恐入ルト申所ニ外口を一身ニ引受らを候ハ、外ニ何之差碍りも無之さすゟ大臣之休を被得候とて却而人望も付可申と奉存候定而南方之威を恐を彼方ニ當り碍り行不申候樣ふと俗心を以所置する人も可有之歟是ハ却て其人

を敬せさる之尤ヶ者ト相考申候ヶ様ニ天下之大事を前ニさし置御國中ニてどしぜり計致居候而ハさすゟ之御大國を被領ふゟら何事も人ゟ先を被駈天下ニ申譯ふき様ニとも相成候而ハ大切之御儀と窃ニ嘆息仕候先年之一義も有之御模様次第ニゑ一ト駈ケ御出懸ケ被成候時節ニゑ有之間敷哉ト奉存候夫も實病ふらハ六ケ敷何程哉ト奉存候

七月朔日

七月二日松平春嶽島津久光會見す

〔撥反雜記〕

七月廿日大埜鐵兵衛書翰ノ一節

去ル二日島津三郎殿越前公へ謁見段々世事御談論有之候處春樂様ニも殊之外御感心爲有之由ニ御座候初春樂様思召ニゑ三郎殿ゑ初而之出府ニ而誠之田舍武士ニ而候得ゑ言語必詭等多咽合抔ゑ互ニ旨趣通徹仕兼可申との事ニ而御應對ニ相成候處案外之相違ニて中々言語明辨議論確實度々江戸上下有之候諸侯方ゟも遙ニ應接振等も宜敷爲有之由ニ而春樂様ニも大ニ御感心ニ直成候由ニ御座候右御義論御合躰ニ付而ゑ些麥府より春樂様へ疑念有之哉ニ承申候

七月三日在府本藩奉行楯岡愼之助は勅使大重原德勅諚を幕府に傳達せし事藩主並に同藩重臣等着京の件及び將軍上洛につき諸侯宿所手配の狀況等を藩政府に報告す

〔文久二年 尊攘錄自筆狀〕

七月三日京都仕出同十一日夜着

勅使大原左衛門督様去ル七日江府御着同十日於御白書院御對顏　勅諚御請被爲在候趣者靑地源右衛門久我様等より委細承候趣則別紙之通ニ而其後十三日十七日兩度御登城有之たる由ニ御座候へ共御模様ハ未タ相分不申長州世子松平長門守様ゑ去ル十九日伏見ゑ御移大膳太夫様ゑ同六日江府御立中山道御越之處御供中過半痲疹ニ而御旅行被差支暫下諏訪ゑ御滯留其後中津川ゑ御滯至而寛成御休泊ニ而今二日京御着此節公邊御屆ゑ御歸國懸京都ゑ御立寄　叡慮御窺御模様ニ應暫御滯京有之候との趣ニ相聞申候處如何之譯歟去ル十四日十六日ニ御國許より　毛利伊勢同筑前同將監志水美作四人孰茂上下多人數ニ而京着其已前浦觀負ゟ申御家老ハ京より御迎ニ罷越此節御供ゟたし江戸ゟハ益田彈正御先ニ踏越先月廿九日京着右外毛利淡路守様德山侯御同道ニ而御出京之模様ニ相聞且又酒井雅樂頭様先達而御出京酒井若狹守様今以御病中ニ而御立無之右付而ゑ様々巷說有之候得共實ハ御託病ニ而御延引之事關東之御趣意ニ而　禁裡御守護之御手當ゟ相唱申候何程ニ可有之哉京地ゑ當時靜穩ニ御座候得共右之模様ニ付而ハ打捨出立もいたし兼居申候最早大膳太夫様ハ御着ニ相成　勅使江戸御立且島津三郎殿猶御付添上京有之候哉否之様子等追々相分可申京江戸之折合今少承候ハヽ早々罷下可申ゟ相含居申候

一今度御上洛之儀被仰出候付而諸家様段々御宿所之御手配有之既ニ大德寺內ニてハ長州様筑前様久留米様抔より御懸合有之由高桐院より知せ有之候間源右衛門申談利益妙院様之御菩提所妙覺寺大道場ゟ而　御所并二條御城ゟ之懸りも宜候付內々見繕其外當御屋敷を御本陣として近邊町家御借受俱伏見御茶屋御本陣ゟて是又最寄之寺院町家御借受等之噺合いたし候へ共何方も種々差支之儀相見且寛永中御上洛之節妙解院様鳥羽ゟ被成御座候趣御留守居方記錄之內ニ相見申候間上下鳥羽見繕候處何分當時御宿所ニ相成候見込無之候付伏見へ立寄見繕候處京都ゑ隔候得共御本陣ニハ御茶屋不足無之近邊町家寺院等御借受も差支無之哉ニ聞運送之便利旁先同所を御本宿として京御屋敷ゑ御休場ニ可被定置哉と申談伏見ゑ正藤御用場ニも相成申候後當時寺院ニて取調有之且尾州紀州之御宿も同所ニ御手當有之模様ニ御座候得共手廣キ所柄一方ニ御宿所御取切差支申間敷哉之見込ニ而本行之通　粗手配ハいたし置候得共御模様ニ應候而ゑ南禪寺中一圓御借受も可宜哉と內々天授庵へ申含故障承合置申候此上精々申談委細歸着之上相達可申ゟ奉存候間左様御承知御家老衆ゟ被仰達可被下候以上

七月三日

御奉行衆中

文久二年

楯岡愼之助

歩御使番ゟ指出候書付也

六月十四日　美濃屋徳右衛門ニ而聞取也

八千石　毛利伊勢

右繩手三條下ル西願寺旅宿

供方御附役三十人計り　但御本陣泊り

同侍分下男迄六十人計り

同人方家司之役人下男共三十人余　宿　鍵屋伊兵衛

同十六日着　荷物主　豊万八千石　毛利筑前

右繩手三條下ル要福寺旅宿

供方御付役三十人　但御本陣泊り

今十七日久我様ゟ致參殿候様申來候付罷出候處御用人山田仙太致面會内府様より御内沙汰之旨ニ而内話之趣書取

勅使大原卿去ル七日江戸御着同十日御登城御白書院出御御對顔春嶽様會津様閣老方御列席被仰出之三ケ條御書取（付札本文三ケ條之御書取別紙之通俗文ニ而大原卿關東に持越ニ相成申候尤最前相達置申候漢文之御書附と御主意之達ハ無御座候事）御直ニ御渡被爲濟御拜見候上被仰下候趣逸々御尤ニ被爲思召上御請之儀之追而被仰上候との御答無程入御夫ゟ猶御同間春嶽様御始御列席之御方々に右三ケ條之儀被仰聞候處春嶽様被仰候之被仰出之趣誠ニ難有次第奉流感涙候との御答ニ御座候由次ニ脇坂様御答ニ之如何様成儀被仰出候哉と奉存居候處右條々之趣誠奉恐入候との御取合ニ御座候由右之通ニ而外ニ御談判等之儀無之其席相濟申候由且又島津泉州出府後春嶽様に一度被致參上候との趣ハ相分り候へとも御談筋等有之候哉否之境何共不申來候由

一勅使此度御差下ニ付而之和宮様彼是嘸可被遊御案勞歟との被爲在　叡慮ニ依之御登城前日迄之内吹上之方に大原卿御使御勤之筈ニ有之候處此儀御登城後ゟらでゝ被出來候御譯柄之趣ニ付段々御取扱ニ相成傳奏屋敷一之御殿へ去ル日女房宰相典御差越大原卿ゝ御同所二之御殿御旅館ニ付一之御殿於御上段三ケ條之御書取御受取渡相濟候而ケ様之稜々被遣候間被遊御懸念間敷様との儀御演舌有之候由此儀ゝ各別含ニ相成候事共不思召候得共時節柄之儀ゝ付宮様女房を傳奏御旅館ニ被差越候抔ゝ相唱自然ゝ如何敷風説等もゝたし可申哉も難計遠境懸隔候得ゝ虚説も實事ニ唱成候綾間々有之候間此一條も無屹度内話ゝたし置候様被仰付候との趣ニ御座候左候而暫扣罷在奥候様申聞引入申候間差扣居申候處無程罷出只今内話之稜々外ニも有之候而自然洩候哉難計候間尙内府様へ伺候處右之ケ條迄ニ而洩候儀も無之段被仰聞候由畢而勿論此後様子御聞出被成候ハヽ早速被仰遣候間乍太儀罷出候様傳達致せとの御意之旨申聞候

以上

六月十七日　青地源右衛門

第一

大樹早ク諸大名ヲ率ヒ上洛アツテ　朝廷ニオイテ相共ニ國家ノ治平ヲ計議シ萬人ノ疑ヲ散セシメ　皇國一和ノ正氣トナシ速ニ蠻夷ノ患難ヲ攘ヒ上ハ祖宗ノ神慮ヲ慰メ下ハ義臣ノ歸嚮ニ從ヒ萬民ヲ化育シ天下ヲ泰山ノ安ニ比セラレ度事

第二

豐臣ノ故事ニヨリ沿海五ケ國ノ大藩ヲ以テ五大老トシ國政ヲ咨決セシメ夷戎ヲ防禦スルノ處置ヲ爲サハ環海ノ武備堅固確然トシテ必夷ヲ掃攘スルノ功アラント思召候事

第三

一橋刑部卿ヲ後見トシ越前ノ中將ヲ大老トシテ幕府ヲ扶ケ政事ヲ計ラシメハ戎虜ノ慢ヲ受ケズシテ衆人ノ望ニ協ヘリト思召候事

〔仝　書〕

慎之助自筆（前略）

一乍恐　今上帝非常之御英傑之御模樣將軍家是亦御同樣之風聞誠ニ　皇國一新之時節ニ相成奉恐悦候御上洛之來春迄ニハ被爲在候ゝ相見へ諸家樣方々寺院等御備ニ相成申候而青地同道所々見繕候へ共宜ケ所無御座寛永度ハ鳥羽ニ被爲居候萬記御座候付先日見繕申候へ共當時貧家勝ニ而いつ處も下宿出來兼候故伏見之樣ニ奎見繕候處運送之辨利等相考候へハ此所ゟ外有之間敷と話合内々懸合置候樣牧田且歩御使番等へ話置申候

一長州樣昨日御上京ニ相成申候右ニ付而之色々御説有之且堂上方へも御懸念之ケ條も有之候御模樣ニ付段々探索仕居申候私儀ゟ〆り永滯京ニ相成伜初家來共麻疹最早快相成申候付前條之模樣相分り次第當月央迄ニ之發足仕候含ニ居申候いつゟ不遠拜容可仕格別言上之儀無御座候以上

七月三日　　楯岡慎之助

御奉行中樣

七月三日楯岡慎之助は一橋慶喜後見問題及び薩長確執の由來を藩政府に報告す

〔文久二年尊攘録自筆狀〕

勅使先月十三日以來追々御登城有之其節々之御模樣疑ゝ之相分不申候得共一橋樣御後見一條ニ係り候ゝ申唱有之既ニ勅諚三ケ條之内御上洛之儀之　勅使御藩府以前ニ被仰出春嶽樣會津樣御執權之儀も右同樣被仰付置其後一橋樣御後見之儀も御内命有之候得共是之御斷被仰上候由右之通御座候へ之　勅使之疾く御引拂ニも相成可申處島津三郎殿如何樣之存念歟強而大原樣ニ申入らゟ一橋樣無異儀御請被仰上候迄ハ御滯府被爲在候との趣ニ相聞扨當時　御所ニ而之長州薩州違却之事ニ付被爲勞　叡慮候との趣先日以來風聞いたし近日ニ至候而之長州樣　勅使ゝ御行違ニ御出京有之候儀御不興ニ被思召上御上洛之儀も當時之叡慮ニ之御十分ニ不被爲在候との唱有之全信用ハ成兼候得共事務を以相考候得之左も可有之哉子細ハ此節之一件根元長州樣江戸ニ於て御熟議之上永井雅樂を被差登　叡慮御窺之上猶御建明其段之一當月二日御差出有之候書付之通ニ而其末御上洛之儀御治定無程江戸御立ニ相成候所ニてハいつゟ右御書付之通公方樣御上洛之上列侯御豫叅外國開鎖等之事天下之高論を以御國是を可被定との御趣意被仰立候儀ゝ於京都ハ永井雅樂出立後島津三郎殿滯京之後之同人獻言之筋御信用外夷御取扱之儀も無二打拂之儀被爲聞召上　勅使一同東下有之候處於江戸ハ前文之通御上洛之儀被決春嶽樣御列被仰付等之趣ゝ付而之既ニ　勅諚之御主意ハ相立居外夷開鎖等之儀之御上洛之正論を以可被定との儀ニ相成候得之三郎殿本意立兼周旋全無詮事ニ相成候處ゟ速ニ御上洛被仰出候儀并長州樣御行違御出京之事御不興ニ相成候ニ而ハ有御座間敷哉三郎殿京出立之砌於江戸長州へ之無懸合建白可有之との儀被建　叡慮長州樣五月二日被差上候御書付之内御自身外樣之御身分として直ニ被汚天聽候段自然列藩并草莽之志士承及ひ天下之公論ゝ心付候事件之公儀を差越直ニ　朝廷ニ申上候而不苦樣心得違自己之了簡を以每々上書抔仕候樣成行候而之難相濟との趣之三郎殿取計ニも差當兼而右樣之違却も有之此節ハ是非五月御上書之筋御貫通之御覺悟ゟ猶別段御人數之御手當等ニハ相成不申哉薩州ゟも長州御出京前島津右門外ニ御一族壹人被召寄候御手當ニ而近く出京有之模樣ニ相聞當時於　御所茂兩家之爭ハ被遊御心遣候ゝの風説有之何樣互ニ隔意内々其戒有之共ニてハ無御座哉右之專ら風説を以一相考候儀ニ而丈夫ニハ難申達候付本書ニハ一切差省置申候間左樣御承知可被下候以上

七月三日　　楯岡慎之助

御奉行衆中

七月四日在伏見本藩探索生藤林建左衛門古賀富次甲斐武一郎は勅使の東下京都薩邸の狀況酒井雅樂頭の着京近衛關白の再任青蓮院宮以下赦免毛利慶親の着京諸侯宿所の手配及び薩長違却の事等を報告す

文久二年

〔文久二年三月以来探索書〕

一五月廿二日勅使大原三位左兵衛督様一同島津三郎殿（和泉殿事）京地出立諸事薩州取賄之由ニ而惣人數六百人余伊勢路東海道御下向之由ニ候處途三四宿相宿有之其余ハ別々ニ御旅行之由ニ候處其後之模様ハ書面ニ書顯候程之儀ゝ承不申候事

一薩州御人數京地ニ相滞居候分貳三百人茂可有之處近來ハ先靜謐之趣ニ相見申候尤三郎殿代として島津石見登伏いたし居三郎殿出立跡京地ニ鎮靜として詰代候筈之處五月廿六日頃流行之痲疹ニて病死いたし候由ニ付其跡島津權九郎と敷申大臣上京之由取沙汰有之候得とも未タ京着之儀承不申候事

一薩州伏見屋敷ニ岡藩之由小河彌右衛門列先達而迄三拾人程居申候處其内拾人計歸國いたし居候由ニ而當時貳拾人不足罷在候處最早賄も無之近來之處ハ自炊いたし候由一旦ハ格別外出も不致由之處近頃段々於途中見受候ニ付最寄を求一面會いたし候含ゝ御座候間猶様子承聞申候上可申上候事

一姫路公御歸國懸京地御取締被仰付六月十日京着通例御同勢之外御國元ゟ貳百人余呼登ニ相成前後京着いたし候處爲何唱も無之御勤等も不爲有御靜謐之由尤些々之風説ゝ御座候得共出所も不正事ニ付略仕候事

一御所司代若州公御奉書御到來先月上旬江戸ニ御發程之筈ニ而禁廷より拜領物等ハ御家老御名代ニ而相濟御病氣と申事ニ而追々御延引今以御滞ニ相成候事

但内輪切腹抔と相唱候得とも事實聞取兼申候事

一九條様御辭職近衛様六月廿三日關白御再任同廿七日拜賀之御式夫々被爲濟候事

一先年御慎被仰付置候青蓮院宮様三公初武家方迄先頃一同御慎解ニ相成候由右之薩藩ゟ京師ニ建言有之候迄ニ而關東ニ相響キ爲申越京師ゟ關東ニ不被仰下候内前文之通ニ而誠ニ天下之政道ニしてハ當否何程ニ御座候哉詐欺之手段迄ニ而聊威力無之始終之駕馭如何と長大息いたし居者も不少候由之事

但轉法輪様方御遠行之御方々ゝゝ御香奠銀等被進候由之事

一長州公六月六日江戸御發駕七月二日（御供中流行病ニ而御運殺ニ相成候由）京御着長門守様ニハ御歸國懸御滞京之處大膳大夫様御着前日伏見御屋敷ニ御立除ニ相成居申候未タ御着昨今ニ而御模様も承不申御父子様之内世子ニハ御出府と申候説も有之未タ何ゝ共片付不申世子付之面々ハ一旦歸國いたし度と希望いたし居候得とも御様子未タ相分り不申由彼藩ゟ承申候御父子様ゝて惣御人數千四五百も可有之由德山公ニゝ御付添ニ而大德寺内大陽院御旅館御人數三四百人も御座候由何様島津家と之引逃御上京ニ付而ハ定而御良策も可有御座候得とも何分昨今之事ニ付御動靜一圓相聞不申候事

一將軍家御上洛之由ニて伏見内も寺院御ゟらゟ有之京地建仁寺之加州公御旅館之御相談有之候由ニ而同寺塔中永源庵ゟ此方様御故障無之候ハヽ御同方様ニ御相談可仕旨京御屋敷ニ申來候由何様寛永以來久御中絶之儀ニ付御調方等御省略ゝは御座候得とも二條御城ゟ御普請無之而ハ御入不被爲出來候間右等之御支度ニ而御早ク御座候而來四月頃其埒ニ相成可申哉と此元御奉行所抔取沙汰いたし候由とカ津田爲助より噂仕候事

一薩長二藩之御建白大同少異ニ而薩州ハ京地より先ゝいたし御慎解等之儀を專ら被申立外異御處置之儀ハ格別被仰立無之長州ハ京師を今一際御遵奉と迄ニ而專ら御合躰航海御開之儀頻ニ被仰立江戸を先ゝして京師を後ニ被成候付薩ハ長之上ニ出ヲとし長ハ薩之上に付んと互ニ爭奪之勢ニ相成候と申或ハ薩長趣を異ゝいたし候得とも内輪生息相通候と申説も有之候得とも薩長同腹之儀ゝ何程之ものニ有之候哉薩人ハ一統長井雅樂を相恨居候由尤京師ニハ多亡命生之建言御同意之形ニ相見專ら攘夷を御唱ニ相成力を料り德を料さる御暴論多實ニ鸞鳳雖美禽安知攫擊之事と申諺ニ而御座候へゝ薩之方長よりハ御取用宜趣ニ相聞申候關東茂未タ兵を加る之御罪科ハ相見不申却而越前會津等之御補佐ニ而中興之御大業と相成可申見込も有之候由併太平之弊習一新之期ニ臨候ハヽ薩長之建白ニかゝり兩藩之御建白者亡命生之濫唱ニ嬰ルと申説も少しハ有因事之由相唱申候事

右者京極方追々ニ政府ニ申向ニ相成候事ニ付疾入電覽候積様と之存候得とも此元方も不申上候而ハ相濟不申候間則呈上仕候勿論當伏些々之儀ハ何茂京地ニ申入候事ニ付此方方政府ニ之通路ニ相成候間度々ニハ不申上候付此段ハ不惡様被思召上可被下候尤前記之内間ニ之行違之儀も可有御座奉存候へとも寸度實地ニ蹈込得不申宜御裁斷被仰付可被下候以上

七月四日

藤林健左衛門
古閑富次
甲斐武一郎

七月五日在府本藩田中彦右衛門は松平春嶽政務參與任命將軍家茂田安慶頼松平春嶽並に久世内藤水野板倉諸閣老等の人物幕政の改革將軍上洛の發表勅使の臨城及ひ其人物等に關し報告す

●五月七日ノ也事

〔尊攘錄探索書〕（從弘化年間至文久二年）

一春嶽様最初（戊五月八日也）●御登城之砌公方様方御政事向御相談被遊度段上意之節兼而之御了簡ニ若し右様之儀被蒙仰候節之被成御斷候御覺悟ニ被爲在候由夫故歟其節御請被御引取之御模様等不分明ニ有之たる由依而公方様御不安心ニ被思召候と相見直ニ久世侯ニ御申付ニ相成御跡方追付大廊下筋ニおゐて被申渡候ニ之自然此度之儀御斷ども被爲成候而之決而不相濟候ニ付猶其段申含よとの上意ニ御座候間左様御心得可被成との事ニ有之たる由右ニ付春嶽様不被爲得止御勤氣ニ被爲成たる由是方纏而五六日之間早朝方御登城毎々御前へ被御召出ニ而御相談及數刻御歸館之上夜四更頃迄御几上御燭燭ニ而御認物必多度被爲在御家來中方御氣根之程も奉氣遣候と申程ニ有御座たる由

一會津侯も一同御同様之御達ニ有之候得共春嶽様之方計り御相談被爲在候ニ付此儀春嶽様ニ之御心配ニ被思召候由

一公方様春嶽様ニ被仰候ニ之近來天下不穩儀之畢竟諸有司共不得其人處方之事ニ而可有之此方寡聞ニ而更ニ人ヲ為らす依而諸有司ハ不及申天下之諸侯共爲人を承知ハ為し度能々心を用吟味いたし爲知呉よとの上意ニ有之たる由

一又被仰候ニ之田安儀之井伊在勤之時此方後見ニ申付有之候處何を相尋候而も不相分無益之者と被仰候由

一春嶽様御近臣へ内々御咄承り候ニ之當時老中之内久世ハ只善柔而已内藤ハ木偶人も同様此度之水野兎角遠慮勝ニ而存念不得演板倉は自分存寄丈ハ正直ニ申演候者是ハ相應役ニ立可申歟と被申候由右之春嶽様初て五月八日（マヽ）御登城九日十日同斷此咄ハ十一日ニ承り候事乍去未詳候間其節ハ認差出不申然ル處其後果て田安井久世内藤等御役御免ニ相成候處ニ而ハ右之御咄等全有之たるニ相違無之趣ニ被存候事依而此節又一類之咄承り候ニ付左之通

一春嶽様被思召候ニ之乍恐公方様御十八歳位ニ而之未タ御小供も御同様格別之御了簡ハ被爲在間敷此一橋尾張水戸殿等ヲ初夫々憚御免被仰出且會津侯井ニ御自分御政事向御相談抔と申も恐らくハ傍方之御附ケ智惠ニ而も可被爲在歟と被思召込候處御逢之上諸事御相談之趣振決而御附ケ智惠抔ニ而者無之奉恐入御英邁春嶽様ニも御刮目ニ而彌以御勤氣色ニ被爲成之由

一去五月廿五日御政事御改革筋寛永以前之振合ニ御基キ之御達有之後公方様儉を示ヘニ身ヲ以御先立之思召ト相見御召御袴諏訪平御着服近江井晒抔之由隨而御進膳も御省略ニ相成候由

一諸事簡易筋之儀ニ付春嶽様諸稜書等御認御持出之處公方様今四五日待呉よ左候而一覽可致との上意ニ有之たる由扨公方様御先々代以來も同様兼々小鳥植木御好ニ而鶯敷御取寄ニ相成居候由之處頃日鶯蒼鷹等之類ハ夫々被下野鳥之類ハ紅葉山ニおゐて御放ニ相成鉢植ハ同様夫々被下且御庭方へ御申付ニ而其邊に植へ置可申との御沙汰其後又御覽ニも可相成哉御伺申上候處庭方之者可然様いたしたらん最早見候ニ不及との上意之由實代ふゑへき様との思召ト相見候由扨前條申出春嶽様より之稜々大抵御自分様も御心附ニ有之たる由右之通之類腳ッ、の美談風說不迨枚擧候

一六月十五日山王御祭禮是迄御豪様朝鮮馬場ニおゐて御覽有之公方様も御透見御座候仕來之處此節之御二方様共其儀無

之山當時　勅使も參り居候と申ハ蛇足之由一說ニ勅使も參り居候と申ハ蛇足之由　且時宜を被思召而之事と相見〇例年御祭禮上覽ニ付而之表奥共御辨當御料理是又一稜之御出費ニ有之由將又右響故る祭禮通行之大名屋敷ノ〳〵物見窓等態と鎖し候向有之たる由

一六月十六日嘉祥御祝儀年々御飾餅等是又御出費多之處是も當年より相止候由

一今度公邊諸改革且被仰出之儀長薩之建白ニ依る斯相成候事と而已相聞居候得共全夫而已に無之因り一新之痛有之公方樣御政事被聞召候樣相成候而ハ御不凡之處も相顯る彼是氣運之機會と相見未タ薩長之建白書不出内水戸御固之振合等替り其外内輪御模樣少々ツヽ改り候由然ル處坂下御門前一件ニ而彌一新之氣憤發いたしゐる事と相見候由儒家之噂ニ御座候

一頃日殿中詰合之面々ハ即日武藝御覽之段被仰出御白書院御緣川ニおいて上覽有之たる由此儀前以被仰出候而之銘々當番樣合等種々取飾出來候事と思召即日御晝食後突然被仰出候由依而老人抔も罷在中々被行申間敷段申上候處殿中に當直いたし候るちハ絕而一太刀之心得も無之者ハ居不申筈如何樣未熟ニ而も不苦との御沙汰ニ而いつる茂大迷惑仕御家人之事ニ候得之絕而不學之者も有之只竹刀を無法ニ振廻シたる迄ニ而紛もし爲濟候者も不少哉之由勝負合宜キ者へ居殘候樣被仰出御直ニ御賞賞有之たる由其後又同斷突然文藝御覽有之たる由之處是ハ又ふさゆふき事ニ而殿中御詰合凡八十余人之内ニ而三人可也出らる候者有之詩を献候由此者にハ御座右御有合之御品差寄被下毛氈抔も有之たる由

一先達而差出申候櫻田並ニ竹橋見附等通行之儀兼而公方樣ニ之不申出老中取計ニ有之たる由頃日初て被聞食以之外之儀水戸浪人位之事ニ恐る右ゲ所通行相止候樣ニ而之德川之家政被保間敷筈也とて御憤り之御氣色老中方御申譯無之次第ニ有之たる由

一公方樣上意ニ來春上洛致奉拜天顏方今之時勢直々具ニ遂奏聞我存念もを可奉奏左候得之先ヅ御安心之一稜との御儀ニ而御差之ほり之由實ニ皇國おして海内無双之强國ト被成天下盤石之國ニ復し候樣被思召込之由就而之此節草莽之間抔ニ心得違之者も可有之折柄萬一於途中不慮之禍害等ニ係り候ハヽ德川家滅亡之時運到來と覺悟いたし至而少人數簡易ニ而上洛可致との御沙汰之由

一勅使大原殿登城對顏之節帶刀可致との儀ニ有之たる時公家帶刀之儀見合も無之如何敷申向見候處中々承引無之差懸り候而之儀ニ付長く談論ゐゐし居候間とても無之板倉侯被考候ニ左衛門督と相成候ニ付而之武官ニ付如何樣可然との事ニ而不苦段即座ニ返答ニ相成候由

一和宮樣への　御宸翰大原殿持來候由依而御奥御前へ被召出直々奉御渡度段被申出候由老中方返答ニ其儀ハ六ケ敷御座候間上萬衆ゟ御取次仕候樣申向候處　勅命ニ付是非直ニ不奉捧候而之不相成と被申候由然ル處板倉侯被申向候ニ之男女授受ルニ自らせさるハ禮也と申ス聖賢之遺訓も御座候得之御手渡之儀御憚有之候而可然被申向候處其理ニ服され然らハ上萬衆ゟ御取次ニ而宜候間御目通りニ而御受取御披見之處迄奉伺度との事ニ而其通り被仰付候由

一大原殿六ケ敷仁と相見此間終日閑暇之節御老中ト歟被咽應候ニ之御退屈之節講武場稽古等御覽被成候而之如何と申被向候處大原殿御返答ニ因り講武場も拜見之積りニ候併退屈ニよつて拜見ハ決而不仕ト被申候由

一春嶽樣樣初ニ謀置候通之處此節ハ御病氣ニ被託御登城無之由御國家老出府御諫申上候とも申候最初被仰付之通り公方樣御政事向御相談ト迄ナレハ隱居之身分可也宜可有御座候處諸事御老中へ被仰達又御老中も諸事春嶽樣ゟ伺出候樣ニ而ハ全大老職ニ相成候儀ニ付御家且御身分柄些不穩と申處ゟ御引込可然儀ニ内輪相成候哉之由〇一說ニ恐多捨文抔も有之たる由基局ニ當り候而ハ如何成英雄ニ而も傍觀八日ニ之參り難キ事と相見候由承り申候未詳

一或人之說ニ春嶽樣御器量乍恐御一國を被爲治候ニ之餘有といへとも天下を被爲治候ニ之些ト御不足歟今少し御寛大ニ有御座度ト申儀承り申候

一春嶽樣ニ之島津三郎之所爲茂御氣ニ不被爲入抔とも申候

一當今之時勢柄ニ付隱日鄕收事ニ而公義初公方樣御直ニ被命越前侯ゟハ尤多く御老中方夫々被差出凡數百人ニも及可申由贈薩出候よし也

一四國九州邊就中行渡居候哉之由物ニ承及候ニ右公邊並ニ御老中方ゟ之隱日見聞之儀彼是寄せ集メ引合方ニ相成候由

一常今時勢柄故敵探索方とも可日様之役多クハ學生抔ニ而相應御手宛等被下諸藩追々出來候様子尤御普代小藩等ハ如何ニ御座候哉水戸ハ以前ゟ有之様子近來薩州長州之勿論近日之處ニ而土州加賀仙臺南部抔之承り申候

右之通聞込候儘を書取御達仕候以上

戌七月五日　田中彦右衛門

七月六日徳川慶喜一橋家を相續し將軍後見職となる

〔文久二年尊攘錄自筆狀〕　徳川刑部卿様

以別紙申達候右之去ル六日思召を以一橋家再御相續以上使被仰出一橋領拾万石被遣且同日御登城被成候處今度以

假慮被仰進候付御後見御勤被成候様被仰出候由

〔撥反雜記〕

一書曰刑部卿様御直書を以御家來之者へ御申渡候書付

今度一橋再相續並御後見之儀被仰付身ニ餘忝奉存候御後見之儀之靈御内命候砌數度御辭退奉申上候處何分御聞入無之無餘儀御請致候今改申迄も無之候得とも素不肖之身分を以御大政取扱候儀深恐入候事ニ候此上上下無滯天下之御爲ヶ心附候事茂有之候ハヽ不寄何事無遠慮存寄可申聞候其品ゝ依而之衆評之上及言上候儀も可有之候扨又當今之立場ニ而之家老用人共心得方別而大切ニ可有之候殊ニ寄他人より内願筋内々ニ而頼込候輩有之間鋪とも難申必請申聞敷候但天下之御爲筋ゝ付心得候儀有之候而表立公邊へ難申立無餘儀頼込候輩抔も可有之哉右ハ立身等頼込候ヶ之事替り請取候而可然事ニ候へ之乍併左様之儀も永申ニ之遂ゝ不筋之頼請候様ゝ相成ものゝ候得之能々可心附事候若不筋之頼請後ニ相知ゟ候ハヽ當人及沙汰候之申迄も無之同勤之者を心附合力を合て天下之御爲可懸心忠勤候遂ゝ厚蒙命之上之猶又

天朝公邊厚心得不申候而者不相成事ニ乍併右板別之所屬心發り候儀俗情ニ候へ共右様之儀有之候而者厚對　天朝公邊深恐入次第ニ候得者此方之立行ニ付屬ケ間鋪事有之候節之無覆藏可申聞候是一身之上ニ者無之當今立場ゝ而者則天下始御爲ゝ相成候事ニ候尤大切之儀ニ可有之就而ハ末々之者ニ至まて他へ對候而も是迄よりも万端可嘸質素ゝ節儉奢ケ間鋪輩聊も無之様可致候又者此方他出候節老人幼少之者抔も於往來少々不禮ケ間鋪事有之候而も能程ニ制候而成丈厚ひ可申候老幼之者無之候而も急用或ハ病氣抔之躰ゝ見請候ハヽ、是又大凡ニ制規矩之不崩様人々難儀不致様能々心得可申候條爲心得用人共始末々之者迄以自筆申達候事

七月

七月六日幕府は諸侯の軍艦にて參勤歸國すること及ひ諸外國に任意船艦の製造を託することを許可す

〔文久元年十月より御同席寫觸大目付様御廻狀寫〕

文久二年七月六日水野和泉守様御渡

大目付に

万石以上之面々向後軍艦ニ而參勤歸國並歸邑致不苦候尤陸路通向之節も供方之儀不及伺膳手次第減略可被致候

右之通萬石以上之面々に可被相觸候

七月

大目付に

條約御取結相成候國々に船艦渡度面々者不及相伺神奈川奉行長崎奉行箱館奉行之内に申達同所奉行より渡可被申候右

之通向々に下被相觸候

七月六日本藩横井平四郎再ひ越藩の聘に應し是日江戸の同藩邸に至る

〔再発記事〕

（六日）先達而御登城被仰出ニ付何角と御相談被爲在ニ付先年も御招待有之候賓師肥後横井平四郎を被爲召度幸ひ御國許へ罷出候積にて國許發足道中敦賀以南疋田驛ニ而御使に出曾夫ゟ江戸表へ向き進歩今夕刻着ニ付御家老初逢對の上於御病床御逢有之今日之處御相談之儀ハ不被爲在

野史氏云此頃邸議未決之條も小楠先生を待て御進退共ニ御決着之事ニ相成有之なり

七月六日岡藩小河彌右衛門在藩の同志者に長土兩藩主の動靜及び幕府奉勅の狀況等を報す

〔撥反雜記〕

一書曰拙々入組候ハ長州之事ニ御座候根元大森長井雅樂より起り中々筆紙ニ盡候事ニ無之候長井建白中　朝廷誹謗似候書有之といふ議奏より先比仰あり夫ニ付其被　仰譯のたゑ大膳大夫様色々御願立ニ而御上京江戸御暇出候所ニ而今度勅使被差下段ニ付於江戸御周旋御座候様　勅命之處夫をさし置れ　勅使ゝも三郎殿ゝも不逢様中山道を去月六日出立供人はじかニ而一向旅行不出來去二日着京也右之次第ニ而色々不都合有之候於江戸長州之當路周布政之助薩之堀小太郎大議論有之政之助大よハり候由本田列よりも政之助手つよくやりつけられ大降參ニ御座候乍併此先も又中分必可有奉存候ゑゝしさしたる事ニ不至濟可申いのり候事ニ御座候長門守様ハ京御屋鋪支故伏水へ御滯留德山侯ハ御在京ニ候長州家老四人出居申候大勢之長陣ニ御座候」加賀よりも家老長大隅守近來出京ゝ申評判也是ハ江戸より大ニ手を入て出てもらふと云評判也虛實はさたかゑり不申候土佐侯ハ去月廿八日御發駕ニ而十一日比御着京之御積ニ御座候暫御滯京ニ而御同人族民部殿と家老を御遣しニ而君侯は江戸に御出御隱居一同江戸ニ而御周旋可被成御見込歟ゝ聞取申候其外列藩少々つゝ之事ハ記ニ不及候也」越前前中將様ハ政事惣裁ゝ被蒙仰候得共一橋刑部卿様之事色々ゝ申分有之一向運ひ不申候處去月廿八日大原様御登城强て被仰立候譯有之右御奉行ニ不相成てハいつまても御下城不被爲成と申御奥張鉄石之如くニ而とふノ〳〵御奥留ニ而今月一日表向被仰出ニ而御受有之筈ニ候旨晦日之飛脚今朝逹申候是ニ而先一安心ニ御座候夫ニ付而も又色々申分候得共其夫ハ聊つゝ之事ニ付先文略仕候此先之ゑこび大切の御場合歟と奉存候右之段ハ政府にも御逹可被下候已上七月六日小河一敏

七月八日横井平四郎　幕吏大久保忠寛に諸侯の參勤を述職に易へ其室家を國に就かしめ且つ其固塲を免すべしとの三策を建言す

〔夢　記　事〕

同八日今朝雪江小楠堂同道大越殿へ罷出明日御登城の御案内且御持論御主張可被成思召通りをも申述夫ゟ先生も對坐ニ而時勢之談論有之先生より　諸侯參勤を述職に易へ妻子國住居諸侯御固場御免之三策を建言有之越州も先生之卓識あつて議論之正確條理之分明なるを殊之外感服せられたり

〔小楠遺稿〕（小楠先生小傳）

文久二年六月四たび越前に赴く未た至らす途に春嶽公の命を得轉して直に江戸に之く此時春嶽公幕府の惣裁職の命を受くるに際す是を以て國是十二條を聞す其中に將軍上洛諸侯の室家を封土に還するの條項有り（大將軍上洛謝列世之無禮、○止諸侯參勤爲述職、○歸諸侯室家、○不限外藩普代撰賢爲政官、○大開言路與天下爲公共之政、○興海軍强兵威、○鑄金銀銅坐公貨幣、○開天下之金礦、○止相對交易爲官交易）大久保一翁（時に越中守と云ふ將軍の側衆頭取たり）之を聞き大ゝ驚き力を極めて其議を拒む先生之を聞き乃ち大久保氏の邸に往きて面議す氏領會の意ふく顏色を變し議論澁滯す先生曰く若し諸侯書けすして室家を國に歸す者有らば幕府之れを禁止するの力有りや如何と大久保氏渙然として悟る此後深く先生を敬信せりと云ふ（本文中の括弧は原書の儘也）